
第二次アサギウォーズinミッドチルダ

八つ橋うい郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第二次アサギウォーズinミッドチルダ

【Nコード】

N3319P

【作者名】

八つ橋うい郎

【あらすじ】

アサギウォーズ——それは、アサギ対アサギの、アサギによるアサギのための、アサギでアサギを洗う、ドキッ！アサギだらけのアサギバトル！

……え？意味がわからないって？ だったら、読んでみればいいじゃない！

アサギウォーズと何の関係も無いゲストが大勢出てきたりするが気にするな！ オレ様からのサービスだ！ BYア○ターレ

第1話：おいでませ異世界

瓦礫の散乱している場所に二つの影が――。

「国境の長いトンネルを抜けると、そこは異世界であった」

「？ いきなり何言ってるんスカアサギの姉御？ オレ達別にトンネルを通って来たわけじゃないッスよ？」

アサギと呼ばれた、白いコートを羽織った女性の言葉に、側にいたペンギンに似た謎の生物がツッコミを入れる。

「特に意味は無い！ ……それより、何処なのここ？」

「何処なんスカねえ。魔力の薄さと、向こうに見える街並みからして人間界だと思っスけど……」

「ま、取りあえず街へ行って――……！ サウレ！」

「はいッス！」

言葉の途中でアサギが二丁の銃を抜きつつ呼びかけ、サウレと呼ばれたペンギンもどきが二本の短剣を構えた。

そして、彼女達を囲むように幾つもの魔法陣が展開され、そこから『何か』が現れた。

「キキキキキ……！」

それは、球体の関節を持った人形だった。道化師のような服を纏い、操る糸も無いにもかかわらずユラユラと不気味に体を揺らしている。よく見れば服の色や体の大きさが違うものもある。総勢、約三十体。

「傀儡族ッスね。ここまで大勢集まるとさすがにキモイッス」

「マリオネットにキラパペット……。雑魚ばっかね。手早く片付けるよ」

「了解ッス！」

そして戦闘……。もとい蹂躪が始まった。

アサギは距離が近ければ殴り碎き、遠ければ銃弾型に圧縮された魔力弾を打ち込み、マリオネット達を爆散させていく。

サウレはひたすら短剣を振るい、斬り刻む。

マリオネット達は為す術も無く破壊されていった。

残り五体、というところで、再び魔法陣が展開、新たな傀儡族が現れた。一体だけだが、マリオネットよりも頭二つ分ほど大きく、二メートルはある。

傀儡族最上級種、ヘルズクラウンである。

「ギギッ、ギギッ！」

「ヘルズクラウンか……。サウレ！ 残りの雑魚は任せたから！」
「了解ッス！」

マリオネット達をサウレに任せ、アサギはヘルズクラウンに向けて銃を構えた。

「碎けろお！」

「ギギギギギッ！」

アサギの打ち出す弾丸を、針状に圧縮した毒液で相殺するヘルズクラウン。最上級種と言うだけあって、マリオネットやキラパペットとは反応が違う。

「ギーー！」

「うわっ！」

ヘルズクラウンが投げたナイフを、アサギは上半身を大きく後ろに反らして避けた。それを隙と見たヘルズクラウンはナイフを構え一気にアサギとの距離を詰めるが、

「ナメんなっ！」

「ギギッ!?」

体制を戻す勢いを利用した頭突きで、頭を弾き飛ばされてしまった。驚きのあまり動きを止めたヘルズクラウンの体に、アサギは銃口を押し付けた。

「零距离バスタアアアアアア！！！！」

放たれた太い光線がヘルズクラウンの上半身を消し飛ばし、直線上にあった頭も飲み込んだ。

「ギギヤアアアアアアアア——！！！！！」

断末魔の叫びと共にヘルズクラウンの頭は消滅し、後にはもはや動くことのない、両腕と下半身だけが残された。

「姉御、こっちも終わったツスよ」

「お疲れ。……しかし何で人間界に悪魔がいるのかねえ？」

アサギの言葉に、サウレは顎(?)に手……もとい翼をあてて考える。

「魔力が薄いってだけで、そもそも人間界じゃないのかもしれない

ツスね」

「あ、そうじゃないみたい。ほら」

アサギが示した方向にサウレが視線を向けると、飛んでくる人影が見えた。

第1話：おいでませ異世界（後書き）

アサギのキャラが原作と（幾つもあるけど）違うと感じるかもしれませんが、そこは『アサギだから』とスルーしてもらえれば幸いです。

第2話：時空管理局？ 魔王みたいなもの？ BYアサギ

機動六課ライトニング分隊隊長、フェイト・T・ハラOWNと副隊長シグナムとはある廃棄区画へ向かっていた。

『小規模の次元震を感知、次元漂流者と思しき生体反応の付近にアンノウン発生』という連絡が入ったからだ。

アンノウン——最近現れるようになった操り人形のような姿のそれは、二年前のJS事件の際のガジェットのようにAMFを発したりはしないが、ある意味ガジェットよりも厄介な相手だった。

まるで意思を持っているかのように動き、体を回転させての打撃やナイフ投げ、さらには毒液を吐くなど攻撃方法も多彩。個体により強さはバラバラで、稀にSランク相当の戦闘力を持つものもいる。

そのアンノウンに対抗するために、機動六課は再編成された。アンノウンの危険性とJS事件で何度も痛手を被ったことを鑑みて、今回はリミッターも無しである。

閑話休題。

前述のように、魔導師にとっても危険な相手なのだ、民間人、ましてや状況を飲み込めず錯乱しがちな次元漂流者ならばなおさらである。

で、あるのだが……

「安全に関しては問題無さそうだな」

「そうだね……」

送られてきた映像を見ながら呟いたシグナムに、フェイトが同意する。

次元漂流者であろう黒髪の女性とペンギンのような何かは、軽々アンノウンを破壊している。まるで戦国〇双か戦〇BASARAだ。

「……安全は問題無かったが、別の気になることが出来たな」

既に戦闘は終わっている画面を見ながらシグナムが言う。

「うん。『人間界』とか『悪魔』とか……。アンノウンのことも知っているみたいだった」

「とにかく、直接聞いてみるしかあるまい。幸い、向こうもこちらとコンタクトを取るつもりのようだしな」

武器をしまいこちらに視線を向けている一人と一体の映った画面を見ながらそう言うシグナム。

（……少し、手合わせしてみたかったが）

内心、そんなことを考えていたが。

アサギとサウレの前に、フェイトとシグナムが降りて来た。

「時空管理局のフェイト・T・ハラOWN執務官です」

「同じくシグナム二等陸士。名前をお聞かせ願えるかな？」

「アタシは朝霧アサギ」

「舍弟のサウレっす。……ところで、時空管理局って何なんスか？」

「噂くらいは聞いたことあるんだけどな。何かあちこちの人間界を支配してる魔王じみた組織とかなんとか……」

サウレの疑問にとんでもない答えを返すアサギ。

（（どんな噂だ……））

フェイトとシグナムの内心の呟きも最もだろう。

「ま、まあその認識はともかくとして、だ。治安維持組織なのでな、ここでのことやこの人形について話がしたい。同行してもらえるか？」

「別にいいんじゃないッスか？ どうせ街に行くつもりだったんスから」

「そうね」

そんなわけで、一同、機動六課へ。

機動六課隊長室。自己紹介は特筆するようなことも無く済んだ。

高町なのは、八神はやて、ヴィータを合わせた隊長陣五人、そしてアサギとサウレがこの部屋にいる。

「それじゃ本題に入るけど、君らはあの人形のことを『悪魔』、この世界のことを『人間界』って呼んどったけど、そのあたりについて教えてもらえるかな？」

はやての言葉に頷くアサギ。

「アナタ達が知ってるように、この宇宙——アタシ達は『多元宇宙』って呼んでいるけど、そこには様々な世界がある。魔法が無い世界も、人間がいない世界も」

一同、頷く。

「その数多の世界の中に、『魔界』と呼ばれる世界があるの」
「魔界？」

「そう、魔界。そこに住む生物——人間に近い姿の者や、獣に近い姿の者、生物とは思えない姿の者もいるけど、それらをひっくりめて悪魔って呼んでるし、本人達もそう名乗ってる。ああ、ちなみにアタシは人間ね。」

「それじゃ、あの人形共は悪魔なのか？」

ヴィータの言葉に、少し考えてからアサギは答えた。

「一応ね。ただ、アイツらは組み込まれた術で動いてるだけで意思も無いから、生物とは言えないけど」

「じゃあ、サウレ君はどうなのかな？ 意思はあるみたいだけど……」

なのはが疑問の声を上げる。

サウレの外見はうろ覚えで作ったペンギンのぬいぐるみのように、自然に生まれてくる生物には見えない。

「何かの術で動いてるわけじゃないッスよ。他の悪魔と比べるとちよつと特殊ではあるッスけどね」

「特殊？」

「オレ達『プリニー』は元人間なんスよ」

『元人間！？』

驚愕する隊長陣に、アサギが説明を加える。

「生前罪を犯した人間が償いのために生まれ変わった存在、それがプリニーなの」

驚きで声も出ない隊長陣だったが、いち早く正気に帰ったはやてが話を戻す。

「それで、や。あの人形の裏には悪魔もしくは魔界に精通してる人間がいるゆうのは間違いなさそうやね。……それで、二人に頼みたいことがあるんよ」

真剣な表情ではやてが切り出した。

「二人に、六課の協力者になって欲しいんや。今後あの人形よりも厄介なのが出てくるかもしれんし」

「いいよ」

「早っ！」

アサギの即答に面食らうはやて。

「オレ達あちこち放浪してる根無し草ッスからね。急ぎの用も無いし、すぐに帰る必要は無いんスよ」

「そうなんや……。で、協力してもらうのに文句つけるのは心苦しいんやけど、武器のことでちょっと問題があるんや」

言って、机の上に置いてある、漆黒の銃身に赤で666と刻印された二丁拳銃、『バハムート666カスタム』に視線を向ける。

「あゝ、非殺傷がどうかいう部分ね」

「そうなんよ。魔力使ってるからギリギリ質量兵器やないって判断出来るんやけど、威力がな……」

アサギもこの世界のことは六課に来る途中に聞いている。バハムート666カスタムは魔力を打ち出すという点ではデバイスに近いが、いかなせん殺傷力が高過ぎる。それはヘルズクラウンの上半身と頭を消し飛ばしたことから明らかだ。

「要は非殺傷に出来るようにすればいいわけか……。あ、その非殺傷を司ってるパーツって持って来られる？」

「そりゃまあ重要なパーツやさかい、予備はあるけど……。どうするんや？」

「少しあてがあるの」

携帯電話を取り出しながら、アサギは言った。

「もしもし……。はい……。一つ依頼がありました……。」

アサギはどこかに電話をかけている。

「……何で通じてるんだ、アレ？」

「魔界の電話は電気じゃなくて魔力で動いてるんすよ。名前に反してるッスけどね」

これは携帯電話に限らず、電化製品全てに共通している。魔界には永久凍土やマグマの海がある場所もあり、また大規模な戦闘で地形が変わることも珍しくないので、電線を引くことが出来ないのだ。

その旨をサウレが説明している間に、アサギが通話を終えた。

「すぐに来てくれるって」

誰が、と問う前に空間に渦が現れた。

「何!？」

「時空ゲートっスよ。完成された術ッスから、次元震とやらは起こらないはずッス」

「……本当に、何でもありだな」

「それが魔界ッスよ」

そうこうしている内に、時空ゲートからスーツケースを持った一人の女性が出てきた。人間とほとんど変わらない姿だが、よく見ると耳が尖っている。これが人型悪魔の特徴である。

「お待たせいたしました。ローゼンクイーン商会出張サービスです」

ローゼンクイーン商会——それは魔界で唯一にして絶対の巨大商会。その全貌を知る者は居らず、道德観念が薄く盗みを一つの技能と認識している悪魔達でも手を出すことは無い。

それほど強大な組織なのだ。

女性は非殺傷設定用のチップとバハムート666カスタムを受け取ると、スーツケースを開き何やら作業を始めた。

作業と言ってもチップはかなり小さいため、一分足らずで終わったが。

「出来ました。どうぞ」

女性からバハムート666カスタムを受け取り、アサギは銃口を手に押し付け、引き金を引いた。

手は大きく弾かれたものの、穴どころか焦げ目一つ付いていない。

「いっつゝ……。でも、上手くいったみたいね」

顔をしかめて痛そうに手を振るアサギを見て、女性は満足そうに頷いた。

「ご要望にお応え出来たようで何よりです。こちら、同じ機能を持った腕輪をサービスでお付けしておきますので、よろしければお使いください。代金は4700ヘルになります」

「はい」

「ありがとうございます。またのご利用をお待ちしております」

丁寧に一礼し、女性は再び時空ゲートを開き帰っていった。

「えーっと……。これで問題は解決したんかな？」

目まぐるしい状況の変化に置いてけぼりにされていたはやてがおずおずと口を開く。

「うん。それじゃ改めて、機動六課の協力者として、朝霧アサギ」
「そしてサウレ」

「「よろしく願います（ツス）」」

第3話：模擬戦！ 二次創作のお約束ツスね。 B Yサウレ（前書き）

デバイスのセリフは日本語で書いてあります。と言っても一言だけですが……。

第3話：模擬戦！ 二次創作のお約束ッスね。 BYサウレ

「アサギさん、どんな戦い方するのかな？」

「楽しみだね、エリオ君」

「どうぞッス」

「あ、ありがとう」

「サウレ、こっちも」

「了解ッス」

以上、お馴染みFW陣ことエリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ、ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマと、訓練を終えた彼らにスポーツドリンクを配っているサウレの会話である。

例によって四人とアサギ達は互いに自己紹介を終えている。

決して描写が面倒だから省いたわけではない。

これから何が始まるか、皆様もうお気づきだろう。二次創作のお約束、模擬戦である。

「ようやくこの時が来たか……。朝霧、私は一目会った時からお前と戦ってみたいと思っていた！」

「うわ何かすごい告白されちゃったよ」

喜びの声を上げるシグナムに、冗談めかして言うアサギ。彼女も戦うことは嫌いではないし、むしろ高揚感を感じている。

魔界は基本的に力が全ての世紀末な世界。そこで長く暮らしていれば自然とこうなるものだ。

「ま、お互いどの程度戦えるか確かめておかないといけないしね」

バハムート666カスタムに両手を添え、臨戦態勢に入るアサギ。同時に、纏う空気が一変する。

「何という威圧感……！　まるで魔獣を前にしているようだ……！」
「あながち間違っていないかもね、その表現。限界の一つや二つ超えないと、魔界じゃやっていけないから。……見せてあげる、元魔王軍リーダーの実力を！」

一方、観戦席。

「またスゲー単語が出て来たな……。魔王軍で」
「そういえば色んなことがあり過ぎて、アサギちゃん自身のことほとんど聞いてなかったなあ。」

啞然として呟くヴィータと苦笑するはやて。

「サウレはそのあたり、何か知ってるの？」

スバルの問いにサウレが答える。

「オレが雇われる少し前までは、何処かの魔王の所で修行してたとは聞いてたツスよ。それより前のことはわからないツスね。……つと、二人とも準備出来たみたいツス」

言って、ウエストポーチからホイッスルを取り出した。

「試合開始ツス！」

サウレがホイッスルを吹き鳴らした。

「そおい！」

某怪盗の相棒並みの早撃ちで銃弾を浴びせるアサギに、シグナムは最小限の動きで銃弾を弾きつつ接近、

「はああああ！！！！」

斬りかかるも、アサギの姿が掻き消えレヴァンティンは空を斬る。

「（高速移動……！！） 後ろか！」

振り向けば斜め上、銃口に銀色の光を宿したアサギの姿が。

「マジカルバレット！」

「くっ……！！」

降り注ぐ星型弾をバックステップでかわし、あえてアサギと距離を取るシグナム。

「シュランゲフォルム！」

レヴァンティンが連結刃に変形、星型弾を砕きつつアサギに迫る。

「なあっ！？」

さすがのアサギもこれには驚く。

質量保存の法則を無視した長さを持ち、複雑な軌道で動くレヴァンティンによって銃弾は遮られ、シグナムに接近することも出来ない。

「このっ……！！ メガウインド！」

真空の刃を伴う竜巻でレヴァンティンを上空に巻き上げ、一気に接近、銃身で殴りかかる。

シグナムは元に戻したレヴァンティンとその鞘でこれを受け止め、そのまま乱打戦に突入。

「せりやあああああ！！！！」

「はあああああ！！！！」

互角の打ち合いを繰り広げるも、やはり接近戦ではシグナムが有利か、徐々にアサギが押され始めた。

「もらった！」

「メガウインド！」

アサギの見せた一瞬の隙を突いた斬撃は、風の壁に阻まれた。そのまま竜巻の中に閉じ込められるシグナム。

（飛ばば逃げられるが、それを朝霧が見逃すはずが無い……。ならば！）

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

《了解》

空薬莖が飛び出し、レヴァンティンが炎を纏った。

頭上に飛び出して来たアサギも、同じく銃口に炎を溜めている。

「トーテックロイツ！」

「迎え撃つ！ 紫電一閃！」

炎の十字架の中を、炎の魔剣が駆け抜ける。

そして、シグナムの一撃が、アサギを地上へと叩き落とした。

「く……！ あゝ、今のは効いた……。意識が飛びかけたよ」

ウインドを応用し、危なげなく着地したアサギが言った。

地面に激突こそしなかったものの、紫電一閃の直撃により決して軽くないダメージを負っている。

「……驚いた。紫電一閃をまともに受けて意識を保っているばかりか、あの状況で反撃してくるとは……！」

腹を押さえながら呻くようにシグナムが言う。

そう、アサギは紫電一閃を受けた直後に、トーテクロイツを撃つ方とは逆の銃で、マジカルバレットを一発シグナムの腹に撃ち込んでいたのだ。

「お互い余裕は無さそうだし……。デカイの一発で最後の勝負といかない？」

「いいだろう……。ボーゲンフォルム！」

レヴァンティンの剣と鞘が合わさり、弓となった。レヴァンティンの第三の姿、ボーゲンフォルムである。

「炎熱地獄……！」

バハムート666カスタムの二つの銃口から溢れ出た炎が、一つの炎弾を作り出した。それは小さく圧縮され、太陽のごとく光を放っている。

「駆けよ隼……！」

カートリッジにより増幅された魔力は炎となり、レヴァンティンを覆った。それは矢を包み、隼の形を成している。

「インフェルノ！」

「シュツルムファルケン！」

光球と隼が交錯した。光球の大爆発に翼を削られるも、隼は朽ちることなく飛び続ける。

ドーム状に広がる炎がシグナムを飲み込み、燃え盛る隼の嘴がアサギを捕らえた。

炎が消え、静寂が戻った時、そこには倒れ伏す二人の女がいた。

第4話：説明タ〜イム♪ そしてフラグ！ ……恋愛じゃないよ？（前書き）

何時の間にやら2000PV突破♪

今回は説明ばかりでダラ長くなった気がします……。

第4話：説明タ〜イム♪ そしてフラグ！ ……恋愛じゃないよ？

「いや〜、すごい勝負だったツスね〜」

サウレが軽く言う。あのくらいの激戦は魔界では珍しくもないのでこの程度の反応だが、他のメンバーはそうではなかった。

「スゲエ……。全力のシグナムと互角かよ……」

「ソニックムーブと同じくらいの速さで動いとったな……」

「それ以上に、反応速度が凄いよ……。隙を突いたシグナムの攻撃に、即座に攻撃で対応するなんて……」

「風と火、少なくとも二つの変換資質……。それに最後の攻撃は、威力のわりに使った魔力が少なかった……」

思い思いの感想を洩らす隊長陣。FW陣は言葉も出ない。

「皆さん、魔界式の戦闘方法を見るのは初めてでしょうツスから、二人が起き次第説明に入りましょうツス」

程なくして、アサギとシグナムが目を覚ました。

場所は変わって機動六課隊舎ロビー。

「それじゃサクツと説明しようか。まず初めに聞きたいことある？」

なのはが手を挙げた。

「アサギちゃんは見えたかんじ火と風の二つの属性を使っていたけど、複数の変換資質があるの？」

「アレね。質問に質問で返して悪いけど、変換資質っていうのは、シグナムが炎出したようなヤツ？」

「うん。炎の他にもフェイトちゃんとエリオが持っている雷と、ここには持っている人はいないけど、凍結の変換資質があるの」

それを聞いたアサギは、少し長くなるけど、と前置きして説明を始める。

「大気中には『靈素』って言うエネルギーの粒みたいなものがあって、魔界の技は個人の資質に依らず、それと魔力を結合させて色んな現象を起こしているの。火の靈素なら炎上や爆発、風の靈素なら突風や鎌鼬、みたいな感じ」

「えーっと……」

専門用語が出て来たためか、スバルはやや混乱気味だ。

「簡単に言えば、靈素と言う種に魔力と言う水をかけると、魔法と言う花が咲くってこと」

「ああ、なるほど」

納得するスバル。と、ここでティアナが疑問を呈した。

「大気中の魔力と靈素が勝手に結合することは無いの？」

「基本的に魔力と靈素は水と油みたいな関係だから。もともとは分離している所に自分の魔力を流し込んで掻き回すことで結合させるってこと。だから魔界の技は自分の魔力だけじゃなくて大気中の魔力も使って発動しているの」

なるほど、とティアナ、そしてなのはが頷く。使用魔力のわりに威力が高かったのはそういう理由があったのだ。

「私からも一つ質問がある」

と、ここでシグナムが発言。

「お前はあの風の魔法を『メガ』ウインドと言っていたが、同系統の魔法で上位や下位があるということか？」

「そういうこと。今回の模擬戦で使った技の内、魔法はメガウインドだけで、他は厳密には特殊技って言うんだけど、大きな意味は無いから省くとして……」

魔力を使った特殊な技だから特殊技。そのまんまである。そういう意味では魔法も特殊技に入るため、アサギの言うようにこの区分に大した意味は無いのだ。

「魔法も色々あるけど、ランク分けされているのはファイア、ウインド、クール、スター、ヒールの五種類。スターは雷と光線が合わさったような魔法ね。で、今言った五つがメガ、ギガ、オメガ、テラ、ペタ、って言う順番に強くなっていくの」

「ちなみに、ヒール系は何故かオメガクラスまでしか無いんスよ」

アサギの説明にサウレが補足を入れた。

「メガウインドはウインド系で下から二番目というわけか……。朝霧はどのくらい使えるんだ？」

「アタシはウインド系とヒール系をメガクラスまで。回復魔法があれば何かと便利だし、銃技には風属性の技が無いからね。あ、あの高速移動もウインドの応用ね。ギガクラス以上は威力に比例して習得難易度が爆発的に上がるからダメだったよ」

「ペタクラスだと威力はどのくらいなんですか？」

と、エリオ。

「大災害並み、というよりそれ以上。都市の一つくらい軽く消し飛ばよ」

「習得出来るのはもの凄い力を持った魔王くらいッスけど」

とサウレが言った時、

「あーっ！ そうだ思い出した！」

ヴィータが大声を上げた。

「模擬戦がスゴ過ぎてすっかり忘れてたけど、あの時言ってた魔王軍って何なんだよ？」

ヴィータの言葉に他の面々もそういえば、と思い出す。

「あー、そういえばアタシのことほとんど言っただけだったような……。まあ、魔王ってのはだいたい察しは付くと思うけど、魔界を支配する王のことね。で、何でアタシが魔王軍にいたかって言う」と

結構前のことだけど、とアサギは続ける。

「アタシ、17歳より前の記憶が無くて、気が付いたら魔界にいたの」

「えっ……」

アサギの思わぬ告白に、重い空気が流れ出す。が……、

「あ、姉御、ちょっといいツスカ？」

サウレが何やら焦ったような声を上げた。

「オレ、姉御の正確な歳聞いたことなかったんスけど、結構前の話で17歳云々が出て来るってことは、姉御今17歳超えてるってことツスカ!？」

「そうよ。今23歳」

「ええええええっ!？ マジツスカ!？ そのわりには体型が幼——ぶべらっツス!」

かなり失礼なことをサウレが言いかけた瞬間、彼はアサギに投げ飛ばされ床に激突、爆発した。

プリニーは強い衝撃を受ける、正確には投げ飛ばされたり高い場所から落ちたりすると爆発するという特徴があるのだ。

なお、何も無い場所に投げられたため、被害は（サウレ自身を除いて）無かった。

サウレの現状は自業自得だが、アサギの年齢についてはなのは達も驚いていた。スバルやティアナと同じくらいだと思っていたら、まさか年上だったとは。

「あのアホは放っておくとして……。歳のことは気にしないでいいから。周りが悪魔ばかりだったから、その辺こだわり無いし」

悪魔の外見年齢はあてにならない。十代前半に見えても実年齢はその百倍以上だったりすることなどザラにある。

閑話休題。

結果的に重苦しい空気は消えたので、少し離れた場所で黒こげにな

っているサウレも無駄死にはなかった（そもそも死んでいない）。

「どこまで話したっけ？ ……ああそうだ、魔界にいて、ある時突然魔王にケンカ売られたの」

「何でやねん！」

はやてがツッコむ。魔界にいた↓魔王にケンカ売られた、では脈絡が無さ過ぎる。

「さあ？ 虫の居所が悪かったんじゃない？」

「とんでもない理由だな……」

シグナムが思わず呟く。

「当然あつさりやられて、その後その魔王、ゼタって言うんだけど、ソイツが『お前はあまりに弱過ぎる！ 見るに堪えぬわ！ 我が下で修練を積むがいい！』とか言ってきて。で、無理矢理弟子にさせられて、戦場に出たりしているうちに戦闘技術が身についたの」

「ホントによく生きてたわね……。って、どうしたのサウレ？ 不自然なくらい驚いてるけど」

ティアナが何気なく視線を向けた先には、ムンクの『叫び』のようなポーズをとり、マナーモードの携帯電話のごとく体を震わせている、何時の間にか復活していたサウレがいた。

「そ、そりゃ驚きもするツスよティアナさん……。下っ端悪魔のオレが言うのもアレなんスけど、魔王もピンからキリまでなんスよ……。それこそ、下は鍛え抜かれた人間が数人集まればどうにかなるレベルから、上は世界の一つや二つ簡単に滅ぼせるレベルまで……。その魔王達の中でもゼタ陛下は……。う、『宇宙最強』と謳われる

お方なんスよ……!」

『宇宙最強!?!』

六課メンバーの声がハモる。

「そうなの。ホント我ながらよく生きてたもんね」

今でこそ軽く言っているが、当時は狂いそうなほどキツかった。いや、狂って一周して元に戻ったのかもしれない。

「しかし魔王か……。今後そんなヤツが出て来たらどないしよ……」
「多分それは無いと思う。悪魔は文化はともかく人間界そのものには興味無いヤツがほとんどだし、魔王だったらなおさら。この世界のことを知ってもすぐ忘れるって」

はやての懸念を打ち消すように言うアサギ。

だが、彼女は知らなかった。今言ったようなセリフは俗に『フラグ』と言われるものであることを。

第4話：説明タ〜イム♪ そしてフラグ！ ……恋愛じゃないよ？（後書き）

そんなワケで、恋愛フラグではなく魔王フラグでした！

第5話：魔王降臨！！（前書き）

思ったよりも長くなったので、二話に分けました。

第5話：魔王降臨！！

飾り気の無い無機質な通路を、一人の男が歩いている。他に動くものは無く、男の足音だけが空しく響く。

通路の先、これまた殺風景な広間に男が足を踏み入れた瞬間、通路からは見えない場所に待機していた二人の魔導士が、既に魔力の充填されているバズーカ型のデバイスを構えた。

しかし魔力弾が打ち出されることなく突如爆裂し、

「ぐふっ！」

「があっ！」

二人は爆風をモロに食らい床に叩き付けられ気絶。

男の視界が晴れる前に斧型のデバイスを持った魔導士が三人、男に斬り掛かるが、

「フン！」

「ぐわっ！」

「ぎゃあっ！」

「がはっ！」

男の両腕と右足に弾き飛ばされ、壁に激突し気絶した。

少し離れた場所から男を狙っている遠隔操作式の機関銃が銃弾を打ち出——す前にやはり爆発。

「……つまらんな」

右腕を機関銃があった方向に突き出したまま、男が呟いた。

「どいつもこいつも弱過ぎる。まるで手応えが無い。羽虫を相手にしているようだ」

男が戦った——もとい、蹂躪したのは先程の五人だけではない。彼が通って来た道筋を辿って行けば、魔導士・非魔導士合わせて百数十人が倒れ伏しているのが見つかるだろう。

「これでは親玉も大したことはあるまい」

男が今いるのは、屋敷の地下に造られた、とある犯罪組織のアジトである。

「まあ、実力がどの程度であれ……」

男は監視カメラの方へ視線を向け、言った。

「我に楯突いた報いは、しっかりと受けてもらうがな！　フハハハハハハ！！！！」

「な、何者なんだ、あの男は……」

アジトの最奥の部屋、スキンヘッドにヒゲ、そして三白眼、といかにも悪役な風貌の男がモニターを見ながら呟いた。

この男の名はワルダー・アクボス。殺人、強盗、密輸、何でもござれの犯罪組織『セブンスエイト』の親玉だ。

S＋相当の高い魔力を持ち、さりとて魔法を絶対視するようなアホではなく肉弾戦にも秀で頭も切れる、他人が聞いたら

「それだけ能力あるなら真面目に働けよ」

と言われること確實の人物。

そんな彼の部下もまた高い戦闘力を持ち、密輸した質量兵器があることもあって魔力だけに頼りがちな管理局員など敵では無い……答だった。

突然襲撃してきた明らかに管理局員ではない男には、魔法も質量兵器も人海戦術も不意打ちも通用しなかった。部下は一撃で倒され、罨は発動する前に潰された。

報いがどのと言っていたが、ワルダーはあの男と面識は無いし、ましてやケンカを売った覚えも無い。

「俺が一体何をしたって言うんだ……！」

他人に恨まれるようなことをした覚えは――腐る程ある。だがあの男は自分のことなど全く知らないかのような口振りだった。ならば何故？

答えの出ない考えを巡らせている内に、男は例によって罨を発動前に破壊しながらワルダーの部屋へと一直線に向かって来る。

「もうやるしかない……！ 当たりさえすれば……、当たりさえすれば……！」

ワルダーはバズーカ型デバイスを構えた。

「ここが最後の部屋か」

言って、男が扉を蹴破る。

直後、黒い砲撃が彼に襲い掛かった。

「ハア……ハア……、やったか……？」

肩で息をしながらワルダーは言った。限界まで魔力を絞り出し、カートリッジまで使って撃った過去最大最高威力の砲撃。今を受けたとあってはさすがにあの男も――

「……驚いたな」

声が、聞こえた。

「あ……、ああ……、あ……」

「この程度の攻撃で我に勝てると、本気で思っていたのか？」

右腕を前に突き出した体勢で、男が立っていた。全くの無傷のまま
で。

「ば……、化け物……」

腰を抜かし、思わず呟くワルダー。

「化け物？ 違うな……」

男はその呟きに、右の手のひらの前に紫電を纏った光球を生み出し
ながら答えた。

「我は、魔王だ！」

放たれた光球に撃たれ、ワルダーは意識を手放した。

昼頃、機動六課に一人の男が現れた。

燃え盛る炎のような赤く長い髪を持ち、鍛え抜かれた肉体を黒い服に包んだ、二メートルを超える大男だ。肩には大きな袋を担いでいる。

男は周囲の視線も気にせず、受付の方へ歩いていく。

「ここは時空管理局とやらの施設で間違い無いか？」

「は、はい、そうです……。どのようなご用件でしょうか……」

若干怯えながら受付嬢が聞くと、男は懷から数枚の手配書を取り出しカウンターの上に置き、次いで袋の中身を床に落とした。

出て来たのは数人の男。ワルダー・アクボスとその部下、組織の幹部達だ。死んではないが非常にボロっちくなくなっており、申し訳程度に衣服が残っている。

先程置いた手配書は彼らのものである。

「コイツらの組織を潰してきた。○○地区のデカイ屋敷の地下にアジトがある。数が多かった故、とりあえず親玉と幹部だけ連れて来た。懸賞金をくれ」

「し、しばらくお待ちください……!」

調査依頼やら何やらのため、受付嬢は奥に入って行った。周囲がざわめき出した時、

「何だか騒がしいですねえ？」

「何かあったんやろか？」

書類仕事を終えたはやて、シグナム、ヴィータ、リインフォース？がやって来た。

「あれはっ……! ワルダー・アクボス!？」

「他のヤツらもS級手配犯ばっかじゃねえか……!」

シグナムとヴィータが倒れているワルダー達を見つけて驚愕の声を上げ、

「大きいです……」

リインがその近くに立っている男の身長に感嘆の声を上げた。

「あの、この人達は貴方が？」

「いかにも、我が捕らえてきた」

はやての問いに、鷹揚に頷き答える男。

「あゝ、終わった終わった」

その時、訓練を終えたFW陣とアサギ、サウレ、分隊長二人が帰って来た。

FW陣は疲弊しているが、アサギとサウレはピンピンしている。

「……ん？」

スポーツドリンクを飲んでいたアサギが受付近くに立っている男に気づき、

「ブホオ!？」

吹いた。

サウレはいつぞやのようにムンク状態になっている。

「あ、あああああああのお方は……！」

「ゼ、ゼタ!？」

「む? おお、アサギではないか」

驚愕するアサギに男——ゼタはさらりと答えた。

「ゼ、ゼタってあの、宇宙最強っていう……」

戦慄くはやてに、ゼタは腕を組んで胸を張り、堂々と答えた。

「いかにも! 我はゼタ! 宇宙最強の魔王なり!」

現在、一同は食堂にいる。体は正直なもので、まさかの魔王登場に皆が戦慄している最中にスバルの腹の音が盛大に響き渡り（六課メンバーは息の根が止まるかと思った）、

「話くらい食事をしながらでも出来るだろう」

と言うゼタの計らい（?）で食事へ移動することになった。

移動したはいいが、食事は進んでいない。サウレは魔王は見慣れているが、さすがに宇宙最強魔王を前にして緊張気味だ。他のメンバーは言うまでも無い。以前サウレから、

『上級の魔王は世界の一つや二つ簡単に滅ぼせる』

と聞かされているのだ、そんな状態で上級も上級、最強の魔王を前にしては食事どころではない。

——ただ一人を除いて。

「で、ゼタ、アンタわざわざ人間界に何しに来たの?」

（何でそんなにフランクに話せるのおおおお!？）

なのはとフェイトが心の中で絶叫する。

人間が自分より遥かに強い力を持つ種族の王に対して、あろうことか呼び捨てでタメ口である。当人同士は気にしていないようだが周りにしてみれば心臓に悪い。

「まさか治安改善に協力しに来たわけじゃないでしょ？」

「当然だ。人間界の治安など我の知ったことではない」

ハンバーグを切りながら問うアサギに、何故か持参していたどす黒いタルタルソース（のような何か）をエビフライにかけながら答えるゼタ。

「大本の目的は視察だ。お前もここにいるのだから知っているだろう、いくつもの人間界を支配している組織のことを」

（（やっぱりそういう認識なのか……））

以前アサギが似たようなことを言っていたことを思い出し、心の中で呟くシグナムとフェイト。

「取るに足らぬ噂だと思っていたが、万が一、いや不可思議が一にでも我が魔界に傷を付けられるようなことがあってはならぬからな。ちようど暇だったこともあって視察に来たのだ」

そこで一旦言葉を区切り、ゼタはエビフライを口に運んだ。

「ほう、悪くないな」

満足げなゼタの様子に、（アサギ以外の）一同は安堵の息を吐いた。食事が不味いという理由で世界を滅ぼされてはかなわない。

「一目に付かぬ場所に時空ゲートを開きこの世界に降り立ったのだが、しばらく歩いた所でいかにもチンピラといった風貌の二人組に絡まれてな」

（オイイイイイ！　誰だよそんなことしやがったバカは！
逆鱗に触れて世界が吹っ飛んだらどうすんだよ！）

心の中で顔も知らないチンピラに怒声を上げるヴィータ。

「軽く叩きのめしてやったら組織がどうのと口走ったのでな。親玉がいるのならソイツに落とし前をつけてもらおうと思い、チンピラ共を締め上げてアジトの場所を吐かせ、襲撃した、というわけだ」

なんと、下っ端の軽率な行動のせいでセブンスエイトは壊滅させられたのだ。哀れワルダー・アクボス。

「それはまた……。命知らずというかただのアホというか……」

「全くだ。S級犯罪者などと仰々しく書いてあるからどれほどのものかと思えば、取るに足らぬ雑魚だったしな」

実際はワルダーが弱いのではなく、ゼタが尋常でなく強いだけなのだが。

「結果として視察も終わった。あの程度の雑魚で上級だと言うのなら、我が魔界にとっては何の脅威にもならぬ。金が入り次第、観光でもして帰るとしよう」

「お金入るまで時間がかかると思うけど、それまでどうすんの？
別の犯罪組織でも潰す？」

「探すのが面倒だ。それに見つけたところでどうせまた雑魚ばかり

だろう。さてどうするか……」

腕を組み、考え込むゼタ。

「そうだ。ここに訓練場はあるな？」

「そりゃあるけど」

「ちょうど良い機会だ。アサギよ、今のお前の力、我に見せて見るがいい！」

第5話：魔王降臨！！（後書き）

ワルダーの外見と組織名の由来はドラゴンボールのナツパです。

彼の再登場予定はありませんw

次回、ゼタ様が暴れます。

第6話：宇宙最強魔王の力がどれほどのものか！ その目に焼き付けるがいい！

予告通り、ゼタ様無双です。

第6話：宇宙最強魔王の力がどれほどのものか！ その目に焼き付けるがいい！

「さて、訓練場に來たわけだが、一つ問題がある」

着いて早々にそう切り出すゼタ。ちなみに、アサギ以外のメンバーは観戦席にいる。

「この訓練場の素材に、暗黒鉄鋼やオリハルコンは使われているか？」

「そんなもん人間界に無いって」

「だろうな。となると、加減するとは言え我がここで戦えば、うっかりぶち抜いて水没させてしまうかもしれん」

物騒なことを言った後、ゼタは考える。

「……そうだ、こうすれば良い。インバイト！」

ゼタが叫ぶと、空から闘技場が降ってきた。闘技場、と言ってもロープの無い巨大なプロレスのリングのようなものだが。

インバイト——ゼタが使用する召喚魔法。下は小さなアイテムから上は城までありとあらゆるものを召喚でき、たとえ建物のような大きなものを召喚しても直下のは微塵も変わらないという実にご都合主g……高性能な魔法である。

「魔王ともなると建造物も召喚出来るんやなあ」

「冷静だね、はやてちゃん……」

「いちいち驚いてたら切り無いしな……」

何か悟ったような表情のはやてと苦笑するなのは。

「これは……、凄いと言うより凄まじいですね……」

そう呟いたのはメカニックのシャーリーことシャリオ・フィニーノ。

「どう、シャーリー？ ゼタさんの魔力は？」

と、フェイトが尋ねると、

「Sが七つを超えた辺りで測定不能になりました」

とんでもない答えが返ってきた。

「それはまた……」

改めてゼタの凄さを知った一同だった。

〈side リング〉

「では始めるか。先手は譲ってやろう、かかって来るがいい！」

腕を組んで胸を張る『魔王様のポーズ』を取りながら言い放つゼタに、アサギはバハムート666カスタムを向け技を放った。

「マジカルバレット！」

「ハアッ！ 魔王ナツクル！」

星型弾を殴り砕くゼタ。

魔王ナツクルはただのパンチなのだが、速度が尋常ではない。腕が霞んで見える程だ。

「そろそろこちらからも行くぞ！」

ゼタの姿が掻き消えた。アサギは半ば反射的に防御の姿勢を取り、後ろを向く。

「フッ！」

「くっ……！」

ゼタの拳がアサギを大きく後方に弾き飛ばす。ウインドの応用で勢いを殺し、緩やかに着地するアサギ。

「防いだか。まあそのくらいは出来て当然だな」

〈side 観戦席〉

「拳の速度が音速を超えています。魔力反応は一切ありません」

「それじゃあ自力であれだけの動きを!？」

「ソニックムーブよりも速いの……」

「キュク……」

シャーリーの報告に驚愕と感嘆の声を上げるエリオとキャロ、そしてフリード。

「スゴいスゴい！」

「何てデタラメな……」

「理屈で考えちゃダメっスよ。魔王なんてみんな常識破りなのが常

識な存在なんスから」

はしゃぐスバルと唾然としているティアナ、そしてやはり一際冷静なサウレ。

隊長陣は固唾を飲んで戦いを見ている。

〈side リング〉

「ならばこれならどうだ？ ギガファイア！」

ゼタの足下に赤い魔法陣が展開され、上空に二メートル弱の火球が出現し、降り注ぐ。が、アサギはそれを高速移動で危なげ無くかわしていく。

「さらにいくぞ！ ギガスター！」

赤い魔法陣に重なるように今度は紫色の魔法陣が展開され、紫電を纏った光の柱がアサギ目掛けて降って来る。

「くっ……！ なら、マジカルバレット！」

さすがに全て回避することは出来ないと判断したのか、ギガスターをかわしながら左の銃でマジカルバレットを放ち、ギガファイアを相殺していくアサギ。そして右の銃には、炎が凝縮されていく。

〈side 観戦席〉

「ス、スゲェッス！ ギガクラス魔法を二種類同時に、しかも連射してるッスよ！」

「そんなにすごいことなのか？」

珍しく興奮しているサウレにヴィータが尋ねる。とりあえずあの魔法が強力だということはわかるのだが。

「そりゃもう！ 違う種類の魔法、特にギガクラス以上の魔法を同時に使うには、ものスゲー繊細な魔力コントロールが必要になるッス。ただ魔力がデカけりゃ使えるってもんじゃないんスよ」

「膨大な魔力とそれを自在に操るセンス、その両方を持ち合わせているからこそ、ゼタ王は最強の座に君臨しているのだな……」

感慨深げに、シグナムが呟いた。

〈side リング〉

ギガファイアを相殺しギガスターをかわしながら、アサギはゼタに狙いを定める。

「炎熱地獄！ インフェルノ！」

光球が撃ち出された。弾丸のごとき貫通力でギガファイアやギガスターを突き抜け、ゼタへと向かう。ゼタはそれを、

「ぬん！」

握り潰した。単なる握力ではなく、手の中に魔力を集め、インフェルノを相殺したのだ。

「相殺されるとは思ってたけど……、まさか、握り潰すなんて……」
「フハハ、ただ相殺するだけでは芸が無かろう。これが『魅せる戦い』というものだ！」

なかなかサービス精神旺盛な魔王である。魅了とは違うが、度胆を抜いたという意味では大成功だろう。

「さて……、インフェルノは魔界銃技の奥義だ。それを破られたとあっては、もう打つ手は無いのではないか？」

ゼタの言葉に、アサギは首を横に振る。

「奥義は一つじゃない！」

言って、アサギは上空に飛び上がると、氷の翼を広げた。翼から溢れた冷気が銃口に集まって行く。

「極寒地獄！」

撃ち出された冷気は六つの氷塊となってゼタの周りに着弾、それらを繋ぐように、巨大な水色の魔法陣が展開された。

「これは!？」

余裕の笑みを崩さなかったゼタの顔に、初めて驚きの表情が浮かぶ。

「コキュートス！」

そして、魔法陣から噴き出した膨大な冷気がゼタを飲み込んだ。

「ようやく直撃……。これで少しくらいはダメージが――」

入ったかな、と続けようとした時、赤いオーラが冷気を塗り潰した。

「フハハハハハハハ！！！！　今のは少々驚いたぞ、アサギよ！」

楽しいにそう言ったゼタには、ダメージを受けた様子は見られない。そしてその手には、いつの間にか黒い大剣が握られている。

「私も少し力を出そう。秘技・魔剣王気ッ！！！」

ゼタが剣を振り下ろすと、魔力による斬撃が砲撃のごとく飛んで来た。

「うわっ！」

慌てて斜め上に飛び退きかわすが、次の瞬間、ゼタが一瞬で目の前に移動して来た。

「幕引きだ」

目を文字通り輝かせながら、それはそれはステキな笑顔でそうおっしゃるゼタ陛下。アサギも釣られて引きつった笑顔を浮かべる。

「ゼタビィィィィィィィンムッ！！！！」

「ギャアアアアアアア……！！！！」

アサギは人間のものとは思えない絶叫を上げながら、ゼタの目から放たれた極太の光線の中に消えていった。

「うわ……、えげつねえッス……」

サウレが呟いた。フェイトとティアナは何かトラウマに触れるもの

があつたのか顔を青くして体を震わせている。

「てか大丈夫なのか!? アサギ生きてんのかアレ!?」

ヴィータが焦った声を上げる。デバイスが無いのだから、ゼタの技は常時殺傷力があることになる。あんな光線をモロに受けてしまったアサギは――

「あつっ、死ぬかと思った……」

生きていた。多少煤けているが、外傷も無い。こういう仕組みか解らないが、ゼタは非殺傷設定を習得していたらしい。

「フハハハハハハハハハ!!! オーバーキルこそ魔王の醍醐味!

そうは思わんか、その栗色の髪の小娘」

「えっ! 何で私に!?!」

いきなりゼタに話を振られ、なのはは面食らった。

「魔王の勘だ。その一見純真なようで、その実敵対する者は容赦無く葬り去らんとする危険な光を湛えた目……、お前には素質がある。どうだ、魔界の王になってみる気はないか?」

「ありませんっ!」

ゼタのスカウトを突っぱねるなのは。ゼタは「遠慮は無用だぞ?」と本気か冗談か解らないことを言って笑っている。

「ゼタ王、少しよろしいか?」

と、シグナムがリング上に飛んで来て、ゼタに声をかけた。

「まだ時間もある。私と戦って頂きたいのだが」

「ほう、我に挑むか……。宇宙最強魔王の称号が目当てか？」

「いや、正直に言って勝てるとは思わない。ただ、私の剣がその宇宙最強の男にどこまで食らいつけるか、それが知りたい」

どうやらゼタが剣を使う（ほとんど使っていなかったが）ことを知って、バトルマニア魂に火が付いたようだ。

「あゝまたいつものが始まったよ……」

多少予測していたのか、呆れと言うより諦めの籠もった声でヴィー
タが言った。

その時、

「私もやります！」

なのはがリングに飛び乗った。先程の『魔王の素質あり』発言が腹
に据えかねているらしい。

「挑戦したところでさっきのことの裏付けになるだけだと思うんだ
けどな……」

ヴィータの眩きは届かない。

「よかろう！ 挑戦を拒んでは魔王の名折れ！ 二人同時にかかっ
て来るがいい！」

そして、二対一の二回戦が始まった。

〈side リング〉

「はあああああ!!!!」

「アクセルシューター!」

「拡散ゼタビーム!」

何条もの細い光線を撃ちなのはの攻撃を相殺、時折直接なのはを狙って撃ちながら、シグナムと斬り結ぶゼタ。遠近両方の攻撃を同時に繰り出しているながら、その動きは的確かつ高速。

(当たらないようにするのが精一杯……、手を抜いてここまで強いなんて……!)

(一撃一撃が速く、重い……、防ぐだけで精一杯だ……! そして恐らく微塵も本気を出してはいない……)

(これが、宇宙最強の魔王の力……!)

一方で、ゼタも内心驚いていた。

(手加減しているとは言え、並みの悪魔では反応出来ぬ速度で撃っているのだが……。こちらの小娘の剣技もシールドに匹敵する……)

いけ好かない『冥王』と呼ばれる男の姿を思い出し、即座にそれを抹消する。あの陰険な引きこもり野郎のことなどどうでもいい。今はこの戦いを楽しむだけだ。

「フハハハハ！ いいぞ小娘共！ もっとだ、もっと我を楽しませろ！ お前達の最高の攻撃を出すがいい！」

「そうさせて頂こう！ 紫電一閃！！！」

炎を纏った強烈な斬撃を、微動だにせず受け止めるゼタ。なのはが魔力を溜めているのが見えるが、あえて手は出さない。

「シグナムさん離れて！」

なのはの声を聞き、シグナムはゼタから距離を取った。

「スターライト……ブレイカー！！！」

桜色の砲撃が、ゼタに向かって放たれた。

「ハアッ！」

ゼタはそれを魔力を込めた大剣の一振りで両断、死角を突くように飛んで来た連結刃を片手で掴むと、

「ぬうん！」

「ぐうっ！」

「きゃあ！」

振り回し、シグナムごとなのはに叩き付けた。

「ハア……、実力差があるのは……、分かっていたけど……」

「一太刀も……、浴びせられんとは……」

「恥じることはない。並みの悪魔ではお前達に手も足も出まい。お前達の力、この我が認めてやろう！」

ゼタの言葉を聞き、疲労の濃い二人の顔にわずかに笑みが浮かぶ。

「そしてお前達に敬意を表し、幕引きは派手に飾ってやる！」

巨大な赤い魔法陣が展開され、ゼタの背後に長大な竜の幻影が現れた。

二人の表情が凍りつく。

「テラファイア！」

竜の口から凄まじい火炎が吐き出され、

「——……！」

悲鳴さえも掻き消す大爆発が起こった。

「フッフ、フハハハハ！！！！ フハハハハハハハ！！！！」

猛火を前に高笑いするゼタ。

まさに魔王！

機動六課隊舎前。

「なかなか楽しい一時だったぞ」

受け取った懸賞金（億近い）をしまい、満足そうな表情でそう告げるゼタ。

「こっちもいい経験出来たし、ちょうど良かったんじゃない？」

「そうだね……」

「最後のアレは本当に死ぬかと思ったがな……」

最後のテラファイアもきっちり非殺傷になっていたので、ケガは全く無かった。もつとも、精神的ダメージは相当なものだったようであるのはとシグナムは若干やつれている。

「我はそろそろ行く。ではな」

ゼタは悠然と歩き去っていった。その姿は威厳に満ち溢れており、六課のメンバーは先の模擬戦も相まって、大きな感銘を受けたという。

後日、誰かが録画していた模擬戦の映像が無料動画サイトにて公開され、また、捕まったワルダー達の証言もあり、『赤髪の魔王伝説』がミッドチルダ中に広まることとなった。

第6話：宇宙最強魔王の力がどれほどのものか！ その目に焼き付けるがいい！

個人的に、ゼタ様の魔力はS×50くらいあるんじゃないかと思つてます。最強ですから。

ちなみにこのゼタ様、ファントム・キングダム本編のゼタ様よりも強いです。レベルで言うと3000くらいあります。本作品中では数百分の一まで力を落として戦ってます。それでも圧倒的なゼタ様にしびれ、憧れてもらえれば幸いです。

第7話：ようやく開幕！ アサギウォーズ！（前書き）

PV6000突破！

ゼタ様パワー恐るべし……。。

第7話..ようやく開幕! アサギウォーズ!

朝、機動六課食堂。

アサギ達がいるテーブルの前に、テレビが置かれている。

液晶テレビ並みの大きさだが、全体的にレトロなデザインをしている。

実はコレ、アサギが『持っていた』ものである。魔界の道具袋に不可能は無い。

テレビの画面には、『MHK（魔界放送協会）ニュース』と言うテロップと、水色の髪と赤い大きなリボンが特徴的な女性、そして兎のぬいぐるみのような生物が映っている。

『ニュースの時間です』

兎のぬいぐるみが声を発した。外見に反して渋い男の声だ。

『当番組は、全魔界、全宇宙へ向けて、ギガビジョン放送にてお届けしています。担当はワタクシ、ウサギと』

『……………』

『ある意味史上最強、プレネールさんです。どうぞよろしく』

「ある意味史上最強? どういうこと?」

スバルが尋ねる。

「プレネールさんには色々伝説があるの。『何も喋らないのに画面に映ってるだけで視聴率がうなぎ登り』とか、『プレネールさんの

機嫌を損ねたスポンサーが翌日サメのエサになった』とか」

「あと実力も上級魔王クラスらしいッス」

「それはまた何とも……」

皆驚いているが、それほどリアクションは大きくない。そろそろ魔界のデタラメさに慣れてきたようだ。

『最初のニュースです。本日、ホテル・シャレコウベにて、ローゼンクイーン商会監修のオークションが開催されます』

「ホテルでオークションって、何か懐かしい組み合わせね」

ティアナが呟く。

『中継が繋がっております。現地のサメさん！』

画面が切り替わり、ドクロを基調とした建物と、マイクを持った鯨のぬいぐるみが映る。

『はい！　こちら、現地のサメです！』

建物に向かって歩きながらサメが言う。ウサギと違い、こちらは少年のような声だ。

『本日はこちら、ホテル・シャレコウベにお邪魔しています。今はまだ準備中ですが、一足先に商品を見せて貰いましょう！』

サメが中に入ると、ガラスケース内に保管された大小様々な商品が、ずらりと並んでいる所が移し出された。

『コレは凄い！ 森羅万象オーブに超合金ロボスーツ、神槍ロンギヌスにアルカディア、滅多にお目にかかれないレアアイテムが目白押しです！』

ゆっくりと歩くサメに合わせてカメラが回る。

あるガラスケースが視界に入った瞬間、サメが血相を変えてそれに駆け寄った。

『こ、コレは！？』

そこにあっただのは一本の剣。長方形の刀身の中心に魔界文字が彫られ、柄には威厳漂う装飾が施されている。

『ご覧下さい！ あの伝説の名剣、魔剣良綱です！』

「何……だと……（ツス）」

アサギとサウレが愕然としている。

「見るからに凄そうだが、やはり相当な代物のようだな」

「もちろん。魔剣良綱は中級魔王クラスの魔力が宿った全宇宙の魔剣……、安くても20億ヘルは下らないはず」

「城一軒がだいたい4億ヘル前後ツスからね。こりゃ参加者は並みの悪魔じゃないツスよ」

『このオークションには魔界各地から名だたる魔神、魔王の方々が参加されるそうです。出品される品を考えれば、当然かもしれませんね。以上、現地からサメがお届けしましたー！』

サウレの言葉を裏付けするようにサメが言い、再び画面が切り替わった。

『ありがとうございます、サメさん』

『……………』

『珍しい品の数々に、プレネールさんも興味津々のようです』

「そうか？」

傍目には先程からずっと変わらない無表情にしか見えない。

『次のニュースです。待ちわびていた方も多いでしょう！ 明日、いよいよアサギウォーズが開幕です！』

『アサギウォーズ？』

全員の声がハモった。

「名前からして何かの大会みたいやけど、何でアサギちゃんの名前が出てくるんや？」

「アサギさん、何か知ってますか？」

キャロの問いにアサギは腕を組んで考え込む。

「知らない……はずなんだけど、何か胸の奥に引っ掛かるものがあるような……」

「とりあえずニュースを見てみましょうッス」

『……と、言うわけで、第一次アサギウォーズは23年前、世界各地に存在する幾千幾万のアサギの中からただ一人のアサギを決める

ために開かれた大会、アサギVSアサギの、アサギによるアサギのための、アサギでアサギを洗う、ドキッ！ アサギだらけのアサギバトル』

「……アサギってそんなにいっぱいいるの？」

「つか何だよアサギでアサギを洗うって……」

魔界に慣れたとは言え、さすがにコレには皆驚きを隠せない。
当のアサギにもイマイチ良く解らない。

『それでは、前回大会出場者7人……もとい7アサギを振り返ってみましょう』

ウサギが写真の付いた7枚のフリップを取り出した。

『腹黒演歌歌手、黒杉あさぎ！』

「何だろう……、コイツ見てると無性にぶん殴りたくなって来るんだけど……」

『筋肉王子、アサギ・シュバルツ・ネイチャー！』

「男の人もいるんだ」

『死を司る辺境魔界の女帝、アサギ・アサマール・アサリンドとアサギ・ザ・デッド！』

「魔王も参加していたのか……」

「そばに居るのってゾンビですか!？」

『コウチュウ目コガネムシ科カブトムシ属、アサギ・ザ・ビートル
』

「……カブトムシ？」

『古き良き時代のレトロ戦士、アサギ8ビット!』

「種族云々以前に、生物なの、コレ……?」

『ポロリもあるよ、呪いのアサギ人形Withアサギロボ!』

「ポロリって首のこと!?!」

『そして前回大会優勝者! プリニーの身で数々の強豪を打ち倒した執念の女、朝霧アサギ!』

『!?!』

一同、驚愕。

そして、

「……思い出したっ!」

アサギが叫んだ。

「アタシ、この大会に参加してた!」

「……では、このプリニーが転生して今の朝霧になった、ということ
とか? 23年前ならば、大会が終わってすぐに転生したと考えれ
ば辻褄は合うが」

「そうみたい……」

アサギには前世の記憶が部分的に戻っていた。通常、転生するとその前の記憶は消えるのだが、魂に強く刻み込まれた記憶は転生後も持っている、あるいは何かの拍子に思い出すことがある。

アサギの場合まさにそれだったようで、第一次アサギウォーズに参加していたこと、そしてそれ以前――プリニーとして償いの日々を送っていたこと、そして何故プリニーになったかを思い出していた。

（うわー、今にして思えば滅茶苦茶恥ずかしい……。）

『当番組はプライバシーをガン無視して、朝霧氏の素性、具体的にはプリニー化の経緯から第一次アサギウォーズ終了後までを調べ上げました』

「オイイイイ！？ 何勝手なことしてくれちゃってんのこの草食動物！？」

叫んだところで相手は画面の向こう、届きはしない。電源を切れば良いだけのことだが、今の彼女はそれも思いつかない。

『朝霧氏はプリニーにケンカを売った後色々あって爆死、身の程知らずの罪でプリニーに転生し、償いの日々を送っていたようです』

「……………」

何とも言えない空気が流れる。アサギはテーブルに突っ伏していたが、意を決して、と言うより諦めて顔を上げた。皆の生温い視線が痛い。

『……優勝した朝霧氏は、自棄になった黒杉氏が自分もろとも魔界

を滅ぼそうとして呼び出した戦艦良綱に大砲を使って特攻。コレを爆破した後行方知れずとなっていました。どうやらこの功績により償いを終え、再び人間に転生した模様です』

「戦艦に特攻!? そんなことしたんですか!?!」

エリオが驚きの声を上げる。

「あゝ……、確かにしたよ。それからのことは全く覚えてないけど」

覚えてはいないが、その後は今ウサギが言った通りなのだろう。どうやって調べたのかは永遠の謎だ。

『そして明日より始まる第二次アサギウォーズ、「唯一人のアサギを決めたって後から後から生まれて来るんだから意味ねーだろ」という強烈なツッコミを頂きましたので、最強のアサギを決める大会と相成りました。天下一武道会ならぬアサギ一武道会というわけです。なお、前回大会優勝者の朝霧氏には特別出場枠が与えられます』

「アサギ、出るの?」

「そりゃ出られるって言うんならね。個人的に興味もあるし、そもそも出ないとこの小説続かな（※自主規制）」

何やらアサギが意味不明なことを言った気がするが、そんなことは無かった。全く無かった。無かったたら無かった。

『ただいま、出場予定のアサギの皆様所に、アサギカウンターが送られています』

ウサギが言い終えた直後、時空ゲートが開いた。もはやこのくらい

では誰も驚かない。

現れたのは巨大な蛾のような姿の悪魔——モスマン。

モスマンは翼の上部を使って器用にカバンを漁ると、アサギに何かを差し出した。

見た目は浅葱色のた○ごっちそのもので、画面にはデカデカと『7』と表示されている。これがアサギカウンターなのだろう。

『はい、ただいま出場予定の7アサギ全員の受け取りを確認しました。表示されている数字は残り人数で、敗者のアサギカウンターからは数字が消えます。最後に1と表示されたアサギカウンターを持っている方が優勝者です。なお、受け取った時点で持ち主が登録されているので、敗者が勝者のアサギカウンターを奪い取ることは出来ません』

一息つき、ウサギが続ける。

『特に期間制限はありません。すぐに倒しに行くもよし、人数が減るのを待つもよし。ですが、今日中に他の選手を襲撃すると反則となるのでご注意ください。繰り返しますが、第二次アサギウォーズは明日より開幕です』

『……………』

『プレネールさんも興奮を隠しきれないようです。ちなみにワタクシ、予選にすら出られませんでした。アサギではなくウサギでしたから、なんちゃって！ はははは』

——シーン……。

空気が凍り付いた。

『……………（ビキイ）』

今のギャグがよほど頭に來たのか、プレネールさんの額にはっきり視認出来る程に青筋が浮かび上がり、画面が真っ暗になった。

白抜きの文字で『しばらくお待ちください』と表示されている。

程なくして画面が元に戻った。

ウサギの左耳が無くなっており、プレネールさんが何かを咀嚼している。

『失礼致しました。視聴者の皆様を不快にさせる発言がありましたことを、心よりお詫び申し上げます』

ウサギが深々と頭を下げた。

『続きまして、連続ドラマ小説、ふたりはガチキュア！マッスルヒート！お楽しみください』

画面が切り替わる。

燃え盛る炎をバックに筋骨隆々の二人の男が、荒い息をしながら抱き合――

――プツン。

アサギが音速に近い速度でリモコンを手に取り、電源を切った。が、少し遅かったようで、一同は完全にフリーズしている。

あの映像の衝撃は、ゼタの力を知った時以上だったという。

第7話..ようやく開幕! アサギウォーズ! (後書き)

そんなわけでアサギウォーズ、いよいよ開幕です。敵が出るのはもう少し先ですが。

なお、大分ネタが尽きてきたのと、現実が忙しくなってきたのとで、更新頻度が下がりそうです。どうか気長にお待ちください。

第8話：今は悪魔が微笑む時代なんだ！ BYアジャギ

今回の

後書きにちょっとしたアンケートがあるのでご覧ください。

第8話：今は悪魔が微笑む時代なんだ！

Byアジャギ

今回の

「フッフッフ……！ お前ら、アタシの名前を言ってみろ！」

「汚物は消毒ッス！」

「……何やってるの？」

「特に意味は無い（ッス）！」

ある日の機動六課、訓練場。

上記のやり取りは何故か鉄仮面を被っているアサギとモヒカンのカツラを乗せているサウレ、そしてティアナのものである。

繰り返すが特に意味は無い。何故、と聞かれれば『なんとなく』としか答えようが無い。当然今回の話に関係があるとかいうことも全く無い。

「今回アンタらの訓練の相手することになったわけだけど、今更基礎なんて教えるまでもないだろうし、魔界式の訓練を少し緩めदैやっていくから」

「要は『体で覚えろ』ってことッス」

ちなみに、緩めなかった場合『死にたくなければ』が頭に付く。

「アタシは隊長達みたいに甘くないから、訓練と言えども戦場の空気を体感してもらう」

「戦場の空気？」

「アタシはアンタらを殺すつもりで攻撃する。非殺傷だから死にはしないけど、実戦ならそうはいかない」

一同の表情が引き締まる。

管理局員としての仕事が死と隣合わせであることはわかっているが、非殺傷設定を使っているためか、どうしても死に対する意識が希薄になりがちなのだ。

「実戦で相手の殺気に怯んでその隙を突かれて殺されました、じゃ話にならない。だからあらかじめ訓練で――」

その時、アラートが鳴り響いた。

「いきなり本番か……」

これはこれで都合がいいかもね、とアサギは内心呟いた。

「市街地付近及びその上空に悪魔出現！ 上空に約40、地上に約50！」

それぞれの様子がモニターに映し出された。

地上には傀儡族。だが下級種のマリオネットやキラパペットは居らず、それらよりも大きく服の色が違う者ばかりがいる。

「デスコツペリアにマッドジェスター、ヘルズクラウン……、全部傀儡族の上級種ね」

「空の方は初めて見る悪魔やな」

一方、上空にはチェスの駒に竜の上半身をくっつけたような姿の悪魔――魔獣族が飛んでいる。

「ガーゴイルにガーディアン、魔獣族の下級種だけど、石で出来る分攻撃力と防御力は傀儡族より高いかな」

「出撃メンバーに関して何かある、アサギちゃん？」

「上空は回避力の高いフェイトと、破壊力の高いヴィータを推す。二人共遠距離攻撃で相手の攻撃を相殺出来るしね。地上は……」

言いながら、FW陣の方を向く。

「アンタら四人なら実力的にも勝てない相手じゃないし、連携を取ればかなり手早く片付けられるはず。相手がランクアップしている分危険性は大きいけど——」

「やるわ」

アサギが言い切る前にティアナが言った。

「危険な任務にあたるのは初めてじゃないし、ずっと前から覚悟もしてるつもり。今更怖じ気づいたりしないし、まして死ぬつもりなんて毛頭無い！」

「……他の三人も？」

「「勿論！」」

そう、とアサギは仮面の下で笑みを浮かべる。

「では部隊長、指示を」

はやてが頷き、告げる。

「上空はフェイト隊長とヴィータ副隊長、地上はFWの四人とアサギちゃん、サウレ君で敵を殲滅！ 機動六課出動！」

現場ではすでに別の部隊が悪魔達と交戦していた。ある程度数は減らしているが、敵がランクアップしていることもあって苦戦してい

る。

「ギギッ！」

「くっ……！ コイツら、前より強くなっている……」

一人の局員がデスコツペリアと斬り結んでいる。

デスコツペリアは左腕が切断され胸から腹にかけて大きな刀傷が出来ているが、歪な笑顔のまま局員にナイフを振るっている。

「ギギギィ！」

「ぐうっ……！」

背中に激痛が走り、局員が膝を付いた。背後に忍び寄っていたヘルズクラウンに斬りつけられたのだ。

「ギギギ……」

ヘルズクラウンが血の滴るナイフを振り上げた。

（ここまでか……！）

局員が死を覚悟した時、

「隠しキャラより優れた初期キャラなぞいねえ！」

謎の言葉を発しながら文字通り飛んで来たアサギが、ヘルズクラウンの頭を叩き潰した。

「大丈夫ッスか！ 援軍ッスよ！」

サウレがデスコツペリアを両断し、アサギが局員にヒールをかける。

「すまない、助かった！」

礼を言うと、局員は戦場へ駆けていった。

〈敵を一カ所に集めるから、キャロとアサギは殲滅、エリオとスバルとサウレは余りを狙って！〉

『了解！』^{ッス}

ティアナが念話で指示を飛ばしながら、幻術で分身を作り、傀儡族を開けた場所におびき寄せた。

「ギ？」

「ギギ？」

突然ティアナの姿が消え、首を傾げる傀儡族。さらに現れた鎖に絡め捕られてしまった。断ち切ろうとナイフを出すもう遅い。

「フリード、ブラストレイ！」

「キュオオオオオ！！！」

「マジカルバレット！」

『ギギヤアアアアア……！！』

炎に焼かれ星型弾に碎かれ、傀儡族は機能停止していく。

離れた場所に残っていた者も、エリオとスバル、サウレ、そして他の局員達によって破壊されていた。

その頃上空では、一方的な蹂躪劇が繰り広げられていた。

「はあああああつ!!!」

「グゴオオオオオ……!!」

「オラアアアアア!!!!」

「ギャオオオオオ……!!」

いかに攻撃力が高かろうと、当たらなければどうということはない。下級種など二人の敵では無かった。

「大分数も減ってきたね」

「アサギが言うには雑魚らしいからな、こんなもんだろ」

言って、ヴィータは背後に鉄球を飛ばす。それは火球を貫き、そのままガーゴイルを打ち碎いた。碎かれたガーゴイルは砂となって散っていく。

「グルルル……、ガアツ!」

勝ち目が無いと悟ったのか、距離を取り静観していたガーディアンが突然地上に向けて急降下した。

その先にいるのは――

「エリオ!?」

「氣イ抜くなフェイト!!!!」

急降下したガーディアンに気を取られていたフェイトの目前に、別のガーディアンが迫っていた。

「ガアアアアッ!!!」

「ウツ……! このっ!」

ヴィータの声で我に返り、後ろに下がることで爪の直撃をかわしたフェイトは、バルディッシュを振るいガーディアンを両断した。

「大丈夫か?」

「うん、少し裂けただけ。それよりエリオは!？」

「すぐに地上に向かうぞ!」

上空の敵を殲滅した二人は地上に降りていった。

「避けるエリオオオ!!!」

地上の敵を殲滅し終え一息ついた時、アサギが叫んだ。

半ば反射的にエリオが飛び退くと、一瞬前に彼がいた場所にガーディアンが落ちて来た。

「オリヤっス!」

サウレが爆弾——火の霊素で作ったものなので法には触れていない——を投げつけ、ガーディアンを破壊する。

「エリオ!」

「大丈夫か!」

フェイトとヴィータが慌てて降りて来た。

「はい、少し掠っただけですから。フェイトさんこそ大丈夫なんですか?」

「私も大丈夫。そんなに深くないから」

「他に怪我してる人は？ 内臓が飛び出したり目が抉れたり顔がもはや誰か解らないほど無残に潰れたりしてない？」

「喩えがグロいッスよ姉御……」

結果として、負傷者は数名いるものの、死亡者はゼロという大健闘だった。

とある魔界、山岳地帯。

一人の男が、二体の岩の身体を持つ巨人——片方は炎を纏い、もう片方は冷気を纏っている——と対峙している。

「「グオオオオオオオ！！！」」

「……………」

二体が男に殴りかかるが、男はいつの間にか二本の刀を抜き放ち二体の背後に立っていた。

「秘剣・闇夜斬り」

男が呟き、納刀する。同時に、

「ガ……！？」

「ゴ……！？」

体にそれぞれ五本の刀傷を刻まれ、二体は倒れ伏した。死んではないが、暫く動くことは出来ないだろう。

「アサギ・フレイムロック、そしてアサギ・フロストロック……」。

思ったほどのものでもなかった。やはり戦うべきは彼女か……」

数字が『5』になったアサギカウンターを見ながら、男は呟いた。

「朝霧、アサギ……」

第8話：今は悪魔が微笑む時代なんだ！ B Y アジャギ

今回の

近いうちに男キャラを一人出す予定なのですが、魔王系だとゼタ様と展開がモロ被りになるので我らがラハール様は断念……。

悩んだ末に以下の三人まで絞ったので、「これだ！」というキャラを一人選んでください。

- ・ 中ボス
- ・ アデル
- ・ アクターレ

第9話：侍来たり（前書き）

アンケート（前話後書き参照）、1月3日まで受け付けます。
現在拮抗しており、このまま3日まで変わらなかった場合、作者の
独断で決まります。
引き続きアンケートにご協力お願いします。

第9話：侍来たり

朝、訓練場。

「はい、朝の訓練はここまで！」

『あ、ありがとうございます……』

笑顔で言うのはと疲労困憊のFW陣。今回の訓練はいつぞやアサギが言っていた『魔界式訓練（ちよい緩め）』。

なのはの訓練も相当キツイが、こちらも負けず劣らずキツイ。と言うかヒドい。

攻撃して気絶させ、追撃で覚醒させ戦闘続行、くらいはザラである。

「じゃあ、アサギちゃんから締めの一言！」

「見切れ！ 以上」

本当に一言だった。

「それじゃあシャワー浴びて体を休めて……、どうしたのアサギちゃん、サウレ君？」

ふと気付くと、アサギと、先ほどまでタオルとスポーツドリンクを配っていたサウレが、臨戦態勢を取り誰もいない場所を睨み付けている。

そしてその視線の先に、時空ゲートが開いた。

時空ゲートの出現自体は今までも何度かあったが、今回はアサギ達の様子が違うため、周りの緊張も高まる。

「さすがだ。そちらのプリニー共々、よく鍛えられている」

現れたのは黒い短髪の男。群青色の和服を纏い、Xを描くように二本の刀を背負っている。

「……時空管理局の者です。話を伺いたいのですが」

言葉からして意図的にここに来たと思われる男に、なのはが警戒しながら声をかける。が、男はそれに一切反応を見せず、アサギに話かけた。

「朝霧アサギ殿とお見受けする」

「そうだけど、アナタは？」

「拙者、乙夜^{いつや・あさぎのじょう}浅葱之丈と申す者」

名乗り、浅葱之丈は懷からアサギカウンターを取り出した。

「この通り、アサギウォーズの参加者だ。そなたに勝負を——」

「質問に答えて——……ッ!？」

なのはが声を荒げてレイジングハートを向けるが、浅葱之丈の放った強烈な殺気に竦み上がってしまう。そして浅葱之丈は一瞬で抜刀し、レイジングハートを弾き飛ばした。

「この程度の殺気で怯むとは……。貴様に武器など過ぎたオモチヤだ」

「このおおおお!」

「……またか」

激昂したフェイトが飛びかかる。浅葱之丈はウンザリした表情で左

腕を振るいバルディッシュを弾くと、フェイトの頭を鷲掴みにし、膝蹴りを叩き込んだ。

「次から次へと、鬱陶しい小娘共だ」

気絶したフェイトをなのはの方へ蹴り飛ばす浅葱之丈。なのはは上手く受け止められず、倒れ込んでしまう。

「話が進まぬ。殺しておくか」

浅葱之丈が刀を振り上げる。FW陣は先ほどの殺気にあてられ動けず、サウレの移動速度では間に合わない。

「死ね」

そして、凶刃が振り下ろされた。

「ちょっと、アンタの目的はアタシでしょ？」

銃身で刀を受け止めたアサギが言う。

高速移動で一気に浅葱之丈との距離を詰めたのだ。

「無視するなんてヒドいじゃない。脳天ブチ抜いちゃうぞ♪」

口調は軽いが、目は全く笑っていない。シグナムをして『魔獣のようだ』と言わしめる空気を纏い、体からは銀色のオーラが滲み出している。

「フ……、これは失礼した。そなた以外の者に興味は無いのだがな」

言って、浅葱之丈は飛び退き、連結刃と鉄球、赤黒い短剣をかわした。

騒ぎを聞いて駆けつけたはやてとシグナム、ヴィータが、浅葱之丈に向けて攻撃を放ったのだ。

「そっちに興味が無くても、こっちには聞きたいことがある。何で二人を襲ったんや！」

「これは異なることを。先に敵意を向けて来たのはその小娘だ」

刀でなのはを指し示し、嘲るように浅葱之丈は続ける。

「もっとも、金髪の小娘共々、ロクに戦い方も知らぬようだったがな。初撃で殺さなかった分、拙者はまだ良心的だ。……ではな朝霧アサギ、『屍ヶ原』で待っているぞ」

時空ゲートを開き、浅葱之丈は去っていった。

「サウレ、後のことは任せた！ 昼ご飯までには帰って来るから！」

アサギもまた時空ゲートに飛び込み、魔界へ向かった。

「一体何が起こったんや、サウレ君？」

「それがツスねえ……」

状況を知っている者の中で、唯一まともに話せる状態のサウレが、はやてに説明を始める。

サウレがはやてに状況説明をしている時、なのははぼんやりと考えていた。

（私は、何も出来なかった……）

放心状態だったが、浅葱之丈に言われたことは驚くほど鮮明に耳に残っている。

『貴様に武器など過ぎたオモチヤだ』

『ロクに戦い方も知らぬ』

管理局員になって十年以上、任務をこなしてきた。当然危険な任務もあったし、場数は踏んで来たつもりだった。

だが、たった一人の男の前に、何も出来なかった。相手が悪魔だから、というのはい訳にならない。現に同じ人間であるアサギは、あの殺気の中にあつて怯むどころか軽口を叩く余裕さえあった。

何のことはない、自分が今まで経験してきた戦いなど、アサギや浅葱之丈のそれに比べれば兎戯に等しいものだったのだ。

『初撃で殺さなかった分、拙者はまだ良心的だ』

そうだ。浅葱之丈にその気があれば、飛んでいたのはレイジングハートではなく自分の首だったかもしれない。フェイトの額に飛んできたのは膝ではなく刀の切っ先だったかもしれない。

あの雪の日のように、血溜まりに倒れ伏すことになっていたかもしれない。

（そっか、私は……）

なのはは思う。

（十年以上前から、ずっと成長してなかったんだ……）

「……幸い、テストロッサも大事には至らなかったが、朝霧は大丈夫なのか？」

一通りの説明は終わったようだ。

「一応、確認する方法はあるんすけどね」

そう言って、テレビを取り出すサウレ。

「このテレビに、姉御が拒否しなければ姉御の周辺を映し出せる術式が組み込んであるッス。これで向こうの様子を見られると思うッスけど……」

どうにも歯切れの悪いサウレ。

「……正直言って、刺激が強すぎると思うッス。魔界には非殺傷設定なんて無いッスから、血を見慣れてない皆さんにはキツイ映像になるッスよ。どうするッスか？」

「……見るよ」

正気に返っていたなのはが言った。

「見なきゃ、知らなきゃ、変わらないから、覚悟を決められないから……！」

なのはの執念はアサギに勝るとも劣らない。再起不能寸前から立ち直った精神力は伊達ではないのだ。

言葉にはしないが、他のメンバーも同意見のようだ。

「わかりましたッス。それじゃ、付けるッスよ」

サウレがテレビの電源を入れた。

戦いは、既に始まっていた。

第9話：侍来たり（後書き）

それでは皆様、良いお年を！

第10話：双銃VS双刀（前書き）

戦闘描写難しいッス！

第10話：双銃VS双刀

屍ヶ原——生物の屍のような不気味な形の岩が乱立している様子からこの呼び名が付いた。

この場所で、アサギと浅葱之丈は死闘を繰り広げていた。

アサギの放つ銃弾を見切り斬り裂き浅葱之丈が接近、振るう刀をアサギが銃身で逸らし打撃、あるいは発砲し、やはりそれを浅葱之丈が防ぐ、これを幾度となく繰り返している。

やがてどちらともなく、攻撃を弾く勢いを利用し後ろに飛んだ。

「抜け目ないな」

浅葱之丈の右肩から血が流れ、

「お互いにね」

アサギの胸からもまた血が流れた。

そして再び両者はぶつかり合う。

「アサルトスター！」

「むっ！」

アサギは無属性霊素で生み出した一メートルほどの鎖付きトゲ鉄球を浅葱之丈に叩きつけた。

浅葱之丈は刀を交差させてこれを防いだが、

「メガウインド！」

「ぐうっ！」

真空の刃を纏い、高速回転しながら撃ち出されたトゲ鉄球が刀をへし折り、浅葱之丈を捕らえた。

体を切り裂かれながら岩に叩きつけられる浅葱之丈。

アサギは砂埃の向こうを注意深く見据える。刀が折れたとは言え、リーチが短くなりはするが戦えないわけではない。そもそも、魔界剣技には遠距離用の技もある。

そんな彼女の考えを肯定するように、砂埃の中から真空の刃――風車斬りが飛んで来た。

アサギは大きく飛び退いてかわし、

「く、あっ……！」

続いて『伸びてきた』刀に、両肩を貫かれた。

「油断したな」

（ヤバッ……！）

そして浅葱之丈が一気に肉薄し、刀を振るう。

「秘剣・闇夜斬り」

アサギの全身から血が噴き出した。

「く、うう……、ハア……ハア……」

荒く息をするアサギ。片膝を突き、銃口を地面に押し当てて体を支えている。

「とっさに後ろに高速移動して直撃を避けたか……」

浅葱之丈も無傷ではない。体のあちこちの切り傷と、胸に穿たれた穴から血を流している。

だが、彼の刀は二本とも健在で、折れた痕跡はどこにも無い。

「魔力……刀……」

「ご名答。原理はそなたのトゲ鉄球と同じだ」

そう、浅葱之丈の刀は魔力で結合させた無属性霊素で出来ている。故に、折られたとしても再生でき、長さも自在に変えられる。

「さて、ここで降参するのなら命までは取らぬ。だが続けると言うのなら命の保証は——ッ！」

言葉の途中で浅葱之丈が飛び退く。

返答は、地中からの四発の銃弾だった。

「（土竜弾か！）恨んでくれるな！」

土竜弾もぐらをかわした浅葱之丈はアサギに向かって駆け出し、

「何……っ!？」

背後からの二発の銃弾に、両脚を撃ち抜かれた。浅葱之丈からは見

えないが、彼の背後には魔力の水晶体が二つ浮かんでいる。

「リフレクト……レイ……！」

アサギは先ほどの四発の土竜弾のうち、二発を水晶体に変え、もう二発をそれで反射させて浅葱之丈の脚を撃ち抜いたのだ。

「油断大敵ってね……！ インフェルノ！」

「ぐおおおおお……！！！！！」

爆炎が、浅葱之丈を飲み込んだ。

「ぐ、かはっ……！ ハアッ……！」

浅葱之丈はまだ立っていた。服が焼け落ちあちこち焼け爛れ、左の刀は遠くへ飛ばされているが、闘志は消えていない。

（ここが正念場かな……）

アサギは考える。出血が多く足下がふらついてきた。だが向こうも満身創痍、一撃で仕留めにかかって来るだろう。

「マジカル……バレットオ……！！！」

「はあああああっ……！！！」

マジカルバレットを浴びながら、浅葱之丈は天を突かんばかりに長大になった刀を両手で構え、アサギの首目掛けて振るった。

左のバハムート666カスタムで防ぐが、腕力で、ましてや片腕対両腕で適うはずも無く、アサギは弾き飛ばされ岩に叩きつけられた。

「がっ……！　ゲホッ！」

血の混ざった唾液を吐き出しながら、上半身を起こす。

「ああああああ！！！」

浅葱之丈がさらに刀を振り下ろした。しかし何も起こらない。刀身は既に形を失い、魔力と霊素に還っていた。

「ぐ……、無念……！」

浅葱之丈はうつ伏せに倒れ、意識を手放した。

アサギカウンターには、『4』と表示されている。それを見て、アサギは全身の力を抜いた。

「っはぁ、勝った……。あちこちいて……」

第二次アサギウォーズ　乙夜　浅葱之丈、敗退。

後から駆けつけたシャマルとザフィーラを加えた一同は、決着が付いたのを見届けると、大きく息を吐いた。

ブランクがあるとは言え戦場を知っているヴォルケンリッターの四人はそうでもないが、他のメンバーは大量の血を見たため顔色が悪い。

「あれが、魔界の戦い……」

「それはちよつと違うツスよ」

なのはの呟きにサウレが反応した。

「魔界であれ人間界であれ、戦闘つてのは元来ああいうものツス。程度の差はあるツスけどね」

「ああ、そうだな。そうだった……」

シグナムが呟き、ヴィータとザフィーラ、シャルが頷く。昔のことを思い出しているのだろう。

「うあゝ、疲れたゝ」

と、ここで時空ゲートが開き、アサギが帰って来た。服とコートはズタズタで血まみれだが、体の傷は既に治っている。

「体は大丈夫なの？」

「貧血と空腹でクラクラするけど、食べて寝れば治るでしょ」

心配そうに聞くシャルに軽く答え、まだ言葉が出ない様子のヴォルケンリッター以外の六課メンバーに視線を向ける。

「見てたみたいだけど、あれが殺気混じりの戦闘ってもんよ。これからどうするかは、アンタ達次第」

「姉御、食堂に行くんならコートだけでも取り替えて、血の臭いをどうにかしてからにしてくださいツス」

サウレから予備のコートと消臭スプレーを受け取り、アサギは歩いていった。

第10話：双銃VS双刀（後書き）

タイトルに『inミッドチルダ』って書いてあるのに、魔界で戦っていることに気付いた今日この頃。

第11話：人前でイチやつくのは程々に（前書き）

あれから投票が無かったので、独断で出演キャラを決めました。

投票してくださった遠峰 シンさん、プチ魔王さん、ありがとうございました。

第11話：人前でイチャつくのは程々に

「怪我は無いか、ロザリー？」

「うむ。……ところで、ここはどこじゃろうか？」

「向こうに大きな街が見える。かなり栄えた世界みたいだな」

「まあ、どこでもいいと言えぱいいのじゃがな。……おぬしと一緒にいられるのなら」

「……そうだな」

「アデル……」

「ロザリー……」

「アデル……」

「ロザリー……」

機動六課、訓練場。

「じゃ、今日はここまででいいか」

そう告げるアサギの前には疲労困憊のフェイトが。

浅葱之丈の来襲から一週間、FW陣だけでなく隊長三人も、アサギを相手に殺気混じりの模擬戦を行っていた。

なお、隊長が全員グロッキーだと緊急時の行動に差し支えるので、実際にやり合うのは一日一人で残りは観戦である。殺気に慣れるという意味では観戦も一つの訓練と言える。

「大分殺気にも慣れて来たんじゃない？」

「まあ……とりあえず、は……」

最初のころなど訓練よりもリンチに近かった。竦み上がってまとも

に動けず、銃弾を受けて気絶、さらに受けて覚醒、また受けて気絶、の繰り返し。

「やっぱ基が良いと成長も速いな。ホント才能って憎い……」

アサルトスターもう一発、とアサギが黒い考えを巡らせていた時、はやての下に通信が入った。

『部隊長、市街地に悪魔が出現したのですが……』

「ならすぐに出動を――」

『それが、たった今民間人、恐らく次元漂流者と思われる二人が全滅させました。映像をそちらに送ります』

映し出されたのは傀儡族と魔獣族の残骸、そして一組の男女。両頬に傷のある赤髪の青年と、豪華なドレスを着た、背中に対の黒い翼を持った金髪の女性がピンク色の空気を醸し出している。

「あれ、アデルの旦那とロザリンドの姉御ツスね」

「ホントだ、懐かしい」

見知った顔だったようで、サウレとアサギが声を上げた。

「知り合いなの？」

「うん。四年前にあの二人と一緒に行動してたことがあって」

「相変わらず仲が良いツスね。新婚旅行にでも来たんスカね？」

「「「新婚!?!?!」」」

サウレの言葉に隊長三人が驚愕の声を上げた。

「いや、四年も経ってたら新婚って言わないでしょ」

「よ、四年前に結婚って……」

「あの二人いくつなの……？」

「見た目は私らとそんなに変わらへんけど……」

三人が恐る恐るアサギに尋ねる。

「えーっと、確か今21歳だったはず」

「「「ゴフウツ！」」」

衝撃的事実に精神的ダメージを受けた隊長三人（21）。

「げ、現場にはアタシが行ってくるわ。知り合いだから話し易いし」

そう言って、アサギは逃げるように歩き去っていった。

六課、会議室。

アサギがアデルとロザリンドを連れて戻り、隊長三人も復活したため、こうして顔合わせをしているのだ。

一通り自己紹介を終えたところで、六課メンバーはあることに気付いた。

（この二人の声、なのはちゃんと恭也さんにそっくりやなあ）

そう、アデルの声はなのはの兄・恭也に、ロザリンドの声はなのは自身にとってもよく似ているのだ。

（ってことはアデル君とロザリーちゃんがイチャつくのは、見た目

を無視すれば恭也さんとなのはちゃんがイチャつくのと同義!？
何て背德的! でも感じてまう!)

「なあ、少しいいか？」

はやての邪な妄想が顔に出ていたためか、若干引き気味にアデルが尋ねる。

「え!？ ああ、何やろ？」

「この世界の大体のことはアサギから聞いた。今起こっていることも。それで、一つ頼みがある」

アデルは真剣な眼差しではやてを見据え、告げた。

「オレ達も協力させてもらえないか？」

「そりゃ、こっちとしては願ってもないことやけど……。ロザリーちゃんはええんか？」

「いいよな、ロザリー？」

ここでロザリンドに話を振る二人。

「……普通余に聞いてから向こうの許可を得ぬか？ まあ異存は無いが。大方『見て見ぬふりをするのはオレの流儀じゃない』といったところであろう？ ……それでこそ余の夫じゃ」

「ロザリー……」

「アデル……」

くくしばらくお待ちくださいくく

「それじゃあ、これからよろしく頼む」

「ああ、うん、よろしゅうな……」

アデルの言葉に、ゲッソリした様子のはやてが答えた。

「それにしても、いやに女が多いな。……アデル、浮気なぞしてくれるなよ？」

「まさか。オレがそんなことするワケないだろ？」

「アデル……」

「ロザリー……」

第11話：人前でイチヤつくのは程々に（後書き）

アサギとサウレがアデル・ロザリンド夫妻と一緒に行動していたのは、デイスガイア2の本編終了後です。

第12話：燃ゆる炎、爆ぜる火の粉、火竜の如し（前書き）

今回、シグナムがオリジナル技オリジナル技を使います。

BGMとして『戦友よ』を聴きながら読むと臨場感がありますかもしれない。

第12話..燃ゆる炎、爆ぜる火の粉、火竜の如し

機動六課、訓練場。

「さっそくアデル君とロザリーちゃんの実力を見せてもらいたいんやけど、相手は誰にする？」

「あ、それなんだけど、アタシから提案が」

はやてが聞き、アサギが挙手する。

「アデルとシグナム、ロザリーとなのはがいいと思う。前者は近距離戦主体の炎属性繋がりで、後者は中のひも……遠距離戦主体繋がりです」

「アサギちゃん……、今妙な言いかけなかった？」

「エーナニワカンナーイ」

ずっとぼけ、口笛で『〇ハール様の賛美歌』を吹き出すアサギ。ちなみに、シグナムと並んで立候補しそうなフェイトは、アサギとの訓練に加え、アデルとロザリンドの醸し出すイチャオーラにあてられたことで心身共に疲弊しきっており、はつきり言って模擬戦どころではない。

「では早速行くぞ！」

「おう！」

意気揚々と観戦席から訓練場へ向かうシグナムとアデル。

「あやつ、アデルと同類か」

「ってことはアレか？ アデルもバトルマニアなのか？」

「うむ。強い相手を前にするとイキイキしおる」

戦法属性性格と、どこまでもよく似ている二人である。

もつとも、シグナムが男とイチャつく様子は想像もつかないが。

シグナムと向かい合うアデル。彼の腕には紅の籠手『バーニングブロウ』が付けられている。

なお、アデルとロザリンドの装備には既に非殺傷用のパーツが取り付けられている。発想が無かっただけで、多少魔力の籠もった武器ならばデバイス化するのはそう難しくもないのだ。

「では始めるか。私が女だからと言って手を抜くなよ」

「当然だ。相手が誰だろうと全力で挑む、それがオレの流儀だ」

シグナムがレヴァンティンを構え、アデルが腰を低く落とした。

「いくぞ！」

同時に駆け出し、それぞれ拳と剣をぶつけ合う。

「オラオラオラアアッ！！！」

「はあああああ！！！」

速さは互角、リーチではシグナムが勝り、手数ではアデルが勝る。そうすると結果も互角になりそうなものだが、徐々にシグナムが押され始めた。

（重い……！ まるで大砲だ……！）

お互い鍛え抜いている以上、単純な腕力では身体構造上どうしても男のアデルに軍配が上がる。

レヴァンティンの重さが加わる分その差は相殺出来るかもしれないが、アデルの方が攻撃回数が多いので、防御にかかる負担はシグナムの方が大きくなる。

「はあっ！」

「ぐっ……！」

防御の上からシグナムを蹴り飛ばし、アデルが右の拳を燃え上がらせた。すかさずシグナムもカートリッジをロードし、レヴァンティンを燃え上がらせる。

「紅蓮疾風拳！」

「紫電一閃！」

炎の拳と炎の剣がぶつかり合う。

「はあああっ！！！」

「うおっ！」

さすがに両手対片手では無理があったか、僅かな拮抗の後、アデルが弾き飛ばされた。

が、すぐさま地面を蹴って回転しながら飛び上がり、右足を燃え上がらせる。

「飛翔爆炎脚！」

「ぐうっ！」

飛び退いて直撃は避けたが、シグナムの騎士甲冑は炎の蹴りで大きく挟られた。

「かわした、つもりだったのだがな……」

「そりゃこっちも同じだ。当てたつもりだったんだけどな」

それぞれ驚くシグナムとアデル。お互いの動きは予想以上に速かった。それでも悔しがるのではなく嬉しがっているあたり、この二人の質^{たち}が忍ばれる。

「それじゃ、少し早い気もするが、クライマックスといくか！」

言って、両手両足を燃え上がらせるアデル。

「望むところだ！」

一方、シグナムも鞘を持ち、刀身と共に燃え上がらせた。アデルの怒涛の連続攻撃に、同じく連続攻撃で対抗するつもりなのだ。

「烈火武神撃！！！！」

「紫電乱閃！！！！」

舞い散る炎、ぶつかり合う拳と剣。大地を揺るがさんばかりの激烈な動きは、さながら武神による舞踏。

「「……………」」

ピタリと、先程までの激しさが嘘のように、二人の動きが止まった。左の拳と鞘がぶつかり合っている。そして――

「私の負けだな」

「ああ、オレの勝ちだ」

レヴァンティンは大きく振り上げられており、アデルの右の拳は、シグナムの眼前に突き付けられていた。

「久々にいい勝負が出来た。またいつか頼む」

「ああ、こちらこそ」

固く握手を交わすアデルとシグナム。この瞬間、二人は『戦友』^{とも}となったのだ。

第12話：燃ゆる炎、爆ぜる火の粉、火竜の如し（後書き）

余談ですが、アデルはシグナムの肩や腹を集中的に狙っています。万が一胸に当たったりすると奥さんが怖いので。

第13話：星の光と薔薇の花（前書き）

ロザリンドVSなのはです

第13話：星の光と薔薇の花

「いや、見込んだとおりいい勝負だった」

「見事な戦いだったな」

「熱かったな、色んな意味で」

以上、アサギ、ザファイラ、ヴィータの感想である。

「戦闘スタイルの近いスバルさんには色々参考になったんじゃないッスか？」

「いや、速すぎて何が何だか……。最後はほとんど炎しか見えなかったし……」

スバルの言うように、アデルとシグナムによる最後の打ち合いは『炎の中から打撃音が聞こえてくる』というようなもので、二人の姿はほとんど見えていなかった。

「じゃ、次は田むr……ロザリーとなのは！」

「うむ、了解した」

「また妙なことを言われたような……」

ロザリンドは鷹揚に頷き、なのはは首を傾げながら、訓練場に下り立った。

「それにしても……」

「ん？」

なのはが切り出した。

「本当に私たちの声って似てるね」

「そうじゃな。魂の波長が近いのかもしれない」

「あ、そういうもののなの？」

「知らん。テキトーじゃ」

ロザリンドの断言になのははずっこけそうになる。

だが、ロザリンドの『前世』となのはが魔王と呼ばれていることを考えれば、その考えはあながち間違ってもいないのかもしれない。

「では、始めるとするか」

言って、ロザリンドは懷から美しい装飾の施された護身銃『ノーズ・ルローズ』を取り出した。

「いくよ！ ロザリーちゃん！」

なのはが飛び、

「飛べるのか。ならば余も遠慮は無用じゃな！」

ロザリンドも翼を広げ、舞い上がった。

まずは小手調べとなのはが四発の魔力弾を生成する。が、それは今までとは違った。

具体的には今までよりずっと小さいのだ。

アサギの速撃ちに対抗するためのアクセルシューターの改良型、その名も――

「アクセルバレット！」

放たれた桜色の弾丸は、アサギに勝るとも劣らないロザリンドの速撃ちに相殺された。しかしなのはは構わず、弾丸の数を増やしなから放ち続ける。

八発、十六発、そして三十二発の弾丸を撃った時、ロザリンドの動きが変わった。

（まだ増えるか……！）

さすがに相殺しきるのは無理だと判断したロザリンドは、飛び回って距離を稼ぎつつノーブルローズをしまい、辺りに水晶を生成、そして魔法陣から黒い筒状の物体――ガトリングガンを取り出し、なのはに向き直った。

「リフレクトレイ！」

ガトリングガンから撃ち出された百を超える魔力の銃弾は、水晶により反射しながらアクセルバレットを相殺し雨のようになのはに降り注ぐ。

彼女はそれをラグビーボールのような形のシールドで全身を覆い防いだ。

「……やりおるわ」

ロザリンドは口の端を吊り上げた。

リフレクトレイとアクセルバレットの応酬が続く。

ロザリンドにしろなのはにしろ、この程度の小技に相手が当たってくれるとは思っていない。さりとて、溜めの長い大技を撃つ隙は無

い。ならばどうすればいいか。

（小技で時間を稼ぎながら――）

（大技を撃つ準備をする！）

ロザリンドは頭上で黒い魔力を渦巻かせ、なのはは砲撃のための魔力を溜めている。その間も、最早弾幕と言える程の魔力の弾丸が飛び交っている。

そして、時は来た。背後に四つ葉のクローバーの紋章を浮かべ、巨大の魔力翼を広げたロザリンドが黒い魔力球を巨大な水晶で覆い、なのはが魔力を溜め終えた。

「ローズリバレット！！！！」

「スターライトブレイカー！！！！」

水晶の薔薇が咲き、砕け散ると同時に大爆発を起こし、流星のごとき桜色の砲撃が放たれた。

（今のは……、効いた……）

ふらつき、落ちそうになるのを懸命に堪えるロザリンド。

（『マジックシールド』で魔防を倍にしてもこのダメージ……。確かにその名のとおり星すらも軽くブツ壊せそうな攻撃じゃな……）

ロザリンドは何やら勘違いしているが、スターライトブレイカーの名前の由来は星の光である、多分。

(じゃが、これで……)

煙が晴れる前にロザリンドは一気に接近し、なのはにノーブルローズを突き付け、

「余の勝ちじゃ！」

「私の勝ちだよ！」

なのはもまた、レイジングハートをロザリンドに突き付けていた。

「……ここまで言うこと為すこと似ていると笑えてくるのう」

「そうだね……」

苦笑するロザリンドとなのは。

「引き分け、じゃな」

「うん」

二人は地上に降り立ち、握手を交わした。

こうして、アデルは勝ち、ロザリンドは引き分けという結果で、模擬戦は幕を閉じた。

第13話：星の光と薔薇の花（後書き）

次回はネタまみれの番外編です！

番外編1..水橋さんってスゴいよね! (前書き)

完全に声優ネタなので注意してください。

番外編1…水橋さんってスゴいよね！

殺風景な部屋に九人の男女が。

「あれー？ どこなのここー？」

「何故オレ様たちはこんなところにいるのだ？」

「さあ？」

「……………」

「えーっと、とりあえず自己紹介でもしましょうか。まず僕から。
ユーノ・スクライアです」

と、金髪眼鏡の青年。

「高町ヴィヴィオです」

金髪オッドアイの少女。

「セインだよ」

水色の髪 of 少女。

「本編の主・人・公！ 朝霧アサギです」

黒髪白コートの女性。

「マローネです」

黄緑色の髪 of 少女。

「……………プレネールⅡアラプリマ」

赤いリボンの女性。

「魔王ラハールだ」

赤いマフラーの少年。

「予言者プラム。魔王の一人よ」

白髪赤眼の少女。

「魔神ハナコです！」

桃色の髪の少女。

「……で、自己紹介したのはいいが、これからどうするのだ？」

「あ、何か紙が……」

ラハールが言った時、マローネが床に落ちている紙を見つけた。それにはこう書かれている。

『この状況について説明してくれる方がいます。この紙にマローネさんの能力を使ってください』

マローネの能力とは靈魂を物に憑依させ、肉体を持たせて召喚する力である。詳しく知りたい方は『ファントム・ブレイブ』のゲーム版をプレイするか、小説版を読んで頂きたい。

「奇跡の能力！^{ちから} シャルトルーズ！」

能力を使うマローネ。現れたのは……

「久しぶりだね、ラハール」

「は、母上！」

大分昔に亡くなったはずのラハールの母であった。

「今ここにいる私を含めた十人は、全員水はS……中のひと……魂の波長が近いんだよ。ここに集められたのは、せっかくだから色々やってみようっていう思い付k……レクリエーションさ。それじゃあラハール、元気だね」

ラハールの母の姿が掻き消えた。

「母上エ……」

再会出来た喜び、また別れねばならない悲しみ、そしてメタ発言を連発したことへの呆れを込めて呟くラハール。

「ところで、魂の波長が近いとか、色々やってみようってどういうこと？」

セインが尋ねる。

「例えば……、こういうこと」

「ハーツハツハツハツ！ オレ様は魔王ラハール様だ！」（↑アサギ）

「うおっ！？ オレ様の声ではないか！」（↑ラハール）

自分の声を出したアサギに驚くラハール。

「へー、面白ーい。それじゃあ……、エトナーツ！ 愛してるぞーっ！」（↑ハナコ）

「なっ！？ 誰だ、オレ様の声でとんでもないことを言っているのは！？」（↑ラハール）

「フロンツ！ お前もだーっ！」（↑ハナコ）

「ハナコ！ お前の仕業かつ！」（↑ラハール）

「世界中の貧乳はオレ様のために存在するのだ！」（↑ハナコ）

「止めんかあああああっ！」（↑ラハール）

暴走するハナコに飛びかかるラハール。

「朝霧アサギ、永遠の17歳！ 夢は主人公、尊敬する一人はル○ージです！ 予定通りに発売されるゲームはみんな滅びればいいのに！」（↑マローネ）

「アタシの声！？ 純粹な目して言うことキツいなこの子！」（↑アサギ）

「……………ブフッ」（↑プレネール）

「プレネールさん！？」（↑アサギ）

いかにも純粹無垢な目をしたマローネの思わぬ発言に驚き、プレネールの意外すぎるリアクションに愕然とするアサギ。

「うわー、何か凄いカオス……」

セインが呟いた。リリカル組は蚊帳の外のようなのだが、そんなことはなかった。

「服をひん剥いて縛り上げて、フヒヒヒヒヒ……！　なのはあ……、ハアハア……！」（↑プラム）

ユーノの声で凄まじい変態発言が放たれた。

「うわっキモッ！」（↑セイン）

「ちよっ、違うって！　今のは僕じゃー！」（↑ユーノ）

「寄んな変態！」（↑セイン）

弁解しようとするユーノをセインが突っぱねる。

「うふふ……、あんな淫獣なんかになのはママは渡さない……！」

「へピー」を握り潰して、引き千切って……。うふ、うふふ、うふふふふふふ……」（↑プレネール）

「怖いよお！　ヴィヴィオじゃないヴィヴィオが怖いよお！」（↑ヴィヴィオ）

ヴィヴィオの声による狂気に満ちた発言に、本物のヴィヴィオが泣きじゃくる。

カオスに満ちた部屋、その角で、最初の紙から再びラハールの母が現れた。

「収集がつかなくなって来たのでこのあたりで。おかげさまで本作は20000アクセスを突破しました。今後もしろしくお願いします」

キャスト

ユーノ…水橋かおり

セイン .. 水橋 かおり
ヴィヴィオ .. 水橋 かおり
アサギ .. 水橋 かおり
ラハール .. 水橋 かおり
ラハールの母 .. 水橋 かおり
マローネ .. 水橋 かおり
プラム .. 水橋 かおり
ハナコ .. 水橋 かおり
プレネール .. 水橋 かおり

番外編1..水橋さんってスゴいよね！（後書き）

マローネの性格は若干デイスガイア3寄りです。

なお、アサギの声は数ある内の一つが水橋さんのものです。
本編を脳内再生する時は、タグにあるようにお好みでどうぞ。

第14話：男達の日常（前書き）

今回はサブタイトル通り男キャラがメインです。

第14話：男達の日常

早朝。

「朝か……」

ベッドから上体を起こしたアデルが呟いた。

ちなみに彼の部屋とロザリンドの部屋は別である。夫婦とは言えさすがに男性寮に女性が、あるいは女性寮に男性がいるとマズいのだ。

「よし！」

素早く身嗜みを整えると軽く気合いを入れ、部屋を出る。

「よお、サウレ、ヴァイス」

「おはようございますッス」

「おう、アデルか！」

アデルが声をかけたのは、サウレとその隣にいた男、ヘリの操縦士ヴァイス・グランセニック。

機動六課は男が少ないので、それぞれの性格が合ったこともあって二人はすぐに打ち解けた。

ちなみにサウレはヴァイスの下に限らず、あちこちで雑用を手伝ったりしている。本プリニー曰く

「プリニーの性ッス」

とのこと。

彼らと軽く雑談した後、訓練場へ向かったアデル。訓練場に素振りならぬ素打ちによる空気を切る音が響く。

「おはようございます、アデルさん！」

「おう、来たかエリオ！」

しばらくして、エリオがやって来た。彼は実力が高く、今時珍しい『男らしい男』のアデルに尊敬の念を抱いているようで、よく訓練を頼んでいる。

その様子は、髪の色が同じということもあって、年の離れた兄弟のように見えなくもない。

「やあっ！ とおっ！」

「そうだ！ 相手を近寄らせるな！」

訓練を始めたアデルとエリオ。

（しかし赤髪の槍使いか……。アイツを思い出すな……）

懸命に攻撃を繰り返すエリオを見ながら、アデルは四年前に思いを馳せる。

今よりずっと弱かったころ、槍を使う赤髪の女魔神に完膚無きまでに叩きのめされたという苦い経験があるのだ。

（今のオレならアイツにも……。いや無理か）

彼女は称号こそ魔神だが、実力は上級魔王クラスだった（魔王＞魔神である）。

強い相手と戦うことを好むアデルだが、彼女とはもう戦いたくないというのが本音だった。

エリオとの訓練が一段落した時、

「精が出るな、アデル」

ザフィーラが歩いて来た。普段は狼型だが今は人型である。

こうして見ると、アデルも相当背が高いが、人型のザフィーラはさらに高い。

「やらないか」

別にいかがわしい意味ではない。手合わせをしないか、という意味だ。

「よし、やるか！」

そしてザフィーラとの手合わせが始まった。

「はあっ！」

「てあっ！」

速さではアデルが勝るが、重さではザフィーラが勝る。

ザフィーラの拳を受け流してアデルが肘を突き出し、ザフィーラがそれを受け止め蹴りを放つ。飛び退いてかわしたアデルが拳を放ち――

と、一進一退の攻防を繰り返す二人。

「カッカッカッ！ いい拳してるじゃねえか坊主！」

いつからそこにいたのか、ザフィーラ並みに逞しい肉体の男性が呵

々大笑していた。

それなりに年を取っているのか少なくなった髪は総白髪だが、その豪快な笑いは若々しい。

外見は簡単に言えば

『筋骨隆々で長身のジ〇ムおじさん』

である。

「えっと、どちら様で……？」

「おっと、自己紹介が遅れたな。俺はここの厨房の首領^{ドン}、ジェムつてもんだ。よろしくな！」

ジェム・ブレッドメーカー、54歳。機動六課料理長兼臨時戦闘員。リンカーコアは無いが、陸戦S+相当の戦闘力を持つ漢^{おっし}。

「お前さんを見てると、魔界にいるダチを思い出すな」

「オッサン、悪魔の知り合いがいるのか？」

「おうよ。お互いに料理と格闘の腕を競い合った仲だ。風の噂じゃ、今は教師をやってるらしい」

これにはエリオとザフィーラも驚いた。見知った人のことでも、意外と知らないことはあるものである。

時は流れ、昼、食堂。

今日のアサギによる実戦訓練ははやての番だったようで、彼女は今にも死にそうな顔をしている。

「はやてのヤツ、えらくバテてるな」

「主は単独での戦闘手段が乏しいからな、特にキツいのだろう」

「非殺傷設定があるから死なねえ分、アサギ嬢ちゃんも容赦ねえかな」

アデルとザフィーラ、ジェムがそんなふうに話していると、アサギ達の会話が聞こえてきた。

「もうアカン……、限界や……」

「限界は投げ捨てるもの！」

「おぬしもかなり動いておったはずじゃが、全然疲れておらぬようじゃのう……」

「慣れよ慣れ。アタシの場合師匠がアレだしね。ゼタの前で『もう限界』とか言ったら『なら死ね』とか言ってビーム撃ってくるし……」

昔を思い出したのか、アサギは死んだ魚のような目でブツブツと何事か呟き出した。

「アサギ……、よく生きてたな……」

「全くだ……」

アデルとザフィーラは咄然として呟き、

「カーツカツカツカツ！ さすがは宇宙最強の魔王だな！ そりや嬢ちゃんも強くなるってもんだ！ カツカツカツカツカツ！」

ジェムは大爆笑していた。

その後、敵性悪魔が出現することもなく、この日は平和に過ぎていった。

夜、機動六課、男湯。

今入っているのはアデル、ザフィーラ、サウレ、エリオの四人。もともと広い風呂だが、人数が少ないこともあって尚更広く感じられる。

「何か女湯の方が騒がしいな」

「向こうは人数が多いですから」

アデルの呟きに、エリオが答え、

「皆、^{つつが}悪い証拠だ。良いことではないか」

「そうだな」

「そうですね」

「そうッスね」

ザフィーラの言葉に全員が同意した。

（大方、主が暴走しているのであろうな……）

ザフィーラ自身は内心そんなことを考えていたが。

おまけ・その頃の女湯

「きらあああああああほあああああああ！
うううう！？」
乳神現るうううう

「な、何じやいきなり！？」

ザフィーラの想像通り、はやてが大暴走していた。

「この艶っ！ この形っ！ この大きさっ！ この手触りっ！ 巨乳なんてキュートな代物じゃねえよ！ どう見ても、どう触っても神乳クラスだろこのお方あああああああ！」

ロザリンドの胸がよほどツボにはまったのか、半ば人格を崩壊させつつ大ハッスルしているはやて。彼女の悪癖、というか病気を知っている周りの者達もドン引きである。

（こやつ、この手のことに関してはティンクと同類か……）

普段は大人しいが主にエロが絡むと暴走する幼なじみを思い出しながら、ロザリンドは水晶を叩きつけてはやてを黙らせた。

第15話：食は世界を越える！

昼、機動六課食堂。

「……何コレ？」

「料理」

誰かの呟きに、アサギが答えた。

「いや、それは見りゃわかるんだけどさ、一体どこの世界にこんなデカイ鶏が……ああ、魔界か」

皿の上にはこんがり焼き上げられた鶏が鎮座している。ただ、ヴィータの言う通りデカイ。1メートル半はあり、またトサカは鹿の角のような形で尻尾はまんま蛇である。

「今日は趣向を変えて魔界料理を作ってもらったの。ちなみにこれは『コカトリスの丸焼き』ね」

「食べて大丈夫なの、コレ？」

「ここにある料理は全部人間が食べても大丈夫だニヤ」

ティアナの問いに、聞き覚えの無い声が答えた。

視線を下に向けると、1メートル程の大きさのサーベルタイガーの、着ぐるみを着た小人のような生物——デスサーベルがいた。

「あの、この子は？」

「ソイツは俺の愛猫、マーガリンだ」

なのはの問いに答えたのは、料理長ジェム。

「食材を取り寄せるついでに、今後何かあった時の予備戦力として召喚魔法で呼んだんだ」

「よろしくニャ」

「うん、よろしく……、あれ？ 料理長はリンカーコアが無いんじゃない？」

リンカーコアの有無が魔法使用の可否を決める、というのは誰もが知っている常識である。あくまでミッドチルダ及び管理世界での、だが。

「魔界の魔法は鍛えれば誰でも使えるんだよ。向き不向きはあるがな」

「へえ」

管理世界的にはとんでもないことだが、時空ゲートやら魔王やら転生やら、常識にケンカ売ってるようなものを知った六課メンバーにしてみれば大したことではない。

「コレ美味し」

「皆さん食べないんですか？」

気が付けば、スバルとエリオ、そして魔界組は既に食べ始めており、コカトリスは半分骨になっている。

「ほな、私らも食べよか」

はやての言葉を皮切りに、ミッド組も席についた。

「あ、ホントに美味しい……」

パンプキンスープを一口飲んだフェイトが呟いた。
見た目がアレなのはコカトリスの丸焼きくらいで、他は人間界のそれと変わらないこともあり、魔界料理の評判は上々だ。

ちなみに、パンプキンスープというのは単なるカボチャのスープでは勿論なく、パンプキンというカボチャの頭を持った悪魔を使ったスープ、ある意味で味噌汁である。

他のメニューはというと、

『マンドラゴラの煉獄炒め』

『マンティコアの燻製』

『グレムリンの煮物』

そして、

「この揚げ物はなんとも不思議な感じがするな。味は魚のようだが舌触りは鶏肉に近い」

「ああそれ？ 『シードラゴンの切り身フライ』」

シグナムの疑問に対するアサギの答えに、フリードが硬直した。現在進行形で食べているものが自分の同族の可能性があるので当然の反応だろう。

「ま、ドラゴンと言っても魚に近い種族だけだね。外見は足が生えてヒレが発達したサメだし」

「キュ〜……」

その言葉にフリードが安堵の息を吐き、フライをかじり始めた。

少しして、アサギが道具袋から取り出したのは一升瓶。

「ちょ、姉御！ それ『魔王殺し』じゃないッスか！」

魔王殺し——別に物凄い毒薬とかではない。魔界名酒である。

「ダメっスよそんなモン飲んじゃ！」

「大丈夫だって。酔いは『妖精の粉』で醒ませるし」

妖精の粉——毒やマヒ、二日酔いなどの状態異常を回復する薬。効果のわりに値段は50ヘルとお手頃価格。

「いやそういう問題じゃなくてッスね、今勤務中ッスよ！ しかも未成年……ではないッスね、確か」

「オイ今何だったコラ」

アサギが若干低くなった声で言った。

（ヤベッ！ 地雷踏んだッス……！）

サウレが気付いた時にはもう遅く、目の据わったアサギはどんどん魔王殺しを煽っている。

「ああそうだよ！ 17歳の時から身長体重スリーサイズ！ 全然全くこれっぽっちも変わってねえよ！ まさに『永遠の17歳』だよチクシヨオオオオオオオオオ！」

叫ぶと、アサギは魔王殺しを一気飲みし（※絶対に真似をしないでください！）、

火を吹いた。

「おあちゃああああッス！」

火はサウレに燃え移った。大惨事のはずなのだが、サウレの外見のためか、ギャグ漫画のワンシーンのようにしか見えない。

何故人間であるアサギが火を吹いたかと言うと、口内に魔力を溜め魔王殺しと共に噴出、魔力と炎属性霊素を結合させると同時に魔王殺しに引火させたのだ。

アサギがさらに魔王殺しを飲もうとした時、アラートが鳴り響いた。

『市街地に敵性悪魔出現！ 数は――』

「ヨッシャアアアアアアアア！」

アサギの叫び声が放送を遮った。

「ちょうどいい時に恰好の八つ当たり相手がノコノコ来てくれた！」

言って、道具袋から妖精の粉を取り出し喉に流し込むアサギ。酔いを醒ましておくだけの理性は残っていたようだ。

「生まれて来たことを後悔させてやる！」

そして、文字通り目にも止まらぬ速さで駆けていった。

「……止めなくていいんでしょうか？」

「どのみち誰かが出動せねばならなかったのじゃし、そもそも止め様があるまい」

キャロの問いに、ロザリンドが肩をすくめて答えた。

「とりあえず現場を映そっか。色んな意味で心配やし」

はやてがそう言って画面を出すと、既にアサギが大暴れしている現場の様子が映し出された。

『アハハハハハッ！！！！ みんなブツ潰してやるわああああ！！！！』

二つの鎖付きトゲ鉄球が縦横無尽に飛び回り、敵性悪魔達を打ち碎いていく。さり気なく初登場の悪魔もいたのだが、一瞬の見せ場も無く粉碎された。哀れ。

こうして六十体もの悪魔の群れは、アサギ一人によってもものの五分で全滅。

そしてこの日、ミッドチルダにまた一つ新たな伝説が生まれた。

その名も、『撲殺ガンナー』。

第15話..食は世界を越える！（後書き）

読者の皆様は、決して勤務中に飲酒をしないでください。

第16話：必中の邪眼（前書き）

繋ぎの話なので短いです。

第16話：必中の邪眼

機動六課、訓練場。

「今日は実際に悪魔相手の訓練ね」

「今更か？ 油断しなけりやもう問題無いんじゃないのか？」

ヴィータが問う。彼女の言う通り、気を抜かなければ今までに出現している敵性悪魔は敵ではないのだが。

「傀儡族と魔獣族はそうなんだけどね。昨日ちよつと面倒なヤツがいたから。……シャーリー、お願い」

「はい！」

シャーリーがなにやら操作すると、実体のある立体映像が現れた。

大きさは4メートル程。黒紫色の体に真つ赤な三つ目、こめかみから生えた二本の太い角に鋭い牙。『まさに悪魔』といった禍々しい姿をしており、変わった点としては右腕の肘から先が筒状になっている。

「コイツは？」

「銃魔神族。破壊を好む上級悪魔……、って言ってもコイツ、バキエルは最下級だから勝てないような相手じゃないんだけど、厄介なのはその能力」

アサギが向き直ると、バキエルは右腕に光を溜め、撃った。

アサギは高速で動いてかわすが、

「何!？」

シグナムが驚きの声を上げた。バキエルの放った砲撃はアサギを追尾しているのだ。

一頻り逃げ回った後マジカルバレットで砲撃を相殺し、アサギは一同に向き直った。

「これが銃魔神族の固有能力、狙いを定めた相手に必ず攻撃を命中させる『必中の邪眼』。……今みたいに相殺は出来るけどね」

「なるほど。確かに厄介だな」

シグナムが言う。銃魔神族の砲撃の溜めは魔導士のそれに比べてかなり速い。威力がずば抜けているわけではないが、それでもまともに食らえばひとたまりもないだろう。

「対策としては、相手の攻撃を相殺しながら攻撃するか、接近戦に持ち込むか。さすがに打撃に追尾能力は無いからね」

「でも体がデカイ上に鋼鉄で出来てるツスから、潰されないように注意が必要ツス」

アサギとサウレの言葉に一同の緊張が高まる。しかしそこに怯えは無い。すぐにでも始められるだろう。

そこにアサギは、起爆剤を投下することにした。

「浅葱之丈は多分コイツ秒殺出来るよ」

「ヨッシャアアアアア! 行くぞデカブツがああああ!」

予想以上の大爆発になった。アサギが勝ったことで多少溜飲が下がったとはいえ、浅葱之丈の一件は腹に据えかねていたらしい（詳細は第9話、第10話を参照）。

「オラアアアアアア！」

「グオオオオオオオオオ！」

半ばキレているヴィータはバキエルに接近、振るわれた拳を逆に殴り返し、粉碎した。

「……まあ、あそこまでやれとは言わないけど、接近戦は大体あんな感じ。それと、銃魔神族を相手にする時は、ティアナ能力は特に有効だから」

「えっ、あたし！？」

突然名前を出されて驚くティアナ。

「銃魔神族は頭の中までカッチカチだから、幻術なんてまず見破れない。攪乱すれば隙を作れるし、敵が複数いれば同士討ちも狙える。戦局の要よ」

「……わかった！」

アサギの言葉に、ティアナは強く頷いた。

「それじゃあ、それぞれの訓練を始めたようか！」

なのはの号令の下、各々の訓練が始まった。

その頃、とある管理世界。

「クカカカ……。実に良い気分だ」

管理局員の死体が転がる中、一人の男が血に濡れた鉤爪を眺めなが

ら言った。

「修練のために魔界に渡り早八年、いざ故郷へという時に妙な大会が開かれたのは僥倖だった。悪魔共を狩れて、経験も積めて一石二鳥」

周囲を見回し、満足げに頷く。

「今となっては傲慢な魔導士共がまるでゴミのようだ！」

そう言って、狂気に満ちた笑みを浮かべる男。

「さあ、次はミッドだ！ クカカカカカカ！」

哄笑を上げながら、男は歩き去っていった。

それから少しして、

「あの男……、間違い無い……！ 早く、本局に伝えねば……！」

辛うじて生きていた一人の局員が、最後の力を振り絞って、ミッドチルダに転移した。

第16話：必中の邪眼（後書き）

次回予告

エトナ

「二十歳を過ぎてなお少女を自称する隊長三人娘にとうとう裁きが下る日がやってきた！」

三隊長

「「ええっ!?!」」

エトナ

「陸・海・空、全ての局員から神の如く崇められるエトナ！」

アサギ

「実際魔神ですからね」

エトナ

「彼女の前に立ちはだかるは、魔提督クロノ・ハラオウン、そして極悪淫獣ユーノ・S・インキュバス！」

クロノ

「何だ魔提督って！いきなりそんな扱いなのか!?!」

ユーノ

「名前変えられてるし！」

エトナ

「果たしてエトナは次元世界の平和を守れるのか？ 次回『魔神美

少女バイオレンスエトナ』！ 最終回『さらばミッドチルダよ』！
キミのハートに、疾風迅雷っ！」

※予告と次回の内容は大幅にずれることがあります。予めご了承ください。

第17話：魔神美少女バイオレンスエトナ（前書き）

またしても長くなったので2話に分けました。

第17話：魔神美少女バイオレンスエトナ

「ホンットにもうっ！ あのアホ魔王はっ！」

何やら怒っているのは露出度の高い皮の服を身に纏い、赤髪を短めのツインテールにした少女。

尖った耳に背中に付いた小さな黒い翼、ハートを逆さまにしたような鏃型の先端を持つ尻尾から分かるように、悪魔である。

「こういう時はウィンドウショッピングに限るわ」

そう言っ、少女は街へ向かって歩いていった。

首都クラナガン。

「結構栄えてるみたいね」

あちこち眺めながら言う少女。その整った顔立ちと服装、そして何より翼と尻尾のため少女はかなり目立っている。そんなことは気にかけず、少女が歩いていると、

「待てえ！」

「待つなあ！」

正面から大きなカバンに覆面という実に分かりやすい姿の五人組の銀行強盗と、警察のような者達——管理局ということ少女は知らない——が走って来た。

少女は自分には関係無いと通り過ぎようとしたが、

「動くな！　動くとコイツの命は無いぞ！」

強盗の一人が少女の首に腕を回し、実弾の入った銃を突き付けた。

強盗達は特に理由があって少女を人質に取ったわけではない。運悪く少女が近くにいたというだけ。

そう、運の悪いことに、彼らは少女を人質に取って『しまった』。

「……オイ」

「何——がっ!？」

「ベタベタ触んじやないわよ気色悪い！」

少女は背負い投げの要領で強盗を地面に叩き付け、蹴り飛ばした。

「なっ……!？　このっ!」

別の強盗が少女に向かって連続で発砲するが、彼女はそれを全て受け止めた。

「そんな……!　嘘……だろ……?」

「何?　こんなオモチャでアタシを殺せると思った?」

手の中の銃弾を地面に落とし、魔法陣から三つ叉の槍を取り出す少女。

「たっぷり虐めてア・ゲ・ル♪」

背筋が凍るような冷たく妖しい笑みを浮かべ、少女はそう言った。

その頃、六課に緊急通信が入った。

『クラナガンで銀行強盗が発生！ 強盗五人は少女を人質に取り――』

一同に緊張が走る。

『反対に、強盗達が少女に殺されかけています！』
『え！？』

驚愕する一同の前に、映像が映し出された。そこには三つ叉の槍を目にも止まらぬ速さで繰り出し、強盗達をなぶる赤髪の少女の姿が。

「エトナさん！？」

「魔神エトナ！？」

アサギとアデル、ロザリンドが驚きの声を上げ、

「ちょっと行って来る！」

アサギが駆け出した。

「アサギ？」

「強盗が殺されたとしたらそれは、気の毒だけど当人達の自業自得。でもこのまま放っておいて誰かがエトナさんの逆鱗に触れたら、それこそ大惨事になりかねない！」

言い残して、アサギは外に飛び出していった。

「アデル、この女は、まあただ者でないのは一目瞭然だが、それほどまでに強いのか？」

「ああ……」

シグナムの問いに、重々しく頷くアデル。

「位で言えば魔神は魔王の下だが、エトナはそこの魔王よりずっと強い。オレも四年前に、ちよっと、な」

「苦い思い出じゃのう」

「……負けた、のか？」

やや躊躇い気味のシグナムの問いに、少し間を置いてアデルは答える。

「……ある意味、負けですらない。全く勝負になってなかった」

今でもはっきり思い出せる。全力の一撃は微動だにせず受け止められ、無造作な槍の一振りで小石のように弾き飛ばされたことを。

「あやつは殺る時は冗談抜きに殺る女じゃからな。アサギが穩便に事を済ませてくれるのを祈るばかりじゃ」

「弱っちいわねーアンタら。マジであれが全力なの？」

呆れたように言うエトナの前には、ボロボロになった強盗達が。

魔導士も何人かいたようだが、デバイスは使い物にならないほど破壊されている。

「た、頼む……、自首する、だから——」

「あのねえ、そんなもんアタシに言っただうすんのよ。それはそこにいる自治組織みたいなヤツらに言うことでしょ？」

周りの局員達は動けなかった。このまま放っておけばどうなるか分かってるのに、エトナの力に圧倒されて。

「ま、誰も動かないあたり、アンタらのことなんてどうでもいいみたいね。じゃ、くたばりな―」

軽いかけ声と共にエトナが引き絞り、放った槍は一直線に強盗に向かって進み、

硬い物がぶつかり合う音を立てた。

「槍を、引いてください、エトナさん」

ギリギリ間に合ったアサギが、666カスタムでエトナの槍を受け止めていた。

「へ？ 何でアンタ、アタシの名前知ってんの？」

「プリニーだった頃に、ラハール陛下の所で働いていたので……。エトナさんは覚えておられないと思いますが、アサギと言います」

「あゝ、何かフロンちゃんが気にかけてたわねーそういうえば。で、そのアサギが何でアタシの邪魔するわけ？」

問いながら、アサギに向かって槍を振るうエトナ。

「うわっ！ ちょっと、そんなに気に障りました！？」

「いや、そうでもないけど。暇潰し」

「暇潰しでロンギヌスなんて振り回さないでください！」

アサギは必死で槍――神槍ロンギヌスをかわす。端から見れば紙一重でかわしているように見えるが、単にギリギリ見切れているだけ

である。

「で、どうなのよ？」

「あの、エトナさんが手を下す程の相手でもないでしょう？」

「そりゃまあそうだけどさ。コイツらか弱い乙女のアタシを殺そうとしたし、ストレス解消も兼ねてブツ殺したいんだけど」

か弱い乙女は銃弾を素手で受け止めたり槍を振り回したりはしない。

「それじゃ、代わりに甘いものでも出しますから。ハロウィンパイとか」

「マジで！」

ここでエトナが食い付いた。ハロウィンとはパンプキンが属する妖魔族の最上級種。それを使ったパイは当然高級、そして美味なのだ。

「分かった！ もうコイツらどうでもいいや」

「それじゃあ一緒に――」

「あの……、そちらの方思いっきり法に触れまくってたんですけど……」

ここでタイミング悪く局員の一人が正気に返った。

（空気読めよこの野郎っ！）

彼が妙なことを言ってエトナの逆鱗に触れると困るので、アサギは早急に説得することにした。

「エトナさん次元漂流者だからこっちの法を知らなくても仕方ないし、そもそも先に武器向けてきたのは強盗の方だし、正当防衛って

ことで！」

「いや明らかに過剰防衛——」

「いいでしょ、ね!？」

じつと局員を見つめて説得するアサギ。その様子に効果音をつけるなら『キラッ☆』ではなく『クワッ!』だろう。はつきり言って、メチャクチャ怖い。

「はいっ！ 問題ありませんっ！」

アサギの必死の説得が届いて、局員は快く了承してくれた。

「じゃ、エトナさん、行きましようか」

「はいよ」

エトナを連れて歩きながら、サウレに『ハロウィンパイ、大至急注文』とメールを送るアサギであった。

機動六課、隊舎にて。

魔神エトナが赤いオーラを噴き出しながら殺気を撒き散らしていた。

「アサギ」

「……何でしょう」

「アンタ、一回死ぬ？」

「何故!？」

ここでエトナは六課メンバーの一部に、ギロリと視線を向けた。

「こんな殺意の湧くような胸した奴ら並べて、アタシにケンカ売ってんの？」

「いや、そういうことは本人に直接言ってください……」

直接言われても困る、と思うが、状況が状況なので言えない。

「これでアンタもたゆんだゆんだったら八つ裂きにしてるわよホントに。……てか今更だけど何なのここ？　いかがわしい店？　ロリからシヨタまで何でもあり？」

『違う（違います）！』

全員が一斉に否定し、はやてが一同を代表して説明した。

「時空管理局ねえ……。魔王の真似事みたいなことやってる人間の組織があるのは聞いたことあったけど、何とも中二臭い名前ね」

アサギといいゼタといい、どうも魔界では『時空管理局　魔王』という認識らしい。

「ところで、何でアデルとロザリンがいんの？　夫婦そろって中二病？」

「ちげえよ！　偶然この世界に飛ばされたから、暫くの間協力してるだけだ！」

エトナとアデルがそんなやり取りをしていた時、

「あの、ちょっといいかな？」

やや険しい表情のフェイトがエトナに話し掛けた。

「あの時、本気で強盗を殺すつもりだったの？」

「もちろん。マジよマジ」

事も無げに答えるエトナ。

「そんな、そこまでしなくても……!」

「アンタがどこから見てたのかは知らないけどさあ、先に殺そうとしてきたのは向こうよ? それにアイツらが自首するとか言い出した時にとっとと逮捕すれば済んだこと。非難される云われはないわ」

エトナの言うことは正しい。しかし命を重んじる傾向の強いフェイトもそうあっさり引き下がりはいしない。

「それは、そうだけど……。でも、あれは――」

「あーっ! もう! ゴチャゴチャうっさいわね!」

そして、エトナがキレた。

「高みの見物決め込んでたヤツが偉そうなこと言うなっての! この中ボスが!」

「ちゅ、中ボス!?!」

「そうよ! アンタなんてただの『中ボス』で十分よ! ふざけた胸しやがって! もぎ取るぞゴラァ!」

エトナの怒りが変な方向に移り出し、

「お待たせしましたッス〜!」

サウレがパイを運んできた。

フェイトの胸はパイによって救われたのだ。

パイの到着でひとまず静まったエトナ。

「ところでエトナさん、どうしてこの世界に？　というか、またラハール陛下と何か？」

アサギが問う。エトナとその主、魔王ラハールが大ゲンカするのはちよくちよくあることで、家臣達によってその時のための避難所が作られている程だ。

「そうなのよあのクソジャリ……！　あゝ、思い出したらまた腹立ってきた！」

「それなら、これをどうぞッス」

怒りが再燃し始めたエトナにサウレが差し出したのは、皆さん覚えているだろうか、ローゼンクイーン商会謹製、非殺傷の腕輪である。

「何コレ？」

「その腕輪を着けていると、手加減しなくても相手を殺さずに攻撃できるんスよ」

「またサディスト受けしそうな代物ね……。コレ着けて誰かと戦えってわけね」

説明し終えたサウレに、アサギが小声で話し掛ける。

「サウレ、アンタなんつーことしてくれてんの！？」

「仕方ないじゃないッスか！　こうでもしないと八つ当たりでテロとか始めかねないッスよあの人！」

否定出来ないのが怖い。

「で、誰が相手してくれんの？」

殺る気……ではなくやる気満々のエトナ。彼女の呼びかけに応えたのは、

「僕が行きます！」

あろうことか、エリオだった。

T o b e c o n t i n u e d ……

第17話：魔神美少女バイオレンスエトナ（後書き）

アサギの銃、『バハムート666カスタム』は今後基本的に『666カスタム』と表記します。

また、エトナのセリフ中の『ロザリン』は脱字ではなく、そういう呼び方です。

第18話..やさしいエトナ? (前書き)

何かもう誰がメインなのか分からなくなってきた……。。

第18話..やさしいエトナ？

〽前回のあらすじ〽

エリオがエトナに挑むようです。

〽本編〽

意外な者の意外な言葉に、皆声が出ない。

「……あのねえ坊や」

真っ先に立ち直ったのはエトナだった。

「いくら死なないって言っても死ぬ程痛い目には会うかもしれないのよ？ 子供の遊びじゃないの」

「もちろん、分かってます」

「……まさか、勝てると思ってる？」

エトナの声に剣呑な色が混ざる。

「いいえ、どうしようもない実力差があるのも分かってます。それでも戦いたいんです！」

しかしエリオは引かなかった。率直に言えば、彼は見惚れたのだ、エトナの槍捌きに。

千年以上も振るってきたのだから、エトナの槍の腕は超一流、無理もない。

その槍の腕を間近で見たいと、エリオは思ったのだ。

（どっつかでこういうヤツと会った気がすんのよね）

そんなふうに考えを巡らせるエトナ。

「だったらオレも参加する。いいか、エトナ？」

（ああコイツか）

答えはすぐに出た。

「アデル……、アンタこの子洗脳したでしょ」

「してねえよ！……で、どうなんだ？」

「別に何人がかりでもいいけどさ、アンタ、一度アタシにフルボツコにされたの忘れたの？」

「覚えてるさ。忘れるわけがねえ……。正直、お前とはもう戦いたくなかったってのが本音だ。……だが！」

グッと胸の前で拳を握るアデル。

「エリオがお前の力を知っても戦うつてのに、怯えて見てるだけなんてのはオレの流儀に反する！」

ドン！と背景に書かれそうな程に堂々と言い切った。

そんなアデルを見て、ロザリンドが熱っぽい表情を浮かべている。

（ここでイチヤつき出したら二人まとめてはっ倒すわよ……）

そんなエトナの考えとは裏腹に、アクションを起こしたのは別の人

物だった。

「よく言ったアデル坊！　それでこそ男だ！」

「うわまた変なの出て来た」

現れたのは変なの、もといジェム。一体いつから聞いていたのか、とかツツコンではいけない。

「その勝負、俺も参加させてもらおう！」

「私もだ。多対一はどうかと思うが、相手が相手だからな」

ジェムの言葉にザフィーラ（人型）が便乗する。ちなみに彼は最初からいた。

「何コイツら？　新種の病気にでもかかってんの？　アデル沢症候群？」

数少ない男が皆熱血しているのを見て呆れるエトナ。

「お願いします！」

「」「頼む！」」

「あーもう分かったわよっ！　分かったから迫るな暑苦しい！」

エリオはまだいいが、筋肉質な男三人が迫ってくるのはなかなかキツイ。

そんなわけで、エトナと熱い男四人による戦闘が行われることとなった。

「大丈夫かな……」

訓練場の方を心配そうに眺めるフェイト。

実は彼女も参加しようとしたのだが、（主に胸に）強烈な殺気を感じ、結局言い出せず仕舞いだったのだ。

「まあ、エトナさんも手加減はしてくれるだろうし。……少なくともエリオには」

やや自信なさげなアサギの言葉。さすがに本気を出しはしないだろう、と言うかエトナが本気を出したらそれこそ世界滅亡ENDである。

一方、訓練場。

エトナと男四人、そしてマーガリンがいる。彼は直接戦う訳ではない。

「マーガリン、頼んだ」

「了解ニャ。魔チェンジ！」

叫ぶと同時にマーガリンが猫の足のような形の籠手に変身し、ジェムの両手を覆った。

魔チェンジ——悪魔の中でも『魔物型』と言われる種族が持つ変身能力。

武器化した悪魔の能力の約30%が装備者に加算される。

その反面時間制限がある上に、武器側の疲労が大きいので、魔チェンジ使用後は戦線離脱を余儀なくされる。

「準備完了だ」

拳を打ち合わせるジエム。ムキムキのオッサン（と言うかジーサン）に肉球というのはなかなかシュールな組み合わせだ。

「いくぞ！」

アデルがエトナに向かって駆け出した。

「ハアッ！」

「ほいっと！」

拳と槍がぶつかり合う。四年前とは違い、アデルは体制を崩さない。

「疾風迅雷っ！」

「効くかつ！」

エトナが繰り出す高速の突きを防ぐアデル。最後の一発、ひときわ強烈な突きを逸らしてエトナの懷に潜り込み、

「せいっ！」

燃え盛る拳を彼女の腹に叩き込んだ。

「っ……！　ちよっ……と痛かったかな？　前よりは強くなってるみたいね」

「当然だ！」

僅かとはいえエトナにダメージを与えられたことを内心喜ぶアデルだが、決して気は抜かない。

「ぬんっ！」

「おっと！」

上空からザフィーラが踵落としを仕掛けるも、軽くかわされる。が、

「デススタンプ！」

「っ！」

肉球型の足場に乗って飛来してきたジェムが、エトナを力の限り踏みつけた。

「……！？ いねえ……！」

はずだったのだが、肉球型のクレーターの中にエトナの姿は無い。

「やるじゃん、オッサン」

「何っ！？」

振り返ると、そこには槍を引き絞ったエトナが。

「チェストー！」

「ぐうっ……！」

エトナの突きを辛くも防いだジェムだが、大きく弾き飛ばされてしまった。

「く、はあ……。ジジイの身には堪えたぜ……」

「まだまだ、こんなん全然大した技じゃないって。んじゃ次、デカいのいくよ」

掲げられたロンギヌスの先に、巨大な火球が生成され始めた。

「あれはヤベェ！ 止めるぞアデル坊！」
「おう！」

アデルとジェムは両手の平を向かい合わせ、闘気と魔力を集め出す。

「カオスインパクト！」
「獅子王波！」

火球と二条の光線がぶつかり、せめぎ合う。
やがて臨界点を越えたのか、火球の表面が泡立ち出した。

「ザファイラ！」
「承知！」

アデルとジェムが獅子王波を打ち切り、ザファイラが障壁を張る。
直後、大爆発が巻き起こった。

「何て威力だ、肝が冷えたぜ。アレで手加減してるってんだから恐ろしいもんだ」

ジェムがぼやき、

《時間切れだニャ……》

マーガリンが元の姿に戻った。

「さて、どう来るか……」

エトナの攻撃に備え全員が身構える。
そして、

「……来る！」

煙の中から黒い枝のようなものが伸びて来た。

「速い……！」

枝は速く、そして複雑に動き回り、アデルとジェム、ザフィーラ、

「え！？ アッシ参加してニヤいんですけど！？」

ぐでぐんとのびていたマーガリンを絡め取った。

「フフフツ、つかまえた〜♪」

サディスティックな笑みを浮かべるエトナ。彼女が持つロンギヌスの先端には光が溜められている。

「ブリュンヒルデ！」

ロンギヌスから太い光線が放たれ、

『うおおおおおおお……！』

「ギニャアアアアアア……！」

三人と、完全にとばっちりを受けたマーガリンを飲み込んだ。

「凄い……」

エリオが唾然として呟いた。入り込む余地の無い、高レベルの戦闘。無力感の前に、感嘆が込み上げて来る。

「残りは坊やだけよ。どうする？ 止めにする？」

悪戯っぽく笑いながら尋ねるエトナ。エリオの返答は、

「……いいえ！」

やはり、開始前と変わらなかった。

「たとえば勝ち目が無くても、一度挑んだ以上、最後まで続けます！
それが、僕の流儀です！」

「この子完全にアデル化してるわ……。しゃーない、付き合っ
てあげる」

ついに、若き騎士と魔神の槍が交錯する時が来た。

「せりゃあああああ！」

「ほらほら、そんなんじゃないよ」

エリオが連続で繰り出す突きを軽く防ぐエトナ。

「なかなか筋はいいみたいだけど……。まだ甘い！」
「うっ！」

エトナがストラーダを弾き、ロンギヌスを引き絞る。

「腰を落として体重を乗せて……。撃つ！」

放たれたロンギヌスを、エリオはどうにか逸らした。

「外したらなぎ払い！」

続くなぎ払いもかわす。

（かわせる……？）

その事実疑問を抱きながらも、エリオは反撃に転じた。

「すぐに槍を戻して防御！」

それを読んでいたように防ぐエトナ。

（エトナさん、もしかして……）

「エリオを、指導してる？」

そう言ったのは観戦席のフェイト。言葉にはしないが皆同じ考えだ。

「気まぐれなヤツじゃからな、こういうこともあるのかもしれないのう」

ロザリンドが呟いた。

「……もしかして、エリオみたいな小さい子が好——」

「何か言ったか中ボスッ！」

「な、何でもないよ!？」

会話はバツチリ聞こえていたようで、怒鳴るエトナにフェイトは慌てて答えた。

「と言うか、中ボスって……」

もはやエトナの中では完全に『フェイトⅡ中ボス』の図式が定着しているようである。

「いや、ザコ扱いされてないだけ十分凄いと思うけど……」

「素直に喜べない……。最近見せ場も無いし……」

視点は戻って訓練場。

暫くエトナの誘導による撃ち合いが続いている。

多分に我流混じりだったエリオの槍捌きが、槍の扱いの基礎を踏まえたそれになっていた。

「（もうそろそろいいかな……）ほいっと！」

「わっ！」

ここで突如速度の上がったロンギヌスが、ストラードをエリオの手から弾き飛ばした。

「さすがにもう終わりでしょ？」

「はい。参りました」

エトナに一礼するエリオ。

こうして模擬戦、もといエトナのストレス解消兼エリオへの指導は幕を閉じた。

「それなりに楽しめたし、そろそろ帰るわ」

非殺傷の腕輪をサウレに放りながら言うエトナ。既に時空ゲートは開いている。

「エトナさん」

「ん？」

時空ゲートに入ろうとしていたエトナに、エリオが声をかけた。

「ご指導、ありがとうございました！」

「そんな大層なことしたつもりもないけどね」

深く頭を下げるエリオに、呆れたようにエトナは言う。

「ま、死ぬ気で修練すればアタシの足下くらいまでは来られるかもね。精々頑張んな」

言葉とは裏腹に、優しい声音でそう言って、エトナは時空ゲートの向こうに消えていった。

騎士とはかけ離れた、奔放で気まぐれな魔神。

その背中を、その槍捌きを、エリオは生涯忘れることは無いだろう。

第18話..やさしいエトナ? (後書き)

『デイスガイア』のアラミス、『デイスガイア2』のハナコに対してそうだったように、エトナは（態度次第とはいえ）子供には優しいんじゃないかな、と思います。

第19話：蝙蝠と侍、時々提督（前書き）

単なる繋ぎの話なのに難産でした……。

なお、サブタイトルに深い意味はありません。

第19話：蝙蝠と侍、時々提督

機動六課会議室。

今ここにいるのは隊長三人とアサギ、そして実際にこの場にいるわけではないが、モニターに映し出されている青年。

クロノ・ハラオウン提督。フェイトの義兄である。平行世界ではK Yだの何だのと散々な言われ様だが、この世界では苦勞多き中間管理職員。ハゲやしないかと戦々恐々としているのは秘密だ。

「さて、今日は話しておきたいことがあって集まってもらった」

例によって自己紹介は済ませてあるため、本題に入るクロノ。

「それってアタシが聞いても問題無いこと？」

「勿論だ。むしろ、君にしか聞けないこともある」

なお、アサギが普通にタメ口をきいているのは、クロノ曰わく『職務ではなく、個人的に話をするので楽にしてくれて構わない』とのことだからである。

「まず一つ目は魔界について。……と言っても、既に会議で満場一致で絶対不干渉ということに決まったんだが」

この決定にはゼタの力が大きく影響している。

誰だって凶悪犯罪組織を一人で壊滅させたり、オーバースクラスの魔法を溜め無しでバカスカ連発するようなヤツを敵に回したくはな

いだろう。

ゼタ並みの実力者は少ないが、それでも同じようなことが出来る者は魔界には割といふのだ。

「ただ、魔界の製品や技術はどうかして取り入れたい、というのも本音だ」

時空管理局は年中人手不足だ。生まれつき使えるか否かが決まっている魔法に依存しているのだから当然だろう。

反面、魔界の魔法は誰にでも使うことが出来る。また、武器のデバイス化は開発経費削減にも繋がる。管理局としては手に入れたいところなのだ。

「魔界と貿易を行うことは出来ないか？」

「特定の魔界と、って言うのは無理だと思う。でも、ローゼンクイーン商会となら出来るはず」

ローゼンクイーン商会は商売相手ならば人間だろうと魔王だろうと対等に扱う。

現に、アデルの故郷『辺境世界ヴェルダウム』は人間界だが、ローゼンクイーン商会と貿易を行っている。

「ただ、心得ておかないといけないこともあるけど」
「と、言うത്？」

「ローゼンクイーン商会は絶対的中立組織だから、敵にはならないけど味方にもならない。有事の時に直接力を貸してもらうことは出来ないし、まして管理下に置くことは出来ない」

冗談抜きに宇宙征服が出来てしまうほどの巨大商会なのだ。

もともと、当の会員達は皆商売に情熱を燃やす者ばかりで、そんなことには微塵も興味は無いのだが。

「なるほど。まあ、貿易が出来るだけで御の字だ。元々それ以上の干渉はするつもりは無いさ」

「じゃあこれ、貿易受付センターの座標ね」

「ああ」

アサギが見せた座標をメモするクロノ。

「では次。現状こちらの方が重要、もとい深刻だな。……先日、ある管理世界で駐在魔導士が襲撃を受けた」

襲撃、その言葉に一同の表情が引き締まる。

「非魔導士の事務員は無傷だったが、魔導士の生存者は一人だけ。その一人もこちらに転移して自分のデバイスを局員に渡した後、治療する間も無く息を引き取った」

「……魔導士だけが殺されたってことは、犯人は魔導士に悪感情を抱いてるってことやね」

はやての言葉に、クロノが頷いた。

「そうだ。彼の残したデバイスの記録から、犯人は割り出せた」

モニターに一人の男の写真が映し出された。温厚そうな顔立ちの、短い金髪の男だ。

「三人は名前くらいは聞いたことがあるだろう。『ジャック・A・

ペタマッド』、優れた技術力と人柄で広く知られていた科学者だ」

その名前を聞いて、驚愕の表情を浮かべる隊長三人。

「確か、八年前に行方知れずになったって……、でも、どうしても彼が……」

「……おそらく、『管理局の闇』を知ってしまったのだろう。あの頃は相当酷かったはずだからな……」

二年前の『JS事件』の後、内部の大粛正が行われたため今はそんなことはないが、それ以前の管理局、とりわけ上層部は腐敗していた。違法研究や人体実験などザラであった。

当時のことを思い出したのか、クロノ達四人の表情が曇る。

「でも、その人そんなに強かったの？ 駐在魔導士も一人や二人じゃなかったんでしょ？」

アサギが疑問を呈する。魔導士の天敵、アンチマギングフィールドAMFを何らかの手段で用いたとしても、数の差は如何ともし難いだろう。

人間の常識では、だが。

「それなんだが、デバイスにジャックの声が途切れ途切れに残っていたんだが、どうやら彼は八年間、魔界に潜伏していたようなんだ」「なるほどね。魔界で八年も『生き延びて』たんならそりゃ強いわ」

魔界は弱肉強食が基本、人間にはあまりにも厳しい世界。アサギは二年間ゼタの配下にいたため最低限の衣食住は保証されていたし、その後の四年間を自力で生き延びられるだけの実力も身に付けてい

た。

しかしジャックはおそらく単独で八年間生き延びてきたのだろう。それで弱いわけが無い。

「他の局員達にも警戒するよう伝えるが、特に実力の高い君達に、先に伝えておきたかった。どうか、彼を止めて欲しい」

クロノの言葉に、四人は頷いた。

第19話：蝙蝠と侍、時々提督（後書き）

そろそろアサギウォーズに動きがありそうです。
敵アサギについて少し触れておくと、

『浅葱之丈が一番まとも』

です。

第20話：狂気の科学者！ ……私のことではないよ！ BYUMSHO暮らしの

最後のページは読み辛いかもしれません。

第20話：狂気の科学者！

……私のことではないよ？

Byムシヨ暮らしの

『三ヶ所同時に敵性悪魔出現！』

そんなわけで、三つの部隊に別れて殲滅に向かう六課の面々。

郊外に向かったのはアサギ、サウレ、ロザリンド、そしてFW陣の計七人。

「どうなってるの……？」

到着してすぐに、思わず呟くティアナ。

彼女の疑問ももっともだろう、傀儡族と魔獣族が、既にバラバラの木片、石片と化しているのだから。

「他の部隊はおらぬようじゃが……、む？」

辺りを見渡していたロザリンドが何かに気付いた。

彼女の視線の先には六体のバキエル、そしてバキエルに取り囲まれている、袖口の広い若草色のコートを着た短い金髪の男。

「あれって……」

その男に見覚えがあることにアサギが気付いた時、男が一同の方を向いた。

「クカカ、これは僥倖……！」

男が引き裂けんばかりに口の端を吊り上げ、バキエル達の間をすり抜けアサギ目掛けて人間離れた速度で疾走、

「シッ！」

「ッ！」

白銀に輝く鉤爪を振り下ろした。アサギは666カスタムでそれを弾くも、男は攻撃を繰り返し続ける。

「見つけたぞおおおおおお！ 悪魔に身を堕した女あ！ 朝霧アサギイイイイイイイ！！！」

男——ジャック・A・ペタマッドは、狂気に満ちた表情で叫びを上げた。

「アサギさ——」

「気を抜くでない！ こちらにも来るぞ！」

アサギの方を向いたキャロに、ロザリンドが激を飛ばす。

ジャックがアサギに向かって行ったことで、彼を取り囲んでいたバキエル達がロザリンド達に気付いたのだ。

「戦闘開始じゃ！ 一体たりともアサギを狙わせるな！」

「「「「はい（ッス）！」「」「」」」」

「さあ、余が相手じゃ！」

「「「グオオオオオオオ！！！！」「」」」

三体のバキエルを相手取るロザリンド。

バキエルの放つ数条の細い光線——超消滅ビームを魔力銃弾で、砲撃——全滅バスターをギガファイアで相殺し、飛び回って攪乱、

「そこじゃ！」

「ゴウウツ!？」

隙あらば銃撃を撃ち込む。

三体いるので多少時間はかかるが、特に問題は無いだろう。

（こちらは問題無し、FW達も大丈夫そうじゃな。気にかかるのはアサギとサウレか……）

一方、FW陣。

「グオオオオオ!？」

「ガアッ!？」

二体のバキエルはティアナの幻術を全く見破れずにいた。

体の大きいフリードを先に潰そうと右腕の砲身を向けるのだが、

「ほらこっちよ！」

「ガ!？」

そのたびに幻影が現れ、気を取られる。

「おりゃあああああ!!!！」

「グオウ！」

そしてスバルやエリオの攻撃を受ける。先程からこの繰り返しである。

何度も受けたことでバキエル達はFW陣の戦法を学習――

「グオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「ガアアアアアアアアアア！！！！」

――することは無く、見事にブチギレた。お互いに当たることも構わず、闇雲に手足を振り回す二体。

この間FW陣は距離を取り、二体が落ち着いたところで攻撃を再開する、というのがはやパターンと化していた。

（ロザリーさんは問題無さそうだし、早くアサギかサウレの加勢に行きたいんだけど……。もうコイツら同士で潰し合ってくれないかな……。）

あまりにも同じことの繰り返しが続くので、油断はしないものの若干ウンザリし始めたティアナであった。

「クカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカッ！」

（こんなにバカ笑いしながら攻撃するか普通！？　舌噛むぞ！　ってかむしろ噛め！）

狂ったような哄笑と共に繰り返されるジャックの攻撃を、内心毒づきながら捌くアサギ。

「悪魔も！　悪魔の呪法に手を染めた魔導士も！　そして悪魔に身を堕した貴様も！　皆滅んでしまえばいい！　いや滅ぼさねばならない！　皆、皆、皆、皆、皆、皆！　私が排除する！　排除する！　排除する！　排

第20話：狂気の科学者！ ……私のことではないよ… BYMシヨ暮らしの

もう『排除』という言葉がゲシュタルト崩壊しそうです……。

第21話：最弱の意地（前書き）

気分が乗ったので今日も投稿です。

第21話：最弱の意地

六人がそれぞれの戦いを繰り広げている時、

「ゴオウ！」

「おりゃッス！」

サウレもまた、バキエルと一対一で戦っていた。

だが、

「グルルル……」

「ハア……ハア……、キツイッスね……」

サウレは劣勢だった。体のあちこちが擦り切れほつれ、焼け焦げている。対してバキエルは体の表面にいくつか浅い傷があるだけ。

「そりゃそりゃそりゃあッス！」

「グオオオウ！」

「かはっ……！」

二本のナイフで果敢に切りかかるも文字通り刃が立たず、腕の一振りで弾き飛ばされるサウレ。

どうにかうまく着地し、地面に激突して爆発することは避けた。

サウレは、決して弱いわけではない。むしろ、転生前のアサギには及ばないものの、プリニーとしては破格の強さだ。傀儡族の上級種であるデスコッペリアやマッドジェスターを難なく撃破することすらもそれが伺える。

「ゴオオオオッ！」

「てりゃあッス！」

では、なぜ劣勢なのか。

種族としての能力の差、というのもある。銃魔神族最下級とはいえ、バキエルは上級悪魔。最下級悪魔であるプリニーとの差は大きい。だがそれは前述の傀儡族上級種にも言えることなので、それ程大きな原因ではない。

最も大きな原因、それは、

（ハア……、やっぱり硬え上に一撃一撃が重てえッス……）

素材と質量の差、である。

プリニーは1メートル程のぬいぐるみに罪人の魂が入った存在。魂に重さは無いので、身に付いているウエストポーチの分を合わせてもその体重は精々1キロと少しだろう。

それに対してバキエルは4メートルはあり、鋼鉄製の体はトン単位
の重さがある。

故にサウレが体重を乗せて切りつけても戦果は掠り傷程度であり、逆にバキエルは無造作に腕や足を振るうだけで致命的なダメージを与えられる。

「ゴオオオッ！」

「……えいッス！」

右腕の砲身に光を溜め始めるバキエル。それが最大までチャージされた瞬間を見計らって、サウレは爆弾を投げつけた。
バキエルの全滅バスターはこれで相殺出来る。

……筈だった。

「ぐうっ！」

サウレの体を数条の光線が貫いた。

「しくった……ッス……」

放たれたのは全滅バスターではなく超消滅ビーム。一つの爆弾では一発の砲撃は相殺出来ても、複数の光線は相殺出来なかった。

（すまねえッス姉御……）

倒れ伏したサウレにバキエルが近付き、空高く打ち上げた。
そのまま砲身をサウレの方に向け、光を一点に凝縮していく。

世界破滅砲——銃魔神族最強の技。それをもってサウレを仕留めるつもりなのだ。

（オレじゃ……、プリニーじゃコイツには……）

諦めかけ、はたと気付く。

（姉御は……、そのプリニーの身で強いヤツを何人も倒して来たッス……）

思い出すのは、第一次アサギウォーズの参加者。誰も彼も皆——いや、一人、というか一匹何故予選を通過出来たのか解らないヤツもいたが——強そうな者ばかりだった。

その上、今のアサギは人間という弱い種族でありながら、下級魔王なら簡単に倒せるだけの実力を身に付けている。

——プリニーでは上級悪魔に勝てない？

何を馬鹿なことを。

（オレは……、オレは……!!）

「オレはああああああああ!!!!」

叫びと共に取り出したのは、二本の角を持った動物の頭蓋骨。その額に光が灯る。

「グオオオオオオ!!!!」

「負けねえッスよおおおおおお!!!!」

世界破滅砲が放たれるより一瞬早く頭蓋骨から一条の光線が伸びバキエルの右腕の先端に到達、

「グ……ガアアアアアアアアッ!!!!」

世界破滅砲が暴発し、砲身が弾け飛んだ。

プリニガービーム——プリニー最強の技。威力こそ世界破滅砲に劣

るが、溜め時間が短く連射性が高い技である。

「グオオオオオオオオオオ！！ ガアアアアアア……ア！？」

暴れ回っていたバキエルの動きが止まった。口の中に爆弾が放り込まれている。

そしてその視線の先、上空には光を灯した頭蓋骨を掲げるサウレの姿が。

知能の低いバキエルでも、この後の展開は予想出来た。

「ゴ……！！」

「ぶっ飛ばええええええええええッス！！！！」

光線が爆弾を貫き、バキエルの頭が爆散した。

「勝った……ッス……」

サウレは着地し、そのまま意識を手放した。

第22話：戦闘には若干の恐怖心は必要だと思う。あくまで若干、ね。ホラー映画

ジャックのキャラが安定しない……。

もう不安定なのがジャックのキャラってことで。

「はあっ!？」

驚きながらもアサギは横に飛んでかわすが、

「デストロオオオオオオオオオオイ!!!」

ジャックが一瞬で肉薄。左の鉤爪による一撃に対しとっさに仰け反るも、避けきれず右頬を浅く斬り裂かれた。

右の鉤爪はワイヤーが巻き戻され、既にジャックの下に戻っている。

(あの鉤爪……)

アサギが驚いたのは鉤爪が飛んできたからではない。高名な科学者だったというから、あれくらいは自作出来てもおかしくはあるまい。ついでに言えば先程の高速移動は靴に加速装置でも仕込んであったのだろう。

驚くべきなのは鉤爪がアサルトスターを『貫通した』ことだ。

あのトゲ鉄球の硬さは鋼鉄並み。いくら発射の勢いがあると言っても回転と加速の加わったそれに真正面からぶつかれば、ただの鋼鉄の鉤爪では良くて弾かれるか悪くて折れるかである。

(言動からして魔力のあるものは嫌い、となると、オリハルコンか……)

オリハルコン——地球の漫画やゲームにもたびたび登場する伝説の金属。硬い。とにかく硬い。

『鉄がゴミのようだ!』

と思えるくらい硬い。そんなものを何故加工出来るかは、ローゼンクイーン商会曰わく、

『企業秘密です』

とのこと。

なお、アサギの666カスタムはオリハルコンと暗黒鉄鋼の合金で出来ている。性質は『ほんの少し強度が低い』が魔力のある黒いオリハルコン』と言ったところ。

閑話休題。

互いに高速移動を交えての乱打戦。アサギはジャックの攻撃を弾き、受け流しながら、時折マジカルバレットを撃ち込んでいる。しかし、

[illegible]

（効いてないの……！？）

痛みを感じない程に精神がブツ飛んでいるのか、ジャックにダメーシを受けたような様子は見られない。狂気を孕んだ叫びと相まって、一層恐怖心が煽られる。

「クカカ！ クカカ！ クカカカカカ！」

「く……ん……！」

精神状態が肉体に響き出したか、徐々に押され始めたアサギ。それでもどうにか持ちこたえていたが、何度目かのぶつかり合いで、

「セエアッ！」

「つつ！」

ジャックが右の鉤爪を発射、左の666カスタムが弾き飛ばされた。さらに悪いことに、その際の衝撃で左手の指の骨が折れてしまった。

「クカカカカ！ 斬り裂き抉り貫き刻み奇抜なオブジェにしてやるっ！！！！」

これを好機と見て、より激しく攻撃を繰り出すジャック。

（ヤバい！ どうする！？ どうすればいい！？）

指の折れた左手ではアサルトスターを持つことも出来ないの、右の666カスタムだけで防御するしかない。

当然両腕によるジャックの攻撃を防ぎきることは出来ず、アサギの体は斬り裂かれていく。

「クカカアッ！」

「うっ……！ くああああああっ！！！！」

鉤爪で左肩を貫かれた上にそれを捻りながら引き抜かれ、堪らずアサギは絶叫した。ジャックは狂気、もとい狂喜に染まった表情で彼女を見下ろしている。

「さあさあさあさあさあ！ チエエエエエエツクメエエエエエエ
エイイイ——ッ！？」

アサギの心臓を貫こうとしたジャックは、突然その場から飛び退いた。彼が一瞬前までいた場所には焼け焦げた痕がある。

「姉御おおおお!!!!」

「サ……ウレ……?」

気絶から覚めたサウレが、アサギの右斜め後ろからプリニガービームでジャックを牽制していた。

「忌々しい……! 下級悪魔風情があ……!」

光線はさすがにマズいのか、ジャックは避けるのに手一杯でアサギの方へ向かうことが出来ない。

その隙にアサギはサウレの所へ高速移動し、メガヒールで自分とサウレの傷を治す。

「ありがと、助かった!」

「反撃開始ツスよ! 魔チェンジ!」

サウレが銃に変身した。治った左手で彼を掴むと、全身に力がみなぎり、同時に心に巣くっていた恐怖が消えていく。

「もう、何も恐くな——」

「おのれええええ!!!! おのれええええ!!!! おおおお

おのれえええええ!!!!」

アサギの言葉を掻き消すように、ジャックの怒号が轟いた。

「……やっぱ怖いもんは怖いわ」

ともあれ、勝負は振り出しに戻った。

「ブチ爆ぜろ小娘ええええええええええ！！！」

ジャックが右の鉤爪を撃ち出すが、

「はあっ！」

かわされ、ワイヤーをウインドで切断された。

「マジカルバレット！」

「ぐう……！」

魔チェンジ状態のサウレを装備して能力が上昇しているアサギの攻撃は、ジャックに確実にダメージを与えている。

（サウレの魔チェンジが切れる前に、一気に決める！）

「『プリニカルシヨック!』」

「ぬうっ！」

ジャック目掛けて細く青白い光線が照射され、

「ぐおおおおつ!!!」

続いてそれが太く赤い光線に変わり、ジャックを飲み込んだ。それでもアサギは攻撃の手を緩めない。

「まだまだあ！」

「がっ！
ぐげっ！
ごぶっ！」

アサルトスターでジャックを何度も殴打し、

「トドメッ！」

「がはぁ……！」

回転を加え、加速したアサルトスターを叩きつけた。

《ちょっと、やり過ぎたんじゃないッスか……？》

「だって、このくらいやらないと、すぐ復活してブリッジの体勢で襲いかかって来そうだし……」

《そんなことになったらそれもう人間じゃないッスよ……》

恐る恐る近付いたアサギとサウレが話していると、

「ガアアアアアアッ……！！」

「うひい！？」

雄叫びを上げながらジャックが立ち上がった。

「……魔……死……べし……い」

が、とうに限界を超えていたようで、またすぐに倒れ動かなくなった。非殺傷なので死んではないだろう、多分。

「……ハア」

「アサギ、サウレ！」

アサギが安堵の息をついた時、バキエルを相手にしていたロザリンド達が駆け寄ってきた。

「無事か？」

「なんとか……。……。ん？」

ふと、アサギはジャックの近くに何かが落ちているのに気付く。

それは、もう何も映っていないアサギカウンターだった。

（コイツ、参加者だったんだ……）

第二次アサギウォーズ

ジャック・^{アサギ}A・ペタマッド、敗退。

第22話：戦闘には若干の恐怖心は必要だと思う。あくまで若干、ね。ホラー

当初、ジャックの性格はスカリエッティ　＋　ブルカノというつもりだったのですが、見事にブッ壊れましたね……。

名前の由来は『切り裂きジャック』と『ペタクラスのマッドサイエンティスト』……だったのですが、サイエンティスト全然関係無い、言動がマッドなヤツになりました。

本編に全く関係無い余談ですが、ブッ壊れる前のジャックの性格はユーノ　＋　ラミントンみたいな感じ、という設定です。うん、原型留めてませんね。

次回は明るめな話にする予定です。

番外編：ネタ丸出し・アサギの固有結界（前書き）

魔界ウォーズ（仮）に愛を込めて……。

なお、この話に登場するアサギは、本編に登場するアサギとは別人です。予めご了承ください。

番外編：ネタ丸出し・アサギの固有結界

地平線を埋め尽くさんばかりの悪魔の大群。その前に、アサギは立っていた。

何故か？　今回はそういう設定だからだ。異論は受け付けない。

シユールストレミンクの汁のような濁った瞳で大群を見据え、アサギは詠唱する。私欲と大人の事情に満ちた、その呪文を。

『体は主役願望で出来ている

血潮は欲で、心は妬み

幾年の時を経て未発売

ただの一度も続報はなく

ただの一度も期待されない

彼の者は常に独り

舞台裏で袖を濡らす

故に、その称号に意味はなく

その体は、きつと

主役願望で出来ていた』

詠唱が終わると同時に、世界が変わる。アサギの心象風景が、世界を浸食していく。

それは日の目を見ることなく散っていった幾千幾万幾億の『アサギ』達の怨念が創り出す、これでもかとかばかりに悲壮感を漂わせる赤黒い世界。

地から生えてくる手に触れられた瞬間、悪魔達の体が足下から粒子化し、消え始めた。

固有結界『魔界ウォーズ』——その効果は、対象を（仮）状態にするというもの。

（仮）状態とは、『名前は存在しても実体は存在しない状態』ということであり、（仮）状態になった者は実体を保つことが出来なくなる。

つまり、悪魔の大群は今や悪魔の大群（仮）であり、その実体が消え出している、というわけである。

断末魔の叫びも無く、悪魔の大群（仮）は消えていった。

もはや彼女以外何も存在しない世界で、

「まだかあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああ！」

アサギは叫ぶ。万感の——恨み怒り妬み憎しみ悲しみと、負の感情ばかりだが——を込めて。

番外編：ネタ丸出し・アサギの固有結界（後書き）

本当に、いつ出るんでしょうねえ……。

第23話..『はじめまして』『久しぶり』(前書き)

どうしても新キャラを出すと2話構成になるようです。

第23話..『はじめまして』『久しぶり』

「まったく、ラハールさんもエトナさんも……」

一人の少女が何やらぼやいている。

「お城が倒壊するほど大ゲンカしちゃって。あれじゃあまたプリニーさん達のお仕事が増え——」

そこまで言って、少女はハッと何かに気付いたような表情をした。

「お仕事が増えるということは、その分プリニーさん達が転生に近付くということ！ お二人はケンカしながらもそれぞれプリニーさんのことを考えてあえてお城を！？」

十中八九、というか間違い無くそれはないだろう。

「素直になれないんですね！ ツンデレですね！ 愛ですね！」

嬉しそうにクネクネし始める少女。彼女は別にヤバイ薬を使っているわけでも、狂っているわけでもない。これでも正常である。

「後はお二人が自分の気持ちに素直になってデレたらオールオッケー！ 仲直りして万事解決！ ラハールさん、エトナさん、応援してますよ！ ウフフフフ♪」

少女はスキップしながら去っていった。

繰り返すが、彼女は正常である。ただ、思考回路が春爛漫なくらい

はあるが。

ジャックの逮捕から早三日。アサギの名前は充分広く知られるようになっていた。

高名な魔導士——アサギは若干違うが——は大抵『敬意からの通り名』と『畏怖からの通り名』が付くものである。

なのは『エースオブエース』『白い魔王』、
フェイトの『金色の閃光』『金色の死神』、
はやての『夜天の王』『腹黒魔狸』
などが代表的だろう。

そんなわけで、アサギにも二つの通り名が付いた。
一つは風魔法を併用して戦うことから『風精銃士』シルフィガンナー、
もう一つは以前から囁かれていた『撲殺ガンナー』である。

このことを知ったアサギの感想は、前者に対しては

『うわっ中二臭っ』

後者に対しては

『……どこのライトノベル？』

だった。まあ満更でもないようだが。

そのアサギは、現在精密検査中。何度も結構な怪我をしているので、今更だが体内に異物が入っていないか確認するためだ。

一方その頃、なのはは一人敵性悪魔の討伐に向かっていた。
分隊長である彼女が出張っている理由は、FW陣が訓練直後だった
ことが一つ。

「……見つけた！」

視線の先にいるのはお馴染み銃魔神族。しかしその体は緑色で、バ
キエルよりも少し大きい。

これがもう一つの理由、出現した敵性悪魔がバキエルより上位、銃
魔神族ランク2のガムビエルだったこと。

アサギが言うにはまだ脅威にはならないらしいが、念のため防御が
堅いのが出撃することとなった。

ガムビエルはまだなのはに気付いていないようで、彼女に背を向け
た状態で拳を振り上げている。

道路や建物が多少砕けているが、予め郊外であるここの住民は避難
していることもあり、人命に関わる被害は出ていないことに安堵す
るなのは。だが、

「……そんな!？」

建物の陰から、15、6歳ほどに見える金髪の少女が歩き出てきた。
なのはからは見えなかったが、ガムビエルはその少女を狙っていた
のだろう。

(間に合って!)

全速力で飛びながらアクセルバレットを撃つが、ガムビエルは鬱陶
しそうになのはの方を一瞥しただけですぐに少女に注意を戻し、拳

を振り下ろした。辺りにコンクリートの碎けた響き渡る。

「あ……あ……」

間に合わなかった。砂煙の向こうに広がる光景を想像し、なのはの顔が青ざめる。

徐々に砂煙が晴れ始め、血肉をぶちまけた無惨な少女の姿が露わに

――

「え……?」

「ゴウ?」

ならなかった。少女の姿はどこにも無く、血の一滴も落ちていない。

「いきなり攻撃してくるなんて、ひどい悪魔さんですね!」

「ゴア!」

その声にガムビエルが振り向くと、斜め上、なのはの正面に少女がいた。そして彼女の背には、白い一對の翼が。その姿はまさしく――

「天使……?」

なのはが呟いた。

今にもぶんぶん!とか言い出しそうな少女の顔は決して見るものに恐怖を感じさせるようなものではないが、彼女が持つ力に気付いたガムビエルは思わず後ずさる。

「お仕置きです! ホーリーアロー!」

少女が撃ち出した数本の羽毛型魔力弾はガムビエルの間接部に突き刺さり、爆発。

「ガ……!?!」

間接を破壊されたガムビエルは、文字通り崩れ落ちた。

「ふう……。あ、そちらの方、大丈夫ですか?」

「あ、はい……」

和やかに問いかける少女に、なのははそう答えることしかできなかった。

機動六課隊舎。

「あゝ、なんか妙に疲れた」

肩を回しながらアサギがぼやく。検査の結果は異常無し、健康そのもの。

「まあ何ともなくて良かった。もし何か入ってたら肉抉って取り出さないといけないし」

「いや、挟らなくても麻酔して切開すれば……、あら?」

アサギの言葉に苦笑していたシャマルが何かに気付いた。

「なのはちゃんが帰ってきたみたいね」

「あ、ホントだ。どう? ガムビエル一体くらいなら別に問題――」

なかったでしょ、と続くはずだった言葉は、そこで途切れた。アサ

ギの視線はなのはが連れてきた少女に釘付けになる。

『初対面の知り合い』という、実に奇妙な関係の少女。

本来続く言葉の代わりに、アサギは口にした。

「フロン……さん……?」

その少女の、名を。

第24話：ババアじゃありません！ ババアじゃありません！ 大事なことなの

今回は『デイスガイア』 『デイスガイア3・ラズベリル編』のネタ
バレが少しあります、ご注意を。

第24話：ババアじゃありません！ ババアじゃありません！ 大事なことなの

「フロン……さん……?」

震える声でアサギが呟いた。

「えーっと……、どこかでお会いしましたか?」

一方、フロンは首を傾げている。さもあらなん、彼女は『今の』アサギとは面識が無いのだから。

「お名前を聞かせてもらえますか?」

「アタシは……アサギ……」

「え……!?」

その答えに目を見開くフロン。

「それじゃあ、あなたは……、あの時のプリニーさんだった、アサギさん……?」

「……んっ……!」

頷き、目に大粒の涙を溜めながら、アサギはフロンに抱き付いた。

「フロン……さ……! 良かっ……た……、また、会……えて……!」

「アサギさん……、ちゃんと、転生出来ていたんですね……」

しゃくり上げるアサギの背を優しく撫でるフロンの表情は、慈愛に満ち溢れていた。

暫く時間を置きアサギが落ち着いた後、それぞれ自己紹介をする一同。

六課メンバーはフロンのことでそれほど驚くことはなかった。『悪魔がいるんだからそりゃ天使もいるだろ』くらいのものである。

「ところでフロンさん、あの時は墮天使だったと思うんだけど、元に戻ったの？」

数十年前、訳あって同族である天使を傷付けたフロンはその罪から墮天使となり、その外見は悪魔に近いものになっていた。

しかし今は鳥のような純白の翼を持ち、赤く変色していた瞳は青に戻っている。

「はい！ 十年前に償いを終えて、晴れて天使長に就任しました！」
「おお！」

天使長——天界で大天使に次ぐ立場。大天使を元帥、天使長を大將と考えれば分かり易いだろうか。

ちなみに先代天使長は、ブルカノという故・レジアス中將と雰囲気に近い厳つい顔のオッサン天使だった。

そのブルカノは不祥事を起こしたため花に姿を変えられ、その後アルラウネという幼女の上半身と花の下半身を持つ魔物に転生、現在は無職である。

「あのー……」

と、ここでスバルが手を挙げた。

「プリニーだった頃のアサギと知り合いだったってことは、フロンさんはアサギよりも年上ってこと？」

外見年齢はスバルとそれほど変わらないのだが。

「そりゃあ天使も悪魔と同じで寿命がもの凄く長くて外見はあてにならないからねー。フロンさんもこう見えて千五ひゃー」

「かにみそー！」

「そげぶっ！」

フロンが謎の叫びと共にアサギを殴り飛ばした。

どういう殴り方をされたのか、アサギは不自然なほどに錐揉み回転しながら吹き飛び顔面から床に激突。

「アサギさん、特に女性は気にする方が多いんですから、他者の年齢に軽々しく触れてはいけません。たとえ1500歳を超えていたとしても、いい年した方が自分を『少女』だと言っていたとしても、触れてはいけないんです！」

フロンの魂の叫び。彼女はラハールやエトナよりも年上なこともあって、年齢のことには敏感なのだ。

「いや、言ってることは分かるんだが、人間を殴り飛ばすのはどうなんだ天使として？」

アデルが冷静にツツコミを入れる。

「愛も罰も、平等に与えなければなりません。愛故に、人は――」

「あの、姉御がちょっとヤバそうなんスけど……」

「あ」

一方、危篤状態のアサギは、

（あ、何か花畑が見える……）

昇天しかけていた。

（男の天使が見える……）

背に大きな純白の翼を二対持った長髪の青年。彼こそ天界の長、大天使ラミントンである。

「――――」

大天使は言っている、ここで死ぬ運命ではないと――

「ギガヒール！」

「はっ!？」

アサギ、復活。

「大丈夫ッスか姉御？」

「大丈夫だ、問題ない」

思いつき死にかけてたのは秘密だ。

「フロンさんギガヒール使えたの？」

「はい！ わたしは基本的に回復担当ですから。オメガヒールも使えますよ」

「えっ！？ 回復担当！？」

「……何ですかその異常な驚き方は？」

アサギを半眼で見つめながらフロンが問う。押さえられている頭からミシミシと音が聞こえてくるのは気のせいだと思いたい。

「いや、何と言うか、その、フロンさんは広範囲攻撃バカスカぶっ放す殲滅型だと思ってた」

「……………」

ゴスツ、と鈍い音が響いた。フロンがアサギに頭突きをかました音だ。

自分の頭を振り下ろす勢いと、アサギの頭を引き寄せる勢いを合わせた強力な頭突き。

威力は倍率ドン、さらに倍。

「~~~~~！」

声も出せずにのたうち回るアサギを放置し、フロンは一同の方へ向き直る。

「暫くの間、この世界に滞在しようと思います。よろしく願います」

天使長フロンが仲間になった！

第24話：ババアじゃありません！ ババアじゃありません！ 大事なことなの

ラミントンってブルカノよりも年上なんですね……。外見が外見なので、驚愕です。

第25話：シャルの思い、フロンの決意（前書き）

雑誌に『デイスガイア4』でのフロンの公式イラストが載っていたので、本作品のフロンはそれ準拠にします。

翼はラミントンの半分ほどの大きさです。

なお、今回はリンカーコアに関して完全オリジナル設定があります。

第25話：シャルの思い、フロンの決意

今日も今日とて訓練中の六課メンバー。

「すごいですね、カッコいいですね！」

その様子を、フロンは目を輝かせながら見ていた。

デバイスのセットアップによる服装の変化などが、ヒーローアニメや特撮番組好きな彼女の琴線に触れたのだろう。

「なんとなく、ゴードンさんのことを思い出しますね！」

地球勇者キャプテン・ゴードン——言動はややマヌケだが、熱い心を持った地球（なのは達の故郷とは別の地球、平行世界である）の大人気ヒーローだ。

彼自身は既に天寿を全うしているが、彼の生き様は今も地球で語り継がれ、魔界でも『ゴードンチャンネル』としてさり気なく放送中である。

閑話休題。

そんなフロンの所に、真剣な表情のシャルがやって来た。

「フロンちゃん、ちょっといいかしら？」

「うふふ」

フロンは答えない。意識的に無視しているのではなく、自分の世界

にトリップしていて呼ばれていることに気付いていないのだ。

「あの、フロンちゃー——」

「キヤー！ スゴいですー！」

「フロンちゃああああああああああん！」

叫び続けること5分。

「どうしましたシャルさん？ そんなに息を切らして」

「あの……ね……」

息を切らしているのはフロンがトリップしていたからなのだが、そこを問い詰めても仕方ないのですぐに本題に入るシャル。

「私に魔界の、……天界の、って言った方がいいのかしら？ ともかく、フロンちゃんの使う回復魔法を教えてほしいの。こっちの魔法よりも効果が高みたいだし」

「……何か、好奇心や向上心とは違う大きな理由が、あるんですね？」

「え……」

自分の心中を見抜いたかのようなフロンの言葉に、シャルは驚きを隠せない。

「今のシャルさん、すごく哀しい目をしています。……余計なお節介かもしれませんが、話してみてくださいませんか？」

真摯な瞳で訴えかけるフロンにシャルは頷き、話し始めた。あの時のことを。

「昔ね、なのはちゃんが、この世界の魔法では完治させられないくらい酷い怪我をしたことがあったの」

魔法と言えど科学の延長、万能ではなく、例えば深く刻まれた傷痕や大火傷などは完治させることは出来ない。

一方、魔界や天界の魔法は純粋な神秘。メガヒールならば原型を留めていれば完治させられ、ギガヒール以上ならば失われた部分を再生することさえ出来る。

「魔界や天界は違うみたいだけど、この世界や周辺の人間界ではリンカーコアっていう器官が無いと魔法は使えなくて……、なのはちゃんはそのにも大きなダメージを受けて……」

リンカーコアは『生存に必須な臓器』ではなく、言わば『体が拒絶反応を起こさない異物』であり、『魂の一部が固形化したもの』とも言える。

魔力光の色が個人で異なるのはこのためだ。

肉体のようで肉体ではないので、リンカーコアの修復は難易度が高く、ある程度は時間の経過に任せるしかない。

「私はあの時、なのはちゃんをしっかり治してあげられなかった……！ もう二度と飛べないかもしれないって、絶望を味わわせてしまった……！」

シャルルの回復魔法の腕は悪いわけではない。むしろ管理局でトップクラスである。腕ではなく魔法そのものの限界に突き当たっていた以上、誰も彼女を責められない、事実責めるものなどいなかった。

他ならぬ、彼女自身を除いては。

あの時のことはシャルの心に、今もなおしこりとなって残っている。

「私は誰かが傷付いてからしか実力を発揮出来ないのに……！ それさえも満足に出来ないのなら、私は――」

「シャルさん」

そつと、フロンがシャルの手を握る。

「そのことを気にするなとは言いません。でも、自分を否定するようなことは言わないでください」

訓練場の方を見て、フロンは続けた。

「なのはさんは今、生きています。それは、シャルさんが全力を尽くしたからこそです」

優しく微笑みながら、再びシャルの方を向くフロン。

「だから、未来のことを考えましょう。よりたくさんの人を助けられるように。わたしに教えられることは全部教えます。そして、必ずシャルさんを前衛から後衛まで立ち回れる、高機動型の回復役に育て上げてみせます！」

瞳に決意の炎を燃やすフロンに、シャルはしっかりと頷いた。

第26話：フロン、医務室に散る（前書き）

以前感想への返信で『デイスガイア3のキャラは無理』と書いたな。
あれは嘘だ。

……はい、そんなわけで、まだ大分先ですが、『デイスガイア3』
からマオ・ラズベリル・チャンプルの三人が出演する予定です。主
にネタの都合で。

第26話：フロン、医務室に散る

シャルがフロンの教え子となって数日。適性が高かったようで、既にシャルは『シールド』『ブレイブハート』などの補助魔法を習得していた。難易度が低いとはいえ相当な速さだ。

目下の目標であるギガヒールはかなり習得難易度が高いのだが、おそらくどうにかなるだろう、というのがフロンの見立て。

そんな風に各々訓練に精を出していたある日、事件は起こった。

「何事!？」

シャルの悲鳴を聞いて駆け付けた一同が見たのは、泣きそうな表情で立ち尽くすシャルと、床に倒れ伏すフロン。

「忘れていた……。ある意味魔王よりも恐ろしいものを……」

「何だ、どうということだ?」

溜め息を吐くように呟くザフィーラにアデルが尋ねた。

「それだ……」

ザフィーラの示す方には皿に乗った三つの白い物体が。改めて見ればフロンの右手にも同じものがある。

日本人には馴染み深い簡易料理、おにぎり。それがその物体の正体である。

「いやいやいや、おかしいでしょ!？」

ザフィーラの言わんとしていることを察したアサギが声を上げ、おにぎりをつ手にとった。

「料理の上手い下手はあるにしても、そんな漫画じゃあるまいし」
「待て朝霧! それは――」

シグナムの静止も空しく、アサギはおにぎりを一口かじる。

「ましておにぎりではどうにかなるわけなグバァ!」

台詞の途中で白目を剥き、倒れるアサギ。

「……おにぎりの何をどうすればこんな破壊力を持つようになるんだ?」

「余も昔は似たようなものじゃったが、さすがに握り飯でこうはならなかったぞ……」

疑問を呈する夫妻に、

「あのー、ちょっと思ったんすけど」

サウレが挙手（挙翼?）しながら言った。

「これはもう調理法云々じゃなくて、一種の能力じゃないツスカね? シヤマルさんが料理をすると魔力と反応して毒性を持つようになる、みたいな……」

『あー……』

納得する一同。もはやそれしか有り得ないだろう。

「そもそも、何で突然おにぎりなんて作っただんだ？」

ヴィータの問いに、シャルは訥々と話し始める。

「フロンちゃん、いつも付きっきりで魔法を教えてくれてるから……。私も何かしてあげたくて……。それで、料理くらいしか思いつかなくて……。でも、私の料理が、その、アレなのはわかってたから、作り方を間違えようが無いおにぎりにしたんだけど……。」

「ダメだった、と」

シグナムの言葉に頷くシャル。そんな事情があつては、シャルを責めるのはあまりに酷である。そもそもおにぎりでこんなことになるなどと、誰が想像出来ようか。

「何にせよ、コレは処分——」

「待って……、ください……。」

ヨロヨロとフロンが立ち上がった。

「それは……、シャルさんがわたしのためを思って……、作ってくれたんです……。シャルさんの愛なんです……！」

ふらつきながらも机の方に歩み寄り、アサギが持っていたおにぎりを拾い上げた。

「それを捨てるなんてとんでもない……！ たとえ凄まじい毒性を持ったダークマターだったとしても！ わたしはシャルさんの愛を全て受け取ります！」

「フロンちゃん……」

「いや、感動するところか？ 結構ヒドいこと言われてるぞ？」

目を潤ませるシャルには、ヴィータのツツコミも届かない。

フロンはおにぎりを食べ進める。顔面蒼白になり、体が痙攣し出し、
ても食べ続ける。そして、

「ごちそうさま……でし……た」

完食すると同時に、意識を手放した。

「フロンちゃああああああああん！」

真っ直ぐ己が信念を貫き、天使長フロンはその命を散らした。

——などということは勿論無く、シャルが練習中だった状態異常
回復魔法『エスポワール』を習得、フロンとアサギは事なきを得た。

復活後、アサギは「また大天使様が見てた」と呟き、フロンはシャル
のエスポワール習得を喜んだ。

フロンの愛に全局員が涙したという。

第26話：フロン、医務室に散る（後書き）

次回はしんみりした話になる予定です。

第27話..赤い月が照らす雪原で（前書き）

今回も『デイスガイア』のネタバレがあります。また、ゲームと若干異なる描写がありますが、仕様です。

推奨BGM..『赤い月』

第27話：赤い月が照らす雪原で

「……！」

訓練が終わりに近付き、タオルの用意をしていたサウレは『何か』を感じた。

「とうとう来たんスね、この時が……」

彼自身はそれについてわかっているようで、報告のためにアサギの方へ歩いていく。

「姉御、ちょっとお話があるッス」

自分が『感じた』、あるいは『悟った』ことをアサギに知らせるサウレ。

「そう、もうそんな時が……」

眩き、アサギはサウレと共に一同の所へ向かった。

「みんな、ちょっと聞いて」

「どうしたの？」

一同が注目したことを確認して、アサギは話し始める。

「今日の夜、サウレが転生する」

『え！？』

驚愕する一同。

「サウレが、というかプリニーがどういう存在か覚えてる？」

「確か、生前罪を犯した人間が、償いのために生まれ変わった姿だ
って……」

なのはの言葉にアサギが頷き、サウレが説明を引き継いだ。

「プリニーの本能で分かったんすよ、今日が転生の日だって。だから、皆さんとは今日でお別れッスね。短い間だったッスけど、お世話になりましたッス」

ぺこりと頭を下げるサウレ。

その日は、ささやかながら宴会が開かれた。

そして夜。

あちこちで雑務を手伝っていたこともあって、サウレと親しい局員は多く、皆別れを惜しんでいた。

とは言え全員が出向くわけにもいかないので、見送りのメンバーは三隊長にヴォルケンリッター、FW陣、協力者組、リイン、ヴァイス、ジェム、マーガリンの合計19人に絞られた。

魔界、『月渡しの雪原』。

見渡す限りの銀世界を、赤い満月が照らしている。

「魔界の月は赤色なんやね」

「普段は金色なんだけど、不定期で赤く変わる日があるの」

「赤い月の光が、償いを終えたプリニーの魂を浄化して、新しく生まれ変われるようにしてくれるってわけだ」

はやての言葉にアサギが答え、ジェムが補足を入れた。

「……何か聞こえねえか？」

「これって、歌……？」

ティアナが気付いた通り、どこからか歌が聞こえてくる。

『赤い月 赤い月

罪を犯した者共の

穢れを清める 赤い月

今宵は誰が生まれ変わる？

今宵は誰が生まれ変わる？』

高く、神秘的な歌声だ。

「一体誰が……、あれは……！？」

歌声の主を探して辺りを見渡していたシグナムが驚きの声を上げる。

彼女の視線の先には無数のプリニー。数え切れないほどのプリニーが一行に並び、歌いながら遠くに見える祭壇を目指して歩いている。

「オレ達も行きましょうッス」

サウレが言って、一同は祭壇に向けて歩き出した。

月渡しの雪原、祭壇。通称『月下の雪鏡』。

赤い月の光が柱となって立っている。

「誰かいるみたいですよ？」

キヤロが言うとおり、三人の黒い人影が光の柱の側にいる。その人影には脚が無く、腕が無く、顔が無かった。

大きな鎌を持った黒い手袋とマントが宙に浮いており、空っぽのフードの中に目と思しき赤い光が二つ灯っている。

「あれは『死神』だニヤ」

死神――償いを終えたプリニーの魂を赤い月に送り届ける使者。外見は邪霊族という悪魔に似ているが、その詳細は謎に包まれている。プリニーが光の柱に触れると、その体から光る球体――魂が抜け出て赤い月へと昇っていき、残された皮を死神が回収していく。

「ところで、プリニーが罪を償い終えるには、どれほどの時間がかかるのじゃ？」

「罪の内容によってまちまちだニヤ。百年もかからないプリニーもいれば、千年以上かかるプリニーもいるのニヤ」

罪を犯した瞬間、死後のプリニー化が決まるわけではない。

善行をプラス、悪行をマイナスとして、死んだ時に総和がマイナスになっていた者がプリニーとなるのだ。

また、法で裁けない罪（自殺など）はかなり大きなマイナスとなる。

「サウレはどのくらいかかったんだ？」

「大体三百年くらいツスね。まだ早い方ツスよ」

ヴァイスの問いに答えるサウレ。彼の場合、アサギに雇われて人間基準で給料がもらえるようになったのが大きい。

ちなみに、魔界でのプリニーの平均時給は約15ヘル（アイスキヤンディが一本60ヘル）である。

「そろそろみたいツスね……」

見れば、あれだけいたプリニーがもう一桁にまで減っている。

サウレははめていた非殺傷の腕輪を外してアサギに渡し、光の柱の前に立った。

「皮肉ツスね……。プリニーになって間もない頃は、さっさと転生したくてたまらなかったのに、今は名残惜しくて仕方ないツスよ……！」

肩を震わせ、サウレは一同の方へ向き直る。

「姉御、皆さん……！ お元気で……！」

光の柱に触れ、サウレの魂は赤い月へ昇っていった。

ヴァイスは目を固く閉じ両手を握り締めて涙をこらえ、アデルは嗚咽を漏らすロザリンドの肩をそっと抱く。

ジェムは切なげに赤い月を見上げ、マーガリンは赤い月に向かって敬礼する。

三隊長とヴォルケンリッター、FW陣、フロン、リインは、震えているアサギの背中を見つめている。

「ふ……う……っ！」

アサギは、まだ内側に温もりの残る非殺傷の腕輪を握り締め、声を殺して泣いた。

「グス……、あれ？ まだプリニーさんが残ってますよ？」

リインが気付いた。一同の後ろに二体のプリニーがいることに。

その二体は他のプリニーとは体色が違った。片方はバキエルに近い黒紫色、もう片方はリインの髪と同じ銀色をしている。

「あの銀色のプリニーさん、なんだかすごく懐かしい感じが……。どうしてでしょう？」

首を傾げるリイン。

二体は光の柱の前に立ち、一同の――正確には、黒紫色のプリニーはフェイトの、銀色のプリニーはやたとヴォルケンリッターの方を見た。

その目に宿るのは悲しみ、そしてそれ以上の深い愛情。

（あの目……、ラハールさんのお母様と同じ……）

その目が、数十年前に赤い月へ昇っていったラハールの母と同じであることに、フロンは気付く。

「あれは……」

「もしかして……！」

フェイトとはやてが声を上げるが、二体はその直後に光の柱に触れ、赤い月へ昇っていつてしまった。役目を終えた死神達もまた、黒い球体となって昇っていく。

「同じ悲しみは一度だけでいい、そういうことなんですね……」

フロンがポツリと呟いた。

赤い月が変わることなく、雪原と一同を照らし続けている。

第27話：赤い月が照らす雪原で（後書き）

このシーン、どうしても書きたかったんです。無事にたどり着けて良かった。

次回はこのしんみりした空気を吹き飛ばす（ぶち壊す？）コメディです！

第28話：これは魔帝ですか？ はい、ただのアホです（前書き）

ノリノリで書き上げてしまいました。

何気に初めてのチートじゃないゲストです。それでも一般的な人間と比べればかなり強いんですけど。

第28話：これは魔帝ですか？ はい、ただのアホです

赤い月の日の翌日。六課訓練場にて。

「はあ……」

アサギはどうにも上の空だった。

他の面々も似たようなものだが、アサギと色違いのプリニーの正体に感づいている三隊長、ヴォルケンリッターは特にひどい。

そんなわけで、全員訓練場に集まっているが訓練は行われていなかった。

「アサギ……、やっぱりサウレのこと……」

心配そうに聞いてくるティアナに、アサギは苦笑しながら答える。

「引きずってるわけじゃないんだけどね。アタシが生きてるうちに見送れたのはむしろ幸運なことだし。ただ、夢見てるような感覚で……」

三隊長とヴォルケンリッターも同じようなものだと言った。

「パツと目の覚めるようなことでも起こればいつも通りに戻りそうなんだけど」

言いながら、起こるわけないかと内心想うアサギ。

だが、ご都合主義のこの世界、口にしたことが起こるものなのだ。

『っ！』

突如訓練場に魔法陣が出現した。すぐに気持ちを切り替え、警戒する一同。

「時空ゲートではなさそうだな……。別の転移術式か？」

「そうみたいだけど……。この暑苦しい魔力、どこかで感じたことがあるような……」

魔法陣から橙色の魔力が溢れ出し、やがて弾けた。

「うわっはっはっはー！ 待たせたな皆の者！」

現れたのは獅子のような頭を持つ、王冠を被った二メートル半ほどの大男。

人型のザフィーラ以上に鍛え抜かれた肉体、裸の上半身に赤いマント、下半身はブルーメランパンツに金色の腰巻きという刺激的な服装、そして渋い若本ボイス……。

そんなインパクトの塊を前にして、一同啞然。いや、アサギだけは床にこぼした牛乳を拭いた雑巾を見るような目をしている。

「あの……、あなたは……？」

「うむ！ よくぞ聞いてくれた！」

なのはの問いに大きく頷くと、若本ライオン（仮称）は筋肉を誇示するポーズを取った。

「我輩こそは！ その名も高き宇宙の王者！ 銀河の英雄！ 森羅万象の創造主！」

一文ごとにポーズを変える若本ライオン（仮称）。無駄に様になっており、その手の趣味の人なら

『ウホッ！ いい男…』

とか言いそうだ。

「そう！ 我輩の名は……、魔帝ロイヤルキン——」

「肉じゃがああああ……！」

「へぶう！」

やたら長い前置きに痺れを切らしたのか、アサギが謎の叫びと共に若本ライオン（仮称）、改めロイヤルキンへぶうの顔面にアサルトスターを叩き込んだ。

「お、おのれえ……、名乗りの最中に殴り飛ばすとは何と無礼な！ 貴様それでも人間か！？」

「能書きとポーズはいらないうての。スパッと名乗れよ鬱陶しい」

ロイヤルキンへぶうのもっともな言い分に、アサギもまたもっともな意見で返す。

「場を盛り上げるための演出だというのに……。まあよい。では改めて！ 我輩は、魔帝ロイヤルキングダーク3世であるう！」

今度は簡潔に、しかしポーズは忘れずに取りつつ名乗ったロイヤルキンへぶう、改めロイヤルキングダーク3世。

「で？ そのロイヤルキングダーク3世、略してキンさんが人間界に何の用？」

「ちょ、変な略し方しないで！　せめてキングダークにしてくれい！　……というか、貴様アサギではないか！」

名前の略し方に異議を申し立てた時、キングダークは今更ながら相手がアサギであることに気付いた。

「知り合い？」

そういえば魔力に感じた覚えがあるとか言ってたなく、と思いつつスバルが尋ねる。

「知り合いというか、ゼタの所にいた時に絡まれただけ。名前も知らなかったし。ゼタに聞いても『ただのアホだ！』としか言わなかったから……」

確かにここまでの流れを振り返れば、キングダークは間違い無くアホだと言える。外見や声『だけ』は威厳があるのだが。

「うむ……、ゼタの弟子とは言え所詮は人間の小娘とナメてかかったら、見事にフルボッコにされてしまった……」

「負けたのかよ……。お前ホントに魔帝か？　『最低』とか『痛帝』とかに代えたほうがいいんじゃないかねえか、称号？」

「うまい！　座布団一枚！　ってやかましいわあああああああああ！　……」

ヴィータの提案にノリツツコミをかますキングダーク。

「ちょうど良い機会だ！ アサギよ、今日この場で貴様への雪辱を果たす！ そして晴れ晴れとした気分でこの世界を侵略し、我が魔界としてくれるわ！」

「へえ、魔王らしいこと言うじゃないの。キングダークのくせに」「ぐうっ！」

アサギの言葉に、キングダークは胸を押さえて呻いた。

「『の○太のくせに』みたいな言い方は止めい！ 我輩のガラスのハートが傷付くではないか！」

息を整え、キングダークは再び筋肉を誇示するポーズを取る。

「見るがいい！ これが我輩の全力全開！ ぶるあああああああああああ！……」

キングダークの全身から橙色のオーラが吹き出した。

腐っても魔王、そこらのエースでは束になってかかっても敵わないくらいの实力はある。

「どうだあああああ！！！！ 我輩が本気になれば、貴様など敵ではない！ もう何も恐くない！ 手早く片付けてくれる！ 我輩、この戦いが終わったらパーティーを開くんだ！」

死亡フラグを乱立するキングダーク。この男、やはり本物のアホである。

「燃え上がれ我輩の情熱！ メエエエエエエエエエエズパツシヨオオオオオオオオオオオ！」

〃五分後〃

「ま、またしても負けた……」

うつ伏せに倒れたキングダークのケツをアサギが蹴りつけている。
これで蹴られているのが愛らしい生物なら

『やめたげてよお!』

と言いたくなるが、如何せんアホ丸出しの筋肉ライオンである。ここに至るまでの過程が過程ということもあり、止めに入る気もおきない。

一応記しておくが、彼は決してボロ負けしたわけではなく、アサギにそれなりにダメージを与えている。

「チクシヨオオオオオオオオオオオオ!」

「うわっ!?!」

突然キングダークが立ち上がり、叫び出した。

「チクシヨオオオオオオ! チクシヨオオオオオオ! 完全体に、完全体になれさえすれば貴様などおとおお……!」

「え、変身出来るの?」

変身して強くなるのかと驚きアサギが尋ねる。が、

「いや出来ん! 願望をさらけ出してみただけだ!」

返ってきたのはこんな答えだった。

「……………」

「アーウチ！」

ムカついたのでキングダークのケツにアサルトスターを叩き込むアサギ。

「ところで、結局アンタ何しに来たの？ 侵略云々も取って付けたような感じだったし」

「特に理由は無い、なんとなくだ。まあ、せっかく知人に会ったのだ、我輩に勝った褒美も兼ねてこれを贈呈してしんぜよう」

そう言ってキングダークが王冠の中から取り出したのは、ビニールで覆われた一冊の本。

「『ワールドレス魔王』……。『ロイヤルキングダーク3世・著』……って、アンタが書いたの！？」

「うむ！ 我輩が娘に魔界を奪われてからのことを赤裸々に綴った実話小説だ。ぜひ読んでみてくれ。……むむ？ 何やら生温かい視線を感じるぞ？」

何事かとキングダークが周りを見渡せば、六課の面々が憐憫の籠もった目で彼を見ている。

「や、止めろ！ そんな目で我輩を見るでない！」

しかし視線は途切れず、

「気を落とさずに、強く生きろよ」

「いつかきつと立派な魔界を持てるようになりますから」

それどころか慰められる始末。

「ううう……、ビエーン！ チックシヨオオオオオオオオオオオ！」

あまりの惨めさに耐えられず、キングダークは泣きながら時空ゲートの向こうに消えていった。

「あれ？ その本、何か付いてますよ？」

本と一緒に箱がパックされていることにエリオが気付いた。

「何だろ、うわ……」

箱を開けたアサギが嫌そうな顔をする。

入っていたのはキングダークのフィギュアだった。妙に完成度が高く、マントと腰巻きは脱着出来るようになっていた。

「どうしようコレ……。フロンさー」

「いりません」

即答。鎧でも着ていればヒーローっぽく見えなくもないが、さすがに裸マントではアウトだろう。

「はやてはどう？ 寂しい夜のお供に」

「いらんわ！ 夢に出そうや！」

夢の中にキングダークが一人、キングダークが二人、キングダーク

が三人……、凄まじい悪夢だ。

「……ネットオークションに出すか」

その後、キングダーク人形は予想以上に人気が出て、最終的にインテリジェントデバイス三つ分ほどの値段で落札された。人の趣味は千差万別だと思い知らされる出来事であった。

第28話：これは魔帝ですか？ はい、ただのアホです（後書き）

次回から『魔界合宿編・魔界観光編』に入ります。

第29話：レッツゴー魔界（前書き）

ラストの展開との辻褄合わせのために、設定を以下のように変更しました。

六課は正式設立↓一度解散、悪魔襲来事件の解決のため再編成（リミッター無し）

それに伴って第2話を加筆修正しましたが、読み返さなくても特に問題ありません。

第29話：レッツゴー魔界

ある日の早朝、機動六課。

「合宿？」

「そう、合宿。魔界に。前からはやてと話はしてたんだけど」

アサギが一同に魔界への合宿について話していた。

「これからもっと強いのが出てくるかもしれないし、他の局員を片っ端から鍛えたりは出来ないから、せめてここのメンバーだけでも強化しておこうと思って」

「思わぬ臨時収入でゴタゴタしてた予算の問題も片付いたしな。キングダークさんに感謝やね」

はやての言う臨時収入とは、キングダーク人形が落札された際の代金のことである。

「そういえば、どうだったのあの本？」

「あれね……。泣けた」

『泣けたの（か）！？』

どうにもギャグ小説というイメージしか湧かないのだが。

「あのアホ丸出しの言動の裏で苦労を重ねてると思うと……」

『ワールドレス魔王』——キングダークが娘に魔界を奪われてから
のことが、小説形式で驚くほど真面目な文章で綴られている。定価
1400ヘル、初回限定版（人形付き）は3200ヘル。魔界各地

の書店にて絶賛発売中。

閑話休題。

「行くにしても、何人か残しておかないといけないんじゃないかな？」

「こういう時のために俺がいるんだ」

「ひゃあ!？」

驚き叫ぶなのはの背後にはジェムがいた。この男、いつも突然現れるのだ。本人曰わく『ダチ譲りだ』とのこと。

「俺やアデル坊たちがこっちに残るから、遠慮なく行ってくるといい。戦力強化だけじゃねえ、今後魔界の技術を取り入れるかもしれないってんなら、色々知っておいて損はねえはずだ」

「そういうことなら、よろしくお願いします」

最終的に、ジェム、マーガリン、シャマル、フロン、アデル、ロザリンドが残ることになった。

そんなわけで魔界。

時空ゲートを使ったため徒歩二秒で到着である。

「さて、どこへ行くか……」

実のところ、アサギは『魔界へ行く』ということ以外は特に決めていなかった。

魔界で修行といえば『練武の洞窟』が定番だが、しばらく滞在する

ので、宿泊場所のことも考えなければならぬ。

「となると、『獣の里』か『修羅の国』か……」

アサギが考えを巡らせていると、

「シャギヤアアアアアアア！」

上空から雄叫びが聞こえてきた。

「サメが……」

「飛んでる……？」

スバルとキャロが思わず呟いた。

飛んでいるのは三体の黄色いサメ。当然普通のサメではなく、脚があり、左右のヒレが翼のように発達している。

竜神族最上級種、ミドガルズである。

ミドガルズ達はアサギ達に気付いていない、あるいは人数が多い分戦闘になれば不利と判断したのか、彼女達に視線を向けずより遠くを見ている。その視線の先には、

「男の子!？」

二本（二束?）の触角のように立った髪が特徴的な、赤いマフラーをした上半身裸の短パン少年の姿が。

「シャアアアア！」

先頭を飛んでいたミドガルズが少年を喰らわんと速度を上げ、残りの二体もそれに追従する。

「すぐ助けに――」

フェイトが飛び出そうとした時、

「獄炎ナツクルッ！」

「シャッ……！」

フェイトの横を、ミドガルズが体をくの字に曲げて飛んでいった。

高度が落ちて地面を抉りながら突き進み、大きな岩に激突してようやく止まったミドガルズの腹には、拳型のへこみと焼け痕がくつきりと残っている。

『一メートル半にも満たない小柄な少年が、十メートルはあるミドガルズを殴り飛ばした』、そんな衝撃的な光景を目のあたりにした二体のミドガルズと六課一同は硬直し、

「……なるほどね。そりゃこうなるわ」

少年の姿をはっきりと認識したアサギは合点がいったと頷いた。

「ギアアギアアと喧しいわ！ 鬱陶しいヤツらめ！」

少年の体から魔力が噴き出す。それはエトナを少し上回る膨大なものの。

圧倒的を通り越して絶望的な実力の差に気付いた二体のミドガルズ

は大急ぎで逃げ出した。

「逃がさん！ 魔王玉あ！」

少年が両手を翳すと、彼の頭上に六つの巨大な魔力球が現れた。その一発一発に、下級魔王クラスの魔力が込められている。

「砕けろっ！」

少年が両手を振り下ろすと同時に、魔王玉がミドガルズ達に殺到、爆発を起こした。

「ギ……ギャ……」

「シャ……ア……」

満身創痍のミドガルズ達。立ち上がったことを誉めるべきか、立ち上がって『しまった』ことを憐れむべきか。

「ほう、魔王玉を受けてまだ立ち上がるとは、なかなかしぶといではないか。では、褒美をくれてやろう」

少年は前者を選んだようで、いたずらを思い付いた悪ガキの表情で右手を翳し、上空に巨大な魔法陣を生み出した。

半ば以上自分達の運命を自覚しながらも、ミドガルズ達は痛む体に鞭打って逃走を再開する。

「遠慮なく受け取るがいい！ メテオインパクト！」

魔法陣の中心から現れた隕石に少年が飛び乗り、『魔王様のポーズ』

を取った。

「ハーツハツハツハツ！」

少年の高笑いをBGMに隕石は突き進み、

「「ギャアアアアア……！！」」

二体のミドガルズとその悲鳴を、大爆発が飲み込んだ。

「フン！ 雑魚のくせにオレ様に楯突くからだ！」

いつの間にか隕石から離れていた少年がマフラーを翼代わりにふわりと舞い降り、吐き捨てた。

その声で我に返ったアサギ以外の一同。

「大丈夫？ 怪我は無い？」

明らかに一方的に伸していたのだから怪我などあろうはずもないのだが、性格的なものだろう、フェイトが心配そうに少年に駆け寄る。

「む？ 何だお前は？ 何故人間が魔界に——、ってやめんか！
そのムチムチした体をオレ様に近付けるな！」

今ようやく存在に気付いたという様子で怪訝な表情を浮かべていた少年だが、フェイトの胸に視線を向けた瞬間残像が出来そうな速度で飛び退いた。

「そんなに照れなくても……」

「照れとらんわっ！　とにかくその物騒な胸をぶら下げてオレ様に近付くでない！」

「あの、ラハール陛下」

照れ隠しだと思い込んでいるフェイトを怒鳴りつけている少年――ラハールに、アサギが声をかける。

少年はアサギの胸元にチラリと視線を向け、安堵の息をついた後に口を開いた。

「面識は無いはずだが、何故オレ様の名を知っている？」

「実は、プリニーだった頃に陛下のところで働いてまして……」

と、アサギがエトナにしたのと同じ説明をラハールにしている間に、なのはとフェイトは小声で会話している。

「『陛下』って、あの子も魔王ってこと？　やんちゃ盛りの子供に

しか見えないけど……」

「かわいい魔王だね、フェイトちゃんの胸を見て照れるなんて」

「オイ！　聞こえてるぞ！　誰が子供だ！　あと照れとらんと言っておろうが！」

ラハールに筒抜けだったようだが。

「あー、オメーら、そう相手を外見で判断するもんじゃねえぞ？」

二人を諫めるヴィータ。彼女らしからぬ哀愁が漂っているのは、似たような経験が多いからか。

そんな彼女の方へ、ラハールが歩み寄った。

「話がわかるではないか。お前とは気が合いそうだ」
「奇遇だな。アタシも同じこと考えてたところだ」

同じ悩みを抱える者同士、通じ合うものがあるらしい。

「改めて名乗っておこう。オレ様は魔王ラハールだ」
「鉄槌の騎士ヴィータだ。よろしくな」

互いに不敵な笑みを浮かべる二人。こうして見ると、雰囲気がよく似ている。

「ところでヴィータよ、何故お前達は魔界にいるのだ？」
「ああ、実はな……」

ヴィータがラハールにこれまでの経緯を説明する。

「……ってわけなんだよ」
「なるほどな。そういうことならオレ様にあてがある。ついて来るがいい」

そう言ってラハールは踵を返して歩き出し、

「……ただし！」

すぐに振り返ってフェイトやシグナムのような胸の大きい女性陣に、
ビシィ！と音がしそうな勢いで指を突きつけ、

「そのムチムチした体のヤツらはオレ様の半径一メートル以内に
近付くなよ！ 絶対に近付くなよ！ 振りじゃないからな！ 本当

に近付くなよ！」

しっかりと釘を刺しておいた。

「世の中には物事を見た目でしか判断出来んヤツが多すぎる！　そうは思わんかヴィータよ？」

「まったくもってその通りだなラハール！　もっと本質を見抜く力を付けろってんだ！」

ラハールとヴィータはすっかり意気投合している。実に微笑ましい光景だ。

そんな二人からきっちり一メートル後ろでは、フェイトがへこんでいた。

「割とスタイルには自信あったのに、それが仇になるなんて……」

子供に（実際はラハールの方が60倍以上長く生きているが）距離を置かれたのがよほどショックだったらしい。

ヴィータは意気揚々と、フェイトはどんよりと、残りのメンバーはどう声をかければいいのか分からないまま歩くこと数分。

「着いたぞ」

ラハールの先導のもと、一同は大きな和風の屋敷の前にたどり着いた。

「滞在するならばここがうってつけだろう。風呂もあるし、メシも出る。その上、確実に強くなれるときている。まさに至れり尽くせ

りだ」

屋敷の扉の隣には木製の看板が打ち付けられており、そこにはこう書かれている。

『合宿宿 生き地獄』

第30話：始動！ 絶対六課メンバー改造計画！（前書き）

今回は短めです。その反動で次回は十分長くなる予定なので、更新は遅くなると思います。

第30話：始動！ 絶対六課メンバー改造計画！

「『合宿宿 生き地獄』……、またいかにもな名前だな……」

ヴィータが呟く。なお、何故彼女が魔界文字で書かれた看板を読めたかと言うと、魔界文字そのものに翻訳効果があるからだ。ご都合主義？ 何を今更。

「オレ様にとってはここでの修練も軽い運動のようなものだがな。……ではな、オレ様はもう行くぞ」

そう言って歩き出すラハールを、

「ラハール君」

なのはが呼び止めた。

「……何だ？」

君付けで呼ばれたことに引っかけかりを覚えるものの、この手の相手は言っても無駄かと諦めつつ応じるラハール。

「ありがとう、わざわざ送ってくれて。優しいんだね」

「な、な、な……！」

微笑みながら言うのはに、ラハールは思いきり狼狽した。

昔と比べると大分マシになったが、彼は愛や優しさといった言葉が大の苦手なのだ。

「バ、バカ者！ 魔王に『優しい』などと言うな！ 虫酸が走るわ！ ……大体、強くなれるというのはお前達が耐え抜けたらの話だ！ せいぜい足掻くことだな！ ハーッハッハッハッ！」

「ツンデレやね」

「違うわっ！」

もう話すことは無いとばかりに、ラハールは肩を怒らせ歩き去る。

「ラハール！ またなーっ！」

ヴィータの声に、右腕を掲げて応えながら。

「……さて！」

改めて一同は門の方へ向き直る。

アサギが扉を開くとそこには、

「ニャ？」

「ニャニャ？」

猫っぽい生物がいた。マーガリンとよく似ているが、爪が短く首から鈴をぶら下げている。

マーガリンが属する邪猫族の近種、寝子猫族のネコサーベルである。

「お客さんだニャー！」

「女将を呼ぶニャー！」

「ニャー！」

宿の名前と裏腹にほのぼのした光景に啞然とする一同をおいて、ネコサーベル達はニャーニャー言いながらどこかへ駆けていった。

「お待たせ致しました」

少ししてやって来たのは和服に身を包み、桃色の髪を一つに結わえた女性。無論人間ではなく、その耳と両腕両脚は猫のそれであり、背後ではふさふさの尻尾が揺れている。

半人半猫の悪魔、猫娘族。その最上級種、バステトだ。

「お部屋にご案内致します。どうぞこちらへ」

女将に連れられ部屋に向かう一同。ネコサーベル達もひよこのように女将の後ろに続いている。

「あの、この子達は？」

女将の尻尾にじゃれついているネコサーベル達を見て、顔をほころばせながらスバルが尋ねた。

「当宿の従業員兼マスコットでございます。当宿はその特性上、精神を病まれる方が多いので、せめてもの癒しにと」

「そ、そうですか……」

女将の不吉な言葉にスバルの表情が引きつる。忘れそうになっていたがここは魔界、常識破りが当たり前の世界なのだ。

そうこうしているうちに部屋に到着。非常に広く、テレビや本棚が置かれている。そして部屋の奥には十一の転送術式の魔法陣が。

「では、当宿の訓練場について説明させていただきます」

一同が女将の方を向く。

「そちらの魔法陣から行くことの出来る訓練場では、練武の洞窟と同じく魔水晶の生み出す『実体のある幻影』と戦うことになります」
仕組みは異なるが、要は六課の訓練用ホログラムと同じということだ。

「訓練場で受けた『ダメージ』は即座に回復するようになっております。しかし、『疲労』は回復致しませんのでご注意ください」

これは通常の回復魔法も同じ。傷や痛みを完全に治しても、しっかりと休憩を取らなければ、結局は体を壊してしまう。

「そして、一度訓練場に入ると一定時間が経過するまでこの部屋に戻ってくることは出来ません」

「途中で力尽きれば時間が来るまでなぶられ続ける、ということか……」

「故に、『生き地獄』なのでございます」

シグナムの呟きに女将が答えた。

「本棚に実用書を用意してありますので、ご活用ください。では、ご武運を……」

女将とネコサーベル達が去った後、はやては本棚を見てみることにした。

『よく分かる魔界戦技』『どうしようもないクズでも出来る魔法入門』などの実用書もあれば、『実録・魔王の生き様』『ゾーマ編』『偶刊魔界』のような戦闘と無関係なものもある。ちなみに、偶刊魔界はその名の通りたまに刊行されるゴシップ雑誌だ。

「何はともあれ、まずは行ってみよか」

持っていた本を本棚に戻し、はやては一同を見渡す。

「どんなに相手か分からへんけど、みんな、気をしっかり持って行こ！」

はやての言葉に頷き、一同は魔法陣に乗り訓練場に転移した。

第30話：始動！ 絶対六課メンバー改造計画！（後書き）

次回は一同の訓練風景です。さすがに一人一話というわけにはいかないで……。

第31話：突撃！ となりの訓練場！（前書き）

やっと書き終わった……。普段の三倍以上の文字数ですので、今回はかなり長いです。

第31話：突撃！ となりの訓練場！

＜side アサギ＞

「ゴオオオアアアアア！」

「おっとお！」

アサギに向かって鋭く尖った爪を振るうのは、体長三メートル程の獣。

サルの頭にライオンの体、コウモリの翼にサソリの尻尾と、その姿はまさに異形。

誇り高き魔界の捕食者、獣王族。アサギの前にいるのは、その頂点に君臨する最上級種、スフィンクス。

『キイツキッキイイイ！』

「……！」

群がってきた無数のコウモリを、アサルトスターを振り回すことで振り払う。

「キキッ！」

「キキキキ……」

コウモリが集まり、二本の角を持つ二人の男に姿を変えた。

人間界でも有名な闇の眷属、ヴァンパイア族。この二体はそのランク5、ノスフェラス。

少しの距離を取り、睨み合う四者。

「上級悪魔のさらに上級種とは、これまた豪勢なこって」

冗談めかして言いつつも、アサギの目は笑っておらず、ほんのわずかな油断も無い。

確かにアサギは下級魔王なら軽くあしらえる実力があるが、それはあくまでも『一対一ならば』の話である。

目の前の三体は確実に上級魔神クラス、もしかすると下級魔王クラスになるかもしれない。苦戦は必至。だが、

（ま、ゼタのしごきに比べれば大分マシか）

その心に、動きを妨げるほどの恐怖は無い。

「行くぞお！」

「グオオオオオ！」

「「キキキィ！」」

そして、再び四者はぶつかり合う。

〈side なのは〉

「デイベインバスター！」

「「きゅうううん！」」

なのはの放った攻撃が、少女の上半身と花の下半身を持つ悪魔——妖花族ランク5、フォティニアを二体飲み込んだ。

「きゅううう！」

「きゅるるっ！」

（あんまり効いてない……）

しかしフォティニア達はノーダメージではないものの、依然元気な様子で地面から尖った根っこを突き出し、なのはを襲う。

妖花族は元々魔法防御力が高い上に、魔法攻撃で受けるダメージを半減する『新緑の護り』という固有能力を持っている。魔法による戦闘を主とするなのはにとっては厄介な相手だ。

それでも通じるだけマシだということを、彼女はすぐに思い知らされることとなる。

「……………」

少し離れた所で静かになのはを見据えているのは、羊のような巻き角と純白の翼を生やした、悪魔とは思えない姿をした体長二メートル程の悪魔。

外見は犬に似ているが、れっきとした竜族の一種。聖竜族最上級種、神竜である。

「ガウッ！」

神竜はなのは目掛けて水属性の砲撃——ホーリーフレアを放った。それを危なげなく回避し、なのはは攻撃しながら溜めていた自身の砲撃を放つ。

「スターライト……ブレイカー！」

桜色の砲撃は神竜に直撃。いかに高位の悪魔と言えど、大ダメージは免れない。

他の種族ならば、の話だが。

「ウオオオオオン！」

「そんな！？……うつ！」

あろうことか神竜は、砲撃の中を防御もせずに飛んできた。そんな異常な光景に面食らったなのは胸元を神竜の角が穿ち、

「ワウッ！」

「うあっ！」

続けざまに振り下ろされた右前足が、なのはを地面に叩きつけた。

（魔法が、効かないの！？）

困惑する彼女を、神竜は悠然と見下ろしている。

聖竜族の固有能力『ディバインコート』。その効果は『無属性の特殊技を無効化する』というもの。魔法に限らず、例えばアサギのアサルトスターのように実体のある技さえも無効化してしまうのだ。

つまり、現状なのは魔法は神竜には一切効かない。

（花の女の子を牽制しながら、白い方を直接叩くしかない！）

地面から突き出る無数の根っこ——フラワーハザードをかわしながらなのは、『管理局の白い悪魔』は、正真正銘の『白い悪魔』を見上げた。

〈side フェイト〉

目の前の体長五メートル程の、体中に目がある不気味な悪魔——宇宙魔族最上級種アルゴスを斬りつけるフェイト。

「ビガガガガ……！」

しかしアルゴスは堪えた様子もなく、電撃を撃ち出し反撃した。

「堅い……！」

攻撃をかわしたフェイトが呟く。

宇宙魔族は機動力は低いが、防御力は魔界随一。そう容易く貫けるものではない。

「「フシャアアアアアアアア！」」

「くっ……！」

敵はアルゴスだけではない。フェイトが飛び退くと、彼女が一瞬前までいた場所を二体の悪魔が駆け抜けていった。

その悪魔達の姿は、マーガリンによく似ているが体色が違う。邪猫族ランク5、アビシニアンだ。

二体は固有技『デスウィーリング』で宙を舞い、フェイトに襲いかかる。

「シャアアアア！」

「フニャアアアア！」

「はあああああ！」

アビシニアン達の爪を双剣状態のバルディッシュで捌く。隙を見て反撃に転じようとした時、アビシニアン達がフェイトから大きく距離を取った。

「ビガガガゴ！」

直後、歪な形の黒い塊がフェイトに向かって飛来。バルディッシュで弾こうとすると、それは形を失い粒子状になった。

「これは……？」

《砂鉄です。あの目の多い悪魔が操っているようです》

宇宙魔族は強力な電磁力を操る力を持つ。砂鉄を操るくらいは造作もない。

「ビガガガゴゴ！」

砂鉄が数本の槍となり、フェイトに殺到した。

〈side はやて〉

はやてと空中戦を繰り広げるのは、出て引っ込んで出てという体型に翼と尻尾、二本の角を生やした悪魔。

男を誑かし精気を吸い取る女悪魔、夜魔族。たなびく金髪と赤色掛かった翼と尻尾、角はその最上級種、リリースである証。

男を誘惑することが主とはいえ元来高い戦闘能力を持つ夜魔族、しかも最上級種のリリースと、はやては互角に打ち合っている。

（アサギちゃんのトゲ鉄球に比べたら、どうってことあらへんな！）

単独戦闘が苦手だったはやてだが、今は一通りの戦闘、肉弾戦さえも出来るようになっていた。

「……バレとるで！」

「っ!？」

リリースの表情が苦痛に歪んだ。尻尾を蛇に変化させはやての背後から強襲したのだが、その尻尾はブラッディダガーに貫かれている。

リリースに迫撃をかけようとした時、五メートル程の大きな影がはやてを覆った。

「……………」

「うわっと!」

体格のわりに高く跳んだ、のっぺりした顔の土色の悪魔——ゴーレム族ランク5、ウルリクルミが繰り出した大砲弾のような拳をどうにか避けるはやて。

「……………」

「ぐっ……………」

しかし、ウルリクルミの背に張り付いていたもう一体のウルリクルミが跳び上がり、組んだ両手をはやてに振り下ろした。

シュベルトクロイツを盾にして直撃は避けるも、衝撃は殺せず地面に叩きつけられてしまう。

「つつ……。乳女に氣い取られすぎた……」

ウルリクルミ達はゆつくりと距離を詰め出し、リリスは獰猛な笑みを浮かべて両手の間に雷を溜め初めている。それを見てはやては、

「チャンス……！」

より獰猛な笑みを浮かべ、既に『溜まっている』魔力と、日頃の鬱憤やリリスの体型に対する嫉妬などを、叫びに乗せて撃ち出した。

「ディアボリックエミッシヨオオオオオオオオオオオン！」

〈side シグナム〉

彼女にしては非常に珍しいことに、シグナムは振るわれる剣に対して回避に撤していた。

（出来れば、正面から打ち合いたいところだが……）

剣を振るうのは、首のあるべき場所に黒い炎を灯した剣士。妖騎士族最上級種、エグゼクターの剣技はまさに達人のもの。普段のシグナムならば打ち合いに興じるだろうが、

（この体格差ではな……）

エグゼクターの体長はおよそ四メートル。まともに打ち合えば力負けするのは確実であり、最悪レヴァンティンごと真っ二つにされかねない。

「紫電一せ——」

エグゼクターの懷に踏み込み紫電一閃を打とうとするシグナムだが、突然上空に現れた暗雲からの落雷により、後退を余儀なくされた。

「くっ……！　またか！」

エグゼクターの斜め後ろには二体の悪魔。体長は二メートル程、ピンク色のサンショウウオのような姿で、目は無く、体のあちこちに赤いY字型の突起がある。

先程の暗雲はこの悪魔達——水魔族ランク5、カリブデスを作り出したものだ。

レヴァンティンを連結刃に変えカリブデス達を狙うが、二体は体を丸めて跳ね回り、これをかわす。

（近付こうとすればあの両生類もどきに邪魔をされ、さりとてヤツらを狙えばこの騎士に隙を見せてしまう……）

近付かずにエグゼクターに決定打を与える、あるいはカリブデスを確実に仕留めるには——

（連結刃に、もっと『速さ』が必要だ！）

〈side ヴィータ〉

「クソッ！　ちまちまとウザってえ！」

怒声を上げるヴィータに向かって妖魔族最上級種、ハロウィンがナイフを突き出す。

ヴィータの得物、グラーフアイゼンの形状はハンマー。破壊力は抜群だが、どうしても大振りになるため、ハロウィンのような超近距離型が相手だと分が悪い。

とは言え、それだけで劣勢に立たされるほど、ヴィータは未熟ではない。むしろ厄介なのは――

「オン！」

「チッ！」

飛来した氷柱^{つらら}を舌打ちしながら障壁を張って防ぐ。この間もハロウィンの猛攻は止まらない。

「オン！」

続いて地面から噴き出す火柱を飛ぶことでかわすが、

「Jack Pot！」

「ぐうっ！」

より高く跳んだハロウィンが体を回転させながらナイフを突き出し、とっさに張られた障壁を突き破ってヴィータの肩を刺した。

（コイツら……、いい連携しやがる……）

彼女を劣勢に立たせているのはハロウィンと二体の中身の無い薄紫のマント——邪霊族ランク5、デスによる波状攻撃。それぞれの弱点を補い合い、遠近両方で立ち回れるヴィータを追い込んでいる。

（敵ながら天晴れてヤツだな。でもよ……！）

「フウ……」

「本っ当にいちいちムカつく挙動だな！ このカボチャ野郎！」

くわえていたタバコを指で挟み、紫煙を吐き出すハロウィンに怒鳴るヴィータ。

「……………」

そんな彼女に向かって、やれやれと言わんばかりに肩をすくめるハロウィン。

（コイツ、ぶん殴りてえ……！）

ヴィータの苛立ちの九割はコイツが原因である。

〈side ザファイラ〉

「ておあああああああ！」

体長7メートル程の黄色い骨だけの竜——死竜族最上級種、冥竜を殴りつけるザファイラ。

「グルルルル……」

「ぬう……」

殴られた冥竜はダメージを受けた様子も無く唸り声を上げ、殴ったザフィーラは顔をしかめて拳をさすっている。

（何という硬さだ……。下手に殴り続ければこちらの拳が潰れかねん……）

死竜族は妖花族とは逆に凄まじい物理防御力と、物理攻撃によるダメージを半減させる固有能力『イモータルボディ』を持つ。おまけに柔らかい部分など無い骨密度100%の体なので、弱点となる部位も存在しない。

（この手の相手は魔法に弱いものだが……）

ザフィーラの読みは当たっており、死竜族は魔法攻撃に非常に弱い。しかし彼はそういった魔法を持っていないのだ。

「「ギギギギッ！」」

「むっ！」

冥竜に攻め倦ねているザフィーラに、白く細長い体に薄紫のマントを羽織った二体の悪魔——妖霊族ランク5、フィンドがギガウインドを放った。障壁を張って防ぐが、

「ゴオオオオオ！」

冥竜が撃った髑髏型の魔力弾——追尾型怨念により、障壁にヒビが

入り出した。

「くっ……！ 鋼のくびき！」

二体のフィードを迎撃しようとするも、ひらりひらりと避けられる。

（せめて一つ、遠距離攻撃の出来る魔法が必要か……）

〈side ティアナ〉

ティアナが相手取るのは球体を押し潰したような体にその半分はありそうな口、細長い腕と翼を持つ悪魔——飛妖族最上級種デーモンと、二メートルはある巨大な蛾——魔翔族ランク5、ブリンガーが二体。

「クロスファイヤー、シュート！」

「ギルルルル！」

幻術による偽物が混ざった魔力弾を、デーモンが雷で相殺する。偽物を貫いた雷は地面にぶつかり砂煙を上げた。

（今！）

砂煙が晴れると、そこには何人ものティアナが。

「ギルル？」

デーモンは突然増えたティアナに戸惑い、視線をあちこちにさ迷わせている。

「ガギャギャ！」

「ガギャギャギャ！」

しかし二体のブリンガーは、迷わず本物のティアナに向かっていった。

「もうバレた！？」

絶対にバレないなどとは思っていなかったが、攻撃したわけでもないのにあまりにも早い。

《どうやらあの二体は、超音波でマスターの本体を見破ったようです》

「そういうこと……！」

ティアナの幻術は目で見破るのは不可能に近いほど高度なものだが実体は無く、故に音は反射しない。文字通り音速で動く超音波を出せるのならば、ブリンガー達が即座に本物に気付いたのも納得がいく。

「ギルルルルル！」

元来協調性の低いデーモンが痙攣を起こし、雷をメチャクチャに乱射し始めた。それをかわすためにブリンガー達の軌道も複雑になる。

「これは……、射撃の腕の見せどころね……！」

〈side スバル〉

「ニャン！」

「はあっ！」

スバルと女将の同族、バステトが乱打戦を繰り広げていた。

爪による攻撃を行う邪猫族とは異なり、猫娘族の戦闘方法は格闘術。猫のしなやかな手足を使い、強かにスバルを打ち据える。

（重さはそうでもないけど、痛みの感じが打撃と違う……。妙に体に残る……）

バステトの鞭のような攻撃を、障壁を交えて凌いでいたスバルだが、

「え……？」

右足首に非常にイヤな感触を感じて動きを止めてしまい、

「ニャアッ！」

「うっ！」

バステトに蹴り飛ばされた。

「あ痛たた……。何さっきの感しょ、く……」

スバルの右足首にはやや大きな手がくっついている。恐る恐る先程自分がいた場所を見ると、

「「オオオオオオオオオ……」」

地面から体がドロドロに腐敗している悪魔——屍族ランク5、ワイ

トが這い出してきていた。

「イヤアアアアアア！」

絶叫して右足首に付いた手を振り落とし、飛びかかってきたバステトを殴り飛ばしてウインググロードで上空に逃げるスバル。バステトも飛び乗ってきたがそんなことは些事だ。

さすがに腐った体では飛び乗ることは出来ないようで、ワイト達はただスバルを見上げている。

「良かった……。でもまだイヤな予感が……」

「「オアアアアア！」」

予感的中。ワイト達はスバルに向かって、腐敗臭の漂う液体を吐きかけてきた。

「ギャアアアアアアア！」

乙女らしからぬ悲鳴を上げて、スバルは過去最高の動きで逃げ回るのがあった。

〈side エリオ〉

「クオオオオオオオオン！」

遠吠えが響き渡り、直後に刀のような一本角を生やした狼——幻獣族ランク5、オルトロスがエリオに襲いかかった。

速いが見切れないほどではないその攻撃を、エリオは引き付けてか

わす。

「グオオオン！」

「ていっ！ はあっ！」

続けてもう一体のオルトロスが振るう角をストラーダで捌き、

「……今だ！」

「「ガウッ!?」」

ソニックムーヴでオルトロス達の脇を駆け抜けた。狙いは離れた所にいる巨大なニワトリ——怪鳥族最上級種、アブラクサス。

一気に背後に回って突きを繰り出そうとした時、

（力が、抜ける……!?!）

突然の脱力感がエリオを襲った。

「コケーッコッコッコッ！」

「くっ！ ううっ！」

アブラクサスの嘴くちばしによる突きをどうにか捌くが、体にうまく力が入らず体勢が崩れそうになってしまう。

エリオを苛む脱力感の原因、それが怪鳥族の固有能力『呪いのオーラ』。自身の前後左右、嘴が届く距離までという狭い範囲だが、その効果は相手の能力を20%低下させるという恐ろしいもの。しかも複数集まるとその効果は最大50%まで重複する。一体しかないなかつたのは僥倖だと言えよう。

「コッ！」

「しまった……！」

アブラクサスの嘴がストラダを挟み込んだ。その力は強く、エリオは能力が低下していることもあって引き剥がすことができない。

「クオオオオオン！」

そこに再び遠吠えが響き渡り、オルトロス達が角から放った真空の刃——カマイタチが襲いかかった。

＜side キャロ＞

竜の巫女、キャロとその竜フリードが相手取るのは奇しくも全て竜族。

「ガアッ！」

「フリード！」

「グオオオウ！」

翼が背中にあり、前脚を持つこと以外はフリードに近い姿の紫色の竜——邪竜族ランク5、ティアマットが吐き出す極寒の吐息——クルブレスをブラストフレアで相殺し、

「ガアアアアア！」

「グルウ！」

「ゴッ……！？」

牙を剥いて飛びかかってきたもう一体のティアマットを尻尾で弾き

飛ばす。キャロの強化魔法の効果もあって、フリードは二体のティアマットと互角以上に渡り合っている。

「……………」

そして、今までフリードの力を見定めるように視線だけを送り、微動だにしなかった『王』が動き出した。

「！？ フリード！」

「グオン！」

キャロの指示でフリードが斜め上へ飛ぶと、直後に黒い拳が落ちてきた。

その拳の主は、フリードの倍はある巨大な黒い竜。翼の無いその体のつくりは人間のそれに近く、後頭部と両肘から黒い炎を噴き出している。

『種族としては最強』『挑むこと自体が無謀』と言われる竜王族、その最上級種、ヒノカグツチ。

「ゴオオオオオオオオ！」

ヒノカグツチの雄叫びに、ティアマット達が萎縮する。フリードもまた萎縮しそうになるが、負けじと叫び返す。目の前の竜王さえも軽くねじ伏せるほどの力を持つ『魔王』を、彼は知っているから。

「行くよ！ フリード！」

「グオオオオオオオオ！」

「ゴオオオオオオオオ！」

竜の巫女と若い竜が、黒い竜王に挑みかかる。

時は流れ、夜。女湯にて。

「あゝ、疲れた……」

赤黒くネットリした湯で満たされた露天風呂――血みどろ湯に入っている女性陣。

アサギは慣れているが、他のメンバーは大分疲労の色が濃い。特にスバルが。

「ああ……、癒される……」

今回、ある意味一番地獄を味わったであろう彼女は、ネコサーベルを抱きかかえてその肉球を揉んでいる。

「ま、今日の訓練で各々思うところはあったんちゃう？」

「そうだね……」

はやての言葉になのはが答え、他のメンバーも頷いた。

「ここにはあと六日滞在するから、その間に色々試してみれば？
属性を付加させる、とかさ」

魔界式の魔法、つまりは霊素を用いた魔法を取り入れればそれだけで魔力の節約となる。彼女達が得るものは大きいだろう。

合宿終了まで、あと六日！

第31話：突撃！ となりの訓練場！（後書き）

次回は留守番組の話です。
その後若干時間が飛びます。

第32話..その頃の待機組(前書き)

前回の反動、というわけでもありませんが、今回はめっさ短いです。

第32話..その頃の待機組

機動六課、訓練場。

待機組もそれぞれ訓練を行っていた。

「ギガウインド！」

「く、うつ……！」

フロンが放ったギガウインドを障壁で受け止めるシャル。補助魔法『マジックシールド』によって魔法に対する耐久力が倍になった障壁は、それでも真空の刃を伴う暴風を受けて軋み、ヒビが入り始めている。

どうにか耐えきりギガウインドが霧散した時、

「キムチー！」

謎の掛け声と共にフロンが矢を乱射し始めた。それをシャルは避け、あるいは小さな障壁で弾いて逸らす。

回復役が回復以外で魔力を使い切ってしまったては意味が無い。出来るだけ魔力の消費を抑えて相手の攻撃を切り抜ける、というのが今回のスタンス。

（フロンちゃん……、攻撃もここまで出来るのね……）

普段の穏やかな姿からは想像もつかないほど、フロンの攻撃は激烈。心意気だけではなく、実力も兼ね備えているからこそその天使長なの

だ。

それはそれとして、とシャルルは思う。

（魔界や天界では食べ物の名前を掛け声にするのが流行ってるのかしら？）

フロンとシャルルから少し離れた場所、その上空。

「遠距離型相手は苦手ニヤんだけどニヤー……」

「だからこそその訓練じゃろう」

空中戦を繰り返すロザリンドとマーガリン。とは言えロザリンドが若干優勢か。

魔力銃弾は簡単に弾けるのだが、時折ギガクラス魔法が飛んでくるので、それを回避している間に距離を取られてしまうのだ。

「今度はギガファイ……ア……」

マーガリンの正面からギガファイアが一発、その周囲に八発、合計九発のギガファイアが迫る。

「ってオiiiiiiiiiiiiiiii!？」

思わずマーガリンはCV…杉田智和な叫びを上げた。

（これは……、結構楽しいかもしれん。ヴェルダインに戻ったらテイク相手にやってみようかのう？）

何気にヒドいことを考えているロザリンドであった。

一方、地上では、

「はあっ！」

「ぬんっ！」

アデルとジェムが拳と拳、蹴りと蹴りをぶつけ合っている。

（訓練を怠ったことはねえが、やっぱ勘が鈍ってやがるな……）

ジェムはもう随分長い間実戦を経験していない。ここ十年での実戦経験と言え、以前のエトナ戦くらいか。それも実力差が圧倒的だったので、勘を取り戻すには程遠いものだった。

（しかしまあ、こうやって若えヤツと打ち合っていると、三十年前を思い出すな……）

三十年前、魔界で料理と格闘の修行をしていた時に一人の漢^{おとこ}と出会ったことを、ジェムは思い返す。

（お前さんは元気でやってんのか？　なあ、チャンプル……）

第33話..合宿終了! ……展開が早い? こまけえこたぁいいんだよ! (前妻

今回、『デイスガイア』に登場したあの脇役がさり気なく出演します。皆さん、覚えているでしょうか? あの二人です。

第33話…合宿終了! ……展開が早い? こまけえこたあいいんだよ!

一気に時は流れ、八日目の朝。

「耐え抜いた……。さすがに十体一はキツかった……」

ある程度戦えるようになると思敵の数が増え出し、最終的には十体。まさに地獄である。

「皆様ご無事のように何より——お一人無事ではないようですが」

女将の言うとおり、各々程度の差はあれ正気を保っているのだが、スバルだけはまるでゾンビのような目をしている。

彼女の相手はバステトとワイトだったのだが、

「何で、ゾンビばかり増えるの……」

何故かワイトばかりが増えたのだ。酷い時にはワイト×10ということもあった。心の救いであるネコサーベルがいなければ確実に精神崩壊していただろう。

「……それじゃ、気分転換に観光でもしうか」

「でしたら、腕試しも兼ねてここなんてどうでしょうか?」

女将がアサギに差し出したのは一枚のチラシ。

「……武道大会?」

「ええ。タッグマッチなので全員参加とはいきませんが」

「へえ、優勝賞金200万ヘルだって。誰が出る？」

一同を見渡すアサギ。

「アタシはパスだ。正直しばらく戦闘から離れてえ」

「私もだ」

ヴィータとザフィーラは辞退、FW陣も同じ様子だ。

「わたしは出てみたい、かな」

ここでののが立候補。

「あと一人はどうする？ 誰も出ないのなら私が――」

シグナムが言いかけた時、

「私私私私私いいいいいいいい！」

フェイトが物凄い勢いで立候補した。

「どうしたテストロッサ！？ 合宿が厳しすぎて脳に異常をきたしたか！？」

「正常だよ！」

ツツコミを入れ、フェイトはどんよりとした空気を醸し出し始める。

「シグナムはいいよ……。アサギにゼタさんにアデル、三人と模擬戦してるから、白星は無くても見せ場はあるんだから……。それにひきかえ私は、膝蹴り一発で気絶させられたり、中ボス呼ばわりさ

れたり……」

心なしか彼女の体からどす黒いオーラが吹き出しているように見える。今なら暗黒魔法も使えるのではないか。

「わかった。そういうことなら譲ろう。（このまま放っておいたら暴走しかねんしな……）」

そんなわけで出場者はなのはとフェイトに決定。

そして一同は武道大会が開かれるコロシウムに向かう。果たして無事でいられるのだろうか。

……フェイト達のことではない。対戦相手の悪魔達のことである。

場面は変わりコロシウム。出場手続きを済ませた二人は選手控え室に向かう。

それからしばらくして、試合が始まった。

第1回戦。

「プラズマスマッシュャー！」

「「ぎゃあああああああ！」」

第2回戦。

「ディバインバスター・エクステンション！」

「ぐばあああああああ！」

「おそるべし！ おそるべしいい！」

第3回戦。

「サンダーブレイド！」

「あ、悪魔より悪魔じみてるぞ！」

「神よ、今お側に……」

そして、第4回戦。

「勝者、なのは&フェイト！」

審判の宣言が響き渡った。互いに手を打ち合わせる二人。

「ようやく……、ようやく出番が巡って来たと思ったら、肝心の戦闘シーンは省略だと……！？ 何という仕打ちだ……！」

一方、対戦相手だったヴァンパイア族の男は両手と両膝を付いて号泣し、

「まあ、ほんの一瞬でも出番があっただけ良しとするゼニよ……」

仰向けに倒れた魔界貴族の男は前向きなのか後ろ向きなのか分からないことを言っていた。

ここまでの対戦相手だった悪魔達、そして観客の悪魔達は後にこう語った。

『あの人間達は、まるで魔王のようだった』と。

昼食休憩を挟んで、午後。

「さあ大会もいよいよ大詰め！ 準決勝の始まりだ！ 司会進行は引き続きこのオレ、アクターレでお送りするぞ！」

この男、アクターレ——『あの悪魔は今』でその赤貧洗うがごとしな生活ぶりが取り上げられるほどに落ちぶれていたが、四年前に不死鳥（あるいはゾンビ）のごとく復活した大人気ダークヒーロー。アデルとも面識があり、本人曰わく『永遠のライバル』、アデル曰わく『ただのアホ、でも根はいいヤツ』とのこと。

「何と準決勝は両チームとも人間だ！」

アクターレから見て右側の入場口にスポットライトが当たる。

「その情け容赦無い攻撃は、魔王もビビる破壊力！ なのは&フェイトオオオオオ！」

観客の歓声の中、アクターレの紹介に苦笑しながら二人が入場した。

「対するは……、実際に見てもらったほうが早いだろう。 ミュージック、スタート！」

壮大な音楽が流れ始め、

「邪悪な闇が迫る時！」

そんな言葉と共に、スポットライトが照らす場所に赤い服とマスクを着けた男が飛んできた。

「呼ばれてないのに現れる！」

続いて二人目、格好は同じだが色は青い。

「使命に萌える、七つの光が！」

何故か三人目、黄色。

「勇気と希望で世界を救う！」

四人目、緑。

「アタシ達、五人揃って——」

五人目、紫。女性のような喋り方だが、その声はムリヤリ高い声を出している男性のものだ。

謎の五人組は左腕を右に、右腕を真上に突き出すポーズを取り、

「「「虹色戦隊！ ニジレンジャー！」」「」「」」

背後にカラフルな爆発を起こしながら、決めゼリフを叫んだ。

第34話：燃えてヒーロー！（前書き）

現在、デイスガイア2PORTABLEにハマっています。アクターレのアホさと兄貴としての顔のギャップがステキ！

第34話..燃えてヒーロー!

(ええ〜……)

反応に困る、というのが二人の正直な感想だった。色々ツツコミどころがありすぎるのだ、この五人組は。

「……タッグマッチなのに何で五人も？」

「ああ、君達と戦うのはニジレッドとニジブルーの二人。後の三人は入場パフォーマンスのためのゲストだ」

なのはの疑問にアクターレが答えている間に、ニジイエロー、ニジグリーン、ニジパープルの三人は普通に歩いて退場していった。

「あの〜、ニジレンジャーなのにどうして五人なんですか？」

「残りの二人は都合が悪くてな」

フェイトの質問にさらりと答えるニジレッド。

「でもさっき紫色の人が『五人そろって』って――」

「だ、誰にでも間違いはある!」

なのはの指摘にニジブルーが言い訳じみた反論をするが、明らかに声が上擦っている。

「何やら疑っているようだが、本当に七人いるんだぞ! ただ、ニジオレンジは祖国に帰っていて、ニジグンジョウは音信不通なだけだ!」

(（それって逃げられたんじゃない……))

さすがにそれを口にするのは憚られた。

「それって逃げられたんじゃないの？」

（言っちゃった！）

アクターレ自重しろ。

肩を震わせ、マスクの隙間から雫を滴らせているニジレンジャーの二人をよそに、アクターレは進行を続ける。

「さあ！ それでは準決勝、なのは&フェイトVS. 涙の数だけ強くなったかもしれないニジレッド&ニジブルー、試合開始！」

背中からムダに美しい虹色の翼を生やし、飛行するニジレッドとニジブルー。伊達に準決勝まで勝ち抜いてきたわけではないようで、その動きは歴戦の戦士のもの。

しかしそれでも、なのはとフェイトの二人の前では劣勢だった。

「ファイア！」

「スターバレット！」

ニジレッドが一度に撃てるファイアは最大九発。対してなのはのスターバレット――星属性のアクセルバレットは五十発以上。数も威力もケタ違いだ。

手にした赤色の剣――レッドソードでスターバレットを斬り裂き、捌ききれない分を身に浴びながらなのはに接近、斬りかかるが、

「くうっ！ 何て堅さだ！」

彼女の張る障壁を貫くことが出来ない。

一方、ニジブルー。

「ぬう……、補えきれん……！」

ニジブルーの速さは相当なものだが、フェイトには適わない。手にした青い槍――ブルーランスでバルディッシュを捌き突きを繰り出すがかわされ、

「はあっ！」

「ぐうっ！」

逆に斬撃を受ける。直撃こそ避けているものの、徐々にダメージを蓄積していくニジブルー。

「強いな、彼女達は……」

「ああ。本当に同じ人間なのか疑わしいくらいだ」

ニジレッドとニジブルーは背中合わせに話し合う。

「どうにも勝ち目は無さそうだが、どうする？ 降参するか、ブルー？」

ニジレッドがニジブルーにした提案は、なのは達にとっても望ましいものだった。

彼ら自身が回避に重点を置いていることもあって大技は避けられ、

結果としてなぶるような形になってしまい、筋違いとわかっているがなのは達は罪悪感を抱いてしまっているのだ。

「フ……、バカ言え……」

だが、ニジブルーの返答は戦闘続行を表すものだった。

「……君達には、愚かしいと思えるかもしれないな」

驚きが表情に出ていたのか、ニジブルーがなのは達に語りかける。

「確かに勝ち目は無いに等しいが、ここで退いたらオレ達は『自己より弱いヤツとしか戦わない男』になってしまう」

「勝ち目が無いなら逃げるのではなく、打ちのめされてまた立ち上がる。それが――」

「『オレ達の『正義』だ!』」

ニジレッドから赤い、ニジブルーから青いオーラが滲み出た。

「『いくぞおおおおおおお!』」

ニジレッドがなのはにレッドソードを突き出し、ニジブルーがフェイトに高速でブルーランスを繰り出す。

そして、

「レエエエエツドジャステイイイイス!」

「ブルウウウウマツハアアアアアアア!」

レッドソードが障壁を突き破ってなのはの頬を掠め、ブルーランスがフェイトの脇腹を掠めた。

「ようやく……、一撃……か……」

「フ……上……出来だ……」

その言葉を最後に、二人は意識を手放した。翼を失い落下する二人を、なのはとフェイトが支え地面に降ろす。

「勝者、なのは&フェイト!　だが負けたとは言え、ニジレンジャ
ーの二人が見せた根性もまた価値あるものだ!　つーかあの泥臭さ、
他人とは思えねえ!　オーイオイオイオイ!」

勝者宣言もそこそこに、号泣し出すアクターレ。

「何だか、昔を思い出しちゃった」

「そうだね」

彼女達もかつては幾度となく、自分達より強いものと戦っていた。ニジレッドとニジブルーの奮闘は、それを思い出させてくれた。

しばしの休憩を挟み、決勝戦。

「いよいよ決勝！ 果たして優勝するのはどのチームか！ それで
は、選手入場だ！」

左右の入場口にスポットライトが当たりまづはなのは達が入場。

「コイツらホントに人間か!？」 その強さ、そしてその美しさは、戦女神と呼ぶにふさわしい! なのは&フェイトオオオオオオオオオ

「！」

観客の歓声が轟く。

「その戦いぶりはまさに鎧袖一触！ 底知れぬ力は武神のごとし！」

反対側の入場口から現れたのは、大きな黒い翼と紫色の長髪を持つ、容姿端麗な男悪魔。そして――

「――！？」

なのはとフェイトの目が驚愕に見開かれる。

「……これはまた、随分懐かしいのが出てきたね」

観客席のアサギがポツリと呟いた。

そこにいるのは、第二次アサギウォーズでアサギが最初に戦い、なのは達が鍛え直すきっかけとなった男。

「バイアス&浅葱之丈おおおおお！」

第35話：因縁の再会！ ……これってワタクシ蚊帳の外じゃありません？

戦闘前の掛け合いだけなので、今回は短いです。

第35話：因縁の再会！ ……これってワタクシ蚊帳の外じゃありません？

「乙夜……、浅葱之丈……！」

かつて自分を文字通り一蹴した男の名を、フェイトは呟いた。

「おや？ 知り合いですか？」

「……一応存在は知っている、という程度だ。事実つい先程まで名も知らなんだし、そもそも会ったことさえ忘れていた」

バイアスの問いに素っ気なく答える浅葱之丈。

「そうですか。……しかしワタクシには、あのマドモアゼル達がその程度の相手とは到底思えないのですが」

バイアスの再びの問い、というより独り言に、

「それもまた、間違いではあるまい」

浅葱之丈は魔力刀を抜きながら答えた。

（前とは刀の属性が違う……！）

以前は普通の刀と変わらない外見だった魔力刀は、今は紫電を纏う光の刃になっている。

「おおっとお！ どうやらなのは&フェイトと浅葱之丈の間には、何やら因縁があるようだ！ 決勝戦での再会、これは燃える展開だあ！」

アクターレが興奮気味に声を張り上げ、

「しかしそう考えるとバイアスはいらない子なんじゃないか？」

その後、小声でボソリと呟いた。

「お黙りなさい！ 聞こえてますよ！？」

小声とはいえマイクを通した呟きはバッチリ聞こえていたようで、バイアスがアクターレを怒鳴りつける。

「……なのは」

「うん」

多くを語らずとも、なのはにはフェイトの言わんとしていることが分かった。

「バイアス、どうやらあの金髪の女は拙者をご所望のようだ」

「そうですね」

一方、浅葱之丈とバイアスもそれとなく悟る。

「そちらの栗色の髪のマドモアゼル、なのはさんとおっしゃいましたか。貴女はよろしいのですか？」

「構いません。フェイトちゃんはきつと、わたしよりも悔しい思いをしたはずですから……。それに、あなたに勝つことでも、わたしはあの時とは違うってことが証明出来ます！」

それを聞いて、バイアスは微笑んだ。

「良い目をしていますね。その髪の色と相まって、ワタクシの愛しい人を思い出しますよ。……そう、あれは今から千四百年以上前のこと。ワタクシと彼女は――」

「さあさあさあ！ 空気を読まずに進行するぞ！」

バイアスの独白を、アクターレの声が掻き消す。

「ちよっ……！ そこは静かに耳を傾けるべきでしょう！？」

「ノロケは余所でやってくれ。正直オレのダチだけで間に合ってる」

バイアスの抗議を軽く流すアクターレ。

「それでは決勝戦！なのは&フェイトVS. バイアス&浅葱之丈、試合開始だあああああああ！」

第35話：因縁の再会！ ……これってワタクシ蚊帳の外じゃありません？

次回、なのはVS中ボス！

第36話：星光と美の戦舞（前書き）

この作品では中ボスは一貫して『バイアス』として登場しますが、あの名ゼリフは出ます。だからどうというわけではありませんが…。

第36話..星光と美の戦舞

双剣状態のバルディッシュを構え、フェイトは浅葱之丈と対峙している。

「……意外だな」

不意に浅葱之丈が口を開いた。

「怨敵を前にして随分と冷静ではないか。三月前みつきのように激情に駆られるものと思っていたが」

「……自分でも不思議だけど、今はあなたに対する怒りも憎しみも無いから」

約3ヶ月前、浅葱之丈に関する騒動が収まった後フェイトの胸中にあったのは、かつてシグナム達と敵対していた時と同じもの。

『勝ちたい』という思い。

「だから、今日ここで晴らすのは、恨みじゃなくて雪辱」

あの時自分が気絶している間に、何を言われていたかは伝え聞いている。

「『戦い方もロクに知らない小娘』はもういないってことを、証明する！」

「左様か……」

ほんの僅かに浅葱之丈が口の端を吊り上げて笑い、

「中ボス止まりでないことを祈るぞ！」

すぐに表情を引き締め、フェイトに向かって駆け出した。

「ちゅ、ちゅ、中ボスですとおおおお！？」

なのはと相対し、牽制し合っていたバイアスが、突然明後日の方向を見て絶叫した。

「な、何ですかいきなり！？」

「これは失礼。何というか、古傷を抉られたような気がしたもので……」

なのはの方へ向き直り優雅に一礼するバイアス。絶叫から一礼までの間に一瞬たりとも隙を見せていないから凄い。

「では、勝負を再開致しましょう！ ビューティー連弾！」

「スターバレット！」

濃紫色の魔力弾と紫電を纏った桜色の弾丸がぶつかり合う。

百発近いビューティー連弾を全て相殺することは出来ず、残りを障壁で防ぐのは。そこに、

「螺旋ビューティー脚！」

翼で体を覆い、独楽こまのように回転しながらバイアスが脚を突き出した。

「はっ！」

それをなのはは障壁ごと体を横に振ることで逸らす。

「良い対応です！ ビューティー波！」

「ディバインバスター！」

濃紫色と桜色の光線がぶつかり合い、爆発。

「強く、そして美しい……。貴女は実に素晴らしいですよ、マドモアゼル」

「ありがとうございます……」

一見互角の攻防のようだが、その実なのはの方が不利だ。

魔力の総量はバイアスの方がずっと上、このまま打ち合えばなのはの魔力が先に枯渇する。

ならば大技で一気に決めるしかないが、バイアスは機敏に動き回るので、砲撃はおろかバインドを当てることも難しい。

バイアスに勝つには、彼が大技を放った際にその技ごと貫くしかない。

「このまま魔力切れを待つ、というのも一つの戦略ではありますが、それは美しくありませんねえ……」

ビューティー連弾を撃ちながら独りごちるバイアス。

「……では、こうしましょう！ 美の四重奏、ビューティーカルテ

ット！」

右手を掲げ指を鳴らすと、何とバイアスが四人に増えた。

「えっ!?!」

「「「さあ、行きますよ!」「」」」

驚くなのはの周りを四人のバイアスが駆け回り、時折拳や蹴りを繰り出す。

（全部、実体がある……!）

幻影ではなく分身。攻撃を当てれば真偽は分かるのだろうが、猛攻にさらされている中ではそれもままならない。

「「「………」」」」

突然、四人のバイアスが動きを止めた。同時に、なのはの足下に魔法陣——四人のバイアスが駆けた軌跡通りの形である——が現れる。

「しまっ——!」

「「「激!」「」」」

魔法陣の上空に四メートル程の三日月型の岩石が現れ、

「「「ビューティー弾!」「」」」

なのは目掛けて落下した。

「はあっ……はっ……はっ……」

全力で張った障壁は容易く粉碎され、バリアジャケットもボロボロだが、なのはは立っていた。

「まさか持ちこたえられるとは思いませんでしたよ。少々貴女を見くびっていたかもしれませんね」

ですが、と一人に戻ったバイアスは続ける。

「もう限界が近いはずです。それでもまだ続けますか？」

「はあ……はあ……」

なのはは答えられる状態ではないが、レイジングハートを構えた。それが答えだった。

「そうですか……。それでは貴女の心意気に敬意を表して、ワタクシの最大最強の技でファイナーレを飾りましょう！」

そう言って、バイアスは再び宙に舞い上がり、円を描くように七つの魔法陣を展開した。

それらは一本の太い線で繋がり一つの巨大な魔法陣となり、その中心部で濃紫色の魔力が渦巻き始める。

（どうしよう……）

自身も魔力を溜めながら、なのはは考えていた。先程の激ビューティー弾の魔力が周囲に残留しているので、魔力は十分に足りる。しかしそれでもバイアスの最強の技に対抗出来るか分からない。

これが最初で最後のチャンス、『相殺』ではダメなのだ。合宿で力

ートリッジを使い切っている以上、威力の増加は見込めない。

魔力の総量を変えずに、貫通力を高める方法が必要――

（……そうだ！）

「さあ、参りますよ！」

閃くと同時に魔力が溜まり切った。バイアスも技を完成させている。

「極！ ビューティー弾！」

「スターライト……、ツイスター！」

巨大な濃紫色の魔力弾とぶつかり合う紫電を纏った桜色の砲撃。その先端は円錐形になっており、紫電の動きから回転していることが分かる。

（なるほど……、考えましたね……）

面と点ならば後者の方が貫通力は高い。回転が加わればなおさらだ。

（これは、何と美しい……！）

削られ舞い散る濃紫色の魔力は星屑のごとく、突き進む桜色の砲撃は流星のごとし。その光景に、バイアスは心を奪われた。

（この美しさに包まれて散るというのなら――）

そして、耐久力が限界に達した極ビューティー弾が碎け散り、

（ワタクシ、本望ですよ……！）

スターライトツイスターが、バイアスを飲み込んだ。

第37話……負けない！ B Yフエイト（前書き）

難産でした……。

ちなみに、時系列的には前話と今話は同時進行しています。タツグマ
ツチですから。

第37話……負けない！ By フェイト

なのはとバイアスが激戦を繰り広げている頃、

「はあっ！」

「せいっ！」

フェイトと浅葱之丈もまた、激しくぶつかり合っていた。

（速い……！）

フェイトの速さに内心舌を巻く浅葱之丈。

限界まで防御を捨て速度を上げた真ソニックフォームは、魔界基準でもかなりの速さを誇る。

（そして拙者の攻撃を的確に見切っている。以前とはまるで別人だ）
三ヶ月前ならば当たっていたであろう攻撃も、今は受け流されている。

（破壊力ではなく手数ของ多さを主たる武器とする高速機動型、ならば……）

ぐっ、と浅葱之丈の刀を握る手に力が籠もった。

（拙者の最速最多の剣技、如何に防ぐ？）

放つは五度の斬撃を高速で繰り出す魔界剣技の奥義、秘剣・闇夜斬

り。刀は二本、手数も倍。

（いざ、参る！）

一方、フェイトも考えを巡らせていた。

（大丈夫、攻撃は見切れてる）

実際はほとんど見えていないので、『見切る』という表現は正確ではないだろう。

視界が極端に狭まる高速移動中でも通用する危険察知能力、というより本能——皮膚が粟立つような感覚——に、フェイトは目覚めていた。

（でも、このままじゃ勝てない……）

フェイトの高速移動が魔法によるものである以上、使い続ければ魔力は減る。純粹な打ち合いではフェイトに勝ち目は無い。

（まだ理屈だけで実践はしてないけど、やるしかない！）

決意を固める。直後、闇夜斬りが襲いかかった。

「な……に……！？」

技を繰り出した体制のまま、浅葱之丈は驚愕の声を漏らした。が、すぐに正気に返り、フェイトから距離を取る。こちらの様子を窺っているのか、それとも何か思うところでもあるのか、距離を詰めてくる様子は無い。

（闇夜斬りを防がれることは想定していたが、よもやその上斬りつけられるとは思わなんだ……）

傷は無いが、胸に斜め十字を描くように走る痛みが証明している。フェイトに斬られたということ。

（油断したつもりは無いが、実力を見誤ったか……）

フェイトを見据えながら、浅葱之丈は思考を巡らせる。

（あの様子からして、二度目はあるまい。となれば、奴が次に仕掛けるは遠距離攻撃か……）

フェイトもまた、痛手を被っていた。

（改良の余地あり、かな……）

原因はソニックムーヴの応用で腕を高速で動かす、闇夜斬りを防いだ上に浅葱之丈に二撃入れるという戦果を上げたあの技。

強化魔法も併用してはいたが、攻撃同士がぶつかり合った時の衝撃が予想以上に大きかった。普通に戦う分には問題無いが、もう一度同じことをすれば腕が潰れかねない。

（一気に決めるしかない！）

「フォトンランサー・ファランクスシフト！」

フェイトの周囲に無数の魔力弾が浮かび上がり、浅葱之丈に殺到する。

「おおおおおおお！」

魔力刀を伸ばして突き、なぎ払い、それを破壊する浅葱之丈。

続いてフェイトの前に魔力弾が集まり合わさり槍となり、浅葱之丈の二本の魔力刀が一つの巨大な刃となった。

「スパークエンド！」

「大次元斬！」

光の槍と光の刃が激突。僅かな拮抗の後、光の槍が両断された。しかしフェイトの姿は無い。

（後ろかつ！）

大次元斬を中断し、浅葱之丈が振り向くと、そこにはバルディッシュを構え疾走するフェイトの姿が。

「「はあああああああああ！」」

すれ違うように互いを斬りつける二人。

そして、

「うっ……！」

フェイトの腹から血が噴き出し、

「か……はあ……！」

浅葱之丈が苦悶の声を漏らして膝を付いた。

（お願いだから、もう立たないで……）

今し方傷を負ったこともあって、フェイトはもう体力・魔力共に限界に近い。

「ほんの三月前に小娘と嘲った者に、ここまでやられるとは……、まこと情けない話よな……」

（そんな……）

しかし彼女の願いは叶わず浅葱之丈は立ち上がり、

「拙者の、負けだ」

刀を鞘に収めた。

「え……？」

あまりに予想外の言葉に呆氣に取られるフェイト。

「まだ戦えるんじゃない……」

「ただ立っただけだ。戦う力は残っておらぬ。仮に残っていたとしても、そなたは膝を付かず拙者は膝を付いた、その時点で拙者の負けだ」

力が残っていないということの真偽はわからないが、彼なりに思うところがあるらしい。

「……向こうも終わったようだな」

そう言って浅葱之丈が二歩右へ動くと、

「あべっ！」

先程まで彼がいた場所に、どこことなくボロっちくなくなったバイアスが降ってきた。

「お前も負けたか、バイアス」

「優しすぎてつい手加減してしまうのがワタクシのウィークポイント、と言いたいところですが……。完敗ですよ、紛れなくね」

バイアスが負けを認め、

「き、決まったあああああああ！　ワンダフル！　エエエエエエクセレーエエエント！　激闘の果てに頂点の座を勝ち取ったのは、なのは&フェイトオオオオオオオオオオ！」

アクターレが勝者宣言をし、観客の歓声が轟いた。

「ゆ、優勝だよ！」

「やったねフェイトちゃん！」

喜びを分かち合うフェイトとなのはであった。

そして表彰式。

「優勝した二人には賞金200万ヘルに加え、副賞として金メダルを授与するぞ！　チラシには書いてなかったが気にするな！　テン

ションがもの凄いことになってるオレからのサービスだ！」

アクターレが二人の首にメダルをかける。ちなみにこのメダル、純金製である。

魔界では金は人間界ほど高価ではないので、直径十センチほどのこのメダルも一つ2万ヘルくらいだ。

「さあ！ もう一度優勝者達に盛大な拍手を！」

コロシウムに、万雷の拍手が鳴り響いた。

第38話：よい子のみんな～！

お姉さんといっしょに魔法のことを勉強しよう

さわやかさったん……P S 3用ソフト『魔界戦記デイスガイア3』の登場人物。教育番組のお姉さんのような喋り方をするが、本性は腹黒い。本作品での登場予定は無し。

今回の話に出てくる魔法の設定は、一部独自設定もありますが概ね公式設定です。

第38話：よい子のみんな〜！

お姉さんといっしょに魔法のことを勉強しよう

武道大会も終わり、日が傾き始めている。

「で、これからどうする？　まだ帰るには早い気もするけど」

「あ、じゃあどっか魔界のこと調べられる場所ないかな？」

はやてがアサギにそう尋ねた。そもそもの魔界に來た主たる理由は、戦力強化と情報収集なのだ。

「それなら一つ心当たりあるよ。こことは別の世界だけど」

そんなわけで一同は時空ゲートをくぐり、別世界へ。

〜〜ゼタ魔界〜〜

一同の前には巨大な城のような建物がそびえ立っている。

新魔蔵館——魔界に関する様々な情報が書物や標本、あるいは実物の展示という形で納められた巨大博物館。旧魔蔵館は図書館だったのだが、数十年前に訳あって半壊、その修復に際して博物館となった。

中に入って初めに目に付いたのは、百五十メートル程の戦艦の模型。

「これが全魔界最強の戦艦、無敵戦艦『良綱』。……模型だけだね」

実物は全長十五キロメートルという巨大戦艦。艦全体を覆う防御フィールドはオメガクラス程度の攻撃ではびくともせず、主砲から放

たれるプラズマレーザー『超時空銀河波動砲』は、『宇宙最強絶対無敵前代未聞の究極最大奥義』と称される程の破壊力を持つ。

……などと言われても今一つわからないが、要はゼタやラハールが全力を出してようやく撃破出来るか否か、という存在自体がほぼチートな戦艦である。これと比べれば（というか比べずとも魔界基準では）、二年前に大騒ぎになった『聖王のゆりかご』など粗大ゴミに等しい。

ちなみに、アサギがプリニー時代に特攻を仕掛けたのはこの量産型、『魔界戦艦良綱・強襲タイプ』。こちらはローゼンクイーン商会で随時注文を受け付けている（が、受注から納品までに300年程かかる）。

閑話休題。

「それじゃ、ひとまず解散ってことで」

アサギが言い、各々が思い思いの場所に歩いていった。

本棚から『魔法とは』というタイトルの本を取り出しページを捲るなのは。

『魔法とは、鍛えれば誰もが使える神秘の力であり、魔界、天界、人間界、宇宙など、あらゆる世界に存在するエネルギー「靈素」を源とする』

（改めて見ると、やっぱり管理世界の魔界とは根本的に違うんだね）

『魔法を使用する際の呪文は悪魔言語、天使言語などと世界によっ

て異なるが、使用する魔法が同じならばその効果は変わらない。というか、そもそも呪文自体が景気付けのかけ声のようなもので、別に唱える必要も無い』

(それでいいの!?)

極端な話、『ファイア』と言いながら『クール』を使うことも出来る。当然魔法以外の技もその名前を叫ぶ必要は無い。ぶっちゃけノリである。

『高度な魔法にはそれぞれ「魔法管理人」と呼ばれる元は天使や悪魔、人間だった者達が存在し、他者がその魔法を使用する際に暴発しないよう監視する役目を果たしている(それらの魔法使用時に浮かび上がる幻影は彼らのものである)。最も代表的なオメガ、テラクラス魔法の管理人は以下の通り。』

オメガファイア…炎の魔神リーブリック

テラファイア…大竜王マレンツィオ

オメガウインド…風の貴公子ルーシャン

テラウインド…風の巨人ドグマ

オメガクール…氷の魔剣士ジョシユア

テラクール…氷の女王おユキさん

オメガスター…大地の巨人ジグマ

テラスター…スペース悪魔ジェネシス

オメガヒール…先代大天使トコナツ

使用者が消費した魔力は彼ら管理人のものとなり後に換金されるため、うまくギブアンドテイクが成立している』

（大竜王マレンツィオ……）

その存在になのはは見えがある。何せゼタのテラファイアをまともに受けたのだから。

かなり手加減されていた上に何故か非殺傷だったので無傷で済んだが、あの時は冗談抜きに死ぬかと思った。

『魔法を主体とする者は杖、または魔導書を持つことが多い。どちらも集中力を高める効果を持ち、使い手の実力が上がるにつれて前者は魔法の飛距離が、後者はバリエーションが大きく増加する。

余談だが、魔導書は魔導師を取り込みその魔力と知識を己がものとすると言われている。実はこの本も……』

「えっ!？」

思わず本を取り落とした。衝撃でページが捲れる。

『な〜んてウ・ソ♪ 驚いた？ ねえ驚いた?』

「……………」

本を焼き捨てたい衝動に駆られるのはだった。

一方スバルは売店を覗いていた。

売り物は非常に魔界らしいものがそろっている。『イモリの黒焼き』に『乾燥ミミズ』、そして――

（これって意味あるのかな……）

彼女の目の前にある商品、その名も『ゾンビジャーキー』。

本来ジャーキー、つまり干し肉は肉そのものが腐りにくくなる意味合いもあるのだが、当然ゾンビ肉は既に腐っている。味に変化があるのかもしれないが、人間が食べられる代物ではない。

（……見なかったことにしよう）

合宿でのトラウマが蘇りそうになったので、スバルは別の商品を見ることがした。

「……これは!？」

しばらく見て歩きとある商品を見つけた時、スバルはそれに飛び付いた。

『ネコサーベルストラップ』――合宿の際スバルの心の支えとなったネコサーベルの姿がそこにあった。

（これは『買い』だっ!）

最終的に土産としてネコサーベルストラップを数本、魔界名菓『暗黒まんじゅう』と『黒い愛人』をそれぞれ五十箱づつ購入、その後館内を見学し他のメンバーと合流、新魔蔵館を出て一同はミッドチルダに戻った。

こうして、七泊八日の魔界合宿兼観光は幕を閉じた。

一同がミッドチルダに戻り、時空ゲートが閉じた直後、一人の少女が虚空から滲み出るようにして現れた。

「やっと見つけた……。うふふ、うふふふ、うふふふふふ……。」

ひとしきり笑い、空間に染み込むように姿を消す少女。

そして後には、静寂だけが残された。

第38話：よい子のみんな～！ お姉さんといっしょに魔法のことを勉強しよう

次回はあの方が再登場！

「楽しみにしているがいい！ ハーッハッハッハッハッ！」

第39話：彼の名を聞けば……（前書き）

大分遅くなりました。新生活に慣れなくてどうにも調子が乗らなくて……。

例によって例のごとく、二話に別れました。

第39話..彼の名を聞けば……

魔界から戻って数日後、今日も今日とて訓練に勤しむ一同。そこに……、

「……時空ゲート？」

時空ゲートが現れた。

「さて今度は誰が出るか……」

一応警戒はするものの殺気や敵意の類は感じないため、一同はむしろ好奇心を持って待つ。手慣れたものである。

そして現れたのは……、

「うむ、間違い無く着いたようだな」

「「「ラハール（陛下／君）！？」「」」」

幼い外見に反して強大な力を持つ魔王、ラハールだった。驚きの声を上げるアサギとヴィータ、そしてなのは。

「どうしたんだよラハール？ 突然こっちに来るなんて」

ヴィータが代表して理由を尋ねる。

「暇潰しも兼ねてメシでもたかろうと思ってな」

「サラッと図々しいこと言うな……」

「フッ、そう褒めるな」

悪魔的には『図々しい』は褒め言葉である。

「まあ立ち話もなんだ、メシでも食いながら――」

ラハールが言いかけた時、

「あれ？ ラハールさん？」

フロンがやって来た。

「フロン！？ お前もこの世界にいたのか！？」

思わぬ所で思わぬ相手に再開し、驚愕するラハールだった。

時間はちょうどいい頃合い、ラハールの希望もあって、一同は食堂に来ている。

「美味しい！ 美味しいぞおおおおお！」

宇宙最強魔王も認めた料理に、ラハールもご満悦の様子。

「あの、ラハール君、喜んでるところに水をさすようで悪いんだけど、自分の魔界のことは大丈夫なの？」

「ん？ 何がだ？」

なのはの質問に首を傾げるラハール。

「何がって、こっちに来てる間に魔界を奪われたりとか……」

留守にしているとあっさり魔界を奪われてしまうのではないか、というのがなのはの懸念だ。

「ああ、そういうことか。それならば問題無い。……ちようど良い機会だ、魔界の支配権についてオレ様が教授してやろう。お前達も魔王を目指すなら覚えておくがいい」

「いや、別に魔王を目指してるわけじゃないんだけど……」

なのはの呟きをスルーして、ラハールは説明を始める。

「魔界の支配権は魔王、あるいはそれに伍する称号を持つ者にあるのだが、誰でもそんな称号を得られるわけではない」

これは当然のことだろう。誰も彼もが『王』を名乗っては混乱を招いてしまう。

「一部例外はあるが、魔王になるには他の魔王を倒してその称号を奪い取るしかない」

ちなみに、ラハールは数少ない例外、父親である先代魔王クリチェフスコイから王座を譲り受けるという形で魔王となった。

「つまり、だ。オレ様の魔界を奪うにはオレ様に勝たねばならんわけだ。仮にオレ様の魔界を荒らすことが目的だったとしても、暴れ回ろうものならあちこちに散っている家臣達がどうにかするだろうしな」

ラハールの家臣達もまた相当な実力者揃いである。特にクリチェフスコイの代から仕えている古参達は、下級魔王を軽く打ち倒せる力を持っている。

閑話休題。

こうして一同は、魔界に関する新たな知識を得た。もっとも、それが役立つ時が来ることはおそらく無いだろうが。

「ところでラハールさん」

「何だ？」

「まだエトナさんとは仲直りしてないんですか？」

フロンの問いを聞いた瞬間、ラハールは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「やっぱり、まだなんですね……」

「フン！ オレ様は絶対にアイツに会いに行ったりはせんぞ！」

悲しげな顔をするフロンに、ラハールは憮然と言い放つ。

「元と言えば、アイツがオレ様の本やゲームを勝手に『BOOK HELL』に売り飛ばしたのが悪いんだからな！」

（理由ショボッ！）

全員が同じことを思った。

「他の物ならばまだ許せたが、よりもよってレア物の『実録・魔王の生き様』シリーズまで売りおって……！」

「そ、それは確かにエトナさんが悪いですけど、ラハールさんが言ったこともヒドいですよ！」

子供じみた口論の末にラハールが言い放った、

『この貧乳魔神が!』

という言葉でエトナの決して大きいとは言えない堪忍袋が爆裂四散。
そして大ゲンカが始まった。

ケンカと言ってもそこは上級魔王とそれに匹敵する力を持つ魔神、
その規模はむしろ戦争に近く、現に魔王城は倒壊している。

「とにかく! オレ様は金輪際エトナと関わりを持たんからな!」

「そんなこと言って、本当は心配なんとちゃうの?」

「誰が心配なぞするか! そもそもアイツがどうにかなると思え
ん」

ラハールの返答に、はやては意地の悪い笑みを浮かべた。

「何のかの言って信用してるんやね、エトナちゃんのこと」

「な、何を言うか! オレ様は別に……!」

「やっぱりツンデレやね」

「だから違うっての!」

本日何度目かのラハールの叫びが、食堂に轟いた。

第40話：心の在処（前書き）

遅くなりました。大学マジ魔界……。これからも不定期になりそうですが、よろしく願います。

第40話：心の在処

昼食を終えて少し経ち、現在三隊長とFW陣が実践形式の訓練を行っている。

どちらが勝ってもおかしくない、一進一退の攻防だ。

「どうよ、アイツらの実力は？」

観戦席でヴィータがラハールに尋ねた。

「うむ、なかなかだな。前に会った時も人間としてはかなりのものだったが、今はさらに強くなっている。オレ様の配下に加えたいくらいだ」

訓練場の方を見て頷き、太鼓判を押すラハール。

「今はさすがに無理だろうが、ヤツらが寿命を迎えた時に魂をスカウトしに行くのもいいかもしれんな」

ラハールの言葉を聞いて、ヴィータは不意に自分のことを思った。

（寿命……、最期、か……）

『夜天の書』とその主を守る守護騎士プログラムとして生み出されたヴィータとシグナム、シャマル、ザフィーラの四人には生物としての寿命は存在しない。主、つまりははやてが最期を迎えた時、守護騎士達もまた最期を迎えるのだ。

（アタシは、どうなるんだろうな……）

プログラムである自分に魂が存在するのか、最期にはただ消滅してしまうのではないか、そんな疑念に駆られるヴィータ。

「……どうかしたか？」

表情に出ていたのかそれとも雰囲気に出ていたのか、ラハールがヴィータに心配そうに声をかける。

「あゝ……、ちょっと、な」

どうにかはぐらかそうと考えを巡らせるヴィータだったが、

（このまま悩み続けても仕方ねえしな……）

意を決し、

「……ラハール、少しいいか？」

打ち明けることにした。

「……実はさ」

少し場所を変えて、ヴィータは話し始める。

「アタシは普通の人間じゃないんだよ」

「そうか、やはりそうだったか」

「気付いてたのか!？」

落ち着き払ったラハールの返答に、逆にヴィータが驚愕の声を上げ

た。

「何となくは、な。どちらかと言えば精霊に近い感じがしていた。他にも桃色の髪のムチムチ女と青い狼もそうだったな」

「ああ。お前の言った寿命云々ってのを聞いてさ、作られた存在のアタシ達に魂なんてあるのかって考えたら、急に怖くなってな……」

『彼女』には魂があったようだが、自分達もそうだとは限らない。やはり自分達の命はプログラムの設定に過ぎないのではないかと思うと、恐ろしくてたまらない。

「……ヴィータよ」

ラハールが重々しく口を開く。

「率直に言うが、お前はアホか？」

「ああ！？ んだとコラア！」

流れをぶった切る暴言に怒るヴィータ。まあ当然の反応だろう。

「それだ。それが事実の証明だ」

「……どういふことだよ？」

言葉に反して真剣なラハールの表情に、ヴィータはひとまず怒りを抑え込んだ。

「お前は先程魂が無いかもしれないことを怖いと言った、そして今オレ様の暴言に腹を立てている。そういう感情を抱くというのはつまり、その、何だ……。こ、心があるということだ」

言っていて恥ずかしくなったのか、ラハールは頬を紅潮させそつぽを向く。

「そもそも魂が無ければ意志など生まれんし思い悩んだりもせん！だからお前に魂が無いなどということはあり得ん！ 以上だ！」

早口でそう言い切るラハール。

「そっか……」

安堵とラハールの不器用な優しさを感じ、自然とヴィータの表情がほころぶ。

「ありがとな、ラハール」

「べ、別に礼を言われる筋合いは無いぞ！ オレ様はただ事実を言っただけだからな！」

そつぽを向いたまま素っ気なく、しかし声に安心感と照れを滲ませながらラハールは答えた。

「グス……、ラハールさん……」

「フロン、何故お前が泣くのだ……」

涙ぐむフロンにラハールが呆れ気味に言う。

「いやちよつと待て！ 何でフロンが……、ってオイ！」

いるはずのない人物の声に驚きヴィータが振り返ると、そこにはフロンだけでなくアデルとロザリンド、そしてアサギの姿が。

「お、お前ら揃いも揃って盗み聞きしてやがったのか!？」

「それは違うぞヴィータ!」

言い逃れ出来ない状況だというのに、アデルの声はやけに自信ありげだ。

「お前が何時になく沈んだ表情をしているのが気にはなったが、コソコソ盗み聞きするのはオレの流儀に反する。だから堂々と聞いてたんだ!」

「堂々としてようが盗み聞きは盗み聞きなんだよ!　むしろそっちの方が質悪いわ!」
たち

冗談か本気かわからない——まあ十中八九本気であろう——アデルの言葉にヴィータがツッコむ。

「てか、どこから聞いてたんだ?」

その問いに答えたのはアサギ。

「『……実はさ』のあたりから!」

「最初からじゃねえか!」

「余はあまり気乗りしなかったのじゃがな……」

「でも聞いてたんだよな?」

もはや答えはわかりきっているその質問にロザリンドは、

「まあの!」

何故か胸を張って答えた。

「まあのじゃねえよ！　少しは悪びれろよ！　何で誇らしげなんだよ！？」

「いや、言っていることはその通りだが、これだけの至近距離にいて気付かなかったのかお前は？」

「うっ……」

ラハールの一言でヴィータは言葉に詰まる。重要なのはそこではないのだが。

「……まあ、盗み聞きしてたのは悪かったけど、アタシ達四人も他のみんなも心配でさ。つい、ね」

申し訳なさそうなアサギの言葉に、まあ悪い気はしないかと矛を収めようとしたヴィータだが、

「……待った、『他のみんな』って何だよ？」

聞き捨てならないことが含まれていることに気付いた。

「ほら、あれ」

アサギが指さした方向には訓練場。今はビルのホログラムが出現している。目を凝らして見ると、そのビルの屋上に複数の人影が。

「ヤッベ！　バレた！」

そこにいたのはスコープでヴィータ達を見ていたヴァイスと、他のメンバー達。

「アイツら………！」

ヴィータが怒りというよりむしろ羞恥で顔を真っ赤にした。

（あれは気付かなくても仕方ないよな？）

そう自分に言い聞かせるヴィータ。

「……ラハール」

「何だ？」

「隕石出してくれ」

「……程々にしておけよ？」

そう言いながらも、ラハールは魔法陣から三メートル程の隕石を出した。ヴィータはそれに飛び乗り、

「待てやコラアアアアアアア！」

逃走を始めたヴァイス達に向かって、文字通り流星のごとく飛んでいった。

第41話..魔女達の15時(前書き)

ヤバイ……。書く時間があまり取れていないというのにまた新作のネタが……！

『ファントム・ブレイブ』のクロス、過酷な人生を送ってきた結果、原作とは全く違う性格になったマローネ、通称『闇マローネ(リメイク版のクローネとは別物)』が主役の物語、そのうち公開するかも！

それはさて置き、今回ちよろっと声優ネタがあります。気付いた人はニヤニヤしてください。

第41話..魔女達の15時

ある日の昼下がり、食堂の片隅に六課の女性陣が集まっていた。

「恋バナに花を咲かすガラでもないんだけどね……」

苦笑するアサギ。そうは言っても花の二十代、多少は興味があったりする。

もうおわかりと思うが、一同が現在話しているのは各々の恋愛事情のことである。

「まずアタシと隊長三人は縁が無いとして……」

「「ごく自然に流された!?!」」

開始三秒で自分達の話題が終了したことになるのはとフェイト、そしてはやては驚愕した。

「そんなに驚かんでも……。だって無いでしょ実際? いいところなのはとフェイトが百合ってるくらいで」

「くっ……! 全く否定できひん……!」

「「百合の部分は否定してよ!」」

なのはとフェイトの訴えはスルー。他のメンバーがツッコまないあたり、割と濃厚な説なのだろう。どこかで某司書長が泣いている気がするがきつと気のせいだ。

「まあ、恋はしようとするものではなく、いつの間にかしているものじゃしな。何が切っ掛けになるかなぞわからんものじゃ」

一同の中での唯一の彼氏持ち、どころか既婚者のロザリンドが口を開く。

「余とアデルも最初から仲が良かったわけではないの」

「えっ！ そうなの？」

「意外だな」

結婚から四年経っている今でも隙あらばイチャついていっているのだから、昔はもっと激しいものと一同は思っていたのだが。

「むしろその逆じゃ。あやつは女が苦手で悪魔を嫌っておったからの、女悪魔の余との相性は最悪じゃった」

「そうなんだ……。ってアレ？」

ロザリンドの言葉になのはは一つの疑問を抱いた。

「悪魔が嫌いって、アデル君も悪魔なんじゃないの？ 外見は人間と変わらないけど……」

言われてみれば、と他のメンバーも首を捻る。

「実際は悪魔なんじゃが、わかりづらいじゃろ？ あやつの両親は元・悪魔、方法は知らんが人間になった悪魔だったようだな、外見は人間と変わらんのかな」

今は亡きアデルの両親、『魔將軍』シュラと『魔神官』セリオンは権力争いを避け、辺境世界ヴェルダ임に落ち延びた悪魔だった。二人は悪魔である自分達を暖かく受け入れてくれた人々と共に、ヴェルダ임で人間として生きることを決めたのだ。

悪魔に対する偏見が消えたとはいえ、自分自身がそうであったと知ったアデルは激しく戸惑ったが、

『おぬしが悪魔だったおかげで、千年でも一万年でも、一緒にいられるではないか!』

というロザリンドの言葉で完全に吹っ切れた。

「余とアデルが仲良くなるまでの話も聞くか？ 五時間ほどかかるが」

「いや、また別の機会に……」

ちなみに五時間の内訳は本筋二時間、ノロケ三時間である。

「シグナムはどうなの？ あんまりそういうことに興味無さそうだけど」

ここでアサギがシグナムに話を振った。

「そうだな、そういう感情が今一つわからないというのもあるが私の場合、理想の男のことは恋愛対象というより好敵手として見そうだからな」

何ともシグナムらしい答えだ。

「私より、ヴィータはどうなんだ？ ラハール王と随分仲がいいようだが」

シグナムが珍しくいたずらっぽい表情でヴィータに尋ねる。

「ア、アタシは……、どう、なんだろうな……。ラハールは気の置けないダチみたいなものだと思ってたんだけど……。やっぱり、好き、なのかな……」

頬を紅潮させて恥じらいながら答えるヴィータ。その時、アサギは不意に不安を感じた。

（フロンさんはラハール陛下のこと、どう思ってるんだろ？ もしかして修羅場になったりとか……）

そんなことを考えるアサギであったが、

「ラハールさんにもいいよ春が来たんですね！ 応援してますよ、ヴィータさん！」

当のフロンは笑顔でガッツポーズをとっている。

彼女はラハールの精神的成長をすぐそばで見守ってきたからか、彼に対する感情は『恋愛』を乗り越えて『慈愛』の域に達している。息子を見守る母のような感覚である。

（問題無いみたいでよかった……）

仲間同士の三角関係など見ていて気持ちのいいものではない。

「ところで若い衆はどうなんや？ 一番縁がありそうやけど」

はやてがFW陣に問う。

「私は、まだそういうことはよくわからないですけど、好きな人と

一緒になれたらすごく素敵だと思います」

まだ幼いキャロの言葉はやはり初々しい。彼女もあと四、五年もすれば、おそらくはエリオと、お互いを意識するようになるのではないだろうか。

「スバルはやっぱりアレ？ マーガリンにゾッコン？」

「いやいやいや！ 種族が違いすぎるでしょ！？」

マーガリンの外見はサーベルタイガーの着ぐるみを着た小人、その顔もまた人間のようなものではなく、ぬいぐるみのような感じである。親しみが湧きこそすれ、恋愛感情を抱くことはまずないだろう。

「だってアンタが興味持つのって邪猫族か寝子猫族か、あとは食べ物くらいでしょうが！ ドウラ！」

（アレ？ 何で私怒られてるの？）

自分の置かれている状況が全くわからないスバル。彼女でなくともわからないだろうし、言っているアサギ自身もわかっていない。ただのノリ、『気にしたら負け』というやつである。

「そーいやさっきから一言も話してないR・T氏はどうなのその辺？」

唐突に正気に返ったアサギが、今度はティアナに話を振る。

「あ、あたしは……、特に何も——」

「え？ ティア最近ヴァイスさんと仲良そうに話してること多いけど、あれは違うの？」

ティアナの言葉の途中でスバルが爆弾発言。

「「……………」」

沈黙が続く。体から橙色のオーラが滲み出しているティアナにやばそうな雰囲気を感じたスバルは、

「……………っ！」

逃げた。その後をティアナが肉食獣のような身のこなしで追従し、

「焼き豚あああああああ！！！」

「へぶうつ……………！」

謎の叫びと共にスバルにバカでかい魔力弾を叩き込んだ。

「まったく……………！ 悔い改めなさい！」

床にヤ○チャのポーズで倒れ伏すスバルを放置して、ティアナは席に戻った。

その後彼女が（主に隊長三人から）質問攻めにあっただのは言うまでもない。

第41話：魔女達の15時（後書き）

作中に出てきた『おぬしが悪魔だったおかげで』というセリフは、コミック版デイスガイア2に登場するセリフです。

ゲーム版では小物丸出しだったニセゼノンが、コミック版ではかなりカッコいいです！

番外編2..あれから千年、魔界にて（前書き）

予告通り、番外編です。時期が時期なので、アサギは一切登場しません。ラハールとヴィータが主役です。

番外編2..あれから千年、魔界にて

ラハール魔界、魔王城。その大広間にて、悪魔達が慌ただしく動いている。

「いやゝ、あの殿下が結婚とはねゝ」

「もう殿下とは呼べねえなこりゃ」

「ま、即位事態は千年以上前からしてただけだな。これを機にもっと威厳を持てるようになってくれればいいんだけどなゝ」

そんな中、隅の方でトランプをしながら駄弁っているのは、ガーゴイルにゴースト、そしてゴーレム。それぞれ名をガーゴ、ゴース、ゴレックという。

全員家臣の中では古参で、種族としてのランクは低いが下級魔王程度なら一捻りできる実力を持っている。

「なあ、どのくらいで殿下……、じゃなかった陛下が威厳を持つようになるか賭けないか？ オレは五百年に六万ヘル」

トランプに飽きてきたのか、ゴースが賭けを始めた。

「そうだな……、それじゃオレは七百年に一五万ヘルで」

「ならオレは勝負に出て、二千年に七十万ヘルだ！」

「……貴様ら、サボりながら無礼極まりない賭け事とはいいい度胸だな」

盛り上がる三人の側に、いつの間にかラハールの姿が。

「これはこれは陛下、お褒めに与かり光栄です」

「褒めとらんわ!!」

全く動揺することなく一礼し、サラッとずれたことを言うガーゴに怒鳴るラハール。

「まあまあ。ところで陛下」

「何だ？」

「そのタキシード、すごく似合ってますね！」

「やかましい!! 言われるまでもないわ!!」

遠慮容赦無いゴレックを一喝しながらも、恰好の評価については一応の同意を示す。

現在ラハールは短パンにマフラーという普段の恰好ではなく、ゴレックが言ったように黒いタキシード姿である。傍目から見てもそうだが、着ている本人にもかなり違和感があるらしい。

「陛下!!」

それから少しして扉が開き、エトナがやって来た。

「こんな所で油売ってたんですか」

「油を売っていたのはオレ様ではない!!」

「一緒になってりゃその時点で同罪です。陛下の嫁の仕度ができたんで、迷子にならないでついて来てくださいよ」

「自分の城の中で迷子になるか!!」

いつも通りの主従漫才を繰り広げながら、ラハールはエトナの後に続く。

「しかしあのアホジャリだった殿下が今や陛下で結婚直前なんてね。未だに実感湧かないわ」

「ええ本当に。時の流れは早いものです」

「誰がアホジャリだ誰が！ それと入ってくるならせめて門からにしろ中ボス！」

窓から入ってきてごく自然に会話に参加していた男、中ボス——無論本名ではない——にラハールがツツコんだ。

「それにしても懐かしいですね。ワタクシとあなた達が出会って千年と百年弱、その間あなた達は——」

微笑みを浮かべていた中ボスが徐々に無表情になり、遂には泣きそうになっている。

「一度たりともワタクシの本名を呼びませんでしたねえ……」

「そうだったか？ まあ別にどうでもよからう、そんな事は」

「てか、アンタの本名って何だっけ？」

あんまりと言えばあんまりなラハールとエトナの言葉にうなだれる中ボス。しかし慣れているのか、すぐに立ち直った。

「あの頃と比べると、心身共に随分強くなりましたね。……本当に、立派に育ってくれた」

慈愛に満ちた声でそう呟く中ボス。

その表情は、息子を見守る父親のものだった。

歩くこと数分、三人はある部屋の扉の前に着いた。

「ラハールさん」

部屋の中から出てきたフロンが、ラハールに声をかける。

「仕立てはバッチリですよ！」

「そうか、ご苦労だったな」

「それじゃあ、わたし達は先に会場に行ってますね」

エトナと中ボスを連れて、フロンは会場——先程の大広間に向かっていった。

「……………」

一人残されたラハールは、緊張した面持ちで扉に手を掛ける。

（……ガラにもなく、ここまで緊張するとはな）

今の自分の様子を内心可笑しく思いつつ、扉を開いた。

「ラハール……」

そこにいたのは普段三つ編みにしている赤髪を解き、純白のウエディングドレスに身を包んだヴィータ。彼女は赤、もしくは黒系統の服を着ることが多いので、非常に新鮮だ。

「どう、かな……？」

「う、うむ……、似合っていると思う、ぞ……」

二人共、それ以上は思うように言葉が出ない。大広間に続く扉の向

こうから、司会をしているゾンビー——古参家臣の一人、ゾンちゃんの声が聞こえてくる。

二人の入場が近づいてきた時、どちらからともなく互いの手を握った。

「あれから、色んなことがあったな……」

「そうだな」

二人が出会ってから六十数年後、ヴィータの主であり家族でもあるはやてが天寿を全うし、守護騎士達もまた最期を迎え、『闇の書』時代の罪を償う為にプリニーとなった。

数百年後に償いを終え、本人の意思もあってラハールが死神と交渉。その結果記憶を持ったまま悪魔に転生、さらに数百年の時を経て現在に至る。

「ラハール、アタシ今、すごく幸せだ」

「そうか。……オレ様もだ」

『大変長らくお待たせしました！ 魔王ラハール陛下並びに、魔王妃ヴィータ皇后の、ご入場です!!』

一際大きくゾンちゃんの声が響き渡り、扉が開かれた。同時に、万雷の拍手が轟く。

この日魔界は、新たな幕開けを迎えた。

第42話：年上の女性をお姉様って呼ぶ人実際にいるのかな？（前書き）

大分遅くなりました。なのになんかなり短いです。

第42話：年上の女性をお姉様って呼ぶ人実際にいるのかな？

ある日の午後クラナガン近郊に敵性悪魔が現れた。

『グオオオオオオオオオオ！！！！』

『グガアアアアアアアア！！！！』

銃魔神族ランク3、アドナキエル、そしてランク4、ウエルキエルが合わせて十数体。

群れをなした上級悪魔の襲撃を受け、クラナガンは血肉と悲鳴が飛び交う地獄となった――

「はい、終わり！」

などということはなく、アサギとシグナム、ヴィータ、ティアナ、そしてスバルによって速やかに討伐された。先程の声はアドナキエル達の断末魔である。

なお、討伐された銃魔神族の残骸はデバイスや戦艦などの材料として再利用されている。

別部隊がピ○ミンのようにアドナキエル達の残骸を運んでいくのを眺めているアサギに、

「見つけた……」

「――！！」

突然、何者かが飛び掛かる。

「お姉様〜！」

「ええ！？」

それは敵性悪魔や暴漢の類ではなく、白いワンピースを着た、長い茶髪の少女。

「アサギ、妹いたの？」

「いや、17歳より前のことはわからないから何とも……」

スバルの質問に答えようがなく戸惑うアサギに、

「血縁関係はありませんよ。そもそも初対面ですし」

当の少女がそう告げる。

「なら何故にお姉様！？」

「一目見てビビッときたら、その時点で姉妹関係は成り立つのです！」

「そういうもん？ ……ってあっつ！ 焼ける焦げる！」

よくわからない理論に引き気味のアサギの腹に、少女が高速で頬擦りしていた。

「まあ、そんなわけで連れてきたの」

場所は変わり、六課隊舎。

「初めまして、アサギ・クロマ・アントライオンです」

「アサギ、ってことは……」

「言わんとしてることはわかるけどね」

少女——クロマは、その名前から想像できるように、第二次アサギウォーズの参加者である。つまり立場上はアサギの敵ということになるのだが——

「敵意の無い相手に武器向けるのも気が引けるでしょ」

「それは、確かに……」

現状クロマはアサギに敵意を見せていない。甘い考えと思われるかもしれないがそんな相手に攻撃するのは気が引けるし、誰かに見られたりすれば社会的にヤバイ。さりとて放っておくわけにもいかなないので、ここまで連れてきたのだ。

（あの子……）

その時、フロンだけはクロマに対し敵意云々とは全く別の違和感を抱いていた。

（人間じゃない……？ かといって天使でも悪魔でもない……）

一同の中で最もその手の感覚が鋭敏なのか、クロマの『種族』に引っかかりを感じるフロン。

（……考えても、仕方ありませんよね）

しかし詮無いことであるので、元来他者を疑うことを好まないフロンは思考を打ち切った。

（殺れ！ 殺れ！ ……ダメ！ させない……！）

人懐っこい笑顔を浮かべているクロマ、その内で渦巻くものを、まだ誰も知らない。

第43話..渴望する魂（前書き）

本編とは全く関係ないのですが、ゲームの新作が出るたびにアサギの称号が酷くなっていることに気付いた今日このごろ。

ファントム・キングダムで『次回作の主人公』として登場（称号は『ガンナー』だったかもしれませんが）して以降、作者の知っている称号は以下の通り。

デイスガイア2..別ゲームの主人公

絶対ヒーロー改造計画..夢は主人公

デイスガイア4..しゅじんこう？

しかもデイスガイア4では他のキャラがイラスト同然の美麗グラフィックの中、アサギだけはドットが荒いまま。もはや公式でネタキヤラ扱いされているようです。

第43話..渴望する魂

翌日、六課訓練場。

訓練を行っているアサギを含む数名のメンバーを、クロマは観戦席で眺めている。

（――！ また……！）

昨日と同じ、自分ではない、しかしある意味で自分でもある者が語りかけてきた。

（いい子でいようとするなよ。憎いんだろ？ 妬ましいんだろ？）

（違う……！ 私は……！）

（違うはずがないでしょう？ ワタシはアナタ、アナタはワタシ）

『何か』の言葉を否定するが、続けざまに別の『何か』が言葉を放つ。

（朱に交われれば赤く染まる。僕らと一つになって、君の感情も随分大きく膨らんでいるはずだよ？）

（堪えて苦しむこたあ無え！ 欲望に身を任せて全部ぶちまけちまえ！）

「う……、ああ……」

声に耐えかねて呻き声を上げ、その場にうずくまるクロマ。

「クロマちゃん？」

「どこか痛むんですか？」

心配そうなシャルとフロンの声も届かない。

（理不尽だよなあ？ 何故コイツらは生きている？ 何故アイツは——）

（二度目の生を与えられている？）

クロマの中で、何かが弾けた。

「アアアアアアアアアアアアアアアア！——！」

絶叫し、アサギに向かって飛び掛かる。

「っ！」

アサギはとっさに飛び退き回避した。追撃は来ない。

「ア、アアアアア……！」

クロマは苦しげに呻き声を上げ、悶えている。

「ああ妬ましい、憎らしい……！ やめて……！ お姉様達を巻き込まないで……！ 同じアサギなのに……！ 違う……！ あなた達は、違う……！」

「クロマ………？」

様子がおかしい。まるで誰かと会話しているかのような言葉を発している。

「……………え……………て……………！ お……………姉様……………！」

そう言った次の瞬間、クロマの目が血をこぼしたように赤く染まり、

「ア、ギギヤ、ガアアアアアアアアアア！！！！」

バキバキと鈍い音を立てながら、彼女の体の変貌し始めた。

破れたワンピースから見える上半身はどす黒く変色し幾つもの苦悶と怨嗟の表情が浮かび上がり、下半身は六本の脚を持つ蟻のようなものになっている。

太く膨れ上がった両腕には山吹色の剛毛が、指先からは鋭い鉤爪が生え、頬まで裂けた口からハサミ状の大顎が伸びてきた。

長い茶髪だけが、少女の姿だった面影を残している。

「魂の……………、集合体……………！！」

硬い声でフロンが呟く。

『肉体ヲ……………！ 再ビノ命ヲオ……………！ ヨコセエエエエエエエエエ！！！！』

直後、クロマが複数の声の重なり合った叫びを上げ、同時に彼女とアサギを他の面々から隔離するように、赤黒い不気味な結界が展開された。

「デケエ上に怖気が走るような魔力を感じたから来てみりゃあ……………」
「この結界、昨日の子の仕業だニヤ？」

「はい、あの子が……、正確にはあの子『達』でしょうか……」

駆け付けたジェムとマーガリンに答え、説明を始めるフロン。

「クロマちゃんの正体は、成仏することもプリニーさんになることもできず、この世に留まっていた魂の集合体です」

通常何らかの理由で現世に留まっている魂は、速やかに死神か特殊な力を持った人間に除霊されるか、あるいは下級悪魔に取り込まれる。

だが『彼ら』は違った。集まり一つになることで力を蓄え、魔力と霊素で精巧な仮の肉体を創ることで、死神の目さえ欺いてきたのだろう。

「言ってたことから察するに、生き返るために肉体を求めてるっちゆうことか……」

実際のところ、それは不可能に近い。宿った魂と肉体の間には共通の波長が生まれる。

そのため一時的な憑依ならばともかく、魂を完全に他者の肉体に定着させることはよほど波長が近くない限りできない。複数の魂が混ざり合っているのならなおさらだ。

血肉とならぬことに気付かず獲物を貪るギリシャ神話の怪物アントライオンのように、死霊^{クロマ}達は決して己がものにならない肉体を求め続けている。

「とにかく、この結界を壊して加勢に――」

「……そうもいかないみたいだニヤ」

意気込むアデルを制するようにマーガリンが言った。彼が指し示す方を見ると、結界と同じ色の魔法陣が幾つも出現している。

「……………」

魔法陣から現れたのは、剣や斧を持った骸骨。

「何だコイツら？　こんな悪魔、見たこと無えな」

「悪魔つつうより、人骨が動いてるって感じだな。あの魂の中に死霊使い（ネクロマンサー）でも混ざってたのかね？」

話し合うアデルとジエムをよそに、骸骨に続き魔方陣から次々と悪魔が現れ始めた。

『キキキキキッ！！！』

妖霊族最上級種フアントム、

『グオオオオオオオオオオ！！！！』

死竜族最上級種冥竜、

そして、

『オオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！』

「ギャアアアアアアア！！！！　また出たああああああ！！！！」

スバルのトラウマ、3K（臭い、キモい、怖い）こと屍族、しかも最上級種のゾンビキング。

「煮ても焼いても食えそうにねえヤツらばかりだが仕方ねえ、まてめて料理してやろう！」

『オオオオオオオオオオオオ！！！！』

ジエムが叫び悪魔達が吠え、生者と死者の戦いの火蓋が切って落とされた。

第43話：渴望する魂（後書き）

ギリシャ神話のアントライオンは頭と前足がライオン、体が蟻という外見で、ライオンの頭がどれだけ食べても蟻の体では消化できず（当時蟻は草を食べると考えられていたそうです）、最後には餓死してしまうという悲惨な怪物です。

ちなみに、英単語としてのアントライオンは『アリジゴク』という意味です。

以上、豆知識でした。

第44話：骨と腐肉と魂と（前書き）

小説版『デイスガイア4』を読んだので少し感想をば。

- ・ 今作のテーマはズバリ、『絆』そして『イワシ』！
- ・ 現代社会への皮肉が刺激的！
- ・ デスコかわいいよデスコ！

そして何より……、

天使長自重しろw

緊迫したシーンで颯爽と登場して、見事にシリアスな雰囲気を吹っ飛ばしてくれましたwww

第44話：骨と腐肉と魂と

カタカタと音を立てながら、武器を振り上げ駆け出す骸骨兵。

「せいっ!!」

「……!!」

しかしジェムの攻撃であえなくバラバラにされた。

今ジェムが両腕に着けているのは、ツヤの無い真っ黒な籠手『ラストリベリオン』。特に特殊な効果などはないがとにかく硬い、『細かいことは考えずにひたすら殴る』をコンセプトに作られた一品である。

この硬い籠手に覆われたジェムの拳は、武器ごと骸骨兵を粉碎していく。

「風牙一閃!!」

「ギッ……!!」

「ギギャッ!」

風による推進力と真空の刃を得たシュランゲフォルムのレヴァンテインが不規則に動き回るファントムを両断し、

「氷狼凍牙!!」

「グゴオオオオオ……!!?」

ザフィーラが放つ氷の狼が冥竜を凍らせ噛み砕き、

「疾風迅雷 いいいいいいいい!!」

『オオオオオオオオオオ……!!』

文字通り疾風と電気を纏った連続突きが、ゾンビキングの群れを貫いた。

数の差はあれど、質で勝る六課の面々が死者の軍勢を押ししている。

しかし死者の軍勢も黙ってやられているわけではない。

「……!」

「おっとお!!」

背後から飛んできた追尾型怨念を裏拳で粉碎するジェム。本来死竜族の固有技であるはずのそれは、冥竜の頭に似た形の斧を持つ骸骨兵から放たれていた。

「厄介だな、魔チェンジ2か……」

魔チェンジ2——武器化した悪魔にさらに別の悪魔が融合する強化版魔チェンジ。通常の魔チェンジよりも持続時間が短くなる反面、武器化した悪魔の能力が100%装備者に付加される上に、融合した悪魔の固有技が使えるようになるという利点がある。

「……!」

「くっ……!!」

瘴気を纏った斧による連撃——おんねんらんだせんぼんのつく怨念乱打千本悩苦を必死で逸らし、

「そこだっ!!」

「……!」

ジェムは骸骨兵の足を払った。

「餓狼——」

さらに骸骨兵を上空に蹴り上げ、自身も飛び上がる。

「——粉碎蹴っ!!!!」

落下の勢いを乗せたジェムの蹴りがむき出しのあばら骨に直撃し、地面に叩きつけられる骸骨兵。

魔チェンジ武器を装備したことによる能力強化と、死竜族の固有能力『イモータルボディ』の付加によりヒビが入る程度のダメージしか受けずすぐに体勢を立て直すか、

「魔拳——」

続けざまに光り輝くジェムの拳が叩き込まれ、

「——ビッグバン!!!!」

「——!!」

魔チェンジしていた冥竜と共に、骸骨兵は粉々に爆散した。

「ギギギギギギッ!!」

「何だ!? いきなりデカくなりやがった!」

二体のファントムが一体になり巨大化したのを見て、ヴィータが驚きの声を上げる。

「『怒ッキング』だニャ！」

怒ッキング――魔チェンジと同じく魔物型悪魔が持つ能力。二体の悪魔が融合、巨大化することで、実力や技の効果範囲が増大する。時間の経過と共に魔力が減少し、尽きると強制解除されるのだが――

「妖霊族は魔力の回復がやたら速いからニャア……」

マーガリンの言う通り、妖霊族の魔力の回復速度はあらゆる種族の中で最も速い。そのため、時間経過による怒ッキングの強制解除はまず見込めない。

「そんだけデカけりゃ嫌でも当たるだろ！」

叫び、ヴィータが数個の鉄球を打ち出した。

しかしそれは巨大ファントムに命中する直前に、無機物を操る妖霊族の固有技『ポルターガイスト』により停止し、

「ギギギィー!!」

「マジかよ!？」

逆にヴィータ目掛けて飛んできた。

寸でのところで技を解除し、事無きを得るヴィータ。

続いてマーガリンが爪を伸ばして飛び掛かるが、

「ギッギギギッ!!」

「チィッ!」

巨大ファントムは雷を乱射し、近付く隙を与えない。

「ギギギギギッ!!」

体を丸めた巨大ファントムが体を上下に分断した。空洞になっているその中には巨大な爆弾が。

「閉じろっ!!」

アデルが宙に浮いている巨大ファントムの上半身に飛び乗り、拳や蹴りを繰り返す。しかし上半身はビクともせず、爆弾の導火線はどんどん短くなっていく。

「クソッ! どうすりゃー!」

「下がれアデルッ!!」

歯噛みしていたアデルはヴィータの声を聞くと同時に身の危険を感じ、即座に飛び退いた。

「グラビトンフレアアアアアッ!!!!」

直後、グラーフアイゼンに炎を纏わせたヴィータが隕石のように巨大ファントムの上半身に突撃し、その体を強引に閉じた。ボスン、とくぐもった爆発音が響く。

「ギ……、ギギ、ギィ……」

内部と外部、両方にダメージを受けた巨大ファントムは崩れ落ち、霧散した。

「……少し、気になったんだけど」

実体のある幻影で冥竜を翻弄しながら、ティアナが口を開く。

「どうしてあの子は、あの時アサギを襲わなかったんだろう？」

あの時、というのはアサギ達が銃魔神達を討伐した時のことだ。

「あの時なら、少なくとも今よりもアサギは疲弊していたはずなのに」

「言われてみれば……、ギャアー!!」

ティアナの言葉に、吐きかけられるゾンビ汁を必死でかわし、火炎弾を撃っているスバルが同意した。

「そういえば、あの姿になる前も何やら葛藤しておったのう……」

「……きつと、アサギさんのことを慕っていたあの子は、本当は他者を傷付けることを望んでいないんだと思います」

ギガウインドで骸骨兵と冥竜を撃退しながらロザリンドが呟くと、フロンが矢でファントムを射抜きながら自分の考えを口にした。

クロマを構成する魂が全員、自らの意志で一つになったとは限らない。不本意に取り込まれ、糧となった魂もいたことだろう。

先程までの言葉から察するに、『彼女』もおそらくその一人。強靱な精神力で自我を保ち、確かに存在する生者への妬みを他の魂共々抑え込んでいた――

もし、本当にそうだったのならば。

（アサギさん、どうかあの子の魂に、救いを……）

本来の立場とは逆に、天使であるフロンは、人間であるアサギに祈りをささげた。

第44話：骨と腐肉と魂と（後書き）

ちよつと調べてみたところ、『デイスガイア4』にもやっぱりありました食べ物ボイス！ わかっているのは以下の二つ。

「おもちっ！」（デスコ）

「チョコレートッ！」（フーカ）

第45話：抗う少女、その名は……（前書き）

今回、やたらと叫び声が多い気がします。

ともあれクロマ編ラスト、どうぞご覧ください。

第45話..抗う少女、その名は……

一方その頃、結界内。

「はあっ!!」

『カアッ!!』

アサギがアサルトスターを撃ち出し、クロマが見るからに危なそう
な毒々しい液体を吐き出す。

「いっ!？」

ぶつかり合った瞬間、アサルトスターは煙と刺激臭を出しながらド
ロドロに溶けてしまった。

『ゴアアアアアアア!!!』

「メガウインドッ!!」

再びクロマが吐き出した溶解液を、竜巻で弾き返すアサギ。飛び散
った溶解液が地面とクロマの体を溶かす。

『ガギャギャアアアアアアア!!!』

「うっ……!」

絶叫し、のたうち回るクロマの前脚が抉った地面の欠片が、弾丸の
ようにアサギに襲いかかった。

『オオオオオオオオオ!!!!』

アサギが防御に徹している隙に、腕を振り上げ突進するクロマだが、
『オ……、オオ、オ……！？』

爪による斬撃を繰り返す直前に動きをとめた。本人の意思ではない
クロマ自身も困惑している。

「そこお！！」
『ゴギヤッ！？』

アサルトスターが胴体にぶち当たり、クロマは大きく弾き飛ばされた。

『オ……、オノレエ……！ マダ邪魔をスルカアッ……！』

苛立たしげに足を踏み鳴らし、唸るように言うクロマ。その視線は
アサギの方には向けられておらず、自身の中の何かに言っているよ
うに見える。

（あの子の自我はまだ残ってる……！）

アサギは確信した。『彼女』はまだ完全には取り込まれていないと。

『オ……、オ……、オ……』
「……ってヤバッ！！」

気がつく、クロマが緑色の巨大な魔法陣を足下に、獅子に跨り二
本の剣を構えた騎士——風の貴公子ルーシヤンの幻影を頭上に、そ
れぞれ浮かび上がらせている。

『オメガウインドオオオオオ!!!!』
「メガウインドッ!!」

巨大な竜巻と九つの竜巻がぶつかり合う。しかしメガクラス魔法とオメガクラス魔法の威力の差は甚大、拮抗は一瞬で破られ、九発のメガウインドは全て霧散した。

「つあっ!!」

高速移動で横に飛び退くも、かわしきれず左腕から鮮血が噴き出す。

（脳みそ腐ってるんじゃないのアタシ!? 戦闘中に考え事に没頭するなんて……!）

内心で自分に毒づきながらも、『彼女』のことが頭から離れない。

アサギ自身、一度死を経験している。その絶望感を知っている。

『グオオオオオオオオ!!!!』

傍からは奇怪な化け物が雄叫びを上げているようにしか見えないこの様子も、アサギには『彼女』が慟哭しているように思えてならない。

『ギ……ガ……! ファイアアアアア!!』

（あの時、あの子は……）

降り注ぐ火球をマジカルバレットで相殺し、クロマの方にも撃ち込みながら、アサギは思い返す。

『同じアサギなのに……！ 違う……！ あなた達は、違う……！』

『彼女』はそう言っていた。

（それは、つまり……！）

『ガアアアアアア！……！』

振るわれる腕をかわし、クロマに飛びかかる。アサギを両断しようと大顎が迫るが怯まずさらに加速、腕を伸ばし、

『っ！？』

その頭を、強く抱きしめた。両肩に大顎が食い込み血が流れているのにも構わず、『彼女』に話しかける。

「『アサギ』……」

クロマの目が見開かれた。

「もう、辛いだけの、救いの無い放浪はなくていい……。死んだ苦しみはわかるけど、いつかきつと、報われる時が来るから……」

クロマの、否、『アサギ』の両目から透明な雫が零れ落ちる。

「オ……ネエ……サマア……！」

「おやすみ、『アサギ』……」

地面に刺さったまま残っていたマジカルバレットが氷塊に変化し、それらを繋ぐように水色の魔法陣が展開された。

「……コキュートス」

噴き出す冷氣に包まれて、凍りついていくクロマの体。

小さな結晶となった『アサギ』の涙が地面に落ちると同時に、クロマの体と結界が砕け散った。

クロマが力尽きたことで召喚魔法陣は消えたため、悪魔達も強制送還されもういない。クロマを構成していた魂は光の球になり、フロンが張った結界の中を漂っている。

「あとは死神さんのお仕事ですね……」

噂をすれば何とやら、フロンが言った時、空から死神が舞い降りてきた。

「すまない……、気付くの……遅れた……。迷惑を……、かけた……」

申し訳なさそうに言う死神。今回はクロマが正体を見せたため、その気配を辿ってきたのだろう。

「こやつらはやはりプリニーになるのか？」

ロザリンドの言葉に死神は頷いた。

「『生者に危害を加えた罪』……、重い……。千年は……下らない……」

「望まずに取り込まれていた魂も、その罪を背負うことになるの？」

「……残念ながら」

アサギが問うと、死神は言いづらそうに話し出す。

「一つになった……魂……、一人……扱い……。罪は……共有される……」

「そう……」

「でも……」

心なしか優しげな声音で、死神は付け加えた。

「幾つもの魂に……、一人抗い……止めようとした功績……、大きい……。罪……軽くなる……」

それを聞いて安堵するアサギ。全てを背負わされたのでは、『アサギ』があまりに浮かばれない。

「協力に……感謝する……」

魂達を引き連れて、死神は天に昇っていく。

「また、何時か……」

その光景を見上げ、アサギは静かに呟いた。

第二次アサギウォーズ

アサギ・クロマ・アントライオン、敗退。

場所は変わり、何処かの世界。

「さあ、いよいよ終盤戦……」

本人以外誰もいない空間で、人影が独りごちている。

「物語はクライマックス、果たしてどんなエンディングが待ち受けているのか……！」

巨大な金属の塊に寄り掛かっている人影の声は、先程よりも興奮気味だ。

「誰も知らない結末がすぐそこに！ ああ、楽しみだなあ！」

『2』と表示されているアサギカウンターを見ながら、人影は喜びと期待に満ちた声を上げた。

第45話：抗う少女、その名は……（後書き）

次回は軽いコメディ、その後はゲスト登場を予定しています。

第46話……沈黙は金。 Byプレネール ……さんをつけろよデッ

大学からの課題が湧いてきているので、今後の更新は遅れ気味になりそうです。こんな私を見捨てないで。

ある日の朝、機動六課食堂。魔界テレビがニュース番組を映し出し
ている。

『——当番組は、全魔界、全宇宙へ向けて、ギガビジョン放送にて
お届けしています』

冒頭の定型文を読み上げているウサギは以前のウサギとは別個体の
ようで、外見は全く変わらないが声が違う。

『担当は昨日不祥事を起こして粛清されたウサギ（CV…子安武人）
に代わりまして、わたくしウサギ（CV…杉田智和）と——』

『……………』

『「さん付け必須」、プレネールさんです』

ちなみに粛清されたというウサギは、以前サムいギャグを言ってプ
レネールさんに耳を喰われたヤツである。

「粛清とはまた穏やかではないな」

「プレネールさん、仕事に厳しいらしいから」

その割にニュースキャスターにもかかわらず基本的に喋らないのだ
が。

「それでは参りましょう、最初のニュースです」

ウサギがフリップを取り出した。そこには一冊の本の写真が載って
いる。

『文学界に新たな巨星誕生か？ ロイヤルキングダーク3世氏の著書、「ワールドレス魔王」が売れに売れまくっています』

初っ端からの衝撃的なニュースに、一同の思考が一瞬停止した。

「……ロイヤル何とか3世って、あのライオンみたいなヤツだよな？」

「娘に魔界を奪われてからのことを本にしたと言っておったのう……」

「確かに泣けたけど、まさかニュースになるほど売れてたなんて……」

正気に返ったアデル、ロザリンド、アサギがそれぞれ声を上げる。

『——主に元魔王の読者からの反響を呼んでいるこの本、売上総額は二百億ヘルを超え、三途川賞の受賞は確実と言われています』

確認しておく、城一軒が約四億ヘル。比較すればこの売上総額がどれほど凄まじいかわかるだろう。

『氏が全ての始まりとなった娘さんに喜びの声を伝えたところ、「黙りなさいこの恥知らず!!」と返されたとのこと。テラクルのおまけ付きで』

「うわ、悲惨……」

ティアナが思わずそう言った。実の娘にこんな仕打ちを受けたら、肉体的にも精神的にもダメージが大きそうだ。

『氏は「この後デレがあるかと思ったたらそんなことはなかったぜ！

！」とコメントしており、おそらく全宇宙のツンデレ好きが抱いていたふざけた幻想がぶち殺されたことでしょう。現実是非情です』フリップをしまうウサギ。

そしてプレネールさんの方を向き、

『……泣いてもいいですか？』

こんなことを言い出した。彼もツンデレ好きだったらしい。

そんな彼にプレネールさんは、

『……………』

無言で原稿を渡した。「仕事しろ」と言いたいらしい。

『……めげずに次へ参りましょう』

若干震えている声でウサギが原稿を読み始める。

『ぶっちゃけ忘れていた方も多いのではないですか、第二次アサギウォーズの情報です。現在五名が敗退、残り二名です。以上』

「それだけ！？ 傷心中だからって手抜きにも程があるでしょうが

！ ちゃんと仕事しろよ草食動物！！」

あまりにもテキトーなアサギウォーズの扱いに、無駄とわかりつつも怒鳴るアサギ。画面の中のウサギは、とうとう原稿を持つ手が震え始めている。

『つ……つ……、続きまして新コーナー、「ビューティー男爵の美しき占い」で……、ってもうやってられるかコンチクショー!!!!』

突然ウサギが立ち上がり、原稿を引き裂き始めた。

『ちょ、何をやっているんですか本番中ですよ!? しかもよりによってワタクシのコーナーが始まる直前に!!!』

『ウルセエコノヤロー!!! ツンデレなんて実在しない、あるのはひたすらツンだけ、そんな残酷な事実を突き付けられた悲しみがお前にわかるのか!?!』

画面外からのビューティー男爵の声にウサギが怒鳴り返す。

『わかりませんよ!!! そもそもワタクシ、ツンデレってあまり好きじゃありませんし!!!』

『ンだとゴラァ!!! ならばお前も釘〇病に感染させてやる!!! 力づくでな!!!』

意味不明なことを叫びながらウサギがビューティー男爵に飛び掛かり、乱闘が始まる。本来なら放送中止になるはずの非常事態だが、現場のカメラマンもテレビの前の視聴者も、別の光景に釘付けになっていた。

（プレネールさんが、メチャクチャ怒ってる……!!）

いつもと変わらない無表情だが、プレネールさんのこめかみには太い青筋がくつきりと浮かび上がり、全身から水色のオーラが噴き出している。

『……………』

プレネールさんがウサギ達のいる方向に腕を突き出すと、それに重なるように巨大な頭――スペース悪魔ジェネシスの幻影が現れた。

『……………テラスター』

『ギャアアアアアアアア――！！』

ウサギとビューティー男爵の悲鳴が轟き、余波でスタジオが壊れ始める。そして、

――ザー……

カメラが壊れたのか、画面が砂嵐になった。

『……………』

しばらくして、画面が元に戻った。ボロボロのスタジオに、プレネールさんが一人佇んでいる。

『……………また次回』

ポツリとそう告げて手を振るプレネールさん。画面に『終』と表示され、一秒後には次の番組が始まった。

「……………いいのか、コレで？」

ヴィータの呟きに答えられる者はいない。

この放送は『プレネールさんが喋った！』と魔界各地で話題になり、録画したビデオテープがかなりの高値で取引されるようになったと

いう。

地球——科学技術の発達により神秘の力は消え失せ、人間達が我が物顔で支配する世界。

だが表沙汰になっていないだけで、この世界にも人外の者は存在する。

「お、お疲れ様です……」

「……フン」

メイド服を着た女性の言葉に、返り血に濡れた銀髪の青年は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「後片付けくらいはお前達でやっておけ」

「は、はいっ!!」

高圧的な青年に怯えた様子で答え、メイドはすぐに後片付け——血濡れであちこちに倒れ伏している襲撃者達の確保に取り掛かった。

「まったく……。最近いやに襲撃が多いな」

「大方、閣下を打ち取って名を揚げようなどと叶わぬ夢を抱いているのでしょうか。亜種とはいえやはり人間、度し難いアホ共です」

呆れたように呟く黒マントの青年に、銀髪の青年がメイドへの態度とは打って変わって慇懃に答える。

「まあいい。何度襲ってこようと、俺はソイツらをねじ伏せてやるだけだ!」

「それでこそ我が主」

恭しく頭^{こゝろ}を垂れる銀髪の青年。

「それはそれとして……、明日のプリニー共の教育プランを立てねば！ 部屋に戻るぞフェンリッヒ！」

「仰せのままに」

マントを翻して歩き出した青年に再び一礼し、銀髪の青年は後に続いた。

第46話……沈黙は金。 Byプレネール ……さんをつけろよデッ

悩んだ末に、宣伝も兼ねてデイスガイア4のキャラを出すことにしました。知らない方でも楽しめるよう尽力するので、よろしく願います。

第47話..さあ、始まるザマスよ！ ……ってダメだ！ フランケンがいないか

サブタイトルの元ネタは昔懐かしのアニメ、『怪物くん』。『らき☆すた』よりもこっちのほうが先なんですよ？

第47話：さあ、始まるザマスよ！

……ってダメだ！

フランケンがいないか

「行ってきたらええやん」

はやてが至極あっさりと言った。

……これでは何のことかサッパリわからないので、少し時間を遡ろう。

「どうしようかな……」

なのはの悩みの種となっているのは一通のメール。地球在住の友人、アリサ・バニングスから、アサギ他魔界組を連れて地球に来ないかと誘われたのだ。

それ自体に異存は無いが、気掛かりなのは悪魔の襲撃のこと。魔界組が地球に行けば、六課の戦力は大幅に減少してしまう。かといって友人からのせつかくの誘いを無碍にするのも気が引ける――

どちらにせよ部隊長であるはやてに話を通さないといけないと思い、部隊長室に向かった。

そして冒頭に戻る。

「そんな簡単に……」

「心配なんはわかるけど、たまには士郎さん達に顔見せへんとそれこそ心配かけることになるよ」

そう言われてしまうと反論できない。以前ほどではないとはいえ、ワーカーホリック気味のなのはが地球に住んでいる家族達と顔を合

わせる機会が少ないのは事実だ。

「油断するつもりは毛頭あらへんけど、並みの悪魔相手なら負けはせえへん、大丈夫や。……ご都合主義の世界やしな」

自信たっぷりと言い放つはやて。最後にボソッと妙なことを口走ったように思えるがきつと気のせいだ。

「それじゃあ、そうさせてもらおうかな」

こうして、なのはと魔界組の地球行きが決まった。

数日後、地球。

「へえ、ここが地球……」

「ホルルト村よりは発展してるが、アルケシティと比べると自然が多いな」

「その二つを足してホルルト村寄りにした感じじゃな」

「私の知っている地球とは大分違いますね」

四者四様の声を上げる魔界組。ちなみに、ロザリンドとフロンは光を屈折させて翼を隠している。

少しして、二人の女性がやって来た。

「アリサちゃん！　すずかちゃん！」

「久しぶり、なのはちゃん」

「そっちの人たちは初めましてね」

なのはは金髪の女性――アリサと、紫色の髪の女性――月村すずか

と久闊を叙し、魔界組はそれぞれ自己紹介する。

「あともう一人こっちに來てるんだけど……」

アリスが後ろを振り返ると、ちょうどその一人——銀髪を腰まで伸ばし、裸の上半身に赤いジャケットを着た野性的な青年が歩いていた。

「アンタねえ……、尻尾隠してきなさいよ。誰かに見られたらどうするのよ？」

「黙れ小娘。何故オレが人間などに氣を使わねばならんのだ」

呆れたようなアリスの言葉にぞんざいに答えた青年の臀部からは、銀色の毛が生えた尻尾がぶら下がっている。

この青年は人間ではなく狼族という悪魔、早い話が狼男である。

「フエ、フェンリツヒ様!？」

「何じゃ、アサギの知り合いか？」

驚愕の声を上げたアサギに交友関係が広いのう、と思いつつロザリンドが尋ねるが、

「……誰だ? 生憎とオレはお前のような小娘と知り合った覚えは無いぞ」

当の青年——フェンリツヒは怪訝な顔をしている。

「あ……、この姿じゃわかるわけないッスよねえ……。前の姿でも区別はつかないと思うッスけど」

「ほう……」

プリニーのようなアサギのその口調に、興味深げな声を上げるフェンリツヒ。

「お前、閣下が教育なされたプリニーが転生した人間か」

「はいッス」

「なるほどな。転生してもなお記憶に残るとは、さすがは閣下、見事な教育だ」

フェンリツヒとアサギの会話を聞いたアリサとすずかが、なのはに尋ねる。

「プリニーってあのペンギンのぬいぐるみみたいな生き物よね？」

「償いを終えたプリニーがあの子になったってこと？」

「うん、そうみたい」

答えた後、なのはは声を潜めて続けた。

「あと、『あの子』って言ってるけど、アサギちゃんわたし達より二つ年上だからね？」

「「えっ!？」」

アサギが元プリニーだと知った時以上に驚く二人。

「何歳くらいだと思ってた？」

「「十七歳」」

「やっぱり……」

ここでフェンリツヒがなのは達に視線を向けた。

「コイツらが小娘共の知人とさらにその知人か。まあまあできるヤツが揃っているようだな……」

値踏みするように一同を見渡し、

「!？」

フロンを二度見した。

「お、お前まさか、あの時の天使長か!？」

「はい、そうですよ」

目に見えて狼狽するフェンリツヒに、にこやかに答えるフロン。

「クソッ……! こんな所でこのアホ天使と会うことになるとは……! なんという悪夢、いや呪いか……?」

「ヒドいです! 力を合わせて世界を救った仲間なのに! ぶんすか!」

「お前と仲間になった覚えなど無い! それとぶんすかとか言うな気色悪い!!」

頬を膨らませるフロンを怒鳴りつけ、フェンリツヒは踵を返した。

「あっ! ちょっと待ちなさいよ!」

アリサとすずかがフェンリツヒを追いかけて、他のメンバーも後に続く。

行き先はなのはの実家、喫茶『翠屋』。

「ところでフェンリツヒ様、何故に人間界におられるんスか？」

口調がプリニー返りしたままのアサギがフェンリツヒに尋ねた。

アサギの知る限りでは、彼は人間界に興味を持っているわけでも、人間を好意的に見ているわけでもない。にもかかわらず地球に滞在しているということは、何か理由があるはずだ。

「閣下が興味本位で時空の歪みに近づいたところ、この世界に飛ばされてな。その後訳あって不本意ながら小娘共の護衛をしている」

「また閣下が何か約束されたんスね」

納得がいったとアサギは頷いた。

地獄でプリニーの教育係を務めているフェンリツヒの主は筋の通らないことを嫌っており、特に『約束を守ること』には並々ならぬ執着を見せる。フェンリツヒ自身はそうでもないが、忠誠を誓った主の命ならば話は別。

「そういうことだ。まったく、あの癖は閣下の美点ではあるが、面倒事を招くことが多い……」

まんざらでもなさそうに苦笑しながら言うフェンリツヒ。

「そーいや、主人がいるってことはアンタは魔王じゃないのか？並みの魔王なら簡単に倒せそうだが……」

ふと疑問に思い、アデルが尋ねた。実際に戦っているところを見たわけではないので断言はできないが、おそらくフェンリツヒの實力はエトナとほぼ互角。だが主がいる以上、フェンリツヒが魔王であ

る可能性は皆無。

自立しようと思えばできるだけの力が彼にはあるのだが――

「オレは魔王の座になど興味は無い」

悪魔にとっての最高の称号を、彼はあっさり切り捨てた。

「オレの望みはただ一つ、閣下を全世界の覇者として君臨させることだけだ。そのために閣下に仕え続けることがオレの存在意義であり、何よりの喜びだ」

「そうか……」

確固たる信念を感じさせるその言葉と表情に、アデルは尊敬の念を抱く。

「基本的に群れることを好まぬ狼族、それも上級魔王クラスをここまで心酔させるとは、その閣下というのは相当な器の持ち主なのじやろうな」

「当然だ」

ロザリンドの呟きに鷹揚に頷きそう言うフェンリツヒ。

そうこうしているうちに、一同は翠屋に到着した。

ドアを開けて最初に一同の視界に入ったのは、黒いマントを羽織った黒髪の青年。彼の前にあるテーブルに乗った皿、その上には無残に食い千切られた死体が。

「クッククク……、肉を貫くこの牙の感触……、流れ落ちる体液の心地良い喉越し……。奪った命が我が糧となり、全身を駆け巡っているかのようだ……！」

口ぶりからして死体を喰らったのであろう黒マントの青年は、口の端を吊り上げて笑い、歓喜に満ちた声を上げている。

「ああ、何という素晴らしき味わい……。抑え難い程の快楽が、まさに嵐のごとく――」

「……閣下、イワシを食べながら中二臭いセリフを垂れ流すのはお止めください。人格を疑われます」

なおも続く青年のセリフをフェンリツヒが遮った。なお、青年の前に置かれているのは別に人間の死体とかではなく、生のイワシである。

「おお、戻っていたのかフェンリツヒ。……そして、そこにいるのが例の客人達か」

今ようやく気付いたかのように青年が言い、彼の奇行に唾然としていたなのは達に視線を向ける。

「久しいな天使長。まさかこのような所で会うとは思わなかったが」「お久しぶりです。本当に奇遇ですね」

このように普通に挨拶していることからわかるように、青年はフェンリツヒと異なりフロンに悪感情を抱いていない。曰く、『悪魔に愛を語るとは面白い天使長だ』とのこと。

「そして……」

続いて青年はアサギの方を見た。

「ふむ……」

「お気付きですか、閣下」

「うむ。プリニー教育係の勘というヤツか」

フエンリツヒと短いやりとりをした後、

「答えてみよ！ プリニー心得その一！！」

突如叫んだ。

「語尾には必ず『ッス』を付けることッス！！」

それにすかさず答えるアサギ。青年は満足そうに頷く。

「やはり俺がかつて教育したプリニー、正確にはその魂の持って生まれた人間だったか」

「はいッス。お久しゅうございますッス、ヴァルバトーゼ閣下」

「ヴァ、ヴァルバトーゼ！？ まさか、『暴君』ヴァルバトーゼか！？」

アサギが口にした名前にロザリンドが驚愕した。

「ほう、俺の昔の呼び名を知っているのか」

「『暴君』ヴァルバトーゼといえば教科書や英雄譚に載るほどの超有名吸血鬼じゃからな、知っていても不思議はあるまい」

驚くと同時に納得もしていた。それほどの悪魔ならば、フェンリツヒが心酔するのも理解できる。事実、青年――ヴァルバトーゼから感じられる魔力は、『暴君』の名にふさわしい強大なものだ。

「その『暴君』が何故、なりたくない職業？1のプリニー教育係になっっているのが非常に気になるのじゃが……」

「その辺は闇より深い事情があるのだ、あまり突っ込んでくれるな。プリニー教育係にしても、周りの認識がどうであれ俺は誇りとやりがいを持っているしな」

ロザリンドとの会話を打ち切り、ヴァルバトーゼはアサギに向き直る。

「さて、せっかく出会えたのだ、見事償いを終え転生した褒美をくれてやろう」

マントからクーラーボックスを引っ張り出し、ヴァルバトーゼはその中からあるものを取り出した。

「これは……」

「今朝チバで水揚げされた天然モノのイワシだ。俺が教育を終えて出荷されるプリニー達に渡しているのと同じものだ」

アサギも覚えている。確かにヴァルバトーゼは自らが教育を施したプリニー達に、出荷の手向けとして天然モノのイワシを渡していた。

「ありがとうございますッス！」

「うむ。……しかしイワシを食べて出荷されていたお前が、再び俺の前に現れイワシを受け取っているとは、これもイワシが生み出した絆か。『全ての道はイワシに通ず』とはよく言ったものだ」

「僭越ながら閣下、今回のことにイワシは何の関係もございませんし、そのような言葉は存在しません」

感慨深げに言うヴァルバトーゼに、フェンリツヒが恭しくツツコミをいれた。

第47話：さあ、始まるザマスよ！ ……ってダメだ！ フランケンがいないか

補足しておく、ヴァルバトーゼはアサギが『いつ』出荷されたプリニーかまでは知りません。何千何万というプリニーのうち特定の個体のことを覚えておくなんてむりですからね。

次回、喫茶店ならこれをやらないと！

というわけで、あの二人がちょっと(?) イチャラブります。

第48話：いくらバカップルでもこんなことするヤツは現実にはいないと思う（前）

イチャラブシーンは書いていて鳥肌が立ちました……。こんなのが許されるのは二次元だけですね。現実にあつたらキモすぎます。

第48話：いくらバカップルでもこんなことするヤツは現実にいないと思う

「ぬう……！」

今、フェンリツヒは猛烈に機嫌が悪かった。いや、機嫌が悪いというより気分が悪いと言った方が正しい。具体的には、物凄く胸焼けがするのだ。

「おい小娘、……確かアサギと言ったか。アレはどうにかならんのか？」

視線を向けずに胸焼けの原因を指さして、ウインドで捌いて作ったイワシの刺身を食べているアサギに問うが、

「どうにもなりませんッス」

にべもなくそう返された。

なのはもう見慣れたと苦笑し、アリサとすずかは直視できないと思いつつもチラ見し、フロンは目を輝かせている。

なのはの両親、士郎と桃子は、

「若いな……」

「そうね……」

と穏やかに見守り、そろそろ三十路が近付いている姉、美由希は

「リア充爆発しろ……！」

と血の涙を流さんばかりに嘆いている。

兄、恭也——婿入りしているため姓は月村である——は

「見ているこっちが恥ずかしくなるな……」

と視線を彷徨わせながら呟き、その妻、月村忍は

「声がそっくりだからなおさらね」

と笑い、そしてヴァルバトーゼは見慣れぬ光景に戸惑っている――

そんな千差万別の反応の根源は、

「「……………」」

言わずもがな、ピンク色の空気を醸し出しているアデル・ロザリンド夫妻である。

ちなみに現在は、グラス一杯のジュースを二本のストローを使い二人で飲むという今どきギャルゲーでも見かけないようなことを平然とやっている。

「ほれアデル、あゝん」

「あゝん」

ロザリンドが差し出したシュークリームにアデルが齧り付く。

「……………」

ミシッ、と音を立てて、フェンリツヒが持っている大きな骨付き肉の骨が軋んだ。

「おっと、クリームが付いておるぞ」

「ああ、悪いな」

アデルの頬に付いたクリームを舐め取り、そのまま唇を押し付けた。頬が唇に吸い付く湿った音が鳴る。

「……………っ!!」

直後、バギィ!!と凄まじい音を立てて、フェンリツヒが握っていた骨付き肉の骨が砕けた。

(クソッ……!　まるで強烈な呪いだ……!)

内心で吐き捨てるフェンリツヒ。一度は悪魔らしく力ずくで排除しようとも思ったのだが、近付くと胸焼けを通り越し、頭痛や吐き気に襲われるのだ。

「むう……、何なのだ一体……。これも絆の一つの形だというのか……?」

首を捻るヴァルバトーゼに、目をギラつかせたフロンが告げる。

「むふふふふふ!　これこそ愛の極み!　一億と二千年あとも続く、言わば絆の最終形態!!　戦闘力一億二千万なのです!!」
「何と!!　そうだったのか!？」

フロンの断言に驚愕するヴァルバトーゼ。

「デメエアホ天使!!　閣下にとんでもないことを吹き込むな!!
……信じないでくださいよ閣下!!　あの二人は悪魔基準どころか人間基準でも異常ですからね!？」

閣下があんな風になったらオレは発狂する――、そう思うフェンリツヒであった。

それから約二時間後。ようやく夫妻の放つイチャラブオーラが薄れ始め、フェンリツヒが回復した頃、

「閣下、人間の護衛をなさるなんて、一体どんな約束を交わされたんスか？」

アサギが好奇心でそう尋ねた。

「それはだな――」

「それについては私から話すわ」

答えようとしたヴァルバトーゼ声を、忍が遮る。

「彼と交わした約束、いえ契約は、私達一族に大きく関わることなの。このことを聞いたら一族の掟に従って――」

「お前達が『夜の一族』とか言う吸血能力を持った人間の亜種で、それを知った人間は友人もしくは伴侶になるか、記憶を消さなければならぬ、これだけのことだろう。勿体ぶった言い方をするな鬱陶しい」

静かな、しかし厳かな忍の言葉を打ち消すように、フェンリツヒが苛立ちまぎれに要点をまとめて告げた。

「……何？ さっきまでの光景が気に食わなかったからって八つ当たり？」

「ああ八つ当たりだとも。それがどうした？」

非難がましく忍が言うが、幾分スッキリした表情のフェンリツヒはさらりと受け流す。

「今までの関係が壊れるかもしれない以上、私達にとってはかなり重大なことなのけど」

「それで壊れる縁など所詮その程度だったということだ。真の絆に種族など関係ない。……見てみるがいい」

ヴァルバトーゼが示す方を見れば、なのはは今までと同じようにすずかに接している。アサギやフロン、アデルとロザリンドも、何も気負った様子は無い。

天使も悪魔も人間も、そして夜の一族も、何事もなく談笑している。
「……そうみたいね」

安堵し、忍は微笑んで呟いた。

「それでは、契約の経緯を話しましょうか」

一同の注目が集まったのを確認し、忍は話し出す。

あまりにも衝撃的だった、あの夜の出会いを。

第48話：いくらバカップルでもこんなことするヤツは現実にはいないと思う（後

次回、フェンリッチが色々エグいことをします。ちょいグロです。

第49話：夜の一族と闇の使者（前書き）

思ったよりはボロクソにはなりませんでしたが。多少えげつないことはやっていますが。

なお、『デイスガイア4』に登場する地球は『デイスガイア』と同様二十三世紀ということになっています。あと夜の一族に関して幾つかの独自設定があります。

第49話：夜の一族と闇の使者

約一月前、夜中。広大な月村家の敷地内で、激戦が繰り広げられていた。

「シッ！！」

「はあっ！！」

爪と刀がぶつかり合う。僅かな拮抗の後、相手を弾く勢いを利用して互いに飛びずさる。

「聞きしに勝る腕だな、人間の剣士。以前の俺なら負けていただろう」

「それはどうも。お褒めに与かり光荣だよ」

男の言葉におどけたように答えながらも、士郎は内心舌を打った。

（慢心が消えている……。しばらく襲撃が無かったのは修練のためだったか……）

元来高い身体能力を持つ夜の一族は人間を見下している者が多く、戦闘スタイルも力まかせな傾向が強い。

それ故に人知を超えた達人である士郎にとっては楽勝、とまではいかずとも危なげなく撃退できる相手であった。

しかし最近になって襲撃をかけてきた者達は違う。元々強い肉体をさらに鍛え上げ、油断なく向かって来ている。恭也と美由希、そして月村家のメイドである自動人形のノエルや銃器を使って応戦している忍も苦戦しているようだ。

（殺さずに止める、なんて意識する余裕はなさそうだ……）

気を持ち直し、士郎が男に斬りかかろうとした時、

「伝説の『修羅の国』に行けるのではないかと思ったが、そんなことはなかったな」

「この汚れた空気、おそらく地球でしょう。大ハズレですね。……ですから申し上げたではありませんか、思いつきでアホなことをなさるのはお止めくださいと」

能天気な会話が聞こえてきた。見れば、黒マントの青年と銀髪の青年が歩いてきている。

（何故一般人がここに！？ ……いや違う、一般人ではない！！）

二人組の登場に驚愕し、そして同時に得体の知れない何かを感じ取る士郎。だが男は戦闘中で気が立っていたからか、それともなまじ元が強い分その手の感覚が鈍いのか気付かなかったようで、

「誰かは知らんがこの場に居合わせた以上、生かして帰すわけにはいかん！！」

二人組の方に飛び掛かった。

（しまった！）

皮肉にも二人組に気を取られていたが故に、士郎は彼らに襲い掛かる男に反応することができず、そして、

「……!?!」

男は幾つかに分断され、物言わぬ肉塊となって崩れ落ちた。士郎も、事態に気付いた他の者達も、言葉が出ず立ち尽くしている。

「……無駄に図体のデカイ害虫がいたようです」

そう呟く銀髪の青年の指は、第一関節から先が変形し、巨大な爪となっていた。

そしてその腰には、銀色の尻尾がゆらゆらと揺れている。

「人狼!?! ならば、あのマントの男も人間ではない、我らの同族か……ッ!?!」

それを見た襲撃者の一人が驚きの声を上げた。その直後、彼の胸に銀髪の青年の腕が突き刺さった。

「貴様、今何と言った……!」

「あ……、あ……!」

ゆっくりと引き抜かれた銀髪の青年の手には、一定のリズムで鼓動する赤い物体――襲撃者の心臓が握られている。

「たかが害虫の分際で我が主、暴君ヴァルバトーゼ様のことを『同族』などとほざいたか!?!」

「……!?! そんな、『暴君』、だと……!?!」

銀髪の青年の言葉に心臓を握られている襲撃者やその仲間、そして忍が驚愕する。『暴君』ヴァルバトーゼ――それはかつて、世界を

恐怖の渦に叩き込んだ伝説の吸血鬼の名だ。

「閣下のお名前は冥土の土産には上等すぎるくらいだろう……。そして光栄に思え、貴様はもう一度閣下に謁見することができる……」

「ああ……。た、頼む……。見逃して――」

「地獄でな！……！」

襲撃者の命乞いを遮って叫び、銀髪青年は手中の心臓を握り潰した。

襲撃者の傷は高速で癒え始めていたが、心臓を潰されていては意味がない。わずかに悶えた後、襲撃者は失血死した。

「貴様らも、コイツの連れのようだな……」

「な――」

「ならば死ねえ！！」

「ギャッ……！！」

目の前で起こった惨劇にあてられ立ちすくんでいた他の襲撃者が、狼型の気弾に喉を食い千切られ地面に倒れる。

「ヒィッ！」

「ひ、退くぞっ！」

残りの襲撃者達が悲鳴を上げて逃げ出した。銀髪青年はそれを追わず、凝縮された魔力を纏った拳を引き絞る。

「消し飛ばえ！！」

その拳が地面に叩きつけられようとした時、

「もうよい、フェンリツヒ。そんな大技を使ってまでトドメをささねばねばならん相手でもあるまい」

今まで静観していた黒マントの青年——ヴァルバトーゼが、銀髪 of 青年——フェンリツヒを止めた。

「仰せのままに」

他ならぬ主人の言葉だからか、あっさりと魔力を霧散させ、胸に右手を当てて恭しく一礼するフェンリツヒ。

「『暴君』ヴァルバトーゼ……、あなたが、本当に……？」

一応事態が収束したところで、恐る恐る忍が尋ねる。

「ああ事実だ。もっとも、そう呼ばれていたのは昔のことだがな」

「でも、『暴君』が歴史から姿を消したのは二百年も前のはず……。あなたは若すぎる……」

「俺達悪魔は数万年、長いものでは数億年の時を生きる種族。たかが二百年程度で老いたりはせん」

忍の疑問にヴァルバトーゼは当たり前のように——實際悪魔にとっては当たり前のことなのだが——答え、

「……待て、二百年だと？」

忍の言葉の中の矛盾に気付いた。

「おかしい……、俺が魔力を失ったのはだいたい四百年前のはずだ。

……ならばここは過去の地球、あるいは平行世界ということか？」

「おそらくは後者かと。少し引っ掛かることがありますので。……おい、その小娘」

顎に手を当てて考え込むヴァルバトーゼ。そんな彼に進言すると、フェンリツヒは高圧的な態度で忍に呼びかけた。

「単刀直入に聞く。お前は何だ？」

「いきなり何を――」

「黙れ小僧。お前には聞いていない」

不躰な問いに食ってかかった恭也を一蹴し、フェンリツヒは襲撃者の死体を踏みつけて続ける。

「この害虫の胸を抉った時、コイツの傷はすぐに塞がり始めた。地球にいた人外の類はだいたい把握しているが、そんな能力を持ったヤツは知らん。見落としていただけかもしれないがな。ここが平行世界である可能性が高いと判断したのもこれが理由だ。……さて、ここからが本題」

威圧感を増大させながら、フェンリツヒはさらに続けた。

「感覚を研ぎ澄ましてみて気付いたが、コイツとお前は同族だ。もう一度聞く。答えろ、お前は何だ？」

「……………」

忍は答えない。

「フン、だんまりか。どうやら聞き方が悪かったようだな」

そう言って小さく溜め息をつき、威圧感を消すフェンリツヒ。その後、

『!?!』

忍達の手前の地面に、深く大きな爪痕が刻まれた。強烈な衝撃波が発生するほどの、それこそ土郎でさえ全く反応できないほどの速度で、フェンリツヒが腕を振るったのだ。

「お前やこの害虫が何者なのか、どうかオレに教えてくれないか？」

血に塗れた爪を見せつけながら、フェンリツヒは先程とは違い表面上は丁寧な口調で『頼んだ』。

「……それって脅迫じゃないの？」

「いいや、単なる依頼だ。現にオレは一切強要はしていないし、脅すようなことも言っていない。……そもそも、この時代に人斬り包丁を持ち歩いているヤツに、交渉の仕方をどうこう言われる筋合いは無い」

非難がましい美由希の言葉を、フェンリツヒは軽く嫌味を織り交ぜながら受け流す。

「……わかったわ。私も殺されたくはないから話しましょう」

「そうか。オレも穏便に解決したかったからな、自発的に話してくれるのなら何よりだ」

嘘くさい、というか120%間違いない嘘であろうフェンリツヒの言葉に若干イラつきながら、忍は話し始めた。

「……なるほどな、高い能力を持つ反面栄養素、とりわけ鉄分の生成力が低く、それを補うために吸血する人間の亜種、か」

「それでこの害虫は閣下を同族呼ばわりしたわけか」

話を聞き終えたヴァルバトーゼが納得がいったと頷き、フェンリツヒが苛立たしげに足下にある襲撃者の頭を踏み潰した。脳が水っぽい嫌な音を立てて地面に広がる。

「……敵だったとはいえ、同族が無惨に扱われてるところを見るのはあまりいい気分がしないわね」

「何を生温いことを。銃や人斬り包丁まで持ち出してるんだ、どのみち殺すつもりだったんだろう？」

「いいえ、怪我はさせても命まで奪うつもりはなかったわ」

その言葉を聞いたフェンリツヒは死体を蹴り飛ばし、凄絶な嘲り笑いを浮かべた。

「ハッ！ 自分の命を狙って来た相手に随分とお優しいことだな当主様？ 口ぶりからして今までも同じようにしてきたようだが、その結果がコレか。敵に情けをかけて自分の首を絞めるとはご苦勞なこった」

敵、とりわけ殺意を持って向かってきた者に情けをかける――フェンリツヒに言わせればそれは優しさなどではない。大局を見ていない、ただの自己満足の偽善だ。

「返す言葉もないわね。実際ジリ貧なもの」

後悔などしていないが、状況を考えれば自分のやってきたことは悪手だったと認めざるを得ない。

「それで一つ、頼みたいことがあるの」

「頼みだど？」

「ええ」

だから――

「暴君ヴァルバトーゼ、あなたと契約を結びたいの」

神が、否、悪魔がもたらしたこの機会に、忍は賭けに出ることにした。

「……契約、だど？」

忍以外の者が言葉を失う中、いち早く正気に返ったヴァルバトーゼが口を開く。それを皮切りに他の者達も我に返り始めた。

「何を言い出すんだ!？」

「そうですよお嬢様!」

「危険は承知の上よ。気付いてるでしょう？　今のままじゃどうにもならないって」

忍の言葉に恭也とノエルは反論に窮した。自分達が以前よりもずっと強くなっている襲撃者達に手こずっているのも、それをフェンリツヒが秒殺してのけたのも事実。そんな彼が付き従うヴァルバトーゼもまた、同格以上の力を持っているのだろう。

「クックククッ……!　悪魔と、それもこの俺と契約しようとは面白いヤツだ!」

楽しげに笑うヴァルバトーゼとは裏腹に、フェンリツヒは渋い顔を
している。

（誤算だった……！ まさか契約を結ぶなどと言い出すとは……！）

ヴァルバトーゼは独自の美学を持っており、契約 約束に異常なま
でに固執する。忍がそれを知っているはずはないのだが、それでも
付け込まれたように思えてならない。

（こんな小娘に閣下が利用されるなど我慢ならん！！ さつさと殺
っておくべきだった……！ まあ、閣下が言いなりになられること
はないだろうが……）

不満はある、というより不満しかないが、ヴァルバトーゼ自身が乗
り気になってしまっているため、フェンリツヒは事の推移を見守る
ことにした。

「一応確認しておくが、タダで結べるほど悪魔との契約は軽くな
いぞ」

「やはり寿命や魂を代償にする必要があるのかい？」

士郎が尋ねる。悪魔との契約といえば、大半の者はそういったこと
を思い浮かべるだろう。

「いや、そんなものはいらん」

だが、ヴァルバトーゼはそれをあつさりと否定した。

「寿命はもらったところで何の意味もない。魂などこちらから願い
下げだ。何せ悪党が増えたおかげで、地獄に落ちてくる魂が多すぎ

て困っているくらいだからな」

「そ、そうなのか……」

予想だになかった地獄の事情を暴露され、反応に困る士郎。

「その代わり、というわけでもないが、幾つか条件を出させてもらう」

視線を忍の方に向け、ヴァルバトーゼは契約条件を告げる。

「まず一つ目、一族のゴタゴタはお前自身がケリを付けろ。襲撃してきたヤツらを蹴散らすくらいのはやってやるが、根本的解決はお前の役目だ。……今まで殺さずにやってきたというのなら、最後まで貫き通してみせろ」

「わかったわ」

返事をした忍に頷くヴァルバトーゼ。

「次に二つ目。俺はプリニーという、罪人が転生した魔物の教育係を務めていてな。その仕事のためにそれなりに広い場所を用意してもらう」

「それなら大丈夫よ」

月村家の敷地は非常に広いため、この条件はまったく問題ない。

「そして三つ目。これが一番重要だな。……毎日、俺の力の源を提供してもらう」

やはりそれがくるか、と忍は思った。吸血鬼であるヴァルバトーゼの力の源といえば当然――

「そう、イワシだ」

「……え？」

血を要求されると思っていた忍は耳を疑った。何が『そう』なのかまったくわからない。どうやら冗談ではないようで、ヴァルバトーゼはマントを翻し声を張り上げる。

「それも養殖モノではなく天然モノの方をだ！　これは絶対に譲れん！　いいな！？」

「え、ええ。かまわないわ」

事情はさっぱりわからないが、血よりはずっと楽に用意できるのですぐに了承する。

「よし！　契約成立だ！　構わんな、フェンリツヒ？」

「喜んで、とは申せませんが……」

正直なところ、フェンリツヒにとっては約束など心底どうでもいいことであり、無論月村家がどうなろうと知ったことではない。彼の行動理念はただ一つ――

「全ては、我が主のために……」

話が終わり、翠屋には何とも言えない空気が漂っている。フェンリツヒによる虐殺のくだりで緊迫した雰囲気、イワシのくだりで一気に弛緩した。

「何と言うか……、さすがフェンリツヒ様、言うこと成すことえげつないッスねえ……」

「フッフ、褒めるな褒めるな」

引きつった表情で言うアサギに、フェンリツヒが得意げに笑う。『やることがえげつない』も悪魔にとっては褒め言葉である。

「我ながらいい契約を結んだものだ！ 襲ってくる雑魚をしばき回すだけで毎日天然モノのイワシが食べられるのだからな！」

満足そうな表情でイワシを口に放り込み、ヴァルバトーゼはフェンリツヒに声をかける。

「フェンリツヒ、ヤツらはまだ動きを見せておらんか？」

「はい。密偵としてプリニーと、拷問たやぶの末に閣下かくげに忠誠を誓った害虫共を送っておりますので、何かあればすぐに連絡が入るはずです」

フェンリツヒが言い終えた時、タイミングよく一匹のプリニーが時空ゲートから現れた。

「フェンリツヒ様、ご報告に参りましたッス」

「ご苦労。聞こう」

「連中は悪魔召喚装置を使って、今晚攻め込んでくるみたいッス」

その報告に、なのはが驚きの声を上げる。

「悪魔召喚！？ そんな、地球には魔法は存在しないはず——」

「それは『今』の話だ、小娘」

それを嘲りを含んだ声で遮るフェンリツヒ。

「昔は魔法などさして珍しくもなかった。無論裏では、だが。悪魔

と契約を結んでいる人間が表では『魔女狩り』を行っているのは滑稽の極みだったな」

歴史の知られざる事実を暴露しながら、フェンリツヒは疑問を呈する。

「問題はどうかやってそれを行使するのかだ。アホな人間共が自然を汚しまくったせいで精霊が消滅している以上、自前の魔力で術式を発動させるしかない」

「でも、連中にそんなデカイ魔力を持ったヤツはいなかったッスよ。何らかの方法で、装置に魔力を溜め込んでみたいッス」

プリニーがそう進言した時、

「……月、か」

ヴァルバトーゼが呟いた。

「月の魔力を利用していると考えれば不思議は無い。現に今日は満月、最も魔力が満ちる日だ」

魔力という概念は知らずとも、月、特に満月が生物に大きな影響を及ぼすことは地球でも立証されている。

例えばサンゴやアカウミガメは満月の夜に産卵を行い、人間も出産や犯罪が増加する。満月の夜に錯乱し、凶暴化する『狼症候群』ライカーンスロビーという精神病の事例も報告されているほどだ。

「チツ……！ 害虫の分際で我らが聖地、月の魔力を利用するとは……！」

心底不快そうにフェンリツヒが吐き捨てる。月は狼族にとって魔力の源であり、彼個人にとってはヴァルバトーゼへの忠誠のシンボルなのだ。

「……閣下、今まで手加減しすぎていたのでしょうか、ヤツらは悪魔を呼べば勝てると思い込んでいるようです。今こそ、愚か者共に真の恐怖というものを刻み込んでやりましょう!!」

フェンリツヒの言葉に、ヴァルバトーゼは大きく頷いた。

「うむ。数をそろえれば勝てると思っているアホ共に見せつけてやるでしょう……」

マントを翻し、叫ぶヴァルバトーゼ。

「俺達の絆、そしてイワシの力をな!!」

「閣下、そこは『暴君の力』と言って頂きたかったのですが……」

やはり少しピントのずれた主に、フェンリツヒは小さく溜め息をついた。

第50話：殺戮の饗宴（前書き）

今回は閣下&フェンリッチ無双です。

最近「この小説の主人公ってだれだっけ？」と思うようになってきました。そのくらいアサギが空気です。

第50話..殺戮の饗宴

夜、月村家敷地内。一同は襲撃者を迎え撃つ準備をしていた。

陣形はヴァルバトーゼとフェンリツヒが前に出て、残りのメンバーからフロンを除いた全員が二人の撃ち漏らしを補い、フロンは「自分の一族のことだから、見届けないと」と言っこの場にいるすずかと、その付き添いのアリスを障壁で守る、という形になっている。

ちなみに何故前衛型のアデルや士郎達も後ろにいるのかというと、

『あ、アデルとか士郎さんみたいな接近戦タイプの人達も後衛でお願い』

『……まあ、遠距離技が無いわけじゃねえからオレはいいけどよ、何でだ？』

『前に出るとフェンリツヒ様の攻撃に巻き込まれて死にかねないから』

ということである。

狼族は縦横無尽に動き回りながらの戦闘を得意とするため、大人数での戦闘は苦手なのだ。ましてフェンリツヒのこと、射程範囲にヴァルバトーゼ以外の誰かが入ったとしても、躊躇いなく攻撃を仕掛けるだろう。

「ある程度荒事は見慣れてるとはいえ、悪魔の襲撃なんてさすがに初めてだし、少し怖いわね……」

「ならば今すぐ逃げ帰って、部屋の隅で頭を抱えてガタガタ震えているがいい」

不安そうなアリサの呟きを耳聴く聞きつけ、フェンリツヒがすかさず冷淡な言葉を飛ばした。

「少しつつたでしょうが！！　しないわよそんなこと！！　何でアンタはいつもそう——」

「まあまあ、落ち着いてくださいアリサさん。きっとフェンリツヒさんはアリサさんを元気付けるために、わざと挑発するようなことを言っただですよ」

フェンリツヒに噛み付くアリサを諫め、超ポジティブな解釈をするフロン。

「ツンデレさんですね」

「ツンデレ言うな！！　まったく……、この上司にしてあの部下ありか……。あの守銭奴と同じようなことを言いやがって……！」

フェンリツヒの脳裏に浮かぶのは、かつて非常に不本意ながら行動を共にしていた、ことあるごとにヴァルバトーゼを誑かそうとする（フェンリツヒにはそう見えている）天使の姿。

（覇道に女など不要！　我が主は絶対に渡さんぞ！！）

フェンリツヒが決意を固めている時、フロンはアリサ達に障壁を張って見せていた。

「それにこの障壁は、例えばミサイルをブチ込まれてもビクともしませんから！　何の心配もいりません！」

胸を張ってフロンがそう言い切った直後、

「つてキャアアアアア!？」

轟音が響き渡り、障壁に無数のヒビが入った。

「な、なななな何ですか!？ 隕石でも降ってきたんですか!？」

立ち込めていた砂煙が晴れるとそこには、

拳を突き出したフェンリツヒの姿が。

「フェ、フェンリツヒさん!! 何てことをするんですか!？」

「お前のドヤ顔を見たら殺意がこみ上げてきてつい、な」

抗議するフロンにフェンリツヒはしれっと答える。

「つい、でミサイルを凌駕する破壊力のパンチを繰り出さないでください!!」

「そう怒るな天使長。むしろ喜べ、ヒビが入ったとはいえ全力の八割の力を込めたオレの拳を止めたんだ、お前の障壁の硬さは証明されたぞ。……チッ」

「今舌打ちしましたよね!？」

フロンの叫びには答えず、フェンリツヒは月を見上げているヴァルバトーゼの所へ歩いていった。

「よい月だな、フェンリツヒよ」

「ええ、本当に美しい月です、閣下」

フェンリツヒがヴァルバトーゼと出会い、そして彼に永遠の忠誠を誓ったのも、こんな月夜だった。

（ヴァル閣下……、このフェンリツヒ、命ある限りあなた様に仕え、そして必ずや宇宙の支配者の座を——）

「……来たか」

ヴァルバトーゼの眩きがフェンリツヒの思考を打ち切る。

辺りに結界が張られると同時に空中と地上に巨大な魔法陣が展開され、悪魔の群れが出現した。

空中に現れたのは夜魔族。最下級種のエンプーサに始まり、リリム、サキュバス、カーミラ、ヘカーテ、そして最上級種のリリスと、全ランクが揃っている。

一方地上に現れたのはテイルリングにキャスパリーグという猫娘族の中級種。そして、

「シャアアアアアアアアッ！！！」

雄叫びを上げる、逆立った髪の人型悪魔。瞳孔の開き切ったその目からは知性を感じられない。

狂戦士——大戦争の最中、打ち取った敵の大将の怨念により理性と知性を奪われた戦士一族。彼らはその中でも最も知能の低い、バリアンと呼ばれる者達である。

「フン……、召喚した当人共はいないようだな、コソコソと鬱陶しいヤツらめ……！」

「では、この悪魔共を殲滅し、高みの見物を決め込んでいる連中を恐怖と絶望のドン底に叩き落としてやりましょう」

不快そうに表情を歪めるヴァルバトーゼに、凶悪な笑みを浮かべたフェンリツヒが言った。

「オラァ!!」

苦悶の叫びを上げる前に頭を叩き潰された。

「であああああああ!!」

「シャ……ッ!!」

さらに背後から迫り斧を振り上げていたバーバリアンの胴体を回し蹴りで粉碎する。

持ち主を失った斧を地面に落ちる前に掴み、

「ぬおおおりやああああああ!!」

『ギニャアアアアアア!!』

魔力を込めて投げつけ、テイルリングとキャスパーリーグの群れを爆散させた。

「……ん? 援軍か」

大きな魔力のうねりを感じたフェンリツヒがその方向に視線を向けると、再び魔法陣が展開されていた。

「グウルルルル……!!」

現れたのは十五メートルはあろうかという漆黒の竜——邪竜族最上級種バハムート。

「グオオオオオオオツ!!」

バハムートは翼を広げ、上空のヴァルバトーゼへと飛び掛かるが、

「行かせるかっ!!」

「ゴアッ!？」

それを許すフェンリツヒではない。バハムートの尻尾を掴んで背負い投げのように地面に叩きつけ、

「せあああっ!!」

「ゴハアッ!!」

バウンドして宙に浮いたところを殴り飛ばした。着地点にいた悪魔達は当然押し潰されている。

「図に乗るなよクソトカゲ。デカいだけが取り柄の粗大ゴミが閣下にお相手して頂けると思っているのか？」

起き上がり、殺気に満ちた視線を向けてくるバハムートを、冷笑を浮かべて罵倒するフェンリツヒ。

「本来ならお前の相手なんぞ小娘共で十分だが……、出血大サービスだ、オレが手ずから挽き肉にしてやる」

「グ、グ、グ……、グゴオオオオオオオオオ!!」

激怒したバハムートがフェンリツヒを食い殺さんと牙を剥いて突進した。しかし風のように駆け回る彼には掠りもしない。

「ゴオオオオオ……、ガアッ!!」

「双凄……、狼牙拳!!」

ならばとばかりに放った巨大な火炎弾は、彼の拳から撃ち出された

二つの狼型の気弾で相殺された上に、その際に発生した煙で自分の視界を遮ることになってしまった。

「……グオッ!? ギアッ! ガアッ!」

死角からの強烈な蹴りで宙に打ち上げられ、そのまま四方八方からの攻撃で蹴られるバハムート。

並みの刀剣類では掠り傷一つ付かないその強固な鱗を、フェンリツヒの爪は容易く貫き、肉や骨を抉っていく。

「オ……、オオ……」

ズタズタに引き裂かれた翼では飛ぶことはできず、バハムートは地面に激突した。もはや虫の息で、動くこともままならない。

「終わりだ」

何の感慨も無さそうに呟き、フェンリツヒは魔力の籠った拳を地面に打ち込んだ。そこを起点に噴き出したエネルギー波が一直線に突き進み、バハムートを飲み込む。

魔力と大地のエネルギーを混ぜ合わせ、噴出させる魔界拳技『大かん起こし』によって、バハムートは前言通り挽き肉となった。

「……閣下がアレをお使いになるようだな」

ヴァルバトーゼが行使する魔力を感知したフェンリツヒはそう独りごちて、まだ生き残っている悪魔達を切り裂きながら後ろへ下がっていった。

一方、少し時間を遡って、飛び立った直後のヴァルバトーゼ。

「はあっ!!」

裂帛の気合いと共に斬った相手の血を吸う魔剣『マンイーター』が振るわれ、エンプーサやリリムといった下級種はなす術も無く首を刎ねられ、あるいは体を両断されていく。

「サンダーボルト!!」

「ライトニング!!」

遠距離からサキュバスが電撃を、カーミラが閃光を撃ちだして攻撃するが、ヴァルバトーゼはそれを無数の蝙蝠に変身してかわした。そのまま飛び回って彼女達を攪乱する。

「闇に吞まれるがいい!!」

蝙蝠が寄り集まって大きな黒い球体となり、周囲の空気を吸い込み始めた。

「キャー——」

比較的近くにいた十数体のサキュバスとカーミラが吸引に巻き込まれ、球体の中に消える。

「貫け!!」

中から鮮血色の長いトゲが伸び、ウニのようになった球体は砕け散った。

黒い破片は蝙蝠に、そしてヴァルバトーゼの姿に戻り、辺りにサキ

ユバスやカーミラ『だったもの』が降り注ぐ。

月光を浴びて輝くそれは、背徳的な美しさを持っていた。

「このまま一気に――!?!」

夜魔族のものではない強大な魔力のうねりを感じ、身構えるヴァルバトーゼ。

彼の前方斜め下、地上に展開された魔法陣から、巨大な一体の悪魔が這い出してきた。

「ゴゴゴオオオオオオオオオオ!!」

漆黒の木でできた体を持つ、二十メートルを超える巨人――樹巨人族最上級種ドレッドノート。

「フッフ……、連中の切り札、といったところか。少しは楽しませてくれそうだな!!」

口の端を吊り上げて笑い、ヴァルバトーゼは再び無数の蝙蝠に姿を変え、ドレッドノートに向かって疾駆する。

「カズイクル・ベイツ!!」

続いて巨大な牙に変身し、ドレッドノートに食らい付いた。しかし、

「くうっ……! 何という硬さだ……!」

木製だというのに明らかに鉄より硬いドレッドノートの体に、文字通り歯が立たない。

「ゴオウッ！」

「チィッ！」

振るわれた剛腕を蝙蝠になって離脱することでかわし、元の姿に戻る。僅かに付いていた牙の痕は、すでに消えてしまっている。

樹巨人族は巨体に見合う防御力と頭抜けた体力、そして底抜けに高い再生能力を持っている。

特に厄介なのは再生能力で、例え腕や脚を切断しても五分もあれば完全に治ってしまうほどである。

「ならば……、天翔九連斬っ！！」

「ゴゴオッ!？」

上下左右斜め八方向からの斬撃に突きを合わせた怒濤の連続攻撃に、さすがのドレッドノートもよろめいた。一気に決めるため、ヴァルバトーゼはマンイーターに魔力を集中させる。

「大次元ざー」

「ライトニング!!」

「グウッ!!」

だが、魔力刃を振り下ろそうとした瞬間に、リリスの放った閃光が襲い掛かった。とっさにマントで防いだものの、魔力刃は霧散してしまった。

「クソッ、失念していた……」

下級・中級種はあらかた葬ったため、現在生き残っている夜魔族の

大半は上級種のヘカーテヤリス。自分達ではヴァルバトーゼに敵わないとわかってる彼女達はドレッドノートの補助、ヴァルバトーゼが大技を出す際に妨害することに徹するつもりようだ。

「前言撤回だ！ 楽しむどころか鬱陶しいことこの上ないわ！！
……仕方がない、ヤツを使うか」

苛立たしげに叫ぶもすぐに気持ちを落ち着かせ、ヴァルバトーゼは詠唱を始めた。

ここで少し補足しておこう。基本的に魔界や天界の魔法に詠唱は必要ないが、召喚魔法、とりわけ『本召喚』と呼ばれる、すでに契約を結んでいる生物を呼び出すものには必要となるのである。

「煉獄に囚われし魔神よ、我が命に従い悪辣なる異形を現せ！！」
攻撃をかわしながらヴァルバトーゼが紡ぐ詠唱に伴い、マントの中から飛び出した無数の蝙蝠が上空で合わさり、一つの形を成していく。

「コオオオオオオオオオ！！！」

ドレッドノートよりもさらに大きい体と、それをすっぽり覆えるほどの巨大な翼、長い楔型の尻尾と凶悪な顔を持った悪魔。かつては吸血鬼の王として君臨していた者。その名も――

「暴帝・フルークフリーデ！！！」

ヴァルバトーゼの命に従い現れたフルークフリーデはドレッドノートに掴みかかり、

「オオオオオオオオオオッ！！」

「ギゴオオッ！？」

まるで葉を摘み取るかのように容易く、その腕を引き千切った。傷口から血液の役目を果たしていた樹液が流れ出る。さらにその首筋に噛み付き、血液、もとい樹液を一瞬で吸い尽くした。

「さて、そろそろこの乱痴気騒ぎに幕を下ろすか。……殺れ、フルークフリーデッ！！！」

「ルオオオオオオオオオッ！！」

ヴァルバトーゼが命じると、フルークフリーデは両翼から黒いエネルギー波を放出した。同心円状に広がるそれは、悪魔達を存在した痕跡も残さず抹消していく。今だ立ち向かおうとする者も、戦意を失い逃げ出そうとする者も平等に。

二百年の時を経て、今宵この世界に、再び『暴君』が降臨した。

召喚された悪魔達は全滅し、現在フェンリツヒが召喚者の搜索を、数百匹のプリニー達が後始末をしている。

死体を回収して血を洗い流し、穴を埋めて芝生を植えるその動きは迅速かつ丁寧で、アリサが「雇ってみようかしら……」と割と本気で考えるほどだ。

「閣下、ただいま戻りました」

少しして、右にスーツケース程の大きさの機械を、左にボロボロになった二人の男を抱えて、フェンリツヒが戻ってきた。

召喚者であるこの男達、ヴァルバトーゼの首をエサに悪魔達と契約したらしいのだが、夜魔族はそれに乗らなかったようで、代償に色々搾り取られていてフェンリツヒが見つけた時にはすでに疲労困憊だったという。

そんな相手にも一切情けをかけないのがフェンリツヒクオリティ。逃走防止のために両肩・両肘・両膝に反しの付いた鋼の杭を突き刺した後傷口にエリクシル（タバスコ風味）をぶっかけ、激痛に悶える男達を膝蹴りで黙らせここまで連れてきたのである。

ここまでされれば発狂しそうなものだが、それを見越してあらかじめローゼンクイーン商会謹製『絶対精神安定剤』を投与してあるという徹底ぶり。まさに外道（悪魔的には褒め言葉）。

「これが件の召喚装置か。存外小さいのだな。後で忍にくれてやるか」

そう言って装置をマントの中に収納するヴァルバトーゼ。

「フェンリツヒよ、ソイツらの教育はお前に任せた」

「御意。……プリニー共！」

フェンリツヒが呼ぶと、すぐさま二匹のプリニーがリヤカーを引きながら駆け付けた。

「コイツらを『死導室』に運び込んでおけ」

「『アイアイサーッス!!』」

男達をリヤカーに放り込み、二匹のプリニーは「ドナドナドッナッス」と歌いながら走り出す。なお、死導室とは『死んだ方がマシだ』と思うくらい酷い目にあわせた後に優しい言葉をかけて閣下への

忠誠へ導く部屋』のことである。

「さて……」

プリニー達の指揮はフェンリツヒに任せ、ヴァルバトーゼは顔色の悪いすずかに歩み寄る。

「すずかよ。……俺が、恐ろしいか？」

「はい……。正直に言って、凄く……」

すずかは今までヴァルバトーゼのことを、『強い』とは思っても『恐ろしい』と思ったことはなかった。楽しそうにプリニー達を教育し、イワシに関する豆知識を披露し、時折士郎と組手をする――そんな姿しか、見たことがなかったから。

一片の情け容赦無く、自身に刃向かう者を屠る――先程までの彼の姿はまさに暴君。普段とはあまりにも違うヴァルバトーゼの姿に、すずかは恐怖を感じた。

「そうか。……それでいい」

「え……？」

「俺達悪魔の本分は、人間を恐怖によって戒め謙虚に生きるように仕向け、世界の秩序を守ることにある。……フェンリツヒはともかく俺はあまり恐れられていなかったようだから、お前が俺を恐ろしいと思ったのなら、悪魔冥利に尽きるというものだ」

クククと笑い、ヴァルバトーゼはマントを翻して続ける。

「そして誇り高き悪魔である俺は、決して契約を違えたりはせん！我が名とイワシに賭けて、必ずやお前達を守り抜くことを約束し

よう!!」

「あ……、はいっ!」

それは、いわゆる吊り橋効果だったのかもしれない。しかし、その揺るぎない自信に満ちた笑みに見惚れたのは、紛れもない事実。まあ早い話――

月村すずかは、暴君ヴァルバトーゼに恋をした。

だが、

「間違っても閣下に恋心など抱くなよ小娘……!」
「ヒッ!?!」

いつのまにか背後に立っていたフェンリツヒが殺意すら感じさせる低い声音で告げ、そのまま立ち去る。

彼女の思いを実らせるのは、世界を救うよりも難しそうだ。

第50話：殺戮の饗宴（後書き）

これで地球編は終了、次回は番外編で某バカップルの夫婦の子供＋αが登場します。本編終了から十二年後くらいですね。またしてもアサギは出ません。

その後は一話挟んで、早いですがデイスガイア3のメンバーが登場する『襲学旅行編』に入ります。少し予告をすると、アサギがダークサイドに片足突っ込んだり、ザフィーラに出番が巡ってきたり、シグナムがガチバトったりします。

番外編3：十二年後、受け継ぎしもの（前書き）

子供よりも夫婦の方が目立っているような気がします。が、ご覧ください。

番外編3：十二年後、受け継ぎしもの

「せああっ!!」

「はあっ!!」

拳と剣が幾度となくぶつかり合う。

拳を繰り出すのは、赤みがかった金髪、黒い瞳と翼を持った少年、そして剣を振るうのは、金色の業火のような長い髪と赤い瞳を持った少女。

なお、彼女が振るっているのは厳密には銀色のバカデカイスプーンである。どう見ても剣ではないが、魔界ではハリセンやネギでさえ剣に分類されるので特に問題は無い。

「紅蓮疾風拳!!」

「竜巻破裏剣!!」

燃え盛る拳と竜巻を纏ったスプーンが激突し、その衝撃で二人の距離が離れた。

「プロミネンス!!」

少年が両手から撃ち出した火柱が少女に迫る。それに慌てる素振りも見せず、スプーンを構える少女。

「スケアクロオオオオオッ!!」

スプーンの中から不気味な案山子^{かし}が飛び出し、巨大な爪で火柱を切り裂きながら少年へと疾駆する。

「せいっ！」

だが少年の拳によってあっさりと粉碎された。そちらを囨に背後から迫っていたもう一体の案山子も、翻った翼が両断する。

「ふはははは！ やはり小細工は通用せぬか！ ……おまけにキツチリ大技の準備までしておるとは、抜け目ないな、リアン」

「それはお互い様でしょ、ドロシー」

それぞれの言葉通り、少年――リアンの背後には四葉のクローバーが描かれた紋章が、前には巨大な灼熱の刃が浮かび上がり、少女――ドロシーのスプーンの先には犬をかたどったエネルギー弾が生み出されている。

「フレアリバレート！！！」

「ハウンドドッグ！！！」

刃とエネルギー弾が激突、大爆発が起こる。

「「はあああああ！！！」」

それをものともせず、二人は再びぶつかり合う。

「二人ともいい動きしてるね」

二人を見据える六つの人影。

今しがた呟いたのはなのはで、その隣にはフェイトがいる。三十路を迎え、いわゆる『大人の女性』な雰囲気醸し出すようになった

彼女達だが、まだまだ現役バリバリ、下級魔王くらいは秒殺できるその実力は健在だ。

「ああ、同じ年だった頃のオレよりもずっと強い」

そう言ったのはリアンの父、アデル。寄り添っているロザリンド共々、十二年前から姿はほとんど変わっていない。

「我らの子供なのだ、あのくらいはできて当然だ」

「あの子達はまだまだ伸びるよ。将来が楽しみだね」

素っ気ないながらも声に喜びを滲ませているのは赤髪の大男――『宇宙最強魔王』ゼタ。ドロシーの父である。そして彼に続いて期待の籠った声を上げた、金髪をボブカットにした長身の女性が彼の妻。

『背徳者』サロメー――元・人間という異色の経歴を持つ魔王で、かつてはゼタをも凌ぐとまで言われた実力者。訳あって魔界を失っているが、ゼタと共に暮らしているため特に気にしていない。

「いずれはドロシーとも宇宙最強の座を賭けて戦う時が来るだろう。実に楽しみだ！　フハハハハハハ！！」

いかに親子と言えどタダで魔王の、まして宇宙最強の座を譲るつもりはゼタには無く、またドロシーも譲ってもらうつもりなど無い。魔王の称号は実力で勝ち取るもの。宇宙の歴史を振り返れば、わずか2歳で父親の魔界を奪い取った悪魔さえいるのだ。

「その時はあの子が背中を預けられる、強い男が伴侶になってほしいね」

もう候補者は見つかったみたいだけど、と内心で続けるサロメに頷き、ゼタは『魔王様のポーズ』をとった。

「強くなれ童共！ 我を超えるほどに！ フハハハハハハハ！」

勝負は引き分けという形で幕を下ろし、リアンとドロシーは体を休めている。

「引き分けか、ドロシー最近強くなったね」

「当然だ。二歳差とはいえ年下の者にいつまでも負けたままでいられるものか」

戦闘中の気迫とは打って変わって、のんびりした口調のリアンに、素っ気なく答えるドロシー。

本人の言う通り、リアンは11歳、ドロシーは13歳で、彼女の方が年上である。そして彼女は何度かリアンと戦っているが、一度も勝ったことはない。今回ようやく引き分けに持ち込んだのだ。

「……我はまだ弱い。父上達の足下にも及ばぬ」

「そりゃあゼタおじさんは宇宙最強だもんね。僕もまだ父さん達に敵わないしなあ……」

しみじみと話すリアンの声を聞きながら、ドロシーは物思いに耽る。

（そう、宇宙最強の座はまだ遙か遠く。まずはリアンに勝たねば！
勝ったら、その時は……、その時は……！）

実は彼女、リアンに打ち負かされた時から彼に惚れているのである。乙女チックさの欠片も無いが、彼と共に宇宙最強の座に登りつめる

ことが最大の夢。
リベンジを果たして堂々と告白するために、日々特訓に勤しんでいる。

これまでの成長具合から鑑みれば、ドロシーの第一の目標達成は、
そう遠くはないかもしれない。

知らぬは本人ばかりなり、とでも言うべきか、ドロシーの純情恋模
様は大人達には周知の事実。皆微笑と共に見守っている。

「初々しいのう。昔を思い出すな……」

「ああ……」

「アデル……」

「ロザリー……」

もはやお馴染み、ピンク色の空気——通称『愛フィールド』（フロン命名）を醸し出す夫妻。

「思い出すも何も十年以上前からずっと変わってないと思うんだけど……」

フェイトのツツコミも愛フィールドに阻まれて届かない。

「ふふ、若いっていいね。妬けちゃうね」

そう言って、サロメがゼタにすり寄った。

「ねえゼタ……、私のこと、愛してる……?」

「フン……! 甘ったれたことをぬかしおって……」

甘えるような声を出すサロメに、ゼタは冷たく吐き捨てそっぽを向く。

それを見たのはとフェイトは、サロメに悪いと思いつつも内心安堵の息を吐いた。

慣れたとはいえ、三十三年間恋人の『こ』の字も無い二人には、愛フィールドは中々精神的にくるものがある。

ゼタの言葉は厳しいが、それが愛フィールドを相殺しているように感じられた。

だが、二人の認識は少々甘かった。

『ツンデレ』という属性を持つのは何も釘宮ボイスの少女だけではないのだ。

「……今更、言うまでもあるまい」

その言葉と共に、ゼタはサロメの肩を抱き寄せる。それに応じ、サロメはゼタの腰に両腕を回した。

「ゼタ……」

「サロメ……」

ゼタ・サロメ夫妻はアデル・ロザリンド夫妻とは異なる、BGMにジャズでも流れてきそうな『大人の愛フィールド』を醸し出し始める。

「ただ結婚すればいいってわけじゃないことはわかってるんだけど……」

「何と言うか、自身失くすね……」

二種類の愛フィールドに、精神をガリガリ削られていく恋人いない歴Ⅱ年齢の独身貴族な二人。

「何だ小娘共、お前達はお前達同士で結婚していたのではなかったのか？」

「「違います!!」」

ゼタの割とマジな質問に、二人は完璧なコンビネーションでツツコんだ。

番外編3：十二年後、受け継ぎしもの（後書き）

はい、そんなわけで子供登場でした。

『ファントム・キングダム』のラストシーンで「ゼタ様マジツンデレ」と思ったのは自分だけではないはず！

そんなゼタ様、『デイスガイア4』ではとうとう人型ユニットとして登場！ 何とLv. 4000！

次回は小ネタ集です。

第51話：この小説の主人公は、どのどいつだ？ ……アタシだよっ！

小ネタ集です。個人的に好きな脇役を出演させてみました。

サブタイトル通りアサギの出演は微塵もありません。「アサギ分が足りない！」という方はYouTubeで『アサギ・メタモルフォーゼ』を検索してみてください。ネタ感溢れるアサギのテーマソングが聞けます。

第51話：この小説の主人公は、どこのどいつだ？ ……アタシだよっ！

（1）

突然だが、虹色戦隊ニジレンジャーは解散した。

ことのきっかけはニジパープル（♂・メンバー最年長）の、

「いい年していつまでもニジレンジャーなんてやってるわけにはいかないわよね」

という言葉。これを聞いて今更ながら人生に危機感を抱いた一同は、それぞれの道を歩むこととなった。

予てからの夢を追いかけて、ニジパープルはバーを開きニジイエローはカレー屋に就職、ニジグリーンは法科大学へ。

速さが自慢のニジブルーはトライアスロンの選手となるべく高校時代の恩師の下へ向かった。「ヘタな魔王より怖いよ、あの人」とボヤきながらも、なかなか充実日々を送っているらしい。

そういえば、祖国に帰っていたニジオレンジから手紙が届いた。家族や友人と楽しく暮らしているようだ。安心した。

懐かしくなってニジグンジョウに電話をかけてみたら、着信拒否にされていた。少し泣いた。

そして、オレことニジレッドはと言うと――

ミッドチルダ、陸士108部隊隊舎。

「おはようございます隊長！ 頼まれていた書類、お持ちしました！」

「おう、ご苦労だったな、赤井」

書類を受け取ったのは部隊長のゲンヤ・ナカジマ。スバルの父であり、魔力を持たないながらも卓越した営業手腕でこの地位まで上り詰めた猛者だ。

そして書類を手渡したのは件の男、ニジレッド（本名・赤井一郎）。偶然この世界に流れ着き、さらに偶然出会ったゲンヤに「雑用係でもかまいませんから雇って〜！」と土下座して頼み込み、現在に至る。

「では、自分は仕事に戻ります！」

敬礼して踵を返し退室するニジレッドを見送り、ゲンヤは深く息を吐いた。

「いいヤツなんだがな……」

雇うまでの経緯はともかくとして、彼はニジレッドを高く評価している。

仕事熱心で根性があり、他の局員とも打ち解けている。

そして強い。魔力はそれほど高くはないが、反面身体能力や反応速度が非常に高く、あっさりと陸戦Sランクの試験を突破するほどだ。

ただ、ゲンヤに限らず誰もが気になっていることが一つある。それは――

「あのマスク、取らねえのか？」

服は部隊の制服なのだが、ニジレッドはいつもマスクを被っている。さすがに風呂に入っている時は脱いでいるようだが、それも顔や頭を洗う時だけのため、彼の素顔をはつきりと見た者はいない。

「何か顔を見せたくない事情でもあるのかね……。あまり深く突っ込むべきじゃねえか」

実際は今までの癖で脱ぐのを忘れていただけなのだが、ゲンヤ以下局員達はそれを知るよしも無い。

（2）

聖王協会訓練場。

「はあああああ！！」

「ワーオ！ いい攻撃だ、ワクワクするね♪」

トンファーと双剣を足したようなデバイス『ヴィンデルシャフト』で怒涛の連撃を繰り出しているのは、協会騎士シャツハ・ヌエラ。それを長剣で難なく捌いているのは、淡い紫色の長髪を一本の三つ編みにした忠誠的な顔立ちの青年。

純白の服に胸や関節部分を覆う白銀の鎧、そして背中から生えた一对の大きな白い翼——天界を守る戦士、天使兵である。

幾度となく続く打ち合いの中、天使兵が僅かに隙を見せた。

（……今っ！）

一瞬躊躇いを覚えながらも打ち込むシャツハ。その攻撃は鎧の無い腹を掠め、

「ああっ……！ 刺激的……！」

天使兵が恍惚とした声を上げた。

背筋を駆け巡る悪寒を堪えつつ、シャツハは畳み掛ける。それを天使兵は体をくねらせかわす——のではなく、わざと鎧の無い場所に掠らせ、

「ああ……！ いい！ いいよおっ！ もっと、もっとボクを切って、殴って、蹴ってえ……！」

頬を紅潮させながら快楽に声を震わせた。

もうおわかりだろう。この天使兵、主役B——本名ではなく芸名なのだが、あえてこちらを名乗っている——は、筋金入りのマゾなのだ。

「はああああ……、快・感……！」

黙っていれば神秘的にすら見える主役Bだが、痛みに酔いしれてクネクネしている姿は果てしなくキモい。

（うっ……）

悪寒を通り越して吐き気すら感じ始めたシャツハの剣筋が乱れた。その瞬間、

「幸せお裾分け！ 恍惚剣Mの字斬りい！」
「かはっ……！」

彼女の腹にMを描くように、高速の四連撃が撃ち込まれた。耐えられずにシャツハは膝を付く。

「じゃあ今日はここまで。いやあ、いい汗かいたねえ」
「私は嫌な汗しかかいた覚えがないのですが……」

爽やかな笑顔を浮かべる主役Bとは対照的に、シャツハは顔色が優れない。原因は言わずもがなだろう。

「腕はいいけど、まだまだ精神鍛錬が足りないね。ボクと同じ道に進めばそれもあるさ解決するんだけど――」
「お断りしますっ！」

主役Bの提案をシャツハはすぐさま撥ね退けた。このやり取りはここ数週間毎日行われている。

「それは残念。気が変わったらいつでも言ってよ」

口で言うほど残念がってもいない主役B。彼が執着する相手は他にいる。

「さて、そろそろ彼の所に行くとするかな。今日こそいい返事がもらえるといいな」

翼を広げ、主役Bはいずこかへと飛び去った。

「来る……！ ヤツが来る……！」

ヴェロッサ・アコースは、いつも飄々としている彼には珍しく狼狽えていた。というのも、数週間前から現れ始めた彼の天敵が迫っているからだ。

わかっていながら逃げろよ、と思われるかもしれないが、その天敵はヴェロッサがどこへ行くとも必ず現れるのだ。高い隠密・索敵機能を持つ彼の稀少技能『ウンエントリヒ・ヤークト』でも、その足取りを全く掴むことができない。

度重なる襲来により、天敵の接近を察知する能力が身についたが、全く喜べない。むしろじわじわと追いつめられる恐怖を感じるようになったただけだ。

「……そこか!？」

気配を感じ、ヴェロッサが背後を振り向くと、

「ヴェロッサく〜ん!」

「うわあああああああ!？」

彼の後ろ、つまり彼が初めに向いていた方から、主役Bが声をかけた。

「い、いつの間に!？ 確かに気配はこっちから感じられたのに!」
「いや、ヴェロッサ君が振り向く一瞬前に反対側に移動したんだよ。たまには趣向を凝らしてみようと思ってね」

とんでもないことをサラッと言ってのけた後、主役Bは真剣な表情になる。

「ヴェロッサ君、キミには素晴らしい素質があるんだ。だから、ボクと契約して『マズスティック・トゥウェルブ』になってよ！」

「断る！ 某インキュベーターみたいな言い方をしてもダメなものはダメだ！」

マズスティック・トゥウェルブ——それは、12人のマゾによって構成される、世界にマゾの素晴らしさを説くためのグループ（未完成）。現在は主役Bを含めて十一人のメンバーがいる。つまり——

「キミが加入すれば完成するんだ！ 頼むよ、洗剤あげるから！」

ヴェロッサに『汚れ滅亡！ 激落ちハルマゲドン』と書かれた箱を差し出す主役B。

「いけないよ！ 何だその汚れどころか世界まで滅亡しそうな洗剤は！？」

「そう、なら仕方ないね……」

洗剤を引っ込めると、主役Bは魔力を練り上げ臨戦態勢を取った。

「どうやら、体に直接教えてあげるしかないようだ……！」

「待て待て待て待て待て……！ 何故そうなる！？ とうか問題あるだろ天使として！」

「何でも話し合いで解決できるなら天使兵はいらないんだよ……！」

突然逆ギレした主役Bがウインドを発動し真空の刃を伴う旋風を生させる。——彼自身の足下に。

「はあああああああん……！ みなぎってきた！」

絶頂に達した主役Bの両手の間に、バスケットボール大のエネルギー弾が現れた。極限まで高められ、凝縮されたマゾエネルギーだ。彼はそれを掲げ、

「M注入!!」

「ゴフツ」

ダンクシュートのごとくヴェロッサに叩きつけた。

「おおおおおおお!!?」

ヴェロッサの体内をマゾエネルギーが駆け巡る。引き起こされた痛みが、徐々に快感に変わっていく。

そして彼は、完全なマゾへと生まれ変わ――

「……ってさせるかあああああああ!!」

――らなかった。正気に返り、マゾエネルギーを弾き飛ばすヴェロッサ。

「チツ……! もう少しだったのに……」

舌打ちする主役Bは、天使とは思えないほど悪い顔をしている。

「はあ……、はあ……! 何て恐ろしい技を使うんだ……!」

「ボクのとっておきの技だったんだけど、まさか破られるとはね……。仕方ない、今日のところは退くとするよ」

時空ゲートを開き、足を踏み入れながらヴェロッサに向き直る。

「強情なキミが首を縦に振ってくれるまで、十回でも百回でも千回でもボクは戻ってくるよ♪」

そう言い残して、主役Bは時空ゲートの向こうに消えた。

「……アイツ、本当はマゾじゃなくてサドじゃないのか？」

ヴェロッサの明日はどっちだ。

（3）

平行世界、それは無数に存在する可能性。これは、そんな可能性の一つの話。

「お父さん……、ギン姉……、どこお……？」

猛火に包まれ地獄と化した空港内を、一人彷徨う幼き日のスバル。

「熱いよ……、怖いよお……！」

熱と恐怖に苛まれ、スバルはその場にへたり込んでしまった。火の手が回り、逃げ道が消えていく。さらに発火の原因となった爆発で土台が弱っていたのか、女神像が鈍い音を立てて倒れた。

灼熱の海に墜ちる女神、その下にはスバルの姿が。自身に迫る危機に気付くも、どうすることもできない。祈りを捧げる相手は、今まさにスバルを押し潰さんとしている。それでも、祈らずにはいられなかった。

「助けて……！ 誰か——」

「ファイナルツ……アアアアアアアムツ！！！」

突如飛来した何かに弾き飛ばされ、猛火の中に消える女神像。

「え……？」

「間一髪だったな。怪我は無いか、嬢ちゃん？」

スバルの後ろからやって来た何者かが言った。

鋭い目つきに黄色いくちばし、黄緑色で楕円形の体を持つその姿は

――

「……ペンギン？」

「ペンギンじゃねえよ！！！」

スバルの言葉に謎の生物は即座にツッコむ。

「ペンギンがこんなクソ暑い所にいるわけねえだろ！？ それ以前に街中うろついてたりしねえよペンギンは！ ……って漫才してる場合じゃなかったな」

ひとしきり捲し立てると謎の生物は落ち着きを取り戻し、ウエストポーチから太い角の生えた動物の頭蓋骨を取り出した。

「メガクールッ！！！」

頭蓋骨から吹き出す冷気が周囲の炎を消し、壁や天井のヒビを凍らせて埋め崩落を防ぐ。

冷気が収まると、頭蓋骨は眩く発光し始めた。

「プリニガアアアアアア……ビイイイイイイムッ！！！」

頭蓋骨から放たれた太い光線は天井を貫き、綺麗な丸い穴を開けた。

「お膳立てはこんなもんでいいだろ。本職のヤツがすぐそこまで来てるみたいだしな。……じゃあな嬢ちゃん、縁があつたらまた会おうぜ」

「……あ、待って！」

立ち去ろうとする謎の生物をスバルが呼び止める。

「あの……、ありがとう」

「ああ、いいってことよ」

「あなたは、何ていうの？」

「オレか？ オレはカーチス。通りすがりの、地球勇者だ」

そう言って、謎の生物——カーチスは、突然現れた空間の渦——時空ゲートの向こうに消えていった。

その後、スバルはあちこちの氷や天井の穴に首をかしげるなのはに救出された。

カーチスが落としていったもの——女神像を弾き飛ばした、ガツチリと組まれて一つになった黒い二つの拳を胸に抱き、スバルは決意する。

彼のように、誰かを助けられる人になることを。

第51話：この小説の主人公は、どこのどいつだ？ ……アタシだよっ！

『デイスガイア4』でとうとうクビかと思われたニジレンジャー、ダウンロードコンテンツで仲間にできるようです。正確にはニジレツドが仲間になり、その後他のメンバーを「汎用キャラとして」作成できるようにするみたいです。

主役Bも同じくダウンロードコンテンツで仲間に。『M注入』は固有技としてマゾで……じゃなかったマジで出ます。正しくは『M注^{ハートマーク}入』です。

第52話：話進むたび、ゲストが増えるね♪ ……すいませんもうネタが無い

大学の課題に追われたりデイスガイア4に現を抜かしていたら非常に遅くなりました。しかもゲスト紹介が主で中身が薄い！

ともかく、ご覧ください。

第52話…話進むたび、ゲストが増えるね♪ ……すいませんもうネタが無い

ある日の昼前、機動六課隊舎前。

「フフフ…、ここにいるみたいだね…」

赤紫色の髪の少女が呟いた。両のこめかみから伸びる黒い角に髪と同色の翼と尻尾――言わずもがな悪魔である。機動六課にはたびたび悪魔が訪れている（しかもやたらと魔王クラスが多い）ので、少女は目立ってこそのものの騒ぎにはなっていない。これで立っているのが裸マントの筋肉ライオンならば職務質問の嵐だろうが。

「アタイにはわかるよ、これが友情の力ってヤツだね。断じて都合主義とかじゃないよ」

何やらよくわからないことを言いながら少女は不適な笑みを浮かべ、

「さて！ それじゃ不良らしく挨拶しに行くかね！」

意気揚々と隊舎に入っていた。

「え？ アタシに客？」

食堂に入って早々受付から届いた連絡に、アサギは目を丸くする。

「また珍しいこともあるもんね…」

何が珍しいかと言えば『客が来ること』ではなく『まともに来ること』が珍しいのである。今までは基本的に時空ゲートやら何やらで

突然現れていたのだが。

ほどなくして件の人物、もとい悪魔がやってきた。

「よっ、久しぶりだねアサギ！」

「ベリル！ 久しぶり〜！」

「お久しぶりです、ラズベリルさん」

「おや、フロンもいるのかい！ こりゃすごい偶然だね」

顔見知りのアサギやフロンと二言三言話し、少女——ラズベリルは他のメンバーの方へ向き直る。

「自己紹介が遅れたね。アタイはラズベリル。魔立邪悪学園の凶師さ」

魔立邪悪学園——とある魔界に存在する、立派な悪魔を育むための学び舎。無秩序に増改築が繰り返された校舎内はジャングルや火の海、カラクリ部屋があるなどもはやダンジョンと化しており、理事長（Ⅱ魔王）でさえその全貌は把握できていない。なお、前述の『凶師』は誤字ではなく、邪悪学園の教師のことである。ちなみに生徒は『生屠』と書く。

「ベリルだったらまともに入ってきたのも納得ね」

「人様の所へ行く時は土産持ってちゃんと手続きしてからってのが不良の基本だからね。つーわけでコレ、暗黒まんじゅうと〇っぱいプリン」

土産を渡すラズベリルに、なのはが疑問を呈した。

「どうしてそれが不良なの？ むしろいいことだと思うけど……」

「魔界は天界や人間界とはいいいことと悪いことの概念が逆なんだよ。例えば人間界じゃ五分前行動が基本だけど、魔界じゃ三十分後行動が基本、みたいだね」

これは当然邪悪学園にも同じことが言える。遅刻やサボりが多いほど優等生となり、それに準じて凶師もサボることが多々あるので、授業時間中に教室、もとい凶室が空っぽということはザラである。

「んでベリル、何でまたこの世界に？」

「襲学旅行だよ。人数はアタイ含めて四人だけだね」

「また随分と少ないのう……」

「目立たない上に危険な場所に何枚かビラ貼っただけだからね。今のご時世、情報は待ってて手に入るもんじゃない。自力で手に入れないと」

割ともっともらしいことを言うラズベリル。

「気付いてはいるけど興味が無いってヤツもいるのかもしれないけどね。四人中生屠は一人だけだよ」

「それもう修学旅行じゃねえだろ……」

「だが、その数少ない情報を得て参加できたということは、相応の実力があるということか？」

呆れ気味のヴィータとは対照的に、シグナムはその生屠の実力に興味を示している。

「まあそうだね。アイツはかなり強い。おまけに自他共に認める戦闘狂だ」

「あゝ、大体誰か検討ついた。……噂をすれば何とやらって、ねっ！！」

言うと同時に振り向き、アサギは天井に向かって発砲した。銃弾は天井に達する前に弾け飛んだが、天井には穴があいている。それはつまり、天井裏から誰かが撃ったということ。

「腕は落ちていないようだな、アサギ」

天井板を外し、銃撃の張本人が下りてきた。長い金髪を一つに纏め、赤い軍服に身を包んだ、闘気の塊のような眼光鋭い長身の女性だ。

「相変わらずね、サルバトーレ」

「当然だ。私は戦闘狂だからな」

苦笑しながら言うアサギにそう答え、女性――サルバトーレは一同に視線を向ける。

「人間になど期待はしていなかったが、なかなかいい面構えの連中が揃っているではないか」

満足げに見渡し、そしてシグナムと目が合った時、

「――！」

一瞬だが、二人の闘気が爆発的に膨れ上がった。

（ああ、スイッチ入ったなこりゃ）

付き合いの長いヴィータはすぐに悟った。というか、ここまであからさまだと誰でもわかる。

「何か初っ端からハジけまくってるみたいだね……。アサギが言ったけど、コイツがサルバトーレ、通称『極上のサルバトーレ』。邪悪学園の三号生で、『伝説の十紳士』っつーバカ強い十人の内の一やさ」

「昔の話だ。あのボンクラ共とはもう縁を切っている」

伝説の十紳士——魔神クラス以上の者が揃う三号生の中で、凶師すら凌駕する力を持つ十人の生屠の総称。三号生自体がめったに姿を現さないため、長い間都市伝説とされていた。余談だが、紳士と言いながら十人中四人が女性だったりする。いつぞやサブタイトルに名前だけ登場した『さわやかさったん』も十紳士の一人である。

閑話休題。

「それはそうと、来るのは残り二人らしいが嬢ちゃん、その中に料理人兼格闘家はいたりしねえかい？」

いつも通り突然現れた——ここが食堂であることを考えればいても不思議は無いが——ジェムがラズベリルに尋ねる。

「ああ、いるよ。もうそろそろ来ると思うけど……、知り合いかい？」

「俺の予感が正しければ、な。……三十年ぶりか、懐かしいな」

予感と言いつつも、確信と期待に満ちた表情で呟くジェム。

「……あれ？　いつの間に？」

その時、スバルがテーブルの上に置かれた肉まんに気付いた。この肉まん、やたらデカイ。軽く見積もって一メートル半はある。

ほんの数秒前までは無かったというのに、まるでジェムのように唐突に現れ、そこに鎮座している。

「来たか……！」

ジェムが喜びのこもった声を上げた瞬間、

「キャー！？」

肉まんが強烈な光を放ち、

「とあああっ！！」

中から何かが飛び出してきた。

「感じるぞなもし……。懐かしい、友の気を……」

それは、袖口の広い中華風の赤い服を着た男。逆立った金髪と同色の長いもみあげが獅子を彷彿とさせる。

「チャンプル！」

「うむ、久しいなジェムよ。息災のようで何よりぞなもし。……一部枯れ果ててしまっているようだが」

「ほっとけ！！」

軽く挨拶を交わした後、頭部に切なげな視線を向ける男——チャンプルに、微苦笑を浮かべながらツツコむジェム。

「この人が、オッサンの言ってたダチか？」

「ああ、そうだ」

アデルの問いにジェムが答え、チャンプルが一步前に入る。

「うむ！ 良き目をした若人達よ！ 拙者は魔立邪悪学園家諦科凶師、そして強火流混沌派厨房拳師範、チャンプルぞなもし！」

チャンプルが名乗りを上げると彼の背後で爆発が起こり、炎の獅子が雄叫びを轟かせた。

「……何と言うか、もの凄くキャラの濃い男じゃな」

「邪悪学園の凶師は大体こんなもんだよ」

ちなみに、ラズベリルとチャンプル以外の凶師は夜魔族の魔チコ、樹巨人族の禁八、ガンナーのトウゴウなど、（著作権的な意味で）フリーダムな連中が揃っている。

「さてジェムよ。お主のこと、三十年の間に腐ってしまった、などということはあるまい？」

「当たり前だ。この三十年で髪は減っちゃったが、腕の方は深みを増していると自負してるさ」

「うむ！ その心意気や良し！ では行くぞなもし！ 我等が聖地にして戦場、厨房へ！」

妙なテンションの高さを維持したまま、チャンプルとジェムは厨房へと跳んでいった（誤字にあらず）。

「あと一人……。ベリル、やっぱりアイツ？」

「多分アサギが考えてるとおりだと思うよ」

「なら普通に出てくるわけではない、か」

軽く身構えるアサギ。彼女の予想する人物は、サルバトーレやチャンプルとは違うベクトルでブツ飛んだ男。身も蓋もない言い方をすれば変態である。

そして少しして――

「もう全員揃っているようだな」

学ランをマントのように羽織り、大きな丸い眼鏡をかけた白髪の少年が扉を開けて入ってきた。

「えゝ……？」

「何だその残念そうな顔は？」

「何で普通に入ってきたの、マオ？」

訝しげな表情の少年、邪悪学園理事長マオ――原作主人公なのにこんなにあっさりした説明でいいのだろうか――にアサギが尋ねる。

「おそらく我がとんでもない方法で入ってくれているだろうからな、裏をかいてあえて普通の登場を――」

「それもうベリルがやったから」

「何……だと……？」

セリフの途中で事実を突き付けられたマオは愕然とし、次いで悔しそうに表情を歪めた。

「くっ……！ 我としたことが計算を誤るとは……！」

「スベっちゃいまいたね、マオさん」

地団駄を踏み出さんばかりに悔しがっているマオの後ろで苦笑して

いるのは眼鏡をかけた女性、デバイスマイスターのシャーリーこと
シャリオ・フィニーノ。無論人間であり、魔界出身者ではない。

「いやちよつと待った。アンタらいつの間に仲良くなったの？」

「お互いに意見交換して意気投合したんですよ」

「そしてこれがその時勢いで作った我とシャーリーの合作だ」

マオが突き出した手のひらの上には、膨大な魔力が秘められたドクロ型のペンダントが乗っていた。

第52話..話進むたび、ゲストが増えるね♪すいませんもうネタが無い

次回はマッド二人の交流です。

第53話..混ぜるな危険!! (前書き)

Playstation Storeが再開されましたね。『デイスガイア4』をお持ちの皆様は是非とも高解像度の『ニュー・アサギ』をお買い求めください! 百円です!

第53話..混ぜるな危険!!

ラズベリルが食堂を目指していた時、

「ふむ、これがデバイスというヤツか。興味深いな」

デバイスルームにて、マオはストレージデバイスを展開したり戻したりを繰り返していた。

「同じ魔法と科学の融合と言っても、魔科学とは大分違うようだ」
「こっちは科学がベースですからね」

正確には魔科学も人間界から流入した科学技術を基礎としている。もっとも、長い歴史の中で進化を続け、現在では純科学ともミッドチルダの魔法技術とも異なるものとなっているが。

「おお、そうだ。デバイスと言えは……」

何かを思い出したように呟き、懷からノートパソコンを取り出すマオ。

「我なりに魔科学で再現したデバイスの設計図を描いてみたのだが」
「え!?! マオさんデバイス設計の知識あったんですか!?!」

「いや、待機状態と展開状態があることくらいしか知らん。要はBLEACHの斬○刀とかD○レのイ○センスみたいなものだろう?」

「間違っではいませんけど、その発想で設計図まで描けちゃうなんて、魔科学って一体……」

改めて魔界の何でもあり具合を認識しつつ、シャーリーは画面を覗

き込む。

「凄い……」

そこには、初心者のもとは思えないほど精密な設計図が描かれていた。所々わからない単語はあるが、総合的なスペックは既存のデバイスより上であろうことはわかる。若干の悔しさと、それを上回る感動を覚えるシャーリー。

「あ、ここをこうすれば……」

しかしそこはプロ、マオでは気付けなかった穴を見つけ、手を加える。

「おお！ そんな手があったのか！ ……うむ、では次にここをこうしてみよう」

「なるほど〜！ じゃあじゃあ、さらにここを……」

こんな感じで手を加え続けること数分。

「考え得る限りでは最高のスペックだな」

「はい、理論上は完璧です」

手直しに次ぐ手直しにより、最高の一品を作り出せる設計図が出来上がった。では何故制作に入らないのかというと、

「……並みの材料で作ったら確実にブッ壊れるよな、コレ？」

「……ええ、120%間違いなく」

そう、最高であるが故に、一般的なデバイスの材料ではその出力に耐えられないのだ。耐えられるような材料を一から揃えるには凄まじい費用がかかる。それ以前に届くのがいつになるかもわからない。

「くそう、もどかしいな……。ここまで来てお預けとは……！」

マオが苛立たしげに頭を掻き耑っていると、

「ほっほっほっ……。お任せください、ぼっちゃま」

彼の足下、影の中から一人の老悪魔が、湧き出すようにして現れた。くすんだ白髪に同じく白く長い髭、知的な眼鏡に黒いスーツといかにも執事なこの男、実際マオの執事であり通称じいや。予知能力があると思えないほどの用意周到さを誇る敏腕執事だ。

「こんなこともあろうかと、宇宙屈指の高級素材やレアアイテムを用意しておきました」

じいやが指を鳴らすと同時に、机の上に幾つもの武器、防具、鉱石が出現する。いずれもなかなかお目にかかれない高級品ばかり。

「でかしたぞジイ！ よし、さっそく制作開始だ！」

「はい！」

「「ハア……、ハア……！」」

「ほっほっほっ……」

デバイスルームに二人の荒い息遣いと、じいやの満足げな笑い声が響き渡った。

「――とまあそういうわけだ」

場面は戻って食堂。テーブルの上には大量の料理が乗っている。多すぎるように見えるが、スバルとエリオはもちろんのこと、ラズベリルもまた相当な大食家なので問題は無い。

「それで、だ。親善試合という名目で起動テストを行おうと思う」
「名目って……。全く隠す気無いのね」

欲望ダダ漏れのマオの言葉。そして、ダダ漏れなのは彼だけではなかった。

「そうだな。強者と切磋琢磨するのは良い経験になる」
「その通りだな。是非そうしろ」

目をギラつかせながら同調するシグナムとサルバトーレ。断ったら即座に襲い掛かってきそうな雰囲気だ。

「まあいいんじゃないのかい？ 熱い思いと力をぶつけ合う、それが青春ってモンさ」

「思いつていうか、欲望だと思うんだけど……」

何はともあれ、邪悪学園と機動六課による親善試合（？）が行われることとなった。

第53話..混ぜるな危険!! (後書き)

次回、ひっさびさにアサギにまともな出番が来ます！

第54話：我らの（魔）科学力は宇宙一イイイイイイイ！！

Byマオ&...

今一つデバイスの性能を上手く伝えられなかった気がしますが、
もかくご覧ください。モチーフは日本一ソフトウェアのSRPGで
お馴染み、でも『デイスガイア4』には現状出ていないアイツです。

機動六課訓練場。マオとシャーリーの合作デバイスの性能上そのままだと崩壊の危険性があるので、現在シュミレーターによってゼタがインバイトしたリングが投影されている。

「まずは小手調べといくか」

マオが懐から取り出したのは刀身の無い剣、かと思いきや、本来刀身がある場所に光の刃が展開された。性能、ビジュアル共に高いローゼンクレーン商会オススメの一品、サンライズソードだ。
このサンライズソードはマオが独自に手を加えているようで、鰐の部分にデカデカと『改』と刻まれている。

「ああ、そうだ。アサギよ、実験ついでに一つ頼みがある」

「何？」

「お前を研究させてくれ」

「はあ！？」

いきなりのブツ飛んだ発言に狼狽するアサギに、息を荒げながらマオが続ける。

「ハアハア……、聞けばお前はプリニーから転生した人間だそうではないか！ その上人間としては破格の強さを持っている！ その間にどんな関連性があるのか？ それを考えると、ハアハア……！」

我はもう辛抱たまらんだ！ ハアハア……！！

「断る！ なんか身の危険どころか命の危険を感じるし！」

「ならば悪魔らしく力尽くで行くぞ！ ヒャッハー！！」

奇声を発しながらマオが駆け出した。

「うわっ!! ……マジカルバレットッ!!」

「無駄無駄無駄無駄ア!!」

高速の突きで星型弾を難なく破壊していくマオ。アサギは右の666カスタムでマジカルバレットを撃ちつつ、左腕を斜め上に向ける。

「アサルトッ!」

左の666カスタムからトゲ鉄球が撃ち出され、

「ストームッ!!」

続けて太い光線が発射された。それは幾条にも別れ、トゲの先からマオに向かって雨のごとく降り注ぐ。

「ほう! 面白い技だ!」

楽しい声上げたマオがサンライズソードを翳すと、刀身が盾状に変形した。光線は全て光の盾に阻まれ、霧散する。そこに、

「ぬおっ!?!」

滞空していたトゲ鉄球が高速回転しながら落下してきた。

「せりゃあああああああ!!」

さらに撃ち出されたアサルスターが迫る。押し留めているトゲ鉄球を楔に光の盾を貫通するであろうその攻撃を前に、マオは焦るこ

となく右手に魔力を溜め、前方に突き出す。

「弾けろ！ 五指爆星！！」

彼の指先から放たれた五つの光弾が、二つのトゲ鉄球を爆散させた。

「輝け——」

五指爆星で使用した魔力はその名の通り五指に溜められた分のみ。手のひらに溜められた分は無数の光線となり、アサギに殺到する。

「閃光抹殺ビームッ！！」

「リフレクトレイツ！！」

互いの撃ち出す光線を水晶体で、あるいは光の盾で反射していく二人。もはや視覚はあてにならず、魔力知覚だけが頼りとなっている。

「飛天双翼——」

「ダーク——」

全ての光線が相殺され、マオは光の翼を展開して宙へ舞い上がり、アサギは霊素を結合させてレンズ状の物体を作り、太陽光を右の66カスタムへ照射した。

「降臨の太刀！！」

「フィラメント！！」

光の刃と黒い光線が激突し、火花を散らす。魔力が強く高さの利を活かしているマオが徐々に押し始めるが、

（——いかん！！ この状況は……！！）

実際のところ、危険なのは自分の方だとマオは気付いた。両手で剣を握り振り下ろしている彼に対し、アサギは右手だけを使っている。つまり彼女は追撃をかけることができるということだ。現に、左の666カスタムの銃口はマオに向けられている。回避しようと動けば拮抗が崩れ、ダークフィラメントの餌食になるだろう。

「く——！！」

「アサルトスタアアアアッ！！」

そして、トゲ鉄球の一撃が、マオを弾き飛ばした。

「ふう……、一瞬の躊躇いもなく顔面を狙ってくるとは……。私の眼鏡がオリハルコンとミスリルクオーツ製でなければヤバかったぞ」
上手く着地したマオが、眼鏡を押し上げつつ呟く。

「あ……、狙う位置調節してる余裕なくて……。……てかどうだ
けお金かけてんの眼鏡に！？」

「フッフ、授業料を着服すれば造作も無いことだ！」

とんでもない問題発言だが、魔界なので問題は無い。良い理事長だろうと悪い理事長だろうと、人間界にお住まいの方はくれぐれもマネしないでいただきたい。

「いやしかしこれほどまでに力を付けていたとはな。ハアハア……！
！ ますます興味が湧いてきたぞ！ ハアハア……！ 私の脳内は
もうアドレナリンの嵐だ！」

疲労ではなく興奮で息を荒げながら、ドクロ型のペンダントを取り出すマオ。

「そろそろコイツを使うとしよう！ シャーリー！ 記録の準備はできているな？」

「バッチリですよー！」

シャーリーの返答に、マオは満足げに頷く。

「うむ！ ではいくぞ！ 『ボール』、セットアップだ！」

マオの言葉に呼応するようにデバイス――ボールから膨大な魔力が溢れ出し、彼の体を包む。

そうして現れたのは、二本の太い角を生やした兜に、くすんだ水色の鎧を纏ったマオ。

「セットアップは問題無く成功したようだな。いや素晴らしい！ 力がみなぎってくるぞ！」

「そりゃみなぎりもするでしょうよ……。何つー魔力よコレ……」

魔王というだけあって、もともとマオの魔力は強い。それがボールをセットアップした瞬間にさらに強大になったのだ。その強さ、何とゼタと同格かそれ以上。

「さあ第二ラウンドだ！ かかって来るがいい！！」
「全く勝てる気がしないんだけど……」

言いながらも、ウインドで加速させ回転を加えたアサルトスターを撃ち出す。マオはサンライズソードを持っていない左手を軽く握りゆっくりと前に伸ばし、

「ハアッ!!」

裂帛の気合いと共に人指し指を跳ね上げた。いわゆるデコピンである。本来なら攻撃とも言えないようなその一撃で、アサルトスターはトゲをへし折られ明後日の方向へ飛んでいった。

「な……!」

「フフフ! さあ、次はこちらから行くぞ!」

マオの不敵な笑いにアサギが身構えた時、

「不良心得その3! 漢凶保護!!」
かんきようほまじ

マオを取り囲むように五匹のコブラが現れ、名前に反して環境を破壊しそうな毒々しい煙を吹き出した。そして彼の視界が煙に覆われている間に、一メートルはある本を抱えたラズベリルがアサギの前に降り立つ。

「ベリル?」

「ダチのピンチを見過ぎしちゃあ不良の名が廃るってね! アタイも参戦させてもらうよ! 事後承諾になるけど、いいかいマオ?」
「構わんぞ。長く持ち堪えてくれたほうが良いデータが取れるからな!」

ウインドで煙を吹き飛ばし、コブラを切断しながらそう答えるマオ。

「それじゃ行くよっ! ムーブアップ!!」

強化魔法により機動力を上げ、アサギとラズベリルはマオの周囲を

縦横無尽に動き回り攻撃を仕掛ける。対してマオは大きく動くことはせず、降り注ぐ銃弾や氷塊を捌いていく。

「正面からのぶつかり合いを避けての攪乱を選んだか。妥当な判断だ、だが甘い！」

魔力を溜めた右手を真上へ突き出す。縦横無尽に動く相手ならば、同じく縦横無尽の軌道を描く閃光抹殺ビームでその動きを阻害できる。

マオの右手から光線が放たれた。

「その技いただきっ！！」

「何！？」

その瞬間、本を開いたラズベリルが飛び出してきた。光線はその推進力でラズベリルを押し飛ばしながらも、拡散することなく本の見開きに描かれた魔法陣に吸い込まれていく。

「私の攻撃を吸収した！？ 初めからそれが狙いか！！！」

「へへっ、そういうことさ！ 不良心得その4！ リサイクル 利災繰流！！！」

ラズベリルが魔法陣に手を当てると、本に吸収されていた魔力が彼女の中に流れ込んでいった。

「くうっ……！ もの凄い魔力だね、体が弾け飛びそうだよ……！
でも今がチャンス！ 行くよ！ 魔チェンジッ！！」

あまりにも強大な魔力に胸を押さえ呻き声を漏らしながらも、ラズベリルは剣に変身しアサギの手に収まる。

《アサギ!! 一気に決めな!!》

「はいよっ!!」

正面に展開された魔法陣に突き刺すように、アサギはラズベリルの切っ先をマオに向けた。すぐさま飛び退こうとするマオだが、誰かに足を掴まれているかのようにつんのめってしまう。見れば、左の足首に鎖が巻き付いていた。その端は、左の666カスタムの銃口に繋がっている。

「いつの間に!?! いやあの時か! ベリルにばかり気を取られすぎた!」

気付いたものの時すでに遅し、魔法陣が強く輝く。

「《超不良ストリームッ!!》」

ラズベリルから放たれた薄紫の業火がマオを呑み込んだ。

《決まったね》

「問題はどの程度効いたかだけど……」

《吸収した魔力が魔力だから、威力はとんでもないことになってたよ。それこそ、普段のマオなら耐えられないくらいにね。ただ、今は装備がアレだから……》

やがて砂埃が晴れだし、マオの姿が現れ始めた。

「今のは、驚いた……」

「なっ……!!?」

《嘘だろ!?!》

アサギとラズベリルが驚愕の声を上げる。

マオは両足でしっかりと立っており、その体を覆う鎧には掠り傷一つ付いていなかった。全くの無傷である。

「さすがに焦ったぞ。一瞬成仏したはずのオヤジが見えたくらいだ」
疲れたように頭を振るマオ。肉体的にはノーダメージでも精神的には割とキツかったらしい。

「とはいえ、結果的に防御力の高さも実証できた。そして――」

足に絡み付く鎖を斬り裂きアサギに肉薄、ラズベリルを弾き飛ばしサンライズソードを突きつける。

「これで、私の勝ちだな？」

「そりゃ、アレが効かないんじゃないもう打つ手無いしね」

「参った、完敗だよ」

アサギと、元の姿に戻ったラズベリルが軽く両手を振りながら言い、マオは楽しげに呵呵大笑した。

「フハハハハ！ 実に有意義な時間だった！ 実験は終わったがデータ解析に更なる改良、これからのことを考えると興奮が収まらない！」

その時、

「アサギちゃんを研究する、とか言ってたことは完全に忘れてるんだね……」

観戦席にいるのはが何の気なしに呟いた。

ほとんど無意識のようなもので無論他意は無く、そもそもその声量は訓練場まで届くような大きさではなかった。しかしボールに集音機能でも付いていたのか、それともマオが地獄耳だったのかバツチリ聞こえていたようで、彼の眼鏡が怪しく光る。

「おーっとそうだった！ すっかり忘れていたぞ！」

マオの背後からマジックハンドやドリル、ノコギリ、金槌などが付いたアームが何本も伸びてきた。それらは全てアサギの方を向いている。

「ヒヤア！！ 我慢できねえ！！ 研究だぁ！！」

「ちょ、待つ、ウボアー！！」

『ボール』の材料

- ・ バールホーン×2
- ・ バールボディ
- ・ バールアームズ
- ・ 馬のチ○チン
- ・ アルカディア
- ・ オリハルコン
- ・ 暗黒鉄鋼

他多数。総額約137億ヘル。

第54話：我らの（魔）科学力は宇宙一イイイイイイイ！！

Byマオ&

今回はもう少し早く投稿したいです。レポートも終わりましたし、『デイスガイア4』も一段落つきましたし。

【以下雑談】

はるるばる来たぜ修羅の国♪

そんなわけで楽にレベル上げできるようになり、閣下のレベルが9000を超えました。でも……、

ゼタ様が倒せない！

何だよレベル4000でHP2000万、装備抜きで他の能力90万オーバーって……。

第55話：闇より深きその執念！（前書き）

今回の話、

「カオスもパロも、あるんだよ」

「シリ阿斯なんて、あるわけない」

みたいな感じなので、予めご了承ください。

「こんなの絶対おかしいよ」

「わけがわからないよ」

と思われる方も多いと思いますが、

「作者って、ほんとバカ」

と生温かく見てやってください。次回は真面目です、多分。

第55話：闇より深きその執念！

惨劇から数分後、苦笑気味のラズベリルと肌がツヤツヤしているマオ、そして全体的にボロツちくなったアサギが観戦席へ上がってきた。

「あ、あの、アサギちゃん……」

躊躇いがちに声をかけるなのは。結果的に惨劇の原因となってしまうのだから、無理もないだろう。

「大丈夫大丈夫。全然気にしてないから」

当のアサギは笑顔でヒラヒラと手を振っている。本来ならば安堵すべきはずなのだが、何故かなのはは悪寒を感じずにいられない。

一方、アサギは変わらぬ笑顔のまま携帯電話を取り出し、何処かへと繋ぐ。

「もしもすいー、エトナすあーん？」

『あん？ 何よアサギ？ 気色の悪い声出して』

「いやー、なのはからエトナさんに伝言がありましたー」

ヤバイ、何かがとてもヤバイ、と思うものの、怨霊にでも取り憑かれているかのように動けない。

「『デコボコもオウトツもデッパリもくびれも無い、まな板で電柱な二次元ボデイのベストペタンカー』だそうです」

「外道？ 最高の褒め言葉よ！！」

ロザリンドの言葉に、アサギは黒い笑顔で親指を立て答える。心なしか、いや間違いなく黒いオーラが噴き出しているのが見える。

「原作主人公だからって優遇されると思ったら大間違いだっつーの！！むしろ容赦無く潰しにかかるからアタシは！！ 何の苦勞も無く主人公になるような人間も、予定通りに発売されるゲームも、第二期第三期と続くような人気アニメも大嫌い！！ みんな爆発しろ！！」

「……何か意味不明なこと言い出したけど、マオ、アンタ一体何したんだい？」

「いや、特に改造はしていないはずなんだが……。妙な化学変化でも起こしたか？」

「こ、これは……！！」

アサギの奇行にマオとラズベリルが首を捻っていると、右目を覆う液晶のようなものを付けたサルバトーレが驚愕の声を上げた。

「アサギの邪悪指数がみるみる上昇していく！ 200万……、500万……、1000万……、まだ上がるだど！？ ……くっ！」

限界を超えたのか、液晶が爆散する。アサギから噴き出す黒いオーラは大きさを増し、彼女の奇行はなおも続く。

「間違っているのはアタシじゃない、世界の方よ！ 故に壊し、再生する！」

「もの凄い悪意……。このままじゃ、『恐怖の大王』が発動してしまいます！」

『恐怖の大王』、それは、惑星そのものに組み込まれた一種のプログラム。悪意の量が規定値を超えると、最も強い悪意を持つ者を核に発動し、取り込んだ悪意を具現化させ、その惑星に住む生物を滅亡させるというシステムだ。有史以来八度の発動が確認されており、うち七つの惑星は滅亡している。

本来ならたった一人の人間の悪意で発動するようなものではないのだが、今のアサギは何故か一個人では有り得ないほどの悪意を生み出しているため、割とヤバイ。さりげなくミッドチルダは滅亡の危機に瀕していた。

「止めないと……！ アサギさん、少し痛いんですけど、堪えてください！」

「来年こそはアタシが主役よおおおおお！！！」

「とうっ！！！」

フロンはいまだ奇行を続けるアサギに接近、宙に打ち上げると、彼女の体を逆さまにし、首を肩口に当て両足首を掴んだ。そして自分の両足を前に伸ばし、尻餅をつくように急降下していく。

「天使長……バスター！！！」

「ゲエーッ！！！」

首と背骨、股に深刻なダメージを受け、アサギは意識を手放した。

これぞ48の殺人技……もとい天罰技の一つ、『天使長バスター』。他にも二対の翼を使ってより強固に相手をロックし破壊力を高めた『大天使バスター』や、頭から地面に叩きつける『天使長ドライバードッキング』などの派生技があるとか無いとか。

こうして、ミッドチルダにさりげなく訪れた滅亡の危機は、誰にも気付かれることなく過ぎ去った。

「さて……」

ここで今まで静観していたチャンプルが立ち上がる。最年長者らしく収拾させる――

「次は拙者が出るぞなもし。相手は誰ぞな？」

――などということはなく、目の前で繰り広げられていたカオスをまるつきり見なかったことにするつもりらしい。汚いな流石大人汚い。

「では、私がいこう」

名乗り出たのは人型状態のザフィーラ。

「ザフィーラいたのか？」

「……最初からな」

ヴィータの何気ない一言は、エトナの槍よりも深くザフィーラの心に突き刺さった。しかしそこは盾の守護獣、そんな様子は微塵も出さない。泣いてなんかいない。

「構わぬか、料理長？」

「ああ。俺がやりてえのは山々だが、今のチャンプルと本気でド突き合うのはちっとキツそうだからな。いい勝負を見せてくれや」

「うむ、おぬしの技と心、しかと味わわせてもらうぞなもし！」

そして二人は訓練場へと跳び移る。

「では始めようか。魔立邪悪学園、家諦科凶師チャンプル」
「ヴォルケンリッター、盾の守護獣ザフィーラ」

「「参る（ぞなもし）！！」」

第55話：闇より深きその執念！（後書き）

何かもう恒例になってる気がするデイスガイア4絡みの呟き。今回は……、

「プレネールさんが高性能でアサギの出番が消滅」

これに尽きます。同じガンナータイプでHITとSPDの装備適性がどちらもプレネールさん＞アサギ。しかもプレネールさんの固有技『ウサ・ラッシュ』の射程は驚異の前方九マス！ わかりやすく言えば一文字スラッシュの三倍（予備動作エリア無し）です。

あと46話で『さん付け必須』とか書きましたが、あれ公式みたいです。

閑話休題。

次回はいいよ、ザファイラ・オン・ステージ！！

第56話..狼獅激突!! (前書き)

ちよくちよく新作を載せたり消したりを繰り返していたのですが、考えが纏まらず混乱してしまっているので、完結するまで連載小説はこの作品一本に絞ることにしました。完結後に改めて、今まで潰してしまったネタも合わせて練り直し、新作の案を考えることにします。

さて、前回は少々悪ふざけが過ぎましたが、今回は真面目です。

第56話..狼獅激突!!

「ておあああああああ!!」

「せあああああああ!!」

ザフィーラとチャンプル、それぞれの拳が幾度もぶつかり合う。押し合いで不利と見たチャンプルが拳の重心をそらしてザフィーラの懐に潜り込み、肘打ちを放つが、あえなく障壁に阻まれた。

「であっ!!」

「ぬんっ!!」

次いでザフィーラが放った蹴りをチャンプルは同じく蹴りで受け、その反動で後ろへ飛び退く。

「下拵えはここまで……。まずは前菜、行くぞなもし！」

チャンプルは一気にザフィーラに接近すると、彼が繰り出した正拳突きを大きく体を後ろに倒し回避、両手を地面につき両足を曲げ、腕力だけで体を持ち上げた。

「千蹴り脚部突っ!!」

突きのような怒涛の連続蹴り。とても捌き切れるものではなく、ザフィーラは障壁を張るが、

「ぐ、うつ……!!」

一ヶ所に集中して放たれているチャンプルの蹴りによって障壁は軋

み、小さくヒビが入り始めた。

「でえい!!」

一際大きな蹴りを放ち、地面を押し飛び上がるチャンプル。ギリギリ持ち堪えたザフィーラがそれを撃墜しようと氷塊を撃ち出す。

「鷹ノ爪鞭撃っ!!」

氷塊を蹴り飛ばし、チャンプルが腕を鞭のようにしならせ、ザフィーラの左肩あたりに手刀を打ち込んだ。

「ぐおおお!!」

広範囲に広がるような鋭い痛みが走る。予想外のその痛みに、ザフィーラは思わずのけ反ってしまった。その隙を見逃さず、チャンプルは連続で同様の技を叩き込む。

（障壁を……、いやダメだ。この距離では十分な強度になる前に他の技で突破されかねん。ならば……）

「ぬっ?」

チャンプルが訝しげな声を上げた。手ごたえに違和感がある気がしたのだ。

（障壁? いやそれはない。そんな硬い手ごたえではなかったぞなもし）

疑問を感じながらも攻撃の手を休めない。そして、技の反動で左手

が跳ね上がり、次なる攻撃のために右手を振り上げた時、

「でああああああっ!!」

「ぐぬうつ!!」

ザフィーラの拳が、ガラ空きになったチャンプルの胸に叩き込まれた。大きく弾き飛ばされたものの、すぐに体勢を立て直すチャンプル。

（これは……!　そういうことか……）

冷静に観察し、彼は気付いた。ザフィーラの全身を覆うように魔力の膜があることに。

鷹ノ爪鞭撃はその名のとおり、鞭のごとく相手の体の表面に激痛を与える技。故に全身を障壁なら障膜で覆ってしまえば無力化できる。もっともそれは理屈の上の話であり、中途半端な膜では簡単に突破され、硬すぎれば自分の動きを阻害してしまう。障膜は、誰よりも防御に深く精通したザフィーラだからこそ扱える技と言えるよう。

（鷹ノ爪鞭撃はもう通じぬぞな……。ならば正攻法!）

両手に炎を纏わせ、チャンプルはザフィーラに向かって疾駆する。

（アデルと同じタイプの技か!）

一方ザフィーラは冷気を纏った拳で応戦する。

「ぬんっ!!」

「せあっ!!」

拳がぶつかるたびに、水蒸気が噴き出す。視界が不明瞭になれども攻防は止まらず、炎と冷気は勢いを増していく。

（今ぞなもし！）

チャンプルが大きく飛び退いた。膨れ上がった両手の炎が獅子をかたどっていく。それを見たザフィーラもまた、大気中の水分を凍結させ始める。

「轟炎獅子投炒め！！」

「氷狼凍牙！！」

炎の獅子と氷の狼が互いの首筋に喰らい付き、膨大な量の水蒸気が発生した。文字通り身を削りながらも二体は一步も引かない。

（これは、少々不味いぞなもし……）

このまま拮抗が続けば、ほどなくして互いの技は相殺されるだろう。そうなれば、周囲に水蒸気が充満しているこの状況では水の技Ⅱ水霊素を使うザフィーラが圧倒的に有利になる。

「ならば裏メニュー！
獅子身中包焼鬼！！」

獅子の腹のあたりから、鋭い一本角を持つ甲虫が赤熱しながら飛び出し、狼を貫通しザフィーラに向かって突進した。

「くうっ！」

とっさに障壁を張るザフィーラ。角の先端が僅かに貫通したものの、

それ以上は進まず甲虫は霧散した。

「なんと!? ……ぬおう!」

ザフィーラの反応の速さと障壁の強度に驚愕しながら、チャンプルは自身の上下から迫る氷の牙を辛くもかわす。

（驚いた……! 多彩な上に頑強なこの防御、盾の守護獣の名に偽り無しぞなもし!）

獅子身中包焼鬼はチャンプルの数少ない飛び道具にして、最も貫通力の高い技。それをとっさの防御で抑え込まれるとは思いもしなかった。

（さて貫くのが無理となると、やはり防御の暇を与えぬよう畳み掛けるしかないぞな。ならば、諸刃の剣たるアレしかないか……）

思案しながらも油断無く見据える先には、拳を構えたザフィーラの姿が。どんな技でも受け切ってみせるという意志がありありと伝わってくる。

フツ、とチャンプルの口元が自然と笑みを形作る。

（これほどの猛者に全力を出さぬなど無礼の極み!）

チャンプルの両手が激しく燃え上がり、彼の全身を包んだ。

「これがメインディッシュぞなもし!」

炎が凝縮され、獅子を模した灼熱の鎧となる。高熱による体力の減

少と引き換えに、爆炎による推進力と破壊力を得る強火流混沌派厨房拳奥義。その名も――

「獅子火化武ッ!!」
シシカバブ

一瞬でザファイラに肉薄したチャンプルが疾風怒濤の勢いで連撃を打ち込む。さすがのザファイラも満足に障壁を張れず、ガードが徐々に開いていく。

「ぬおおおおおおおっ!!」
「があっ……!」

そしてついに、チャンプルの拳がザファイラの腹に叩き込まれた。同時にチャンプルの背にも衝撃が伝わったが、獅子火化武は強固な鎧の役割も果たす技、拳一発で碎けたりはしない。

その筈、だった。

「な……あ……!?!」

彼の背に、直に拳がめり込んだ。困惑する彼の耳に、水分が蒸発する音が届く。

(そういう……ことか……!)

確かに『拳一発』では獅子火化武は碎けなかった。障膜に覆われた氷柱が楔となり、ヒビを入れたのだ。無論すぐに障膜は破れ氷柱は一瞬で蒸発したが、それ故に拳は勢いを失わず獅子火化武を粉碎し、チャンプルに直撃。

攻撃は最大の防御と言うが今回はその逆、防御のための技が、攻撃を最大に活かす布石となった。

（このような隠し味があるとは……、あいや見事……！）

獅子火化武が消滅し、ザファイラとチャンプルは同時に倒れ伏した。

第57話：諸君、私は戦闘が好きだ。諸君、私は戦闘が大好きだ。殲滅戦が好き

戦闘シーンがなかなか思い付かなかったので、短い繋ぎの話をば。

サブタイトルの元ネタはとある漫画の演説から。そちらは『戦闘』ではなく『戦争』ですが。

第57話：諸君、私は戦闘が好きだ。諸君、私は戦闘が大好きだ。殲滅戦が好き

「いや、いい勝負だった！ 昔を思い出すな……」

ジエムを始め、観戦組が静かに感動している中、チャンプルとザフイーラは互いに肩を貸し合いながら戻って来た。

「実にいい勝負を見せてもらった。そしてようやく私の出番か……。フッフ、全く焦らしてくれる……！」

闘気を通り越して殺気になりつつある空気をクジラの潮吹きのごとく噴出しながら、サルバトーレがゆらりと立ち上がる。同時に彼女の足下に魔法陣が展開され、何かがせり上がってきた。

黒を基調にところどころ炎のような装飾が施された、禍々しい銃剣。と言ってもかつて日本で使われていた銃の先端にナイフを付けたものではなく、ライフルの銃身に刀をくっつけたような外見だ。

オーダーメイドで作られたこの武器、画期的な策の数々で名を揚げた人間界の戦士にあやかって『六天魔王』と名付けられている。

六天魔王を手を持ち、訓練場へと跳び移るサルバトーレ。

「では私も行くとするか」

彼女ほどではないとはいえ、こちらまで戦いたくてウズウズしていたシグナムが後に続く。

「アサギとの再戦だけを楽しみにしていたが、まさかヤツと同格かそれ以上の者と戦えようとは！ まったく僥倖、久方ぶりに退屈か

ら脱することが」

「フフ、『極上』と称されるほどの悪魔にそうまで言われるとは光栄だな。……しかし退屈ならばどこかの魔王に挑むという選択肢もあったのではないか？」

「挑んだとも。だが新しく探し当てた魔界に乗り込んでみれば、治めているのは取るに足らぬ雑魚魔王ばかり。さりとて既に知っている魔王は、私では手も足も出ぬほどの実力者揃い。身内と本気で死マオ合うわけにもいかんしな」

ちなみに六天魔王の製作費は、襲撃した十数の魔界から巻き上げた戦利品から賄われている。被害を受けた魔王の皆様には、某キングダークのようにしぶとく逞しく生きてもらいたいものである。

一方、観戦席。

「うーん……。あれ？　もうチャンプル先生の出番終わったの？」

天使長バスターで撃沈していたアサギが復活した。

「何かマオに負けてからの記憶が無いんだけど……？　あと首と背中と股が殺人技をかけられたみたいに痛い……」

「き、きつと寝相が悪かったんですよ！」

滝のような汗を流しながら苦しい言い訳をするフロン。それでいいのか天使長。

「と、ところで、サルバトーレさんはやっぱりお強いんですか？」
「うん、かなり。前にやり合った時はアタシが数秒先に倒れて、でもサルバトーレ自身が納得いかないって言って一応引き分けてことになったけど」

「趣味で軍事訓練やったり暇潰しで魔王と戦いに行ったりするヤツだからね。あん時よりもっと強くなってるよ」

趣味で軍事訓練、というのは一見常識外れに思えるが、人間界にも趣味がトライアスロンという高校教師がいるので、悪魔の肉体の頑丈さを鑑みれば案外おかしくはないのかもしれない。

「む、そろそろ始まるぞな。皆、刮目して見るぞなもし」

チャンプルの言葉を聞き、一同が訓練場の方へ注目する。

「今まで生きてきた二千六百余年の中で、これほど血が滾るたぎのは初めてかもしれん！ 手加減などするな！ 全力で来い！ いや、限界すらも超えてみせろ！！」

「言われるまでもない！！」

サルバトーレが六天魔王を、シグナムがレヴァンティンをそれぞれ構えた。

「魔立邪悪学園三号生、極上のサルバトーレ」

「ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム」

「「参る！！」」

第57話：諸君、私は戦闘が好きだ。諸君、私は戦闘が大好きだ。殲滅戦が好き

ここで書くのもあれな気がしますが、本作でヴァルバトーゼが強い魔力を持っているのは、アルティナEND後で魔力が復活しているから、という設定です。なお、本作に登場する主人公達の強さは、

ゼタ＞殿下≧閣下＞マオⅡアデル

となっています。

前回は無かったけど今回はあるよ！ DLCの話。

『史上最強のツンデレ』ことギグ様、固有技の範囲が広くてレベルが上げやすいのですが、何より印象深いのは魔チェンジ技のカッコよさ！ 閣下に使わせるのが特にオススメ！

これから先は果たして誰が来るのか？ プラムは確定しているそうです。大女優は多分来るでしょう。個人的にはキングダークに来てほしかったり。

第58話：戦闘狂のお姉さんは好きですか？

あ、でも二人ともお姉さんって

随分遅くなりましたが、どうぞご覧ください。

第58話：戦闘狂のお姉さんは好きですか？

あ、でも二人ともお姉さんって

レヴァンティンと六天魔王が高速でぶつかり合い、連続した金属音をたてる。

「紫電一閃！！」

「竜巻破裏剣！！」

猛火と竜巻をそれぞれ纏った斬撃が激突、衝撃で両者が後ろへ跳んだ。即座にサルバトーレは水晶体で覆った六天魔王の銃口から、四方八方に銃弾を撃ち出す。空中に現れた水晶体で向きを変えたそれはシグナムに降り注ぐが、炎の膜に阻まれ届かない。

この炎の膜は障壁を変換させたもの。シグナムはシャルやザフィーラに比べると防御系魔法が不得手なので、貫通性の高い銃弾を障壁で止めるのは難しい。故に炎によって相殺させたのだ。

「はっ！」

「ふっ！」

一気に距離を詰めたサルバトーレが放った突きをシグナムは刀身で受け止め、

「せああっ！！」

「せいっ！」

続けて放たれた蹴りを、跳ね上げた鞘を障壁で固定し受け止める。

「むっ……！！？」

「てあああっ！！」

ウインドにもう片足を掬われ体勢を崩したサルバトーレにシグナムが斬りかかった。そこにプリニー型の手榴弾を投げ込み、爆風で自らを吹き飛ばし切っ先をかわすサルバトーレ。

「出でよ、無限剣の墓標」

声に呼応し無数の禍々しい剣が、墓標のごとく地面に突き刺さった状態で現れる。サルバトーレは剣の一本を蹴って飛び上がり、その上に乗った。

「これは炎では防げんぞ……」

ギガウインドに巻き上げられ、回転する数十本の剣。遠目から見れば花のように美しいが、至近距離から見えるのはそんな風情も粉碎する斬撃の嵐。

「豪禍剣嵐!!」

「シュランゲフォルム!!　メガウインド!!」

自身に向かって突き進む剣の嵐を、シグナムは自身を覆うように連結刃を展開、メガウインドで速度を緩和させ防御し、さらに先端部分を伸ばしてサルバトーレに反撃する。

「ただの大道芸……!!?」

構えた六天魔王にぶつかる直前に進路を変え、サルバトーレの体に巻き付いた。そのまま彼女を上空へ運び、風の推進力を加えて振り下ろし地面に突き立った剣に叩きつける。

「かつ……!!」

意識が飛びかけたものの、すぐに体勢を立て直しシグナムに向き直る。

「く……、はあ……!!」

一方、シグナムもまた無傷ではなかった。サルバトーレへの攻撃に意識を集中していたため防御に隙間ができ、そこに飛来した剣が叩き込まれたのだ。

「この展開、朝霧とやり合った時を思い出すな……。あの時はお互いとおきの一撃をぶつけ合ったのだが」

「ならば今回もそうするか」

サルバトーレが頭上に戦闘機のような翼の付いたライフルを出現させ、シグナムが腰を落とし居合いの体勢を取る。

「極上・銃王無神!!」

「風牙一閃!!」

ライフルから撃ち出された太い光線を、真空の刃を纏った連結刃が食い止めた。普通に撃ち出していれば押し負けていただろうが、風による推進力が加わったことで拮抗している。

ぶつかり合いを制したのは連結刃だった。光線を両断し、ライフルの真下へ突き進む。しかし、サルバトーレは既にそこにはいない。

「――!!」

シグナムがかざした鞘に、六天魔王がぶちあたった。

「考えていたことは同じか……」

「ああ。とっておきとはいえ、あれで決まるとも思えなかったからな」

両腕で振り下ろされている六天魔王を片手で持った鞘で止めていられるのも、風の恩恵があるからこそ。

ならば、その風をなくせばどうなるか。

「くっ!？」

力の均衡が崩れ、体勢を崩すサルバトーレ。そこに、

「紫電一閃!！」

「ぐあ……!！」

サルバトーレの背に燃え盛る鞘が叩き込まれた。吹き飛ばされながらも六天魔王の銃口をシグナムの方へ向け発砲。額に銃弾を受け、サルバトーレとほぼ同時に仰向けに倒れた。どちらも意識は残っている。

「……負け、か」

少しして、サルバトーレがポツリと呟いた。彼女の首の上には連結刃の先端が乗っている。これが実戦ならば、頭と胴体は泣き別れになっただろう。

「だが、血沸き肉躍る楽しい勝負だった。……これからしばらくは退屈せずにすみそうだ」

当面の間の彼女の暇潰しが、今決まったようだ。

試合も全て終わり、邪悪学園の一同は時空ゲートの前に立っていた。

「有意義な時間を過ごさせてもらったぞ。これからの研究もはかどりそうだ！」

「それじゃ、またいつかな！」

そう言って、マオとラズベリルが時空ゲートに入る。なお、合作デバイスのボールはあまりに高すぎる性能のために魔界にあったほうが安全と判断され、マオが持って帰ることになった。

「若人達よ！ 何事も強火で行けい！ ヌツハハハハハ！」

続いて、意味はよくわからないがおそらく激励と思われる言葉を残してサンプルが、

「またいずれ来るが、シグナム、その時まで腕を落したりするなよ」

「無論だ」

実質再戦の約束ととれる言葉を残してサルバトーレが入っていた。

静かになったことで寂寥とした空気が流れ始めるが――

「……あれ？　なのはは？」

『あ……』

アサギの一言で全員が思い出した。当の本人は完全に忘れているが、

なのはアサギのよってあること無いこと、というか無いことばかり吹き込まれたエトナによって拉致られていたのだ。

「教育的指導も済んだから返しに來たわよ」

狙い澄ましたかのようなタイミングで、エトナがなのはを連れて現れた。エトナの逆鱗に（強制的に）触れ（させられ）たにもかかわらず、なのはに外傷は一切見当たらない。

「ご指導ありがとうございました。ナイスバディ・エトナ様」

胸に右手をあて膝を付き、エトナに恭しく一礼するなのは。外傷は無いが、確実に何かがおかしくなっている。

「えーっと、エトナさん、これは一体……？」

「本当は精神崩壊するくらいしごいて無感情なキラマッスーンにでもしようかと思ったんだけどね。でも戦力は足りてるから、予定変更して貢ぎ役として教育したのよ」

説明した後、エトナはなのはにビシッと指を突き付け言う。

「つーわけで、週三回アタシに高級スイーツを送ること！ いいわね？」

「イエス・ナイスバディ！！」

返答したなのはの敬礼は、百人中百人が満点をつけるであろう立派なものだった。

なのはは称号『エトナの下僕』を手に入れた！

第58話：戦闘狂のお姉さんは好きですか？ あ、でも二人ともお姉さんって

次回はまた性懲りも無く番外編、その後はいよいよラスボスが登場します！

番外編4…いつかの時代、どこかの世界（前書き）

向こうの前書きにも加筆しておきますが、番外編3に登場したアデルの息子、ゼタの娘は完全オリジナルです。

まさかあの話書いた数週間後に公式で娘が出てくるとは思わなかった……。

今回も短編集です。どうぞご覧ください。

番外編4…いつかの時代、どこかの世界

（1）

とある一匹のプリニーが仕事を終え、自室に向かっていた。

（まさかあのような所で会うとはな……。もっとも、向こうは気付いたいるはずもなからうが）

彼はミッドチルダの出身で、死亡したのは二年前。魂という概念や地獄の存在に驚きはしたものの、罪を犯した自覚はあったため特に反抗もせずにプリニーとしての研修に励んだ。かなり早い段階で一人前のプリニーと認められ、また生前の経験に基づく高い指揮能力を評価されたことでプリニー教育係である吸血鬼、ヴァルバトーゼの直属プリニー隊の指揮官に就任。諜報や戦闘など数々の仕事をこなし、魔界での生活に馴染んでいった。

そしてある時、戦闘の後始末のために地球へ向かった際に、彼女を見たのだ。

管理局のエース、高町なのはを。

（彼女があそこにいるということとは、あの事件は無事解決したということか。……。それにしても、わずか二年で随分と変わったな）

彼の知っている高町なのはは、実力はあれど甘さの目立つ人物だった。少なくとも、あの凄惨な戦闘の跡を前にして平静を保っているほど豪胆ではなかったはず。

戦闘の跡云々以前に悪魔を見て平然としているあたり、ミッドチルダで何かが起こった、あるいは現在進行形で起こっているのだろう。

そしてそれが彼女が変わるきっかけになった、といったところか。

あらゆる物事は良くも悪くも変化していく。死した彼にできるのは、罪を犯してまで守ろうとしたあの世界が、より良く変わっていくよう願うことだけ。

（世界を頼むぞ、若者たち……）

胸の内でそう呟いて、彼――レジアス・ゲイズは部屋に入った。

（2）

『グオオオオオオオオオツ！！』

バハムートの群れが大地を揺るがさんばかりの雄叫びを上げる。そしてその内の一体が、眼前の白い竜に向かって腕を振り下ろした。

「フリード！！」

「グオウ！！」

白い竜――フリードは、背に乗せた女性――キャロの声に応じて飛び上がりそれを回避、別のバハムートが撃ち出した火炎弾を自らの火炎弾で相殺する。

「ヴォルテール！！」

「ゴオオオオオオ！！」

続いて彼女のもう一体の召喚竜、人に近い体格の巨大な竜――ヴォルテールが腕を振るい、数体のバハムートを弾き飛ばした。

だがバハムート達は翼を広げて勢いを殺し、そのまま空へ飛び上が

る。ヴォルテールの攻撃でダメージを受けた様子はない。

（どうにかして隙を作らないと……）

事の発端は十数分前。鍛錬のため魔界を訪れたキャロ達は、一体のバハムートと交戦した。それだけなら問題はなかったのだがどうやら縄張りに踏み込んでいたようで、どんどん数を増やしていき現在に至る。

（数が多すぎる……！）

包囲網は地上だけでなく空中にまで広がり、穴を開けても即座に別のバハムートによって塞がれる。全てを打倒するなどもってのほかだ。

八方塞がりのキャロ達に、痺れを切らしたバハムート達が飛び掛かる。その時、

「ガアッ!？」

「グオウッ!？」

「え……?」

突如飛来した巨大な氷の拳が、彼らを殴り倒した。

「止めんか小童共!！」

しわがれた一喝が轟く。その場の全員が声のした方向を向くと、そこには赤く長い髪と髭を生やした、浅黒い肌の老悪魔の姿が。

「少数相手に大勢で襲い掛かりおって!! お前さん達の誇りはどこへいった!! ……良いか? 誇り高き悪魔というのは――」

説教を始めた老悪魔に、バハムート達は一様に膝を付き頭を垂れている。いや、彼らだけではない。説教を受けているわけではないフリードとヴォルテールも同じ体勢をとっている。そしてキャロは、老悪魔から今までに会った悪魔とは違う何かを感じていた。

強大な魔力による、肌を突き刺すようなピリピリした感触はゼタやラハールといった魔王達からも感じられた。しかしこの老悪魔を見ていると別の何か――親愛や畏怖、敬意が入り混じったような感覚――が胸の奥から湧き上ってくるのだ。

そう、強大な竜族を前にした時と同じ感覚が――

「すまんのう嬢ちゃん達、ウチの若いもんが迷惑をかけた」

「え!?! いえそんな、気にしないでください。もとはと言えば私達が縄張りに入っただけが原因ですし」

説教を終えた老悪魔に声をかけられ、我に返ったキャロは慌てて答えた。原因は自分達にあるので、謝られるとなおさら申し訳ない。

「そう言ってもらえると助かるわい。……おぬしらもそう固くなることはない。楽にしてよいぞ」

その言葉でフリードとヴォルテールが体勢を戻して何やら一言二言発し、老悪魔はそれに頷く。

「フリードリヒにヴォルテール、か。良い名じゃな」

「フリード達の言葉がわかるんですか？」

「うむ。ワシはこの魔界の魔王じゃからな、竜の言葉がわからねば文字通り話ならんわい。……たしかおぬしはキャロ、じゃったな。ワシはバビロン、よろしくな」

これが、キャロとバビロンの邂逅。以後二人はたびたび顔を合わせるようになる。

彼が数億年の時を生き、かつては最強どころか『無敵』の名を恣いままにしていた超巨大竜、『暗黒竜バビロン』であることを彼女が知るの
は、まだまだ先のこと。

（3）

今日も今日とて訓練に励む六課の面々。

「フフフ……」

その様子を上空から、一人の少女が眺めていた。

新雪のような純白の髪とドレス、鎖がちぎれた黒い手枷、そして鮮血のように赤い瞳が特徴的なこの少女の名はプラム。不安定ながらもゼタに匹敵する魔力を持ち、2歳の時に父親の魔界を奪い取った若き天才魔王だ。

『父親の魔界を』というくだりでピンときた方も多いだろう。外見からは全く想像できないが、彼女はあのキングダークの娘なのだ。つまりロイヤルキングダーク4世とも言える。

「……今、ものっすごく不愉快なことを言われた気がしたのだけど、気のせいかしら？」

殺気に満ちた目であさつての方向を睨み付けるプラム。当然誰もいないため、気を取り直して再び訓練場の方へ視線を戻した。
彼女は興味を持った相手を『オモチャ』と称し、その行動を観察す

ることを趣味としている。そして現在の観察対象はと云うと、視線からわかるようにアサギである。

興味を抱いたのは彼女が強いからではない。弱い種族である人間の中にも『勇者』と呼ばれる者を筆頭に、魔王に匹敵する力を持つ者は何人も確認されてきた。だがそれは下級魔王、高く見積もっても下級寄りの中級魔王相当の力に過ぎない。上級魔王であるプラムから見ればそんなものは泥団子か石ころか、程度の違いであり、興味の対象にはなり得ない。

彼女が興味を抱いたのは、アサギのぶっ飛んだ人間（というか悪魔）関係。宇宙最強魔王ゼタの弟子であり、プラムも含め何人もの上級魔王と面識がある。これだけでも興味深いことだが、最近入った情報によれば――

「天使長とも知り合いで、おまけに前世の記憶があるなんて、『事実は小説よりも奇なり』とはよく言ったものね。本当に物語の主人公みたい」

若干メタなことを言いつつ見物を続けていたプラムは、あることを閃き、笑みを深める。

「この世界で色々やらかしている悪魔もいるみたいだし、ちょっとあの子の未来を見てみようかしら」

彼女を、『予言者プラム』の名を宇宙に轟かせる最大の要因が、漠然とではあるが未来を見通す力を持っていることである。

全くの余談だがこれを応用することでちょっとした占いをするのもでき、MHKニュース内で彼女が担当しているコーナー『生首占い』は大人気だったりする。

「大きなお屋敷に三つの金属……。それに……。これは!？」

未来視を行っていたプラムが驚愕に目を見開き、しかしすぐに楽しげな笑みを浮かべた。

「フフフフ……。! これはまた楽しませてくれそうね。本当にあなたは面白い子だね、アサギ……。」

青空に舞う白い魔王が何を見たのか、知る者はいない。

番外編4…いつかの時代、どこかの世界（後書き）

レジアス中将の話は思いつきを即興で話にただけ。後悔はしていない。

キャラとバビロンは大分前から絡ませたいと思っていた！ 後悔はし（ry

プラムの予言ですが、デイスガイア4のDLCのイベントで本当に未来を見たような描写があったので、このような形にしました。

ちなみにプラムは同じく配信された日本一ソフトウェアの擬人化キャラ、日本一ちゃんの魔ビリティー『ぺたんこ同盟』（同一魔エリア内にいるぺたんこキャラ一体につき能力10%アップ）の発動要員にもなります。

イベントで胸について（話題的な意味で）触れられまくった日本一ちゃん、得意武器は『拳』。

嗚呼、またフェンリッチの出番が遠退いていく……。

第59話：赤Ⅱ主役で緑Ⅱ脇役ってイメージあるけど、ガチャ○ンと○ツクは

皆様、この小説のメインはアサギウォーズだってこと覚えてました
でしょうか？

作者は軽く忘れてましたw

ともあれ最終章、スタートです！

第59話：赤Ⅱ主役で緑Ⅱ脇役ってイメージあるけど、ガチャ○ンと○ックは

「おりゃあああああああ！！」

「ギッ——！？」

「でいっ！！」

「ギギャ——！？」

『例の人形が数体うろついている』——そんな連絡が入ったある日の昼下がり。六課から五人が出動し現場の廃ビル前にて傀儡族を発見、襲い掛かってきたためこれを即座に粉碎し内部に踏み込んだ。アデルとスバルが先陣を切り、ティアナ、アサギ、ロザリンドが援護射撃を行いながら進撃、傀儡族達はロクに攻撃もできずに燃えるゴミと化していく。可愛げの無いザコの扱いなどこんなものだ。

「ここっ！！」

「うっわ！ もう来やがった！！」

アデルが蹴破った扉の向こうには、彼の到達の速さに驚いている、緑色の立派な髭を生やした長身の男が。彼の名はエルグリン・オットート。持ち前の影の薄さを生かして窃盗や拳銃のような小型質量兵器の密輸などの犯罪を行ってきた男だ。無論どれだけ影が薄かろうと目前まで迫られれば意味は無いので、彼は早くも窮地に立たされたことになる。

「ぐぬぬ……」

「おとなしく投降してください！」

「そ、そうはいくか！ こんなところで捕まるなんてゴメンだ！！」

スバルの言葉を一蹴し、巨大な金槌の形をしたデバイスを構えるエ

ルグリン。

「なら仕方ねえ！ 手荒にいかせてもらおうぞ！！」

拳に炎を纏わせ、アデルが駆け出す。それとほぼ同時にエルグリンが自身を包み込むように、見ていると陰鬱な気分になりそうなどんよりした色のオーラを展開した。

「くっ……！！？」

オーラの範囲内に踏み込んだ瞬間、アデルは体から力が抜けていく感覚に襲われる。振るわれたデバイスを受け止め、その衝撃を利用して効果範囲から飛び出すと、すぐに力は戻った。

「アデルさん！」

「大丈夫だ。……だが何だあの技は？ あれじゃうかつに踏み込めねえ……！！」

「驚いたか！ 効果範囲内の技の威力や相手の身体能力を大きく削る、これぞ俺の稀少技能『ネガティブフィールド』だ！！ コイツがある限り、たとえエースクラスの攻撃でも豆鉄砲同然よ！！」

得意気に語るエルグリン。だがその実内心ではビビりまくっていた。

（何今の攻撃！？ 速っ！ あと一瞬出すの遅かったらやられてたぞ！ しかもコイツ……）

エルグリンの視線がアデルの髪に移る。

（赤色じゃねーか！！）

エルグリン・オットートは軽度の『赤色恐怖症』である。と言うのも、リングを齧って歯が折れたり鷹の爪が虫歯に直撃したり海でカニに男の象徴を挟まれたりと、昔から赤色のものによってひどい目にあってきたからだ。故に彼がアデル達にしかけた傀儡族の中にも、赤い服や帽子を身に着けているマッドジエスターはいなかった。

（いつだったか銀行強盗が赤髪の女に殺されかけたらしいし、その前にはあのワルダーの組織が赤髪の大男に壊滅させられたっていうし……。ヤベーよ死亡フラグ立ちまくりだよ！ 頼むから諦めて帰ってくれ！）

本気でそう願うエルグリンだが、目の前の男に言えばこう返ってくるだろう。

「敵に背を向けるのはオレの流儀に反する！」と。

「威力が削られるなら底上げするまでだ！ スバル、足場を頼む！」

「はい！！！」

現れたウイングロードに乗り、そこからさらに跳び上がったアデルは右足に炎を纏わせ、左足で思い切り天井を蹴った。

「飛翔爆炎脚！！！」

「へぶっ……！！！」

加速の付いた踵が願うのに必死になりすぎて反応が遅れたエルグリンの脳天に直撃し、一瞬彼の意識が飛んだ。そのためネガティブフイールドが消滅、アデルに力が戻る。

「これで決めるっ！！！」

(ああ……)

燃え盛る拳が迫る中、エルグリンは思った。

「さっさと投稿しときゃよかった」と。

「へぶらぶっ!!」

顔を殴り飛ばされ壁に激突し、エルグリンは崩れ落ちた。

そして後衛三人が合流したところで尋問タイムへ。「赤色に関わった時点で俺の命運は尽きた」と言って、エルグリンはあっさりゲロった。胃の中身を、ではない。真実を、である。

「あの人形を動かす術式は、何ヶ月か前に突然俺のところに来た男に教えられたんだ。『これを使ってちょっとした騒ぎを起こしてほしい』ってな。見た目は優男だったが、とてつもない魔力を持っていたな」「とてつもない魔力？」

「ああ、管理局のエース共なんて目じゃないほどだ。初めてだったぜ、魔法を使ってるわけでもないのに肌で魔力を感じるなんてのは」「十中八九悪魔じゃろうな。それも相当高位の、な」

ロザリンドが呟く。魔界のものである傀儡族の術式を知っている時点で、人間である可能性は大きく下がる。まして肌で感じられるほどの魔力の持ち主となればなおさらだ。

「何で俺なのかはわからねえが、断って怒らせでもしたらヤバイことになりそうだから引き受けたんだ。それから一週間くらいしてからだな、あちこちで人形が出始めるようになったのは」

「え？　今までの全部アンタがやったんじゃないの？」

「いや、俺は少数をコソコソ盗みなんかに使ってたくらいだ。加えて言えばあの竜みてえな石像や鉄の怪物に関しては全く知らねえ」

どうやら本当に知らないらしい。確かに先程も出て来たのは傀儡族ばかりだった。

「なら今までの襲撃騒ぎはその優男が黒幕ってことか？　わからねえな、何だってそんなことを――」

「それにはボクが答えるよ」

『!?!?』

突然この場の誰のものでもない声が響く。一同が反射的に飛び退くと彼らが一瞬前までいた場所から、刃付きの傀儡の腕が網状に連なったものが飛び出してきた。

「この声は――ぐへっ!」

アデルに首根っこを掴まれていたエルグリンが驚きの声を上げるが、勢い余って壁に頭を打ち付け言い終える前に気絶。

「へえ、今のをかわすなんて、ずいぶん強くなったんだね。嬉しいよ」

そう言いながら現れたのは、穏やかな笑みを浮かべた黒い短髪の男。燕尾服に身を包んだ、歌舞伎の女形を担当できそうな美青年だ。

「お前がこのオッサンが言ってたヤツか!」

「そうだよ。それともう一つ」

「――!?!?　それって!?!」

青年がポケットから取り出したのは、画面に『2』と表示されたアサギカウンター。

「そういうことだよ、アサギ。もっともボクもアサギだからね、ちゃんと自己紹介しておこうか」

胸に手を当て優雅に一礼し、青年は続ける。

「初めまして。ボクはアサギ・マリネ・プレイライト」

第59話：赤Ⅱ主役で緑Ⅱ脇役ってイメージあるけど、ガチャ○ンと○ツクは

エルグリンのモチーフは某配管工の弟の方です。アサギに通ずるものがありますが、彼は主役になってますからね。

やっそこさつとこラスボス登場！ 名前の由来なんかは次回の後書きで。とりあえず料理とは何の関係ありません！

第60話：劇作家へプレイライト（前書き）

早めに投稿！ でも短い！

デイスガイア4でネモが

「どうして、戦いに敗れた悪党というのは裏に隠された重大な秘密をペチャクチャとしゃべりたがるんだろうねえ」

とか言っていました。自分はずしろ戦う前にしゃべるヤツのほうが多い気がします。……今回の話とは関係あったりなかったり。

第60話：劇作家へプレイライト

「アサギウォーズの参加者でこの事件の黒幕、ね……。そりゃまた
えらい偶然だけど、目的は何？ てかホントに偶然？ 全部仕組ん
だことなんじゃないの？」

「そう慌てないでよ、今から全部説明するからさ」

矢継ぎ早に問うアサギを手で制し、青年——マリネは話し始めた。

「一連の騒動は全部ボクの目的のためのものだよ。騒動そのものが
目的、とも言えるけどね」

「目的だと？ 世界征服でもするつもりか？」

「いや、そうじゃない」

アデルの言葉に首を横に振り、続ける。

「もしそうなら初めから銃魔神族を送り込んでさっさと制圧してる
よ。おかしいと思わなかった？ ゲームみたいに弱い敵から始まっ
て徐々に強くなっていくなんてさ」

彼の言うとおり今までに現れた敵性悪魔は傀儡族下級種に始まり、
上級種、魔獣族、銃魔神族と一部例外はあったにしても徐々に強さ
を増していた。まるで局員達、とりわけ機動六課の面々が実力を上
げるのにあわせているかのよう。

「最高の物語が中途半端なバッドエンドにならないためにも、キミ
たちにあっさり全滅されちゃ困るからね、そういうふうにしたんだ
よ」

「最高の物語？」

「そう！」

まるでミュージカルの役者のように、マリネは朗々とした声を響かせる。

「ボクは物語が大好きなんだ！ 幾千の物語を堪能し、幾万の物語を作ってきた！ 何百年もかけて！ ……そして！」

ダン！と音が鳴るほど強く一步前に踏み出し、両腕を広げるマリネ。

「辿り着いたんだよ！ 最高の物語の形、誰にも、作り手自身にさえもどんな結末になるかわからない物語に！ だけどただ辿り着いただけじゃ満足できなかった、だから作ることにした！ この世界を舞台に！ 弱いながらも計り知れない可能性を持った人間という種族を主演に！ それがボクの目的さ！」

「そんな、勝手な……！」

彼の言葉を聞いたスバルが思わずそう零す。多くの人間を危険にさらした襲撃が、大義も何もないマリネ個人の欲によるものだったのだから、無理もないだろう。言葉にしてはいないが、ティアナやアデルも同じ思いだ。

対してマリネは動じることもなく——ここまでやっておいて今更動じるはずもないが——穏やかな笑みを浮かべながら再び口を開いた。

「そうだね、勝手だね。でもそういうものなんだよ、行っていくのはさ。物語の参考がてら何度でも人間の社会に入り込んで観察してきたけど、正義も悪もその根本は同じ、『勝手』なんだよ。法だって多くの者の勝手が合致した結果できたものに過ぎない。受け入れるとも認めるとも言わないよ、これもボクの『勝手』な自論だからね。……話が逸れたね。どこまで話したかな？ 興奮しすぎて何を

聞かれてたか忘れちゃったよ。……そうそう、何故彼に傀儡族の術式を与えたか、だったね」

後ろの方で今だ気絶しているエルグリンに視線を向ける。

「彼には『表向きの首謀者』^{プロローグ}っていう形で事件開始を担当してもらったんだ。思ったより控えめな使い方しなかったから、かなり早い段階でボクが暴れさせることになったけど。……あ、あと彼のことを通報したのもボクだよ。そろそろ黒幕の登場にちょうどいい頃合いだったからね」

「つまりこのオッサンは最初から最後までいいように利用された挙句、ボコられて捕まったわけか。さすがに少しだけ同情するぜ……」

呆れたように呟くアデル。

「あとは……、そう、アサギウォーズのことだね。これは本当に偶然だよ。後で片付けるつもりだったんだけど、まさかボクの目的と重なるとは微塵も思わなかったよ。おかげで全く予想の付かない展開になって嬉しい限りだけどね」

本当に嬉しそうに言うマリネに、アサギは小さく嘆息し口を開く。

「……なんかやたら長い上に途中で哲学的な話が入ったけど要するにアレね？ アンタを倒せばアタシが優勝、事件も解決で一石二鳥と」

「そういうこと。いわゆるラスボスってやつだね」

「そう。なら——」

抜く手も見せずに構えた666カスタムから銃弾が放たれた。マリネは首を傾けてそれかわす。

「ここで潰しにかかるかい？ 普通ラストバトルはもっとムードのある場所でやると思うんだけど」

「知るかそんなもんこっちは仕事よ。空気読んで早めにやられろっつの！」

「シビアだなあ……。でもボクとしてもせつかくの準備を無駄にしたいくないし……。――グランギニョール！！」

『キキキキッ！！』

『グオオオオオオッ！！』

マリネの声に応じて魔法陣が展開され、合わせて十数体の傀儡族と魔獣族が現れた。

「今日はこれで撤退させてもらうよ。三日後の正午にアサギ、この世界でキミが初めて訪れた場所に来てよ。待ってるからさ」

そう言い残し、マリネは何処かへ転移していった。

第60話：劇作家へプレイライト（後書き）

ようやくここまで来た！　って感じですね。まだメインは先ですが。それでは名前の由来をば。

アサギ…言わずもがな。

マリネ…『マリオネット』の略です。『人形』ではなく『人形劇』のほうですね。

プレイライト…サブタイトルにあるように『劇作家』です。

最近コレが終わったあとの新作のことを考えてたりします。いやホントにネタだけは腐るほどあるんです。

でも今書く間違いなく腐ります。過去にそうやって潰した作品もありますので。その潰したのも新作ネタとして再構築していたり。

ところで、『ソウルクレイドル』と『ファントム・ブレイブ』って、ご存じの方どれくらいいるんでしょうか？

第61話：決戦の日は近い。……え？ さっさと戦闘に入れって？ しょうが

そんなわけでお久しぶりです。そして短いです。何故短いのに遅く
なったのか？ 言い訳&とある宣伝は後書きにて！

第61話：決戦の日は近い。……え？ さっさと戦闘に入れって？

しょうが

五人が隊舎に戻ってすぐに、戦闘員全員を集めての会議が開かれた。画面越しではあるが、クロノも同席している。

「世界を舞台に物語を作る、か。キザったらしい上にはた迷惑な野郎だな」

「しかしわざわざ時間と場所を指定してくるとは。余程自身があるのか、勝ち負けよりその物語とやらが大切なのか……」

忌々しげにヴィータが吐き捨て、クロノが呆れと思考の入り混じった呟きを漏らす。

「十中八九後者だろうな。買つつう可能性もあるにはあるが――」

「姿を現した以上、今更そんなセコいマネはしないとと思うけどニャ。本気でこっちを潰すつもりニャら、姿を見せずにひたすら悪魔を送り続けた方が確実だしニャ」

ジェムが自身の考えを口にし、マーガリンが後を引き継いだ。特に反対意見も出ず、そもそも他に手がかりも無いため、三日後の正午にマリネと戦うことになるかと仮定して話を進めることになった。

「そのマリネという男の力はどれ程のものなんだ？」

「やり合ったわけじゃないから総合的な実力はわからないけど……。単純な魔力だけならキングダーク並みね」

「魔王クラスか……」

シグナムの問いにアサギが答え、クロノが呻くように声を上げる。後学のためと純粋な興味とで魔王達との戦闘の映像を送ってもらっ

ていたので、彼もキングダークのことは知っている。

アホな言動や完全肉弾戦型の戦闘スタイルのため忘れがちだが、彼も相当な――人間としては破格の強さであるはやてのさらに十倍はある――魔力の持ち主である。魔法が非常に不得手で遠距離攻撃の手段が乏しい上に、巨体のため攻撃を当てられやすいという弱点を彼が抱えていることを鑑みれば、マリネの実力はキングダークを上回っていると言えるだろう。

「となると、現場には他の部隊は行かせないほうが良さそうだな。魔王クラスが相手ではどれだけ犠牲がでるかかわからない」

現在、魔界で鍛えられた機動六課とその他の部隊とでは、個々人の実力に大きな差ができている。そのため、一騎当千が当たり前な魔王クラスを相手取るのは六課以外には荷が重すぎるのだ。まして敵がマリネだけでも限らない。彼の気まぐれで市街地を敵性悪魔が襲うかもしれないし、彼とは関係なく事件や事故が起こるかもしれない。どちらにせよ、この事件に多くの部隊をあてるわけにはいけないのが実状。

「時間は三日後の正午、アサギちゃんがこの世界で初めて訪れた場所言うたら廃棄区画やね。罨やなかったとしても、ここまで時間と手間をかけてきたヤツが何も無しに突っ立ってとは思えへん。気を引き締めていこう。……三日後、何もかも全部カタをつけるで！」

一同を見渡し、はやてが声を張り上げた。

マリネ自身も準備をしているためか、はたまた単なる偶然か、その後二日間は敵性悪魔の襲撃はなかった。

そして二日目の夜。それほど多くはなかった書類仕事を終えた隊長三人は、特に重要な話があるというわけでもないが、なんとなく集

まっていた。

「言葉どおりなら、明日で最後なんだね……」

なのはがポツリと呟く。一連の事件の始まり、傀儡族の出現から半年。魔王と出会ったり魔界へ行ったりと凄まじく濃い、長いようであつという間の時間だった。

「この事件が終わったら、アサギはどうするんだろう……」

不意にフェイトがそう零す。

事件が解決すればアデルとロザリンドはヴェルダ임へ、フロンは天界もしくはラハール魔界へ戻るだろう。だが、故郷が無い——正確には知らないアサギはどうするのか。それはフェイトのみならず、他の者も考えていたことだった。ゼタカラハールに仕えに行くかもしれない、アデル達と共にヴェルダ임へ行くかもしれない。そのどれかならばまだいい。だが——

「また魔界を放浪するのかな……」

最大の不安は、それだ。サウレが転生してしまっている以上、その場合アサギは独りで魔界を彷徨うことになる。

心の毒、とでも言うべきか、孤独は心を持つ生物にとって大きな負担となる。強大な力故に孤独に陥り、心を壊した勇者や魔王がいたほどだ。

さらに加えて言えば、本人が一番よくわかっているだろうが、やはり魔界は人間が暮らすにはあまりに危険な場所、人間界と比べれば命の危険はずっと大きい。いかにアサギが強かろうと、体の強度は人間の域を出ないのだから。

「……何にせよ、アサギちゃん自身が決めることや、無理強いはできひんよ。それに、アイツを倒さな『これから』がそもそも無くならないまう。まずは明日のことに集中しよ」

残り十数時間、決戦の日は近い――。

第61話：決戦の日は近い。……え？ さっさと戦闘に入れって？

しょうが

それでは言い訳タイムです。

先日某微笑み動画にて『なのは丸さん』という動画を見つけまして。StSのなのはのセリフを『ニンがシノブ伝』というアニメに登場する音速丸（CV：若本規夫）という謎の生物のセリフに置き換えたネタ動画なんですけど、これを見て抱腹絶倒、いてもたっても音速丸！な気分になり原作コミックス全四巻を読み返して再び抱腹絶倒、余韻に浸っているうちに夏休みが終わり現在に至る、というわけです。はい、完全無欠の自業自得です。

おまけ…音速丸語録（一部です）

「エロいのは男の罪……、それを許さないのは女の罪……」

「あーもうなんなんですかあなた達！ 女の子同士でフトンに入る時は服を脱ぎなさい！！ 父さんこれ以外認めませんよ！！ あー柔らけえ柔らけえ！！」

「その裸の女ジャマだ！！ アニメが見えねえだろ！！」

「グダグダアファフ言ってんじゃねー！！ 混浴すると寿命が延びるっつーの！！」

「罰として熱くゆで上がったパスタを一本尻の割れ目にセットしてやるよー！！」

「いやしこうか！？ いやしこうか！？」

※…「いやらしい尻？ フフフ……、こうか！？」をできるだけ速く言いたいがために偶然生まれた言葉。

……はい、本作の話に戻しましょう。次回は戦闘あります。前座ですが。

本作とシノブ伝、どちらもよろしくお願いします！

第62話：開幕（前書き）

前回よりは早めの投稿です。

第62話：開幕

決戦日当日、正午。はやてはリインとユニゾンし、普段は前線に出ないシヤマルとフロンも加えた六課の最高戦力が廃棄区画に集結していた。

「昨日まではこんなもん無かったんやけどな……」

「わざわざ別の場所から持ってきたのか。ご苦労なこった」

一同の前には洋風の大きな屋敷が。ワインレッドを基調とした色合いが、美しくも妖しい雰囲気醸し出している。

『オオオオオオオオオオッ!!』

「さっそくお出ましみたいだな……」

雄叫びと共に魔法陣から現れたのは十メートルほどの真紅の悪魔——銃魔神族最上級種マルキダエルが十数体と、三メートルほどの黄金色の石像——魔獣族最上級種パズスが数十体。

「デカいのがウジャウジャと……。早いとこ片付けて中へ——」

「いや、突破口を開くだけならもっと手軽に済む」

そう言うと同時にロザリンドの足下に魔法陣が描かれ、何かがせり上がってきた。

乗り込み口のあるやや細長い球体にそれより二回りほど細い筒が付いており、禍々しい腕を模した装飾によって支えられている。全長はおよそ五メートル。

対魔神消滅魔砲『ローゼンハンマー』。魔界戦車『ローゼンガルデ

ン』の主砲兼操縦室だが、このようにバラ売りもしている。お値段千五百万ヘル、キャタピラとセットならば四千万ヘル（税込）。

「ロ、ロザリー、いつの間にそんな物を……？」

「『偶刊魔界』の懸賞で当たったのじゃ」

さらりと答えるロザリーが乗り込んだローゼンハンマーは、背面に四つ葉のクローバーの紋章を浮かび上がらせ、小刻みに震えている。

「発射!!」

轟音と共に魔砲弾が撃ち出され、着弾地点にいたマルキダエル数体とパズス十数体が欠片も残さず消滅。それとほぼ同時に砲身が花びらのように開いたローゼンハンマーから黒煙が上がりはじめた。

「たった一発で壊れるとは、粗悪品を掴まされたか？ ……まあよい、所詮は懸賞の景品じゃしな」

敵も味方も全員硬直する中ロザリンドの声が響き、はやてがいち早く我に返り、指示を飛ばす。

「私と両分隊長、キャロとロザリーちゃんは残りを迎撃、シャマルとフロンちゃんはその援護！ 他は全員屋敷に突入！」

『了解！』

突入組が屋敷に向かって走りだした。動き出したパズスの攻撃を極力魔力を使わず回避あるいは相殺し、避けようのないマルキダエルの砲撃はザフィーラが障壁で防ぐ。

「ロザリー……」

アデルが立ち止まり、心配そうに振り返った。実力を知っていてもやはり上級悪魔の群れの前に置いて行くのが不安なのだろう。しかし当のロザリンドは穏やかに微笑みながらローゼンハンマーから降り、言った。

「案ずるなアデル。約束したであろう？ 『千年でも一万年でも、一緒にいる』と。このようところで果てはせぬ。余を信じよ」

「……ああ、そうだな！ 信じてるぞ、ロザリー！」
「うむ！」

再び駆け出したアデルを見送るロザリンドを、はやてが上空からジト目で見ている。

「ちよおロザリーちゃん、こんな時にラブコメってんとはよ手伝ってえな」

「そう焦るでない。ちゃんと手は打っておる」

無防備なロザリンドを前にしながらも、彼女の周りのパズス達は動かない。否、動けないのだ。その身を縛る、四つ葉のクローバーの紋章のために。

「夫婦の語らいを邪魔する無粋な輩は――」

ロザリンドが紋章の中心に銃弾を撃ち込むと、そこから黒いエネルギー球が発生、

「――消え去るがよい」

大きく膨れ上がるとパズス達を呑み込み、その存在を抹消した。

全員が上級とはいえ、悪魔の群れは明らかに劣勢だった。なのはやはやて、ロザリンドには嵐のような弾幕に遮られ近づけず、それを突破できる砲撃はシャルとフロンの障壁に阻まれる。高速で動き回るフェイトには狙いを定めることができず、接近戦に持ち込もうにも射程範囲に入った時にはすでに斬られているという有様。

故にパズス達は防戦一方、耐久力の高いマルキダエル達は攻撃を当てやすいフリードに狙いを絞ることとなった。

「ゴアアッ!!」

「ゴウッ!!」

一体のマルキダエルが放った砲撃をフリードが火炎弾で相殺する。さらに別の数体が砲撃を放とうとするが、その右腕に鎖が絡み付き強引に向きを変えた。

「ゴガア——!？」

放たれた砲撃は腕の先、至近距離にいたマルキダエルに命中し、その右腕を根本から吹き飛ばす。いかに必中の邪眼による追尾効果があろうとも、急激に向きを変えることはできない。

フリードは全速力で飛行し、鎖の妨害を免れた者達による砲撃を引き離す。そして眼前に伸びてきた鎖を銜えると方向転換、その勢いを利用して鎖を振り回し、先端に結び付けられている、先程吹き飛んだマルキダエルの腕を砲撃に叩きつけた。

「ゴアッ——!？」

「グオッ——!？」

「ゴガッ——!？」

腕は完全に粉碎されたものの残った鎖は勢いを保ったまま突き進み、地上のマルキダエル達を打ち据える。

単なる使役する者とされる者では成し得ない、竜と共に生きるルシエ族であるがこその人竜一体の戦いが、そこにあった。

屋敷内、大広間。まだ突入組も到着しておらず静まり返っているこの場所に、魔法陣が展開される。

「ギギ……」

「ギギギ……」

腕を蠢かし、そこから這い出してくる異形達。

次の舞台に、新たな役者が降り立った。

第62話：開幕（後書き）

今回ロザリーが使った技はデイスガイア4で登場する『クレストローゼス』を若干アレンジしたものです。演出が変わったローズリバレート共々かなりカッコいいのでオススメです！ 自分は買ってませんが。だってこれ以上銃使い増えるとアサギの出番が（ry え？ アルティナ？ 誰それ？

あと本作について最近気付いたことが一つ。

第41話でメインの女性陣を全員出したつもりがナチュラルにシャルを忘れてたでござる。

第63話：前回の話読んだ後に『ローゼンハンマーの砲撃屋敷にブチ込めばよ

どうにも盛り上がりが欠けていると感じる今日このごろ。このままではいかんばい！と思うもののまだ前座……。ともあれご覧ください。

第63話：前回の話読んだ後に『ローゼンハンマーの砲撃屋敷にブチ込めばよ

屋敷、扉前。

「このまま一気に――」

「いや待てアデル」

駆けてきた勢いのまま扉を蹴破ろうとしたアデルをザフィーラが制止する。

「おそらく中にも敵はいるだろう、うかつに突っ込むのは危険だ」

言って、扉目掛けて鋼の軛を突き出すザフィーラ。扉が弾け飛びその破片が降る中、隙間を縫うようにして十数本のナイフが飛んできた。

「やはり――……ん？」

最低限の障壁で難なくそれを防いだザフィーラは、ナイフの主を視界に収めて訝しげな声を上げる。

そこにいるのはもはや見慣れたヘルズクラウン。しかし今までに見てきたものとは違い、腕が六本生えている。通常のものに交ってその六本腕の個体――便宜上アシュラクラウンと呼称する――がちらほらとおり、さらにその後ろには巨大な影が二体。

「うわ、気持ち悪……」

その異形を見て、スバルが思わずそう漏らす。
無数に連なり重なった腕で作られた触手が三メートルほどのヘルズ

クラウンの頭、その下部から八本、上部から十数本生えており、上部の方の先端には通常サイズの頭が一つずつくっ付いている。タコとイソギンチャクとヤマタノオロチを足して三で割ったような、生理的嫌悪感を催す外見だ。

「改良型か……」

「後ろのデカいのは外見だけ見れば改悪だけどニャ」

「どっちでも構いやいねえよ、どのみち潰すだけだ」

「ギギッ!!」

「おりゃあっ!!」

上下の両腕をしなければ四本のナイフをヴィータ目掛けて投げるアシユラクラウン。ヴィータがグラーフアイゼンを大きく振るってそれを弾いたことで生まれた隙を突き、真ん中の両手に持ったナイフを突き立てようとするが、

「おらよっ!!」

「ギッ!」

彼女は握った手の中を滑らせるようにグラーフアイゼンを引き寄せヘッド付近を掴むと、横に振るってヘルズクラウンの両腕をへし折る。

「オラァッ!!」

トドメにヘッドを叩きつけアシユラクラウンを粉碎、柄を掴み直すと円を描くように振り回し、周囲のヘルズクラウンを弾き飛ばした。

「よし! ……っておいティアー」

ヴィータの視界にはティアナと、彼女に向かって背後から飛来するナイフが。

気付いた時にはすでに遅く、ナイフは彼女の頭を貫き――

「あ……？」

そのまま直進、進行方向にいたヘルズクラウンの背中に突き刺さった。その個体は振り向くより早く、頭を貫かれたはずのティアナが撃ち出した魔力弾によって爆散する。

「ギギ……？ ギーー！？」

相手の攻撃は当たっているのに自分の攻撃はすり抜けるという不可解な現象に首を傾げていたヘルズクラウンは、突然両断され崩れ落ちた。

「ああ、そういうことか……。ヒヤヒヤさせやがる……」

タネに気付いたヴィータが安堵の声を漏らす。

ナイフが貫いたのは幻影、それも手首から先にだけ実体を持たせたもの。ヘルズクラウンがそれに意識を向けている間に本物のティアナはオプティックハイドで姿を消して背後に回り込み、ダガーモードで両断した、というわけだ。

「まるで忍者だな……」

部下の成長を頼もしく思いつつも、未恐ろしさを感じるヴィータだった。

「ギゴアッ!!」

「ああもうっ!」

二体の異形が吐き出す毒液を、アサギは悪態を吐きながらメガウインドで弾き返す。自らの毒液を浴びてところどころ溶解し、攻撃を受けて亀裂が入っているものの痛みを感じぬ人形の体、全く動じることなく触手を振るい襲い掛かる。

「射程広い上に地の利は向こうにあるし……!」

外見だけならば異形達は満身創痍なのだが、その実大きなダメージは与えられていない。触手を切断するにはメガウインドでは威力不足、アサルトスターのような実体のある技は途中で毒液により溶かされ、インフェルノやコキュートスは室内で使うには威力が大き危険すぎる。

『ゴアッ!!』

「くっ……!」

上部から生えた触手に付いた頭がアサギを囲むように移動し、一斉に毒液を吐いた。せめて直撃を避けるために比較的包囲の薄い背後へ飛び、両腕で頭をかばう体勢を取るが、飛沫がかかることはなかった。見れば毒液は氷塊となり、アサギの一手手前で静止している。

「ぬうん!!」

「ギガッ……!」

そしてその間に飛び込んできたザフィーラがそれを蹴り飛ばし、異形にぶち当たった。続けて鋼の軛を突き出し二体の異形を強引に引き離す。その結果、二体の陰に隠れていた扉が露わになった。

「朝霧、先に行け」

「え？」

「マリネとやらがこの人形達を呼び出しているのなら、そいつをどうにかせねばこいつらは延々と湧き出してくるかもしれん。だから先に行ってヤツを叩いてくれ」

「……わかった！」

扉に向かって駆け出すアサギ。異形達が鋼の軛の隙間から触手を伸ばし彼女を捕らえようとするが、一方は飛来した円形のエネルギー弾に、もう一方は爪による斬撃によって斬り落とされた。

「いけねえなあ、フラれた男がいつまでも女に追い縋るもんじゃねえ。潔く諦めて思い出に昇華させるもんだ」

「……それ、『経験者は語る』ってヤツかニヤ？」

「ああ、ほろ苦い青春の思い出だ。あの頃は俺も若かった……」

エネルギー弾を飛ばしたジェムと斬撃を放ったマーガリンが、何とも気の抜けそうな会話を繰り返している。異形達が予先を自分達に変えているにも関わらず、二人に動じた様子は無い。

『ギゴ——！』

二体の異形が毒液を吐こうとした瞬間、ジェムが招くように指を動かし、マーガリンの姿が掻き消える。そして――

『ゴ……！？』

異形達はブーメランのように戻ってきたエネルギー弾に両断され、爪による無数の斬撃にバラバラにされた。

扉の向こうには敵はおらず、真っ直ぐに廊下が続いている。
その先にある扉を開けると、そこは広大なホールになっていた。

「……………」

誰もいない観客席を通り抜け、アサギは舞台へと上がる。同時に照明が灯され、彼女ともう一人――アサギ・マリネ・プレイライトを照らし出した。

「待ってたよアサギ。さあはじめよう、ラストバトル最終演目を！」

第63話：前回の話読んだ後に『ローゼンハンマーの砲撃屋敷にブチ込めばよ

次回ようやく、ほんつとくにようやく、ラスボス戦開始！

第64話：アタシの闘いはこれからだ！ ※打ち切りではありません（前書き）

戦闘シーンがテ○ルズのゲーム版みたいになりました。会話も心理描写も無え……。

第64話：アタシの闘いはこれからだ！

※打ち切りではありません

「マジカルバレット！！」

先手を取ったのはアサギ。マリネに向かって星型弾を連射する。彼はそれを素手で叩き壊し、連射が途切れたところで右手を前方に突き出した。

マリオネット
「傀儡網！！」

「アサルトスター！！」

刃の付いた網状の傀儡の腕と高速回転するトゲ鉄球が激突、僅かな拮抗の後傀儡網が砕け散り、アサルトスターがマリネに迫る。

「おっと！」

「もう一発！！」

一步横に動いてそれをかわした彼に続けざまにもう一つアサルトスターが飛来。

「なんの！」

「まだまだっ！！」

跳び上がって避けたマリネのさらに頭上、滞空するトゲ鉄球から幾条もの光線が降り注ぐ。

「うわっ！」

傀儡網を絡ませて作った盾で防ぐマリネ。光線を撃ち終えたトゲ鉄

球が回転しつつ落下してくるのを見据えながら、盾の表面に真紅の魔法陣を浮かび上がらせた。

くれないてんによ
「紅天女!!」

盾を消し炭にしながら魔法陣から飛び出してきたのは、羽衣を纏った女性を象った炎。その炎——紅天女はトゲ鉄球を溶解させ、アサギへと突き進む。

「メガウインド!!」

竜巻が紅天女の突進を押し留めた。だが真空の刃は実体の無いそれを切り裂くことはできず、むしろ多量の酸素を取り込むことでより大きく燃え上がっていく。

「続けていくよ! トウーランドット!!」

「くっ……! つあっ!!」

先端が丸い斬首用の剣が、横からアサギの首を狙って飛んできた。とっさに飛び退くも、かわし切れず鮮血が噴き出す。さらに制御が乱れたメガウインドを突き破って、紅天女がトウーランドットと共に再びアサギに襲い掛かる。そこにアサギは炎の溜まった銃口を向け、引き金を引いた。

「トーテン……、クロイツツ!!」

「うあっ!」

炎の十字架が紅天女とトウーランドットを呑み込む。横に大きく跳んで辛くも逃れたマリネとの距離を、アサギはトゲ鉄球を出しながら一気に詰めた。

「でりゃああああああああっ!!」

「くうううううっ……! 紅——」

「させない!! マジカルバレット!!」

トゲ鉄球による殴打を盾で防いだマリネが紅天女を出すよりも早く、彼の額にアサギが星型弾を撃ち込む。

さらに吹き飛んだマリネの足に鎖を巻き付け振り上げると、観客席に叩きつけた。

「かあっ——!」

「これでえ……、終わりだああああああああっ!!」

「ぐあああああああ……!!」

そして風の推進力と回転の加わったアサルトスターが、マリネの腹を挟り観客席を粉碎し床を陥没させた。

（ああは言ったものの、ホントに決まったかどうか……）

マリネが倒れているあたりを見つめながら、アサギは内心でそう呟く。人間ならば胴体が消し飛んでいるような攻撃だが、相手は人間より頑丈な体を持つ悪魔、それも魔王クラスである。むしろまだ健在の可能性の方が高い。アサギカウンターを見ればすぐにわかるが、今日を離すのは危険すぎる。

「フッフ、ハハハハハ、ハハハハハハハ……!」

案の定、マリネは立ち上がってきた。燕尾服は破れあちこちから流血しているにもかかわらず、心底楽しそうに笑っている。

「いいよ素晴らしい最高だよ!! 最高の展開だ!! この時を待っていたんだ、この時のために三千年もの間準備をしてきたんだ!」

マリネの足下に翡翠色の魔法陣が展開され、彼の全身の傷が塞がった。ギガヒールの効果だ。魔王クラスともなればギガクラス魔法を使うことなど珍しくもないので、アサギも特に驚きはしない。だが、続いての変化に、彼女は驚愕することとなる。

「知っているかいアサギ? ラストバトルは連戦になるって相場は決まっているんだよ!!」

「なっ……!?!」

マリネの顔に漆黒の隈取りが描かれ、両腕両脚がどす黒い十数本の触手に変化した。さらに服を突き破って、背中から黒く細長い枝のような腕が何本も生え始める。

「いよいよ第二幕の始まりだ!!」

そう叫び、マリネが壁を打ち壊して外へ飛び立った。アサギも慌てて後を追う。

壁を破った音が聞こえていたようで、中で戦っていたメンバーも外に集まっていた。マリネは既に空高く舞い上がり、巨大な魔法陣を展開している。

「アイツ……、姿が変わってやがる!」

「あの魔法陣、どうやら召喚魔法のようだが……、随分デケエニヤ。何と呼ぶ気ニヤ……?」

ヴィータとマーガリンが口ぐちにそう漏らす。

「これが三千年の集大成、ボクの最高傑作だよ！ ……グランギニョール！！」

マリネの叫びに応じて魔法陣から現れたのは、巨大な金属の塊。横長の形で、その大きさは百メートルほど。三角形の翼が二対、後ろから見ればXを描くように付いており、上部の翼の端にはドクロの装飾が施されている。

「あれって、魔蔵館で見たのと同じ……！」

「ナリは小せえが間違いねえ！　ありゃあ……」

なのはとジェムが驚愕の声を上げ、アサギが呟いた。宇宙に轟く、その名を。

「無敵戦艦『良綱』……！？」

第64話：アタシの闘いはこれからだ！

※打ち切りではありません（後書き）

久々にデイスガイア4のDLCの話。

フーカ&デスコ編、大多数の人の予想通り、デスゼットが加入するようです。さらに何故かハゴスとネモも加入！ もはやストーリーが予想できません！

そして同日の追加配信キャラは日本一ソフトウェアの良心、マローネとアッシュ。ちなみにマローネは転生時に性格をデイスガイア3のやさぐれバージョンにできるようです。

ページを改め本作の話。

マリネの技は劇場、演劇関係のものが多いです。気になる方は調べてみてください。

次回、第65話。さあ、皆さんご一緒に！

『ヨシツーナ ガ キータヨー!!』

第65話：ヨシツーナ ガ キータヨー!! (前書き)

ナンバーズの出所時期っていつごろなんでしょうね？ 調べてみたものの正確な設定はわかりませんでした。

あと感想欄でもちよろつと言ってましたが、今一つ味方になったナンバーズが覚え切れません。赤髪、眼帯、バズーカ、プリニー口調、CV…水橋あたりは覚えてるんですが……。

第65話：ヨシツーナ ガ キータヨー!!

魔法陣から現れた戦艦、それは都市部の警備にあたっていた地上部隊の目にも映っていた。

「あ、あれは伝説の……!?!」

「知っているのか赤井!?!」

驚愕の声を上げるニジレッドに、彼の近くにいた眼帯の少女――チンクが尋ねる。

「ええ、あれは――」

「無敵戦艦『良綱』、全宇宙最強の戦艦。……の贗作だね、大きさからして」

ニジレッドの言葉を引き継ぐように言ったのは、依頼を受けて警備に参加していた主役B。

「ま、贗作って言っても性能は相当なものだろうけど。お金も相当かけてるんだろうな」

「そんな呑気なこと言ってる場合じゃねえだろ!?! いいのかよ助太刀に行かなくて!?!」

「行ったところで邪魔にはなっても役には立たないよ。力の差がありすぎる」

状況にそぐわぬのんびりとした態度に赤髪の少女――ノーヴェが声を荒げるが、主役Bは相変わらずの態度で、しかし若干真剣さを帯びた声音で返答した。

「貴方でも、無理なのか……？」

驚きで思わず、という風にチンクが尋ねた。彼女の妹が聖王協会に
いるため、主役Bのことは聞き及んでいる。悪魔との関わりが薄い
彼女には、AAAランクという実力者であるシャッハを（色んな意
味で）圧倒するほどの男が勝てないというのは信じ難いことなので
ある。

「うん。この世界とその周辺世界の人間はその限りじゃないらしい
けど、基本的に天使や悪魔の実力は魔力に比例するからね。見たと
ころアレは天使長クラス、おまけに贗作良綱まである。ボクじゃ行
っても刺激を楽しむ前に死体になるのがオチだよ」

ちなみに天使及び天使兵の序列は下から順に天使（兵）見習い、下
級天使（兵）、中級天使（兵）、上級天使（兵）、大天使兵、天使
長、大天使となっており、主役Bは上級天使兵にあたる。性癖がア
レなのでそうは思えないが、実は結構高い立場にいるのだ。

「それに組織にいる以上独断行動は厳禁だしね。どのみちここで放
置プレイ食らってるしかないよ」

「向こうにいる方々は大丈夫なのでしょうか……」

「絶対、とは言い切れないけど、ボクらよりは勝ち目があるよ。人
間も悪魔もかなり強いみたいだし」

心配そうなニジレッドにそう答え、それはそうと、と主役Bは内心
で続ける。

（ボクも人のこと言えないけど、フロン様、どうしてこの世界にい
るんだろ？ 天使長ってヒマなのかな？）

他の天使長に聞かれたら殴られそう——それはそれでこの男は喜ぶだろうが——ことを考えながら、彼は良綱の方へと視線を戻した。
場面は戻り廃棄区画。

「無敵戦艦『良綱』……!?!? でもサイズが小さい……」

「どうかな? ボクの最高傑作、『戦艦良綱可変型』は?」

「可変型?」

アサギが疑問の声を上げると、それに答えるように良綱が唸り声のような低い駆動音を立てながら変形を始めた。

内部から黒い球体がせり上がると艦体が縦に折り畳まれ、側面が横に伸び先端が別れ腕と手を形成する。最後にマリネの触手と背中腕が球体に沈み込み、変形が完了した。全体像は脚の無い人型、と言ったところか。

「二戦目はメカ戦……、よくわかってるじゃありませんか! て、敵ながらアッパレです! ……というか、カッコイイデース!!」

「フロンさん、目え輝かせてる場合じゃないから! てか、二十三年前の黒杉の時も同じこと言ってなかった?」

アサギの声もどこ吹く風で、フロンはバカデカイ魔法陣を展開する。

「こっちも負けていられません!!」

「ちよちよちよ、ちよつとフロンさん! まさかとは思うけど、巨大ロボとか呼び出す気!?!」

「もっちらんです!! 今こそグレートフロンガーXを——」

「いや、それ思いつき法に触れるから」

まるで時が止まったかのようにフロンが硬直した。およそ三十秒経

った後、ギギギと音がしそうな動きでアサギの方を向く。

「……え？」

「法に触れるから、出せないの、巨大ロボは。出しちゃったらまた堕天使に逆戻りよ？」

「そ……んな……」

愕然とし、地面に両手と両膝を着くいわゆる『orZ』のポーズを取るフロン。

「ああ……、地位とロマン、私は一体どちらを取れば……！」

よほどショックだったようで、今にもマジ泣きしそうな表情で何やら呟いている。

「……話進めてもいいかい？」

今まで律儀に待っていた――あるいは啞然としていたのかもしれない――マリネが尋ねた。切り札を出した直後にこの奇行が始まったためか、いたたまれなさそうな顔をしている。

「あ、どうぞ」

「えーと、ううん……、まあそういうわけで、これがボクの最強最後のスタイルなわけだけど。他にも最高の召喚悪魔を用意してあるんだよ」

マリネが言い終わるとほぼ同時に三つのエネルギー弾が飛来、隊長三人とロザリンド、キャロを乗せたフリード、そして正気に返ってアサギを抱えたフロンが飛行し、残りのメンバーは飛び退いてそれかわした。砂煙が晴れた時、そこには黒光りする三つの金属、も

とい三体のロボット。頭から二本のアンテナを生やしマントを着けているが、その姿はプリニーに酷似しており、腹にそれぞれ『X・1』『X・2』『X・3』と刻印されている。

地上に残っているメンバーはアデル、ジェム、マーガリンがX・1、ティアナ、スバル、エリオがX・2、そしてヴォルケンリッターがX・3と向かい合う形になった。

「さあ、役者も揃っていい感じにシリアスな雰囲気になったところで、はじめようか!!」

正真正銘、最後の決戦の火蓋が切って落とされた。

第65話：ヨシツーナ ガ キータヨー!! (後書き)

主役Bが上級天使兵だという設定はデイスガイア4での移動力と投げ射程（共に5マス）から取りました。なお、ゲームでは大天使兵の上に超天使兵がいますが、小説版でのラミントンの側近が大天使兵なのと正直ネーミングセンスがアレなので除外しました。余談ですが、小説版では大天使兵の死亡率が高いです。

わかりづらかったかもしれませんが、番外編4でプラムが言っていたのは良綱とあの三体のことです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3319p/>

第二次アサギウォーズinミッドチルダ

2011年11月17日05時09分発行